

第9回 保育所保育実践研究・報告集

平成 27 年 3 月



社会福祉法人 日本保育協会

はじめに

保育所に対する地域の要望は様々であるが、子育て専門機関、専門の職員が常駐する場所は地域では保育所をおいて他にない。保育所における日々の保育実践の中から課題を見つけ、複数の職員の手でそれを分析し、検討を加え、より良い方向へと改善することが保育の質を高めることに繋がる。

この「保育所保育実践研究・報告」は、「研究論文」と「報告と考察」の2つの方向性により、保育者の実践について募集したものである。第9回目を迎え、会員各位のご協力により、16件の提出をいただいたことに感謝申し上げます。また、業務多忙の中、応募された皆様に対し、敬意を表する次第である。

第7回から、課題研究の取り組みを評価することとし、各賞の区分の見直しを行い、従来3区分だったものを5区分に変更している。

なお、この事業はあくまで保育実践の研究・報告について募集したものであり、各園における保育内容の評価を目的としたことではないことを申し上げます。

更に検討を加え、第10回の募集を予定している。内容がより充実していくことを期待し、併せて積極的に保育研究を行っていただくことを願うものである。またこの報告への応募を、保育所がいかに様々なことを行っているかを発信する手段としても活用していただきたい。

平成27年3月

「保育所保育実践研究・報告」企画審査委員会

第9回「保育所保育実践研究・報告」募集要綱（概要）

1. 目 的

日本保育協会では、保育所保育の専門性の向上を図るため、日々の保育を振り返り、検証していく保育実践に関する研究・報告を募集します。

応募いただいた研究・報告は審査を経て表彰し、報告集やホームページ、「保育界」等で公表することにより、今後の保育内容の向上と充実に資することを目的とします。

2. 主 催 社会福祉法人 日本保育協会（日本学術会議協力学術研究団体）

3. 対 象 日本保育協会会員保育所の所長、職員（個人研究、保育所内グループ研究、地域のグループ研究等）及び保育科学研究所研究会員（保育所との共同研究を含む）

4. 部 門

（1）課題研究部門

以下からテーマを選び、保育所での課題や取り組みについてまとめてください。関心を持ったきっかけ、疑問などの課題又はどのような仮説を立てたのか、保育にどのように取り組んだのか、そこからどのような発見、気づきがあったかを、出来るだけ掘り下げてください。必ずしも問題解決の成果や成功例を求めているわけではなく、課題の発見とその解決に向けたプロセスをまとめてください。保育所保育指針をもとに、具体的にどのように実践されているかを示す機会としてお考えください。

① 人との関わり

子どもが人への信頼感や主体性、社会性を形成していくために人間関係は大切です。子どもと人との関係性をつないでいくための関わりについて取り組みをお寄せください。

② 遊びと学び

遊びや日々の生活においても子どもが学ぶ機会はたくさんあります。日常的な遊びや生活が学びにつながっていくことについての取り組みをお寄せください。

③ 子どもの健康・安全

保育所での保健活動、感染症対策、事故防止対策、防災等の危機対応などについて、具体的な取り組みの内容をお寄せください。

（2）実践報告部門

テーマは自由です。日誌に記載された日常の実践や、地域・保護者に向けて実施した調査結果など、保育実践・事例報告・調査報告等を対象とします。日々の記録の中から得られた事柄や傾向の変化など、客観的な記録・報告をもとにした考察に注目するものです。

- （例）
- ・保育所での実践事例（感染症・食中毒への対応、特別な配慮の必要な子どもの保育、乳児保育での課題、苦情解決の取り組み、保育環境向上のための取り組み（物的、人的）、入所の際の配慮、保育日誌の工夫・改善等）
 - ・保育所（地域）での調査など
 - ・保育所として実施した子育てに関する特別活動、子育て家庭への支援・地域との連携など
 - ・災害への対応（防災計画の策定等）

5. 審査において評価する内容

応募作の評価は企画審査委員会が行います。目的や課題を明確に示し、それに対しどのように取り組んでいったかという経過等について、事実を基に客観的・具体的に記述され、その結果に対して考察がなされていることが大切です。また、問題提起が明確か、論旨が通っているか、オリジナリティはあるか、データは適切か等についても評価を行います。

第9回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

○優秀研究賞（課題研究部門）

該当なし

○研究奨励賞（課題研究部門）

- ・課題研究③子どもの健康・安全

「保育の質を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～」

江藤 治世（大阪府・都島友渕乳児保育センター）

○優秀報告賞（実践報告部門）

- ・実践報告

「園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り

～職員一人ひとりのよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～」

知念 幸江（沖縄県・第2愛心保育園）

○実践奨励賞

- ・課題研究①人との関わり

「子ども達が自分のことが“好き”と思える保育」

岩谷 裕子（京都府・福知山保育所）

- ・課題研究②遊びと学び

「絵本の力」

中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加（大阪府・都島桜宮保育園）

- ・実践報告

「健康な歯を育む保育の在り方

～口腔衛生指導と、歯科医、保護者との連携を通して～」

後藤 しのぶ（仙台市（研究会員）・仙台保育所こじか園）

- ・実践報告

「子どもの育ちを支える食育の実践

～食を身近に感じるために調理担当者ができること～」

大森 美和、峯村ひで子（埼玉県・与野本町駅前保育所）

- ・実践報告

「職員間の連携を振り返って～リーダーとしての取り組み～」

斉藤 直美（東京都・そあ季の花保育園）

- ・実践報告

「保育における標準化とその手立てについて

～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～」

浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）

- ・実践報告

「お箸の正しい使い方

～手先を使ったあそび、機能との関連性～」

大森 千代美（鹿児島県・建昌こぎく保育園）

- ・実践報告

「カルタ遊びを通して思いやりの心を育む」

島袋 篤子（沖縄県・愛心保育園）

○奨励賞

- ・ 課題研究①人との関わり
「グループ活動と係活動にチャレンジ！」
武元 善輝（鹿児島県・つるみね保育園）
- ・ 実践報告
「仲間、あそび、自然の中で育ちあう保育
—障害児保育の取り組みから—」
藤井 民子、佐々木 淑子、鈴木 綾、太田 ちはる（北海道・人見保育所）
- ・ 実践報告
「楽しく食べる
～“ひとくち食べてみる”から繋がる“食べられるかも？”の気持ち～」
野上 未優、佐藤 遼子、北爪 麻依（群馬県・高崎保育所）
- ・ 実践報告
「麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり」
金田 茉莉（東京都・砂原保育園）
- ・ 実践報告
「運動遊びを保育に取り入れて
～園内事故防止と体力増進のために～」
桑野 嘉子（新潟市・つくし保育園）
- ・ 実践報告
「子育て家庭への支援を考える
～子育てパートナーとして～」
田中 美佳、井原 千恵（北九州市（研究会員）・戸畑保育所）

目 次

はじめに

第9回「保育所保育実践研究・報告」事業の概要

第9回「保育所保育実践研究・報告」入賞作一覧

1. 入賞作の紹介	1
(1) 研究奨励賞	1
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究③子どもの健康・安全 「保育の質を高めるリスクマネージメント ～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～」 江藤 治世（大阪府・都島友渕乳児保育センター）	3
(2) 優秀報告賞	15
〈実践報告部門〉	
「園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り ～職員一人ひとりのよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～」 知念 幸江（沖縄県・第2 愛心保育園）	17
(3) 実践奨励賞	25
〈課題研究部門〉	
・ 課題研究①人との関わり 「子ども達が自分のことが“好き”と思える保育」 岩谷 裕子（京都府・福知山保育所）	27
・ 課題研究②遊びと学び 「絵本の力」 中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加 （大阪府・都島桜宮保育園）	33
〈実践報告部門〉	
・ 「健康な歯を育む保育の在り方 ～口腔衛生指導と、歯科医、保護者との連携を通して～」 後藤 しのぶ（仙台市（研究会員）・仙台保育所こじか園）	38
・ 「子どもの育ちを支える食育の実践 ～食を身近に感じるために調理担当者ができること～」 大森 美和、峯村 ひで子（埼玉県・与野本町駅前保育所）	42
・ 「職員間の連携を振り返って ～リーダーとしての取り組み～」 斉藤 直美（東京都・そあ季の花保育園）	49
・ 「保育における標準化とその手立てについて ～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～」 浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）	54

・「お箸の正しい使い方 ～手先を使ったあそび、機能との関連性～」 大森 千代美（鹿児島県・建昌こぎく保育園）	62
・「カルタ遊びを通して思いやりの心を育む」 島袋 篤子（沖縄県・愛心保育園）	68
(4) 奨励賞	77
〈課題研究部門〉	
・課題研究①人との関わり 「グループ活動と係活動にチャレンジ！」 武元 善輝（鹿児島県・つるみね保育園）	79
〈実践報告部門〉	
・「仲間、あそび、自然の中で育ちあう保育 ―障害児保育の取り組みから―」 藤井 民子、佐々木 淑子、鈴木 綾、太田 ちはる（北海道・人見保育所）	85
・「楽しく食べる ～“ひとくち食べてみる”から繋がる“食べられるかも？”の気持ち～」 野上 未優、佐藤 遼子、北爪 麻依（群馬県・高崎保育所）	88
・「麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり」 金田 茉莉（東京都・砂原保育園）	94
・「運動遊びを保育に取り入れて ～園内事故防止と体力増進のために～」 桑野 嘉子（新潟市・つくし保育園）	99
・「子育て家庭への支援を考える ～子育てパートナーとして～」 田中 美佳、井原 千恵（北九州市（研究会員）・戸畑保育所）	106
2. 総評及び講評	111
総 評	113
委員長 藤 澤 良 知	
講 評（作品別）	114
「保育所保育実践研究・報告」企画・審査委員会 委員長 藤 澤 良 知（実践女子大学名誉教授） 小 林 芳 文（和光大学教授） 石 川 昭 義（仁愛大学教授） 井 桁 容 子（東京家政大学ナースリールーム主任保育士） 酒 井 かず子（金目保育園園長） 日 吉 輝 幸（社会福祉法人 穴水福祉会理事長） 岡 田 澄 子（見和めぐみ保育園園長）	

1. 入賞作の紹介

(1) 研究奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究③ 子どもの健康・安全

「保育の質を高めるリスクマネジメント

～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～」

江藤 治世（大阪府・都島友渕乳児保育センター）

課題研究③ 子どもの健康・安全 保育の質を高めるリスクマネジメント ～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～

大阪府・都島友渕乳児保育センター 江藤 治世

はじめに

私の勤務する社会福祉法人都島友の会は、平成23年に創立80周年を迎え、大阪市内に保育園8ヶ園と児童発達支援センターを運営しており、園児は9園合わせると1,000名を超える大規模な法人です。

保育園の重要な任務の一つは、「子どもの命」を守ることです。大切な子どもたちの命を預かっているという責任は重く、少しのミスも許されません。一方、子どもというのは、判断力や身体機能が未熟であり、時として突発的な行動を起こすことがあります。そのため職員は、細心の注意を払って保育する必要があります。しかし集団生活において事故を避けることは困難であり、また職員も人であるために、ミスを犯してしまったり、保育の環境から事故が起こったりします。

そこで事故発生を、個人の資質や責任にせず、再発を防止できるよう、各園から提出されたヒヤリハット事例を分析し、法人全体として事故発生の原因・傾向を考察し、対策を立てる「リスクマネジメント」の取組みを、平成25年度より本格的に実施したところです。

ヒヤリハット事例の分析から

ヒヤリハット事例の分析は、平成24年度まで各保育園で行っていましたが、平成25年度からは法人のリスクマネジメント委員会で問題を共有化し、分析を行い事故防止に努めてきました。

平成25年4月～12月の集計期間に、各園から委員会に提出されたヒヤリハット事例の報告は3,016件です。

保育園により、当初ヒヤリハットの報告が集まりにくい保育園もありました。現場のリスクマネジメント担当者に、ヒヤリハット報告が少ない理由を聞いてみると、「日常の業務に追われてヒヤリハット報告を書く時間的な余裕がない」、「何を書いていいのかわからない」、「ヒヤリハット報告を書く必要性・意義をあまり感じない」との意見がありました。またリスクマネジメント担当者も、同僚が多忙なことを理解しているので、書くようにはお願いはできても、それ以上はためらってしまい、なかなか報告件数が増えないということがありました。

保育園にとってヒヤリハットの報告をする意味は、事故にならなくとも、保育を振り返り、事故につながるリスクの存在を日頃から意識することにあります。報告件数が少ないということは、隠れているリスクを見逃していることであり、適切なリスク管理ができません。

そこで各保育園では、ヒヤリハット報告の書式を簡略化したり、毎朝のミーティングで話し合ったり、毎日夕方にヒヤリハット報告を事務所に提出し、各自で帰るときに見るようにしたりと、事例報告を増やす努力をしました。またリスクマネジメント担当者が事例報告の意義や必要性を、職員に周知理解させることを繰り返し、結果として、ヒヤリハット報告を増やすことができました。



【内容別集計】 三重大事故は噛み付き・転倒・擦り傷（図1～4）

ヒヤリハットの内容別集計では、0、1歳児と2歳児とでは同じ傾向がみられ、噛み付きが合計445件と最も多く、次いで転倒が合計359件でした。乳児は日常的に

噛み付き行動が見られますが、これは言葉がうまく伝えられないからだと思われます。また次いで転倒が多い原因として、乳児期、特に歩き始めの時期は、頭が大きく、バランスの悪さから足元が不安定で、よく転倒してしまうためと考えます。

図1 0、1歳児けが別

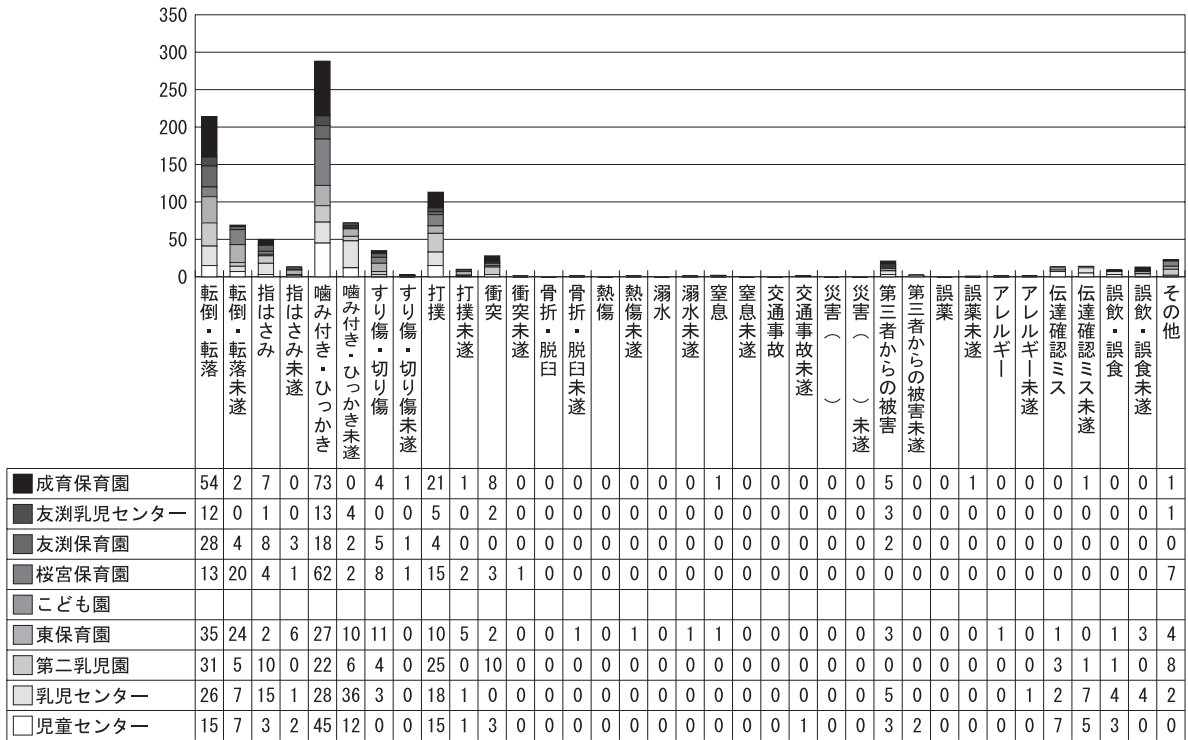
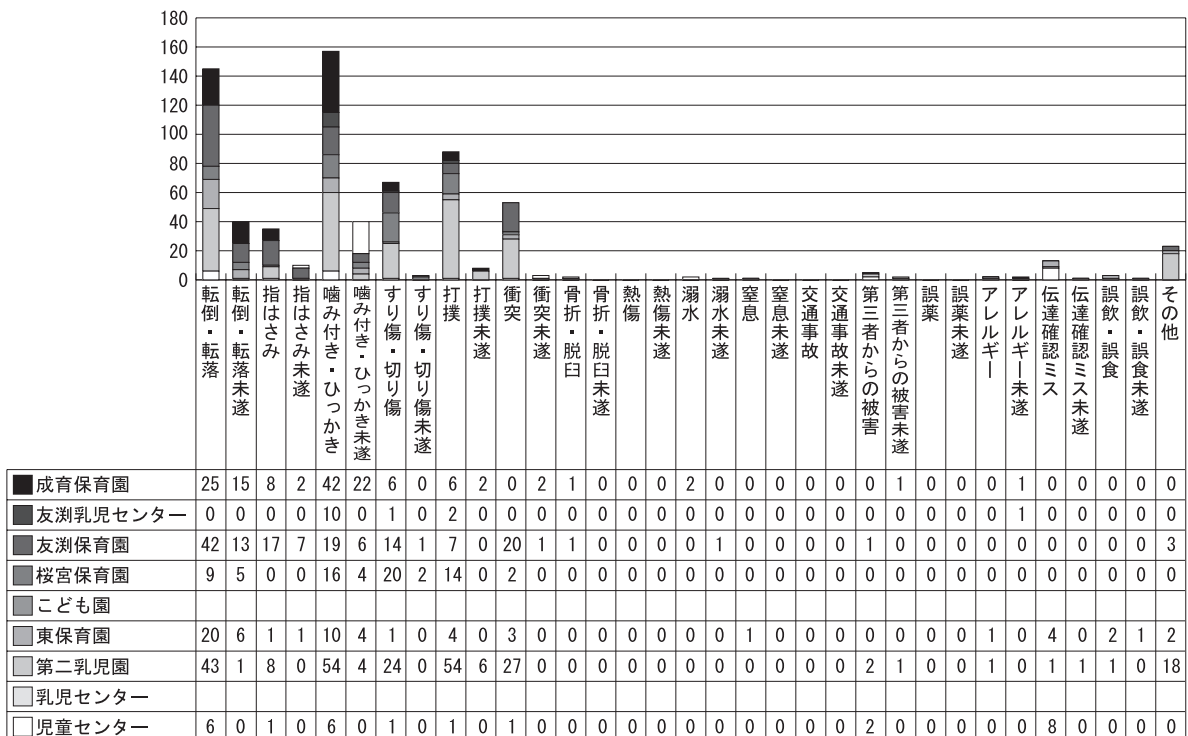


図2 2歳児けが別



3歳児では転倒が167件と最も多く、次いで、噛み付き・ひっかきが101件みられました。これは3歳児になると外遊びの機会も多く、思いっきり走り回って転倒してしまうためではないかと考えます。また噛み付きは、自分の意思をうまく伝えられないためにおこると考えま

す。しかし、4月・5月に比べると10月以降は噛み付きが、半分以下に減少しています。10月以降は、噛み付きに変わって打撲が多くみられるようになってきています。これは前半期には言葉が未熟だった3歳児も、成長とともに意思が伝えられるようになったからだと考えます。

図3 3歳児けが別

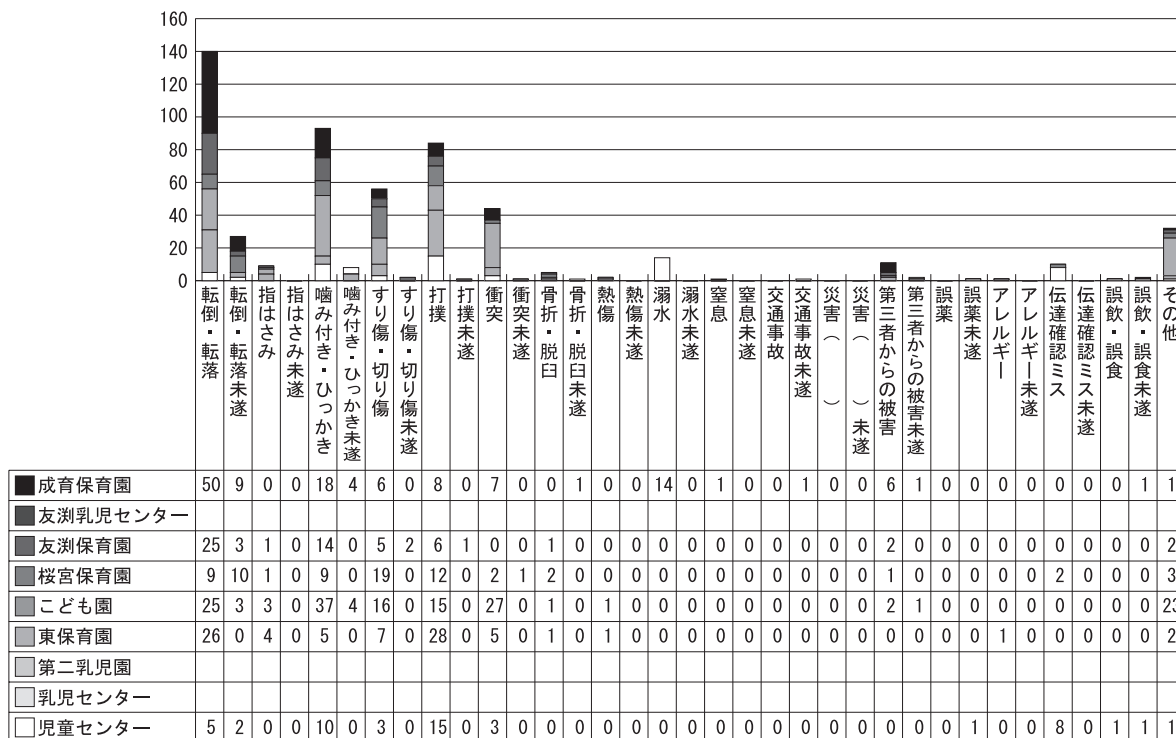
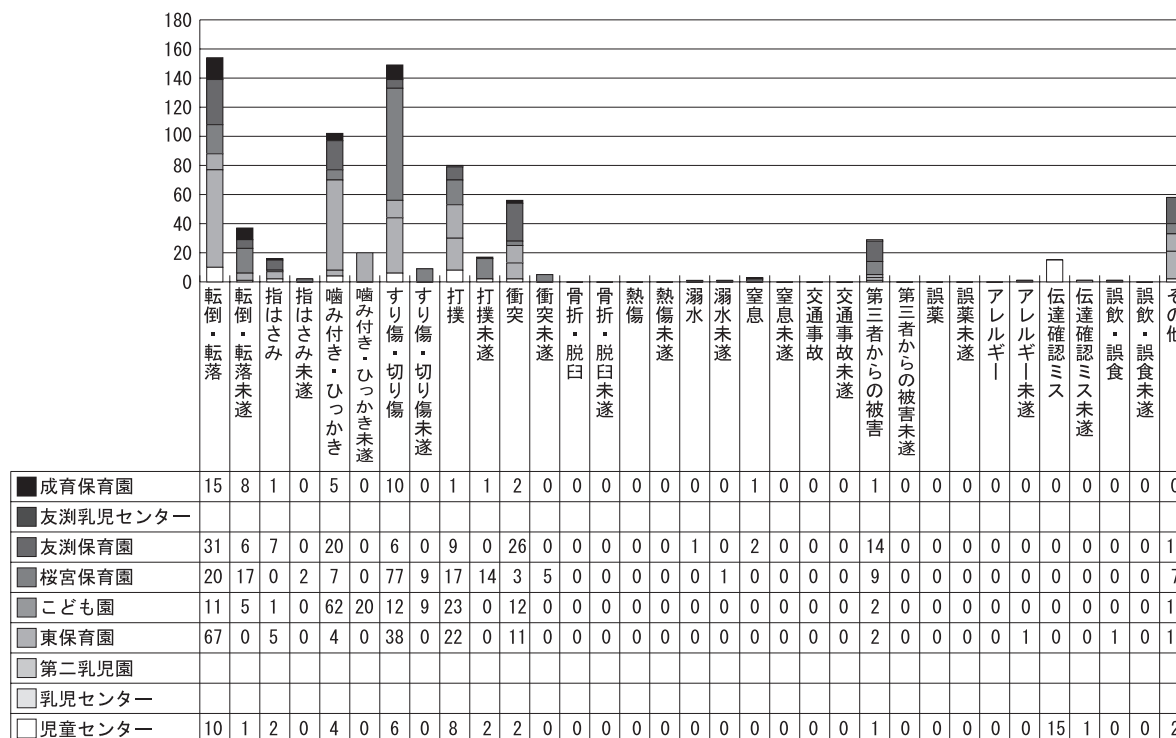


図4 4、5歳児けが別



4、5歳児では転倒が154件と最も多く、次いで擦り傷が149件という結果がでました。これは3歳児同様、外遊びの機会が多く、思いっきり走り回って転倒し、年齢が上がるとよりダイナミックに転ぶのか、擦り傷とともに、打撲や衝突も多くみられました。

【場所別集計】 事故は保育室で (図5~8)

ヒヤリハットの場所別集計では、各年齢とも保育室が多く、特に0、1、2歳児では圧倒的に保育室が多く、合わせて1,090件でした。

保育室は乳児・幼児とも過ごす時間が最も多く、また子ども同士密着して遊ぶため、トラブルも多いと考えら

れます。0、1、2歳児の、その次に多い場所は、各保育園によってばらつきがあり、全体の集計では特定できませんでした。

3、4、5歳児では、保育室は493件のほかに、特に4、5歳児では園庭など戸外が222件と次いで多くみられました。しかし報告の記入要旨に、戸外での発生場所を「園庭」としてしまったため、今後の分析のためには「園庭のすべり台でよく起こっている」「うんていからの転落が多い」「砂場でのトラブル」などという風に、具体的な場所にすることにより注意がしやすく、けがや事故をもっと未然に防ぐことができたのではないかと思います。

図5 場所別0、1歳児

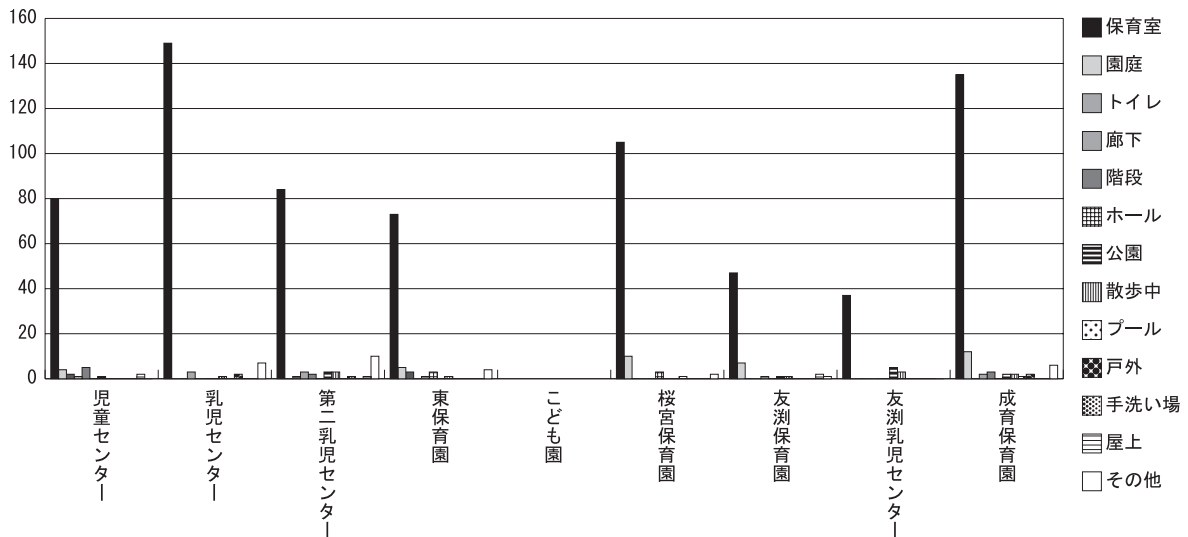


図6 場所別2歳児

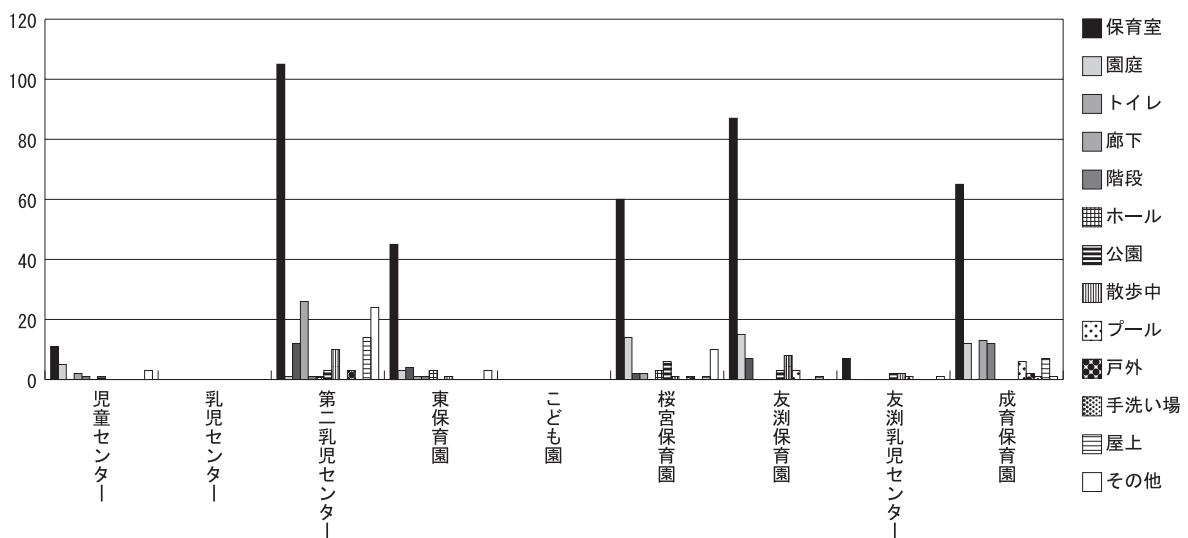


図7 場所別3歳児

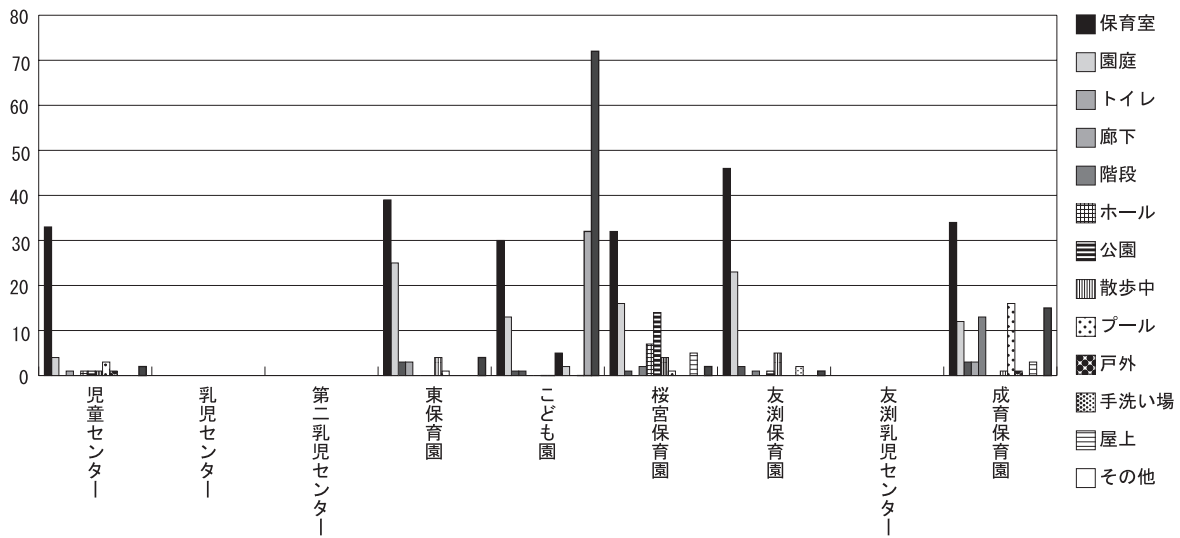
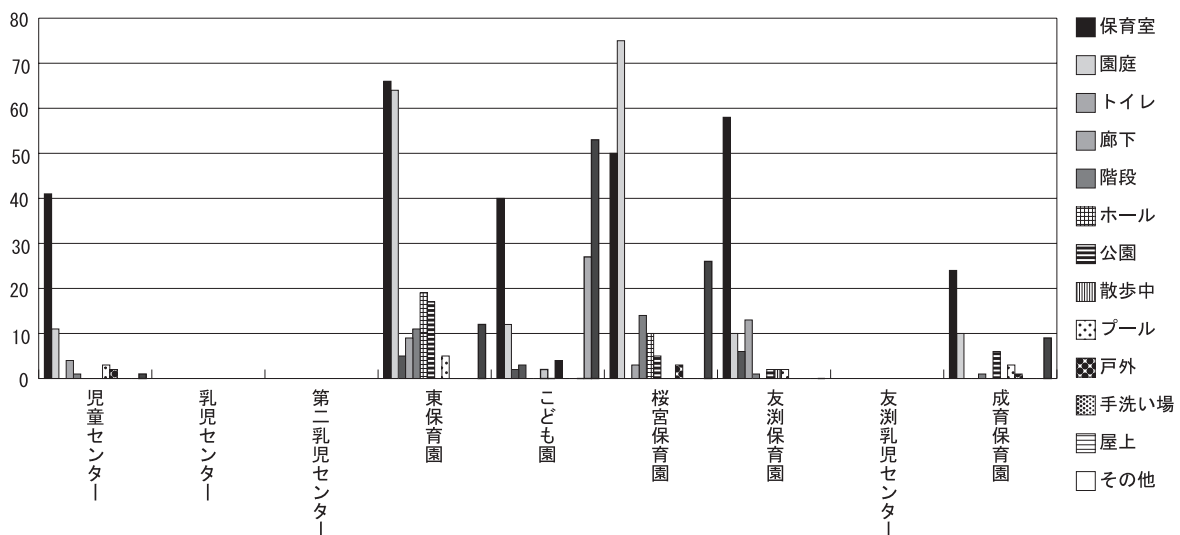


図8 場所別4、5歳児



【時間別集計】 午前中に多い事故 (図9~12)

ヒヤリハットの時間別集計では、0、1、2、3歳児では10時台が最も多く、4、5歳児では11時台が最も多いという異なった結果がでました。0、1、2歳児では次いで16時台が多く、3歳児では11時台となり、4、5歳児では10時台が多くみられていました。

10時台は乳児・幼児共活動する時間帯であり、幼児(3、4、5歳児)では11時台でも活動しており、逆に乳児(0、1、2歳児)は、給食中で保育士のみも届き、食べることに集中しているため、あまり起こりにくいのではないかと思います。乳児が次いで多い16時台は、夕方の掃除の時間でもあり、掃除に人手が取られ、子どもをみる人数が少ないためにトラブルも起こりやすいのではないかと考えます。

【天気別集計】 雨の日は事故の確率が高い (図13~16)

ヒヤリハットの天気別集計では、晴れの日の件数が2,053件で、雨の日が240件と、圧倒的に晴れの日の件数が多い結果となりました。集計をとった期間は晴れの日が多かった印象があり、単純に晴れの日にヒヤリハット報告が多いとは考えにくいと思い、晴雨の比率を調べ件数と比べてみました。

すると保育可能な晴れの日が149日間で、ヒヤリハット件数が2,053件に対し、雨の日が11日間でヒヤリハット件数が240件でした。晴れの日のヒヤリハット件数が7.4%起こっているのに対し、雨の日は11.7%で、雨の日の方が高い確立でヒヤリハット件数がみられていました。

これは雨の日は、園庭や屋外に出ることができず、思

図9 時間別0、1歳児

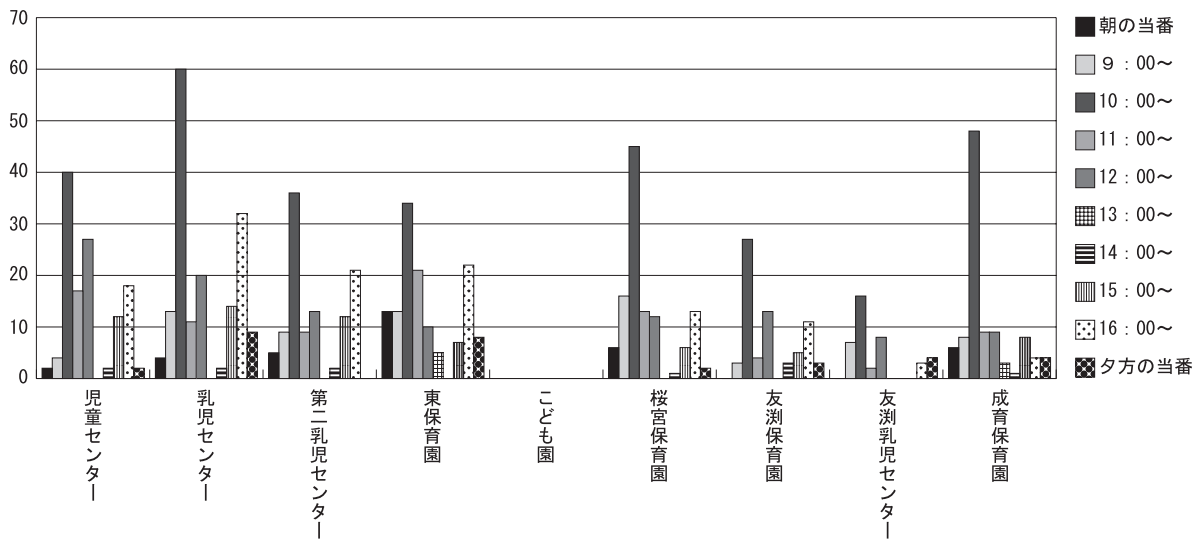


図10 時間別2歳児

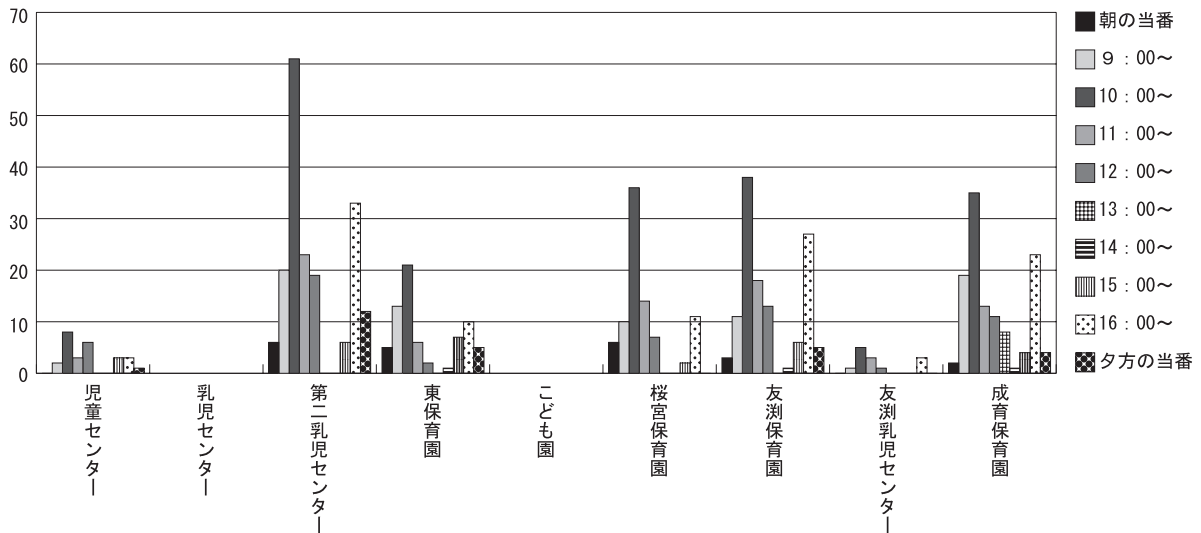


図11 時間別3歳児

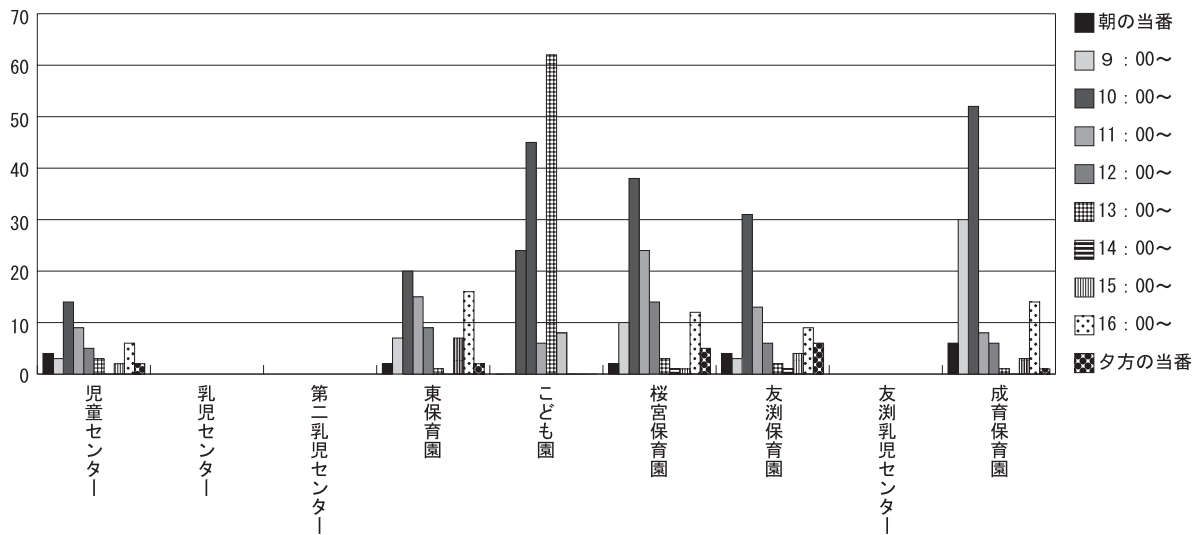


図12 時間別4、5歳児

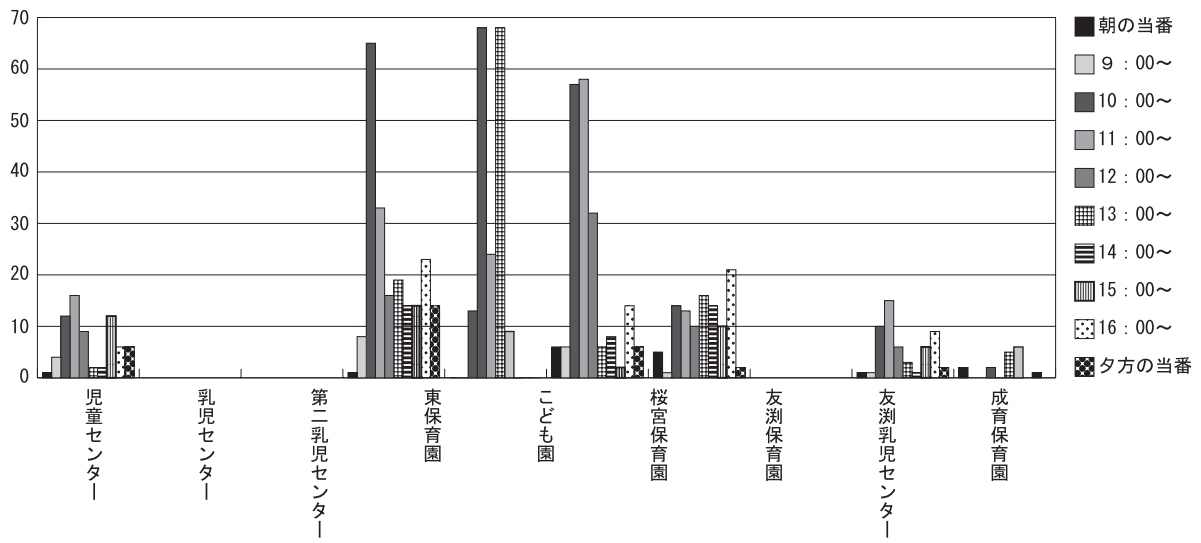


図13 天気別0、1歳児

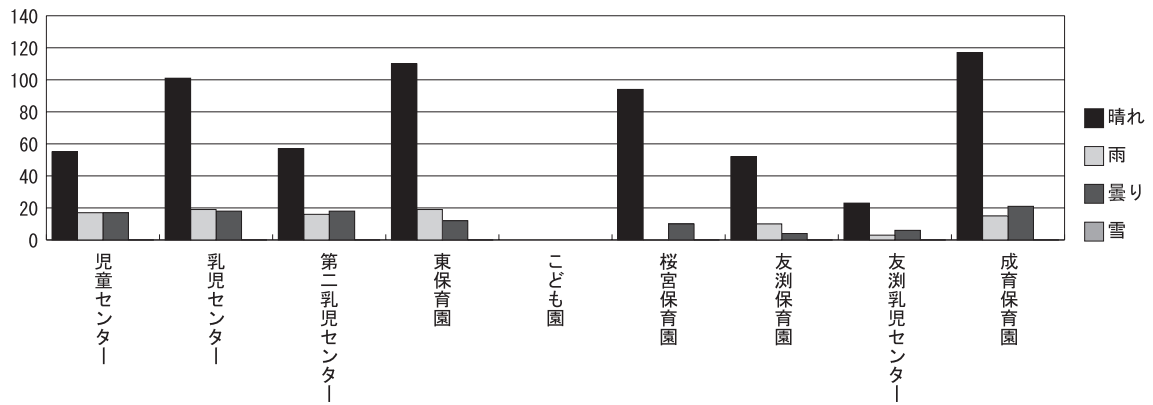


図14 天気別2歳児

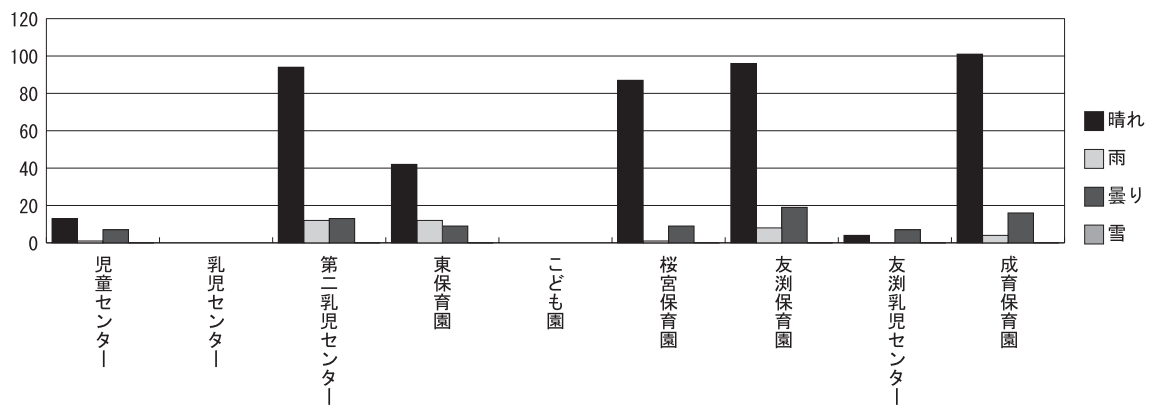


図15 天気別3歳児

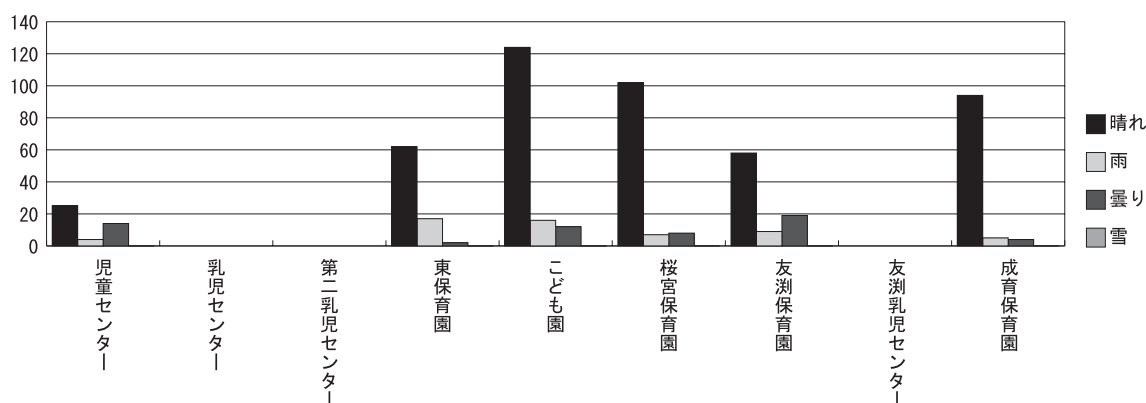
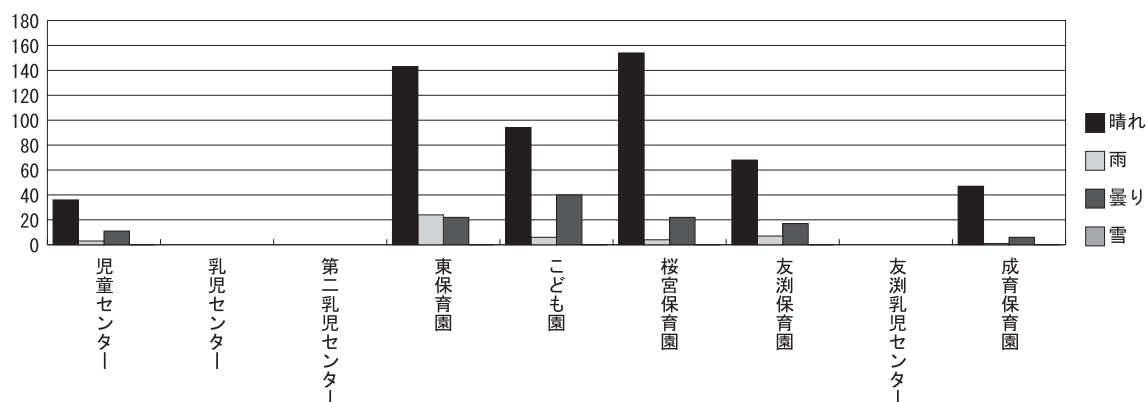


図16 天気別4、5歳児



いっきり体を動かして遊ぶことができないため発散できないこと。また室内では、子ども同士が密着して遊ぶため、トラブルも起きやすく、外に出ることができずに発散できないストレスと相まって、件数が多くみられるのではないかと考えます。

【曜日別集計】各園により相違 (図17~20)

ヒヤリハットの曜日別集計では、全園の総件数で見ると何曜日に多いという傾向は見られず、平均化していますが、細かく園ごとに見ていくと突出している曜日があることがわかりました。

例えば成育保育園の3歳児は金曜日に突出して多く見られていましたが、これは金曜日に専門の体育の先生による「体育遊び」があり、そのときに普段あまり使用していない体育用具などを使うために、「体育遊び」のある金曜日の午前中に多くみられました。成育保育園では3歳児から「体育遊び」があり、まだ体育用具の使用に慣れていない4月~6月は特に、転倒やすり傷・打撲などが多くみられたようでした。しかし、体育用具にも慣れてくると、徐々に金曜日の件数は減っていき、10月以降は金曜日に突出してみられるということはなくなりました。

次に友渕保育園の2歳児は木曜日に多かったのですが、これは10~11時台の保育室と15~16時台の保育室で多く起こっていました。内容は転倒が多く、次いで衝突が多くみられていました。保育室内で寝そべて遊んでいて、その寝そべている子どもにつまづいて転倒したという報告が目につきました。木曜日以外の保育室でも保育室内を走り回り転倒したり、密着して遊んでいたため、子ども同士のトラブルは起こっていましたが、木曜日以外の曜日では寝そべて遊んでいたための転倒は1件もみられませんでした。木曜日は、子どもたちの寝そべて遊んでいる姿からも、週末に近づき疲れが出ているとみられ、木曜日にヒヤリハット報告が多かったのではないかと考えられました。また集計期間中の保育可能な日の雨の日数が11日間でしたが、そのうち6日間で木曜日でした。直接的に関係があるのかは不明ですが、雨の日にヒヤリハット報告が多いという結果からも木曜日に多かったのではないかと考えました。

乳児保育センターでは、0、1歳児でやや火曜日に多かったのですが、内容は噛み付き・ひっかきが大半で、10時台に保育室で起こっていました。桜宮保育園でも0、1歳児でやや木曜日に多かったのですが、内容は乳児保育センター同様、噛み付き・ひっかきが多く、10時台に

図17 曜日別0、1歳児

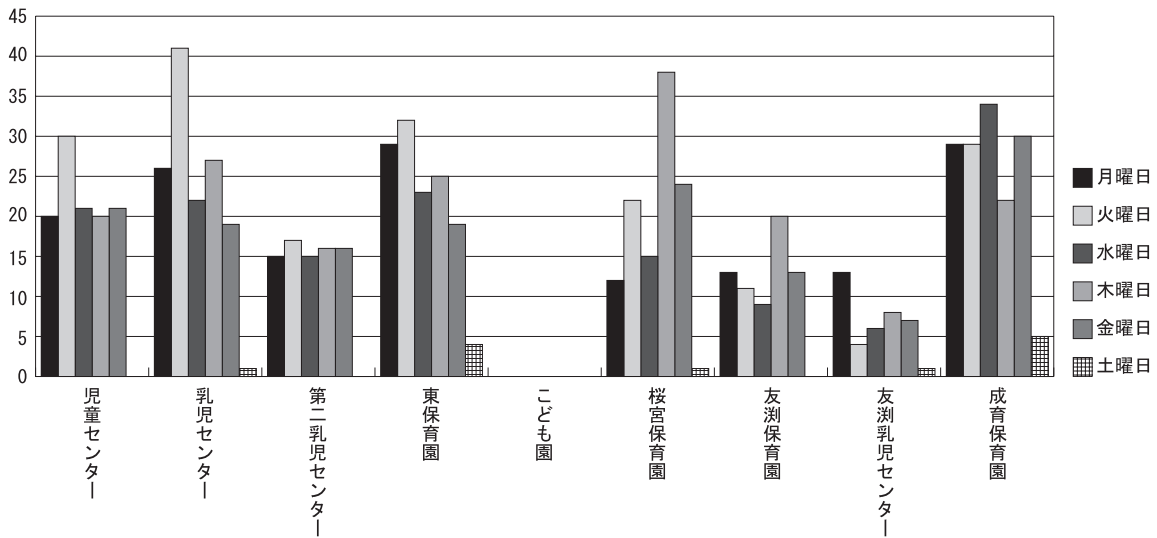


図18 曜日別2歳児

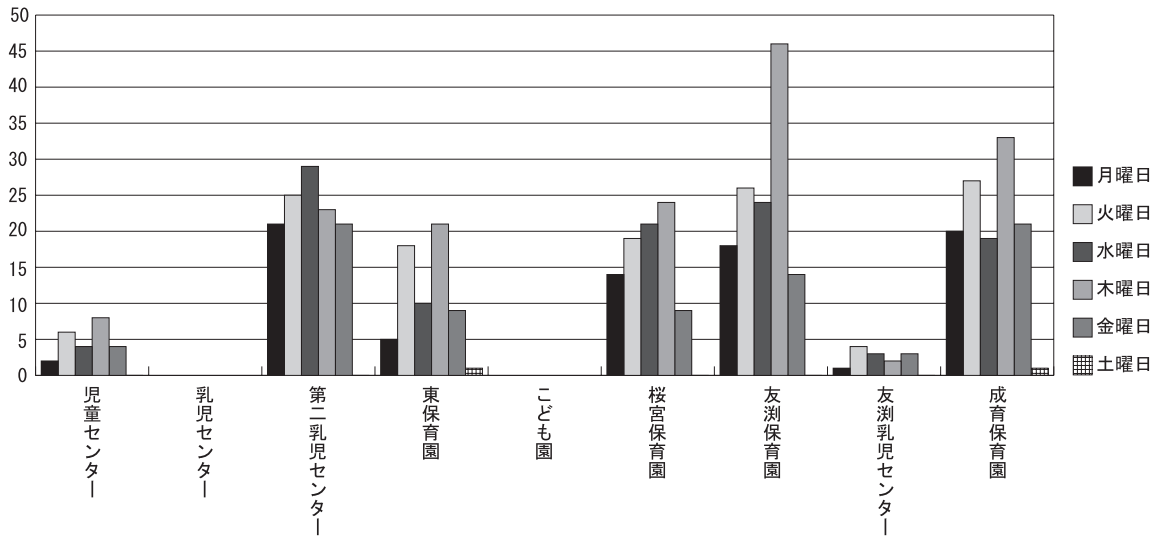


図19 曜日別3歳児

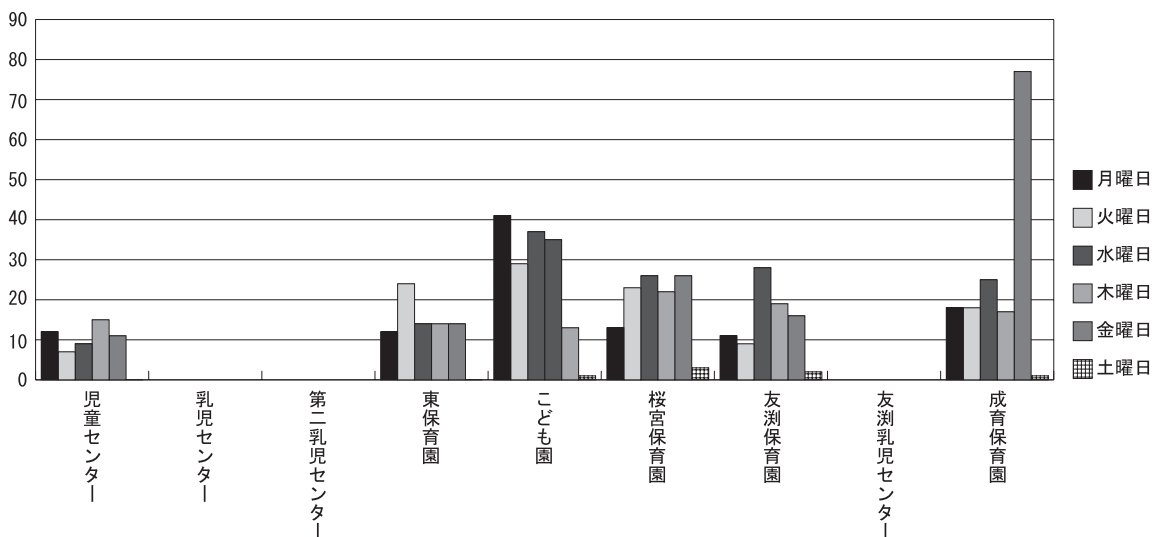
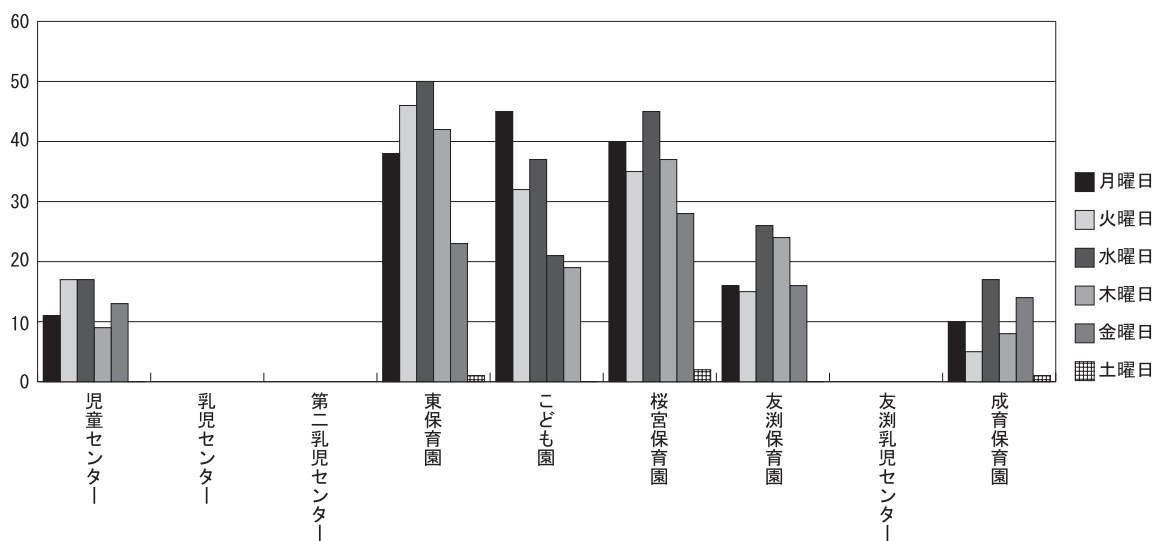


図20 曜日別4、5歳児



保育室で起こっていました。0、1歳児に関してなぜこの曜日に多いのかを考えてみましたが、乳児保育センター・桜宮保育園ともに、なぜこの曜日に起こりやすいのかは、わかりませんでした。しかし結果に基づき、保育する際には気をつけていくことになりました。

【月別集計】(図21～24)

ヒヤリハットの月別集計では、全園の総件数でみると7月～9月が突出して多くみられていました。これは4月～6月のヒヤリハット件数が少なかったため、リスクマネジメント委員会で話し合い、7月以降に件数が増えたと考えられます。リスクマネジメント委員会では、ヒヤリハット報告の記入の仕方についての統一や、未遂事項についても記入を促すなど積極的に件数が増えるように働きかけました。その結果4月～6月に比べると倍

以上に増やすことができました。しかし9月をピークに10月からは再び件数が減っていってしまいました。これについては、10月は運動会があり、その後は発表会が続いてあるため、職員が忙しく、ヒヤリハット報告の記入にまで手が回らなかったためと考えます。

職員の感覚的には、まだ子どもたちもクラスに慣れていない4月・5月が嘔み付き・ひっかきなど子ども同士のトラブルが多く起こっている印象がありましたが、4月～6月のヒヤリハット件数は少なく、職員の感覚とは一致しませんでした。これはまだヒヤリハットを習慣的に書いておらず、件数が少なかったためであり、ヒヤリ・ハットした体験が少なかったためではないと考えます。その結果、月別の正確なヒヤリハットの件数が把握できず、月別についての詳しい分析はできませんでした。

図21 月別0、1歳児

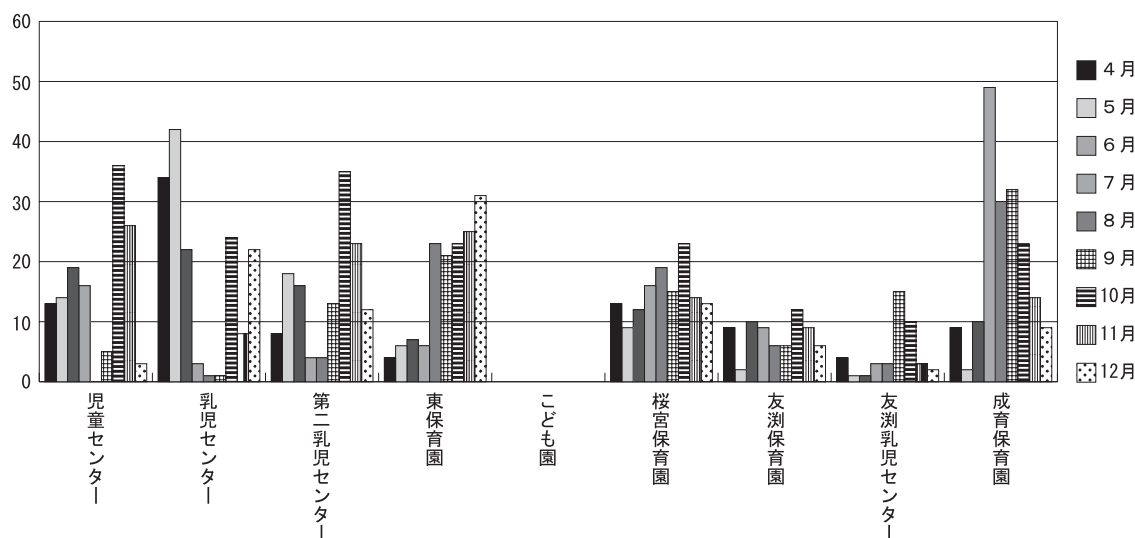


図22 月別2歳児

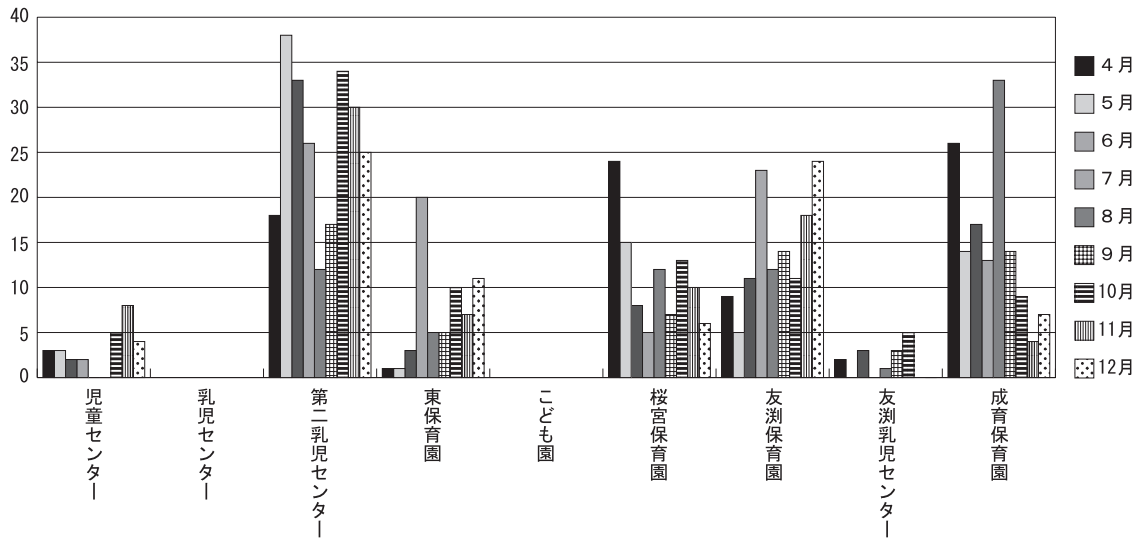


図23 月別3歳児

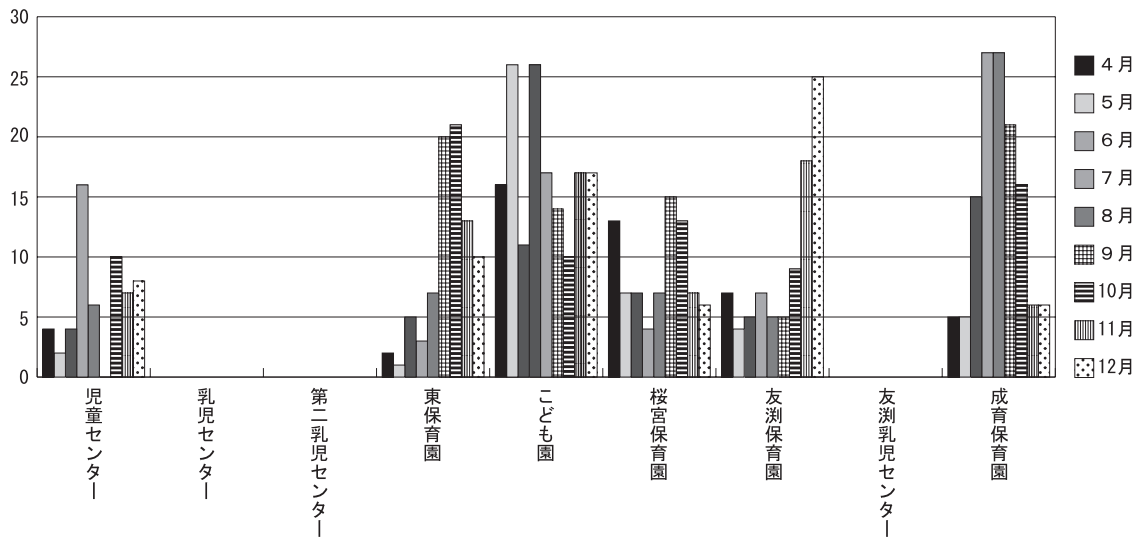
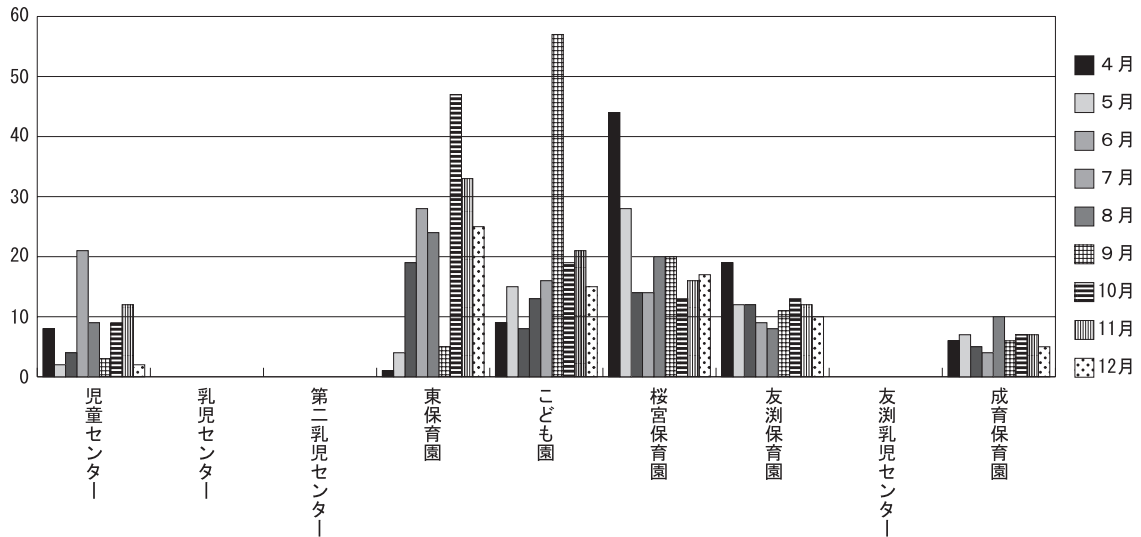


図24 月別4、5歳児



ヒヤリハット報告から学んだこと

ヒヤリハット報告の意義は、「ハインリッヒの法則」にあるように、1件の重大事故の背後には、29件の軽微な事故が起きており、さらにその背後には300件の「ヒヤリ・ハットした」事故寸前の危険な状態や経験があるといわれています。

ヒヤリハット報告からは、軽微な事故やヒヤリ・ハットした体験から、事故報告書だけでは把握できなかった事故リスクが明らかになります。

このため事例検討会を開催し、職員一人ひとりが考える機会をもつことが重要であると考えています。その結果を現場にフィードバックすることで、リスクを見る眼を鍛え、事故発生を予測する習慣をもつことができると考えます。

ヒヤリハット報告を、内容別・場所別等の区分でグラフ化しました。

同じ法人内でも、建物の構造上の違いや、子どもの定員、年齢など保育園によって様々であり、事故につながる原因等を、単純に比較することはできませんが、大まかな傾向はみえてきます。

保育園ごとに細かく分析していくと、自分の保育園の

傾向がわかり、また全体をグラフ化することで、自分の保育園だけでなく、法人内の他の保育園の傾向を知ることができ、様々なリスクの存在を知ることができ、重大事故を回避できると考えます。

法人内では様々な研修を実施していますが、各園のリスクマネジメント担当者を対象にヒヤリハット報告の分析結果を説明したのをはじめ、法人内職員が一堂に集まった平成26年度の辞令交付式後に、職員約200人に対して全体研修を行ったところです。職員からも「ヒヤリハットの内容が明らかになることで、気をつけるポイントがよくわかった」「時間帯やどこで起こっているかがわかったので、これからは気をつけていこうと思う」などの感想も聞かれ、ヒヤリハットを書く意義も理解が深まってきたのではないかと感じています。

保育園での様々なシチュエーション下における事故発生の傾向を知り、効果的な対策を立てるためには、第一にヒヤリハット事例の記入の徹底・習慣化、第二に集計と原因を探る分析、第三に職員一人ひとりが結果を共有し活用することです。今後も、報告・分析の簡易化を図りながら報告件数を増やし、さらに事故防止、安全対策の向上に向け努力していきたいと考えています。



(2) 優秀報告賞

〈実践報告部門〉

- ・実践報告

「園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り

～職員一人ひとりのよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～」

知念 幸江（沖縄県・第2 愛心保育園）

園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り

～職員一人ひとりのよりよい資質向上と保護者支援を目指して～

沖縄県・第2 愛心保育園 知念 幸江

1. はじめに

平成22年度に園内勉強会についての実践研究を行った際に出た課題をどのように改善していくかという点において、平成23～25年度の勉強会では、各職員の声を聞きながら試行錯誤の中取り組んできた。そして今年度は「次世代を担う保育士をどのように育てていくか」また「全職員が同じ方向性を持って取り組むことができているのか」ということを確認したいという思いで、研究を進めることにした。

更に平成24年度に2度目の第三者評価を受審した際、評価委員の先生方に“経験値が違う職員がいる中で同じような自己評価をするのではなく、その立場にあった自己評価をすべきではないか”というご指導を頂き、自己評価の内容を見直すことが組織の強化にも繋がるのではないかと、ということも踏まえながら、今回勉強会を通して、一人ひとりの意識を高める共に、組織としての強化を図ることができるよう研究を深めることにした。

2. 園の概要

施設名 社会福祉法人 玉重福祉会 第2 愛心保育園
所在地 那覇市字国場251-1

設立年月日 平成13年4月1日・愛心保育園 分園
平成19年4月1日・第2 愛心保育園

平成26年11月1日現在

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	計(名)
定員(110名)	15名	19名	19名	20名	20名	17名	110名
現員(127名)	18名	22名	23名	23名	21名	20名	127名

職員構成 園長1名・副園長1名・主任保育士1名
保育士22名(パート2名含む)
調理員3名(パート1名含む)
用務員3名……計31名

3. 研究の目的

- ・保育士一人ひとりの自己評価を通して、P D C Aサイクルを活かす
- ・園の理念、目標を再確認し、組織の強化に繋げる
- ・園内勉強会についてのアンケート(職員、保護者)を取り、それぞれの思いを知ることにより個々の学びに繋げる

4. 園内勉強会のこれまでの取り組み

	勉強会の内容(取り組み)	評価
二十一年度	＊4つのテーマを設定し、各グループの学びを深める。 ・思いやり保育について ・子どものケガや安全環境について ・感染症について ・子どもと遊び	少人数(4～5人)での話し合いを持つことで、意見や発言も活発にできると共に、グループにおいて話し合いがまとまりやすかった。
二十二年度	＊各自で学びたい内容を選びグループ学習を深める。 ・マーチングの基本動作 ・保育士指針の再確認 ・救急救命について(安全管理と健康について) ・思いやり保育の今後の取り組みについて	これまでリーダーが各テーマを決め、担当者として中心になることが多かったが、リーダー以外の人も担当者となることで、会をまとめる責任感をもつことができ、よい経験になった。
二十三年度	内容①4つのテーマを設定し、各グループに分かれて学びを深める。 ・保育の知識について ・文章の書き方、言葉遣い、対応など ・音楽(ピアノの上達を目指しながら音楽を楽しむ) ・保育環境について 内容②好きなテーマを各自で選んで学ぶ。 ・習字/生け花 ・パソコンの使い方 ・料理/テーブルコーディネート	各自で“やってみたい”と思う分野に分かれて取り組むことができた。苦手なことについての意見の場を設け、皆で活発な話し合いがもったり、互いに協力しながら行うことができた。 生け花やテーブルコーディネート等、保育とかけ離れた学びのように感じたが、実際、花をいけることで保育環境の充実に繋がったり等、それぞれ違う分野だが、保育における学びを得ることができた。

二十四年度	*第三者評価について学びを深める 第三者評価を受審するにあたり、自己評価を通して園で取り組まなければいけない事を全職員で共通確認する。	第三者評価を受審するにあたり、職員同士の話し合いを多く持つことができ、気づかされる点が多く学びにつながった。
二十五年度	*職員育成（新任、中堅、リーダー）を強化しながら、質の向上に努める。 自己評価の見直しを行い、職員の育成(新任・中堅・リーダー)を図ると共に、保育や組織について学びを深める	これまでこのような形で取り組むことがなかったが、職員育成に力を入れた内容にしたことにより、一人ひとりの意識が高められてきているように思われた。

☆前回までの課題

- ・園長、主任、各クラスリーダー、中堅、新任という立場で、それぞれがスムーズに研修を行う為に、各自どのような役割や研修を必要とするのか明確にする。
- ・楽しく意欲的に学ぶ環境作り

5. 今年度の取り組み(研究の進め方・方法)

テーマ：園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り

～職員一人ひとりよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～

- ①保育クレド^{*1}の読み合わせを通して、保育理念・園の目標の周知を図る。
- ②各自で自己評価を行い、新任・中堅・リーダーに分かれ話し合いを持ち、課題改善に繋げる。

- ③園内勉強会についてのアンケートを実施（職員、保護者）
- ④園内勉強会を行うにあたり、保育グループ（各クラスリーダーで構成された研修担当グループ）を中心に全職員が計画を立てる。
- ⑤勉強会をよりよいものにするために、担当者に勉強会の評価、反省を記入してもらい、それを回覧して全職員で周知徹底を図る。

*1 保育クレド…クレドとはスペイン語で信条(約束)という意味を持つ。その内容は、当園の保育課程・各種マニュアル・保育に関する専門的なことがおさめられオリジナルに作成している。ポケットサイズの大きさになっており、全職員が手元に置き、共通理解ができるようにしている。

(平成26年度の勉強会内容)

	勉強会内容
保新 育任 士	・保育園の理念、園の目標、個別支援の作成の仕方について ・日頃の悩みや保護者支援の仕方について(事前にアンケートを配布)
保中 育堅 士	・子ども達との関わり方、褒め方 ・日頃の悩みや保護者支援について(事前にアンケートを配布)
保リ 育ー 士ダ ー	・実践研究を進めるにあたっての話し合い ・自己評価の作成についての話し合い
全 職 員	①新年度を迎えるにあたり、理事長・園長講話（H26.3/31） ②AEDの講習会（H26.7/12） ③自己評価の課題についての話し合い（リーダー：9/16、中堅：9/24、新任：9/30） ④外部講師を招いての勉強会（2回） テーマ：コミュニケーション研修（H26.9/13） いきいきとした職場作り（H26.10/25）

☆事例①…新任保育士勉強会1回目(H26・5月11日実施)
 目的：個人支援計画や週案の立て方について学びを深める。

(個別支援計画の作成が難しく、どのように作成してよいかわからないという意見が多かった為)

新任保育士からの質問事項	リーダー保育士からのアドバイス
<ul style="list-style-type: none"> 各年齢の発達段階をうまく把握できないところがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 各年齢の発達段階は、大まかに保育クレドに記されているので、参考にするとよい。
<ul style="list-style-type: none"> 0歳児を担当しているが、月齢の高い子と低い子では遊び方が違うので、どのように進めたらよいか戸惑っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 設定内容によっては、一緒にできる内容とできない内容があると思うので、クラスで話し合っけて活動するとよいと思う。
<ul style="list-style-type: none"> 養護、教育と分けて個別支援計画を作成するが、ねらいによっては、両方にあてはまるように思う時がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係は情緒の面にも含まれ、欲求を受け止めてもらうねらいならば養護、友達との関係を広げるようなねらいは、教育となる。
<ul style="list-style-type: none"> 評価や反省の書き方がどう表現してよいかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画で立てた“ねらい”に対して、保育士がどのように関わったか、またその関わり方で子どもがどのように変わったかを見つめ、今後どのように関わればよいのかを記入する。そうすることで、次月の保育士の配慮すべき事項も記入しやすいと思う。
<ul style="list-style-type: none"> 個別支援計画で前月と同じようなねらいを立ててしまうが、それでよいのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> 保育課程⇔年間計画⇔月週案⇔個別支援計画というようにつながっていくので、照らし合わせながら立てていくとよい。但し、同じねらいでも、保育士は同じ配慮や言葉かけ、体験させる内容も一緒ではなく、工夫しながら変える必要がある。

勉強会を終えて

(2歳児担当：Aさん)

・個人支援計画を立てる時の記入で、こんな表現でいいのか？小さな疑問等をみんなで確認できて良かった。

(0歳児担当：Bさん)

・個人計画や子どもの関わりについても聞くことができ、自身の課題が見出せた。
 又、先輩保育士に近づけるように良いところを学んでいきたいと思う。

(考察)

日頃から職員同士、ゆっくり丁寧に関わり、知らせたいと思う気持ちはあるが、なかなかできない部分を勉強会という形で新任保育士の話や質問に答える機会がもてて良かったと思う。個別支援計画を作成するにあたり、見本を作成し、個別に対応したり声をかけるよう

にはしているが、同じ悩みを持っている新任同士で確認したことで、共感できる部分もあった。今後も悩みや相談が伝えやすい環境作りを心がけながら丁寧に指導していきたいと思う。

☆事例②…新任保育士勉強会2回目（H26・9月30日実施）

目的：自己評価を振り返り、課題を明確にしていく。
（自己評価を終え、課題やわかりづらい項目について話しあい、次へと繋げていくため）

自己評価（項目）＊資料1参照

1. 組織について（4問）
2. 保育について（12問）
3. 自己向上について（6問）
4. 保護者支援について（3問）

	質問（課題）	回答（担当者より）
1. 組織	<ul style="list-style-type: none"> ・理念や保育目標について自信を持って言えない。 ・組織の一員としての誇りについて保育歴が浅く、日々の保育で精いっぱいである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クレドを読むなどして熟読する。 （自分なりに言えるように） ・自分が“保育園や子ども達の為に精いっぱい頑張っている”という意識をもって、仕事をすることが誇りに繋がると思う。
2. 保育	<ul style="list-style-type: none"> ・安全面での配慮が不十分に思う。 ・異年齢交流がうまくできない。 ・人権、人格を尊重していないわけではないが、呼び捨てにしてしまうことがある。 ・食育(クッキング)の計画をするが、先延ばしになりがちである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全面に関しては、常に意識をして、物の置き場所なども考える。 ・週案等意図的に計画し、他クラスへも早目に声をかける。 ・さんづけで呼ぶことを常に意識するようにする。 ・計画を見直し、できる範囲から進めていく。
3. 自己向上	<ul style="list-style-type: none"> ・職員とのコミュニケーションで、まだ積極的に声かけができない。 ・事前に保育の準備ができない。 ・保育クレドや各種マニュアルに目を通すことができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プライベートなことや話題にしやすい事について、少しずつ声かけができるように心がけていく。 ・時間の使い方を工夫し、常に準備ができるよう心がけていく。 ・週に1回や出勤前の10分間など、目を通す日を決める。
4. 保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔と元気な言葉かけができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは、笑顔のあいさつを基本にして、相手の話に耳を傾けるよう心がける。

（考察）

これまでの自己評価は、ガイドラインに沿って作成し行っていた為、質問項目も多く、当園にあわない内容になっている項目もあった。そのため今回独自で自己評価

を作成することで課題が明確になり、課題に向けてどのように取り組めばよいのかという話し合いを持つことで、実践しやすくなったのではないと思う。

☆事例③…中堅保育士勉強会（H26・8月2日実施）
 目的：日ごろの振り返りを行い、保育内容の充実を図りながら子どもとの関わり方や保護者支援の仕方を学ぶ

（自己評価の結果をもとに、保育内容のパターン化や保護者支援について、どのように関わればよいのかを考えるため）

中堅職員勉強会（子どもとの関わり方や保護者支援について）

中堅保育士の質問事項	リーダー保育士からのアドバイス
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の要求をどこまで受け入れてあげればよいのか、わからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ受け入れるようにはするが、要求している内容にもよると思うので、判断しかねる場合は、園長に相談をする。
<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の練習などで、クラスに1～2人はいると思うが、お遊戯などに興味を持ってくれない子がいる。どのように接すればよいのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・お遊戯の進み具合にもよるが、全体的に教えているのであれば、なるべく興味を持っていない子の側にいき、声かけを多くしながら“見ているからね”という素振りを見せてあげたり、側で楽しそうに踊って見せる。 ・参加はしなくても、そばで見て興味を示している子は、“それでよし”として、その都度、状況を把握して、対応するのもよいと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・“保護者支援”というと、構えてしまい、何をしてあげたらよいのか、よくわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者支援は、保育の専門性を持っている保育士の責務なので、保護者支援をする時、アドバイスではなく、まずは話を聞いてあげるようにする。できるだけ保護者にたくさん話してもらえるように話を最後まで聞く姿勢が大切。そして保護者がいろいろな場面において、自ら対応ができるように手立てを知らせてあげるとよいと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・固定時間での勤務で、なかなか会えない保護者もあり、連絡帳を通して子どもの日々の成長などを伝えているが、やり取りの難しさを感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳を通して伝えていることは、保護者にも伝わっていると思うので、限られた時間帯で、できるだけ多くの保護者と接することができるよう心がけると良いと思う。又、行事等でも積極的に声かけができるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達のできていない部分を言葉を選びながら声かけをしているが、理解できていないように思う部分があり、戸惑ってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別に声かけを多くしながら、丁寧に教えていく。 ・子どもも保育士の話していることを理解はしているが、目先の物に視線がいき、なかなか行動に移せない場合もあると思うので、状況を確認しなら声かけをするとよいと思う。

勉強会を終えて

（2歳児担当：Cさん）
 ・自分の意見を伝えることができ、困っていることもアドバイスがもらえたので良かった。

（3歳児担当：Dさん）
 ・保護者支援について難しく考えてしまいがちだったが、（支援⇔話を聞く⇔導く）事を心に留めながら、保護者と共に成長していけたらいいなと思った

(考察)

職員へは、事前にアンケートを取った結果をもとに話し合いをしたことで、保育についての思いや関わり方への戸惑いなどに対して助言することができた。特に保護者支援については、何か役立つことを提供してあげる、(アドバイス)という考えに結びつきがちで、とても大きな課題として捉えていたように感じられた。今回の勉強会を通して支援の在り方に気づき、自分なりに感じることができたようである。これからも一人ひとりの声に耳を傾け、解決できるようにしていきたい。

※自己評価についての話し合い

自己評価については、新任保育士と同じような形で中堅、リーダーで分かれて進め、自己評価後は、各自の評価、反省をもとに話し合いを持った。

(各自評価のまとめとして別紙参照3、4)

事例④…アンケートを実施(保護者H26年8月11日配布、職員7月4日配布)

園内勉強会について職員、保護者にそれぞれアンケートを実施した。

(別紙参照1、2)

(アンケートの考察)

これまで園内勉強会を実施するにあたり、月に一度、家庭保育の協力をお願いすることについて、保護者へ負担をかけていないかという心配や、保育の専門性を高めるためではあるが、どこまで理解をしてもらっているのか等、アンケートを実施するまでは不安も多くあった。しかし、アンケートの回答では、嬉しい言葉が多く寄せられ、協力して頂いている保護者の皆様に改めて感謝の気持ちでいっぱいである。各保護者に対しては、入園する際に園長より園内勉強会について説明をしたり、園便りなどを通して勉強会についての内容を知らせている事も、協力が得られている理由のひとつではないかと考えられる。今後は、保護者の意向も反映させながら、保護者と保育士と一緒に参加できる内容の勉強会を設定していくのも良いのではないかと思った。

6. まとめ

これまでの園内勉強会は、全職員で同じ課題や内容に対して学ぶことが多かったが、今年度は前回の課題を踏まえて取り組んだ。職員は経験年数やそれぞれの立場で考え方も違い、学びたいと思うことも異なってくる。しかし、学んできたことや保育歴が違っても、保護者からすれば、同じプロの保育士であることに変わりはない。日々、クラス内で話し合う機会を設けているが、新任や中堅職員にとって、もっと聞きたいことや、こんなことを聞いてよいのか遠慮していた部分があったように感じる。今回のように、それぞれの立場で勉強会を進めていく中で、自分の意見をあまり言わなかった人や質問などをしなかった人が、積極的に発言や質問をする姿が多く見られ、組織について学ぶ機会も増えたように思う。それは、事前にアンケートを配布し、少人数で話しやすい雰囲気の中、アンケートを基に進めた内容がよかったと思われる。また、各クラスリーダーも新任、中堅の勉強会を担当する事で、自分たちが職員の育成をしなければという意識を強くもつことができたように感じる。園内勉強会を進めるにあたり、当園のように第2土曜日の午後を利用し、保護者の協力願いのもとで行っているところは少ないかと思われるが、アンケートを通して保護者の皆様が、“保育士の頑張っている姿を見ると協力しても良い”というような温かい意見が聞かれたことは、嬉しく思うと共に、今後の励みにも繋がった。このような環境で勉強会を開催できることに感謝しながら、これからも園内外の研修や勉強会を通して多くのことを学び、実践に活かしていきたいと思う。そして、学んだことを子ども達に還元できるよう、一人ひとりが切磋琢磨する中でお互いに刺激をしあい自己研鑽を怠らず資質向上に繋げていきたい。

7. 今後の取り組み

(課題)

- ・一人ひとりが更に意識を高め、勉強会で習得したことを確実に保育に活かすための具体的な手立てを考える
- ・後輩の育成に力を入れ、共に学びあう組織作りの強化

職員へのアンケート（7月4日配布、7月11日回収、保育士22名）

今年度の実践研究では、園内勉強会の取り組みを研究したいと思います。これまで、いろいろな取り組みを行ってきましたが、皆さんの勉強会に対する意見を参考にしながら今後につなげていきたいと思っておりますので、園内勉強会について下記の項目について記入下さい。

☆アンケート内容(結果)

①園内勉強会の開催について

- ア、毎月あった方がよい（6人） イ、毎月でなくてもよい（16人）
ウ、その他（0人）

②内容についてどう思いますか？

- ア、よいと思う（13人） イ、特に思わない（5人）
ウ、その他（4人）

③時間について

- ア、日時よいと思う（9人） イ、時間がかかりすぎている（10人）
ウ、その他（2人）

④園外研修報告について

- ア、報告をした方がよい（10人） イ、回覧した方がよいと思う（11人）
ウ、その他（2人）

⑤ヒヤリハット、事故報告について

- ア、報告をした方がよい（13人） イ、回覧して周知を図った方がよい（15人）
ウ、その他（2人）

⑥年度末に園内勉強会についてアンケートを取っていますが、意見は、反映されていますか？

- ア、反映されている（6人） イ、少しは、反映されている（15人）
ウ、全く反映されていない（2人）

☆園内勉強会は、自己の資質向上や共通理解をする上で必要な学びの場です。これまでの勉強会を通してあなた自身、どのような学びや変化がありましたか？

- ア、障がいを持つ子への理解や関わり方がわかった（19人）
イ、園外研修報告を聞いて実践している（11人）
ウ、新任、中堅、リーダーと分けて研修を行うことで普段聞けないことが聞ける（8人）
エ、その他（1人）

☆園内勉強会に対してご意見がある方ご記入下さい。

- ・毎回行っている園外研修報告を回覧にしたならその分時間が短縮できるのでは？
- ・外部講師を招いての勉強会を設けてほしい。
- ・話し合ったり、研修の報告を受けてよいと感じたことが、実践できていないと感じることがある。

保護者のアンケート（8月4日配布、8月11日回収 回収率61パーセント）

職員園内勉強会におけるアンケートのご協力お願い

「よりよい保育を行う為に新しい情報を得たり、大切なことを全職員で共通理解することにより、一人ひとりの資質向上を図り、保育の幅を広げる」という大きなねらいのもと、当園では毎月1回、職員の園内勉強会を行っております。この園内勉強会を行うにあたり保護者の皆様方には毎回ご理解、ご協力頂き心より感謝しております。つきましては、今後も保護者の皆様の協力のもと、充実した勉強会を行うことができますよう皆様のご意見を頂き、これからの勉強会に反映させていきたいという思いからアンケートを実施したいと思っております。何かとお忙しいことかと思いますが、どうぞアンケートにご協力下さいますようお願いいたします。

☆アンケート内容(結果)

①園内勉強会の開催について

- ア、職員の資質向上のためには、勉強会も必要だと思う（52人）
- イ、特に必要だとは思わない（0人）
- ウ、どちらとも言えない（0人） エ、その他（0人）

②園内勉強会の内容について、職員が行っている勉強会の内容をどう思いますか？(内容は、勉強会の翌月に園便りに載せています。)

- ア、現在の内容でよい（47人） イ、もう少し工夫がほしい（2人）
- ウ、その他（1人）

③今後の勉強会について、職員にどのようなことを学んでほしいと思いませんか？

- ア、子ども達の遊びについて（30人） エ、ケガ、救急法について（23人）
- イ、園内、園外の環境について（6人） オ、食育について（16人）
- ウ、コミュニケーション力（26人） カ、その他（うちな一口）

④上記以外にご意見やご要望、ご感想などがありましたら、どうぞご遠慮なくお書き下さい。

- ・先生方が研修して、子ども達に良い影響を与えてくれるのは、とても良いと思います。
- ・私自身も上手ではありませんが、帰りの時とか、声を掛けてくれると安心しますし、先生たちとの距離も近くなると思います。あと伝え方で取られ方も変わってくるので、コミュニケーション力を深めるのは、重要なと思います。
- ・勉強会の内容を公開しているのは素晴らしい。職員のためにも園の資質の向上のためにも続けてほしい。
- ・先生方の勉強熱心な気持ちが嬉しくなります。先生方が笑顔だと子どもも笑顔に。私も協力できるように頑張ります。

(3) 実践奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・課題研究①人との関わり

「子ども達が自分のことが“好き”と思える保育」

岩谷 裕子（京都府・福知山保育所）

- ・課題研究②遊びと学び

「絵本の力」

中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加

（大阪府・都島桜宮保育園）

〈実践報告部門〉

- ・「健康な歯を育む保育の在り方

～口腔衛生指導と、歯科医、保護者との連携を通して～

後藤 しのぶ（仙台市（研究会員）・仙台保育所こじか園）

- ・「子どもの育ちを支える食育の実践

～食を身近に感じるために調理担当者ができること～

大森 美和、峯村 ひで子（埼玉県・与野本町駅前保育所）

- ・「職員間の連携を振り返って

～リーダーとしての取り組み～

斉藤 直美（東京都・そあ季の花保育園）

- ・「保育における標準化とその手立てについて

～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～

浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）

- ・「お箸の正しい使い方

～手先を使ったあそび、機能との関連性～

大森 千代美（鹿児島県・建昌こぎく保育園）

- ・「カルタ遊びを通して思いやりの心を育む」

島袋 篤子（沖縄県・愛心保育園）

課題研究① 人との関わり

子ども達が自分のことを“好き”と思える保育

京都府・福知山保育所（さくら保育園） 岩谷 裕子

I. はじめに

2011年度、2012年度と園内研修をテーマに研究を進めてきた。2011年度においては「職員のスキルを上げるための園内研修を考える」をテーマに、自園での園内研修の方法や在り方を考えた。続いて2012年度のテーマは「子どもの自尊感情を育てるための園内研修」として、肯定的で子どもの心に響く言葉を“キラキラ言葉”とし、この“キラキラ言葉”をキーワードに研修を重ねてきた。2年間の園内研修は保育士の言葉掛けや子どもへの関わり方等、学びの大きなものとなった。だが、子どもへの影響や、子どもの変化などは十分に検証することができなかったという課題が残った。今年度はその課題を踏まえて、“子ども達が自分のことが好き（自己肯定感）と思える保育”を研修のテーマとし、今年度も園内研修を中心とした研究に取り組むことにした。

諸富祥彦氏は著書の“子どもの心を救う親の「一言」”の中で、「折れない心の種は自分や人生への肯定的感覚を6歳までの様々な経験・体験を重ねてどれほど味わえるか、にかかっている」と、述べている。悩みや壁にぶつかった時に「でも大丈夫」「もう少し頑張ってみよう」と思い自己回復できる力を如何に引き出すかが、子どもの自己肯定感を養い、自分を肯定する心の育ちに繋がると考えられる。また自己回復力は乳幼児期に関わる大人達の励ましや、子ども個々の存在を大人が認めることで、子ども達は“やってみよう”“できた”を積み重ねていき、自信＝自己肯定感を育んでいくものと思われる。乳幼児の子ども達が、今後複雑化するのであろう様々な社会問題や、これから成長していくにあたって、ぶつかる壁や悩みに押し潰されないために、保育所での“やってみよう”“できた”という日々の積み重ねから生じる自信と、保育士の関わりから子ども達の自己肯定感を如何に引き出せるのかを考えたい。

II. 目的

園独自の園内研修を用いて“子ども達が自分を好きと思える保育”を考える。

III. 方法

“子ども達が自分を好きと思える保育”というテーマで研修担当者2名が研修の計画を立てる。研修過程の中で子どもや職員の変化を検証する。

(研究の流れ)

- ① 自己研修（自身の振り返り）
- ② 全体研修（職員相互の良い所探し）
- ③ 全体研修（グループ討議）
- ④ 振り返り研修（個人の気付き）

IV. 事例と考察

【事例①】

〈保育士自身の好きなところ嫌いなところを記載する〉

(ねらい)－保育士が自分自身の振り返りをする

- ・今年度の第一回目の園内研修を計画するにあたり“自分のことが好きと思える子どもを育てる”というテーマを掲げたが、その子ども達と関わる職員の自己肯定感はどうか、職員一人ひとりの振り返りを行う。

(方 法)－自己研修として自分の好きなところ嫌いなところを書く

(時 間)－職員会議終了後の約30分間

(対 象)－全職員：職員会議に出席していないアルバイト職員は日を改めて、午睡の時間に同様の研修を行った。

○第一回目の研修を終えて

客観的に自分を見つめる場を設けた結果、「自分には自信がない」「自分のことが好きではない」という職員がほとんどだった。“子どもに自信を”“自分を好きな子に”という思いとは明らかに反している。子どもに関わる職員の自己肯定感を高めるにはどうすればよいのだろうか、という悩みを次の研修の柱に置くことにした。

【事例②】

〈私から見たあなたの良い所〉

(ねらい)－自分では気が付かない自分の良さに気付き自信を持つ。

(方 法)－職員同士で好きな所や良い所を手紙に書いて渡し合い、自分を振り返る。

(対 象)－全職員

全職員に宛てた“あなたの良い所”と称したラブレターを研修担当者2名が作成し、職員みんなに配った。2人からのサプライズのラブレターを読んで、職員の表情が明るくなり、嬉しいやら恥ずかしいやらの歓声が沸き上がった。それぞれがもらったラブレターに目を通すと多くの職員は「ありがとうございます」と口にし、嬉し

さのあまりうっすらと涙を浮かべる職員もあり、何ともいえない和やかな雰囲気に包まれた。そこで、職員が職員一人ひとりにラブレターを書き渡し合うことにした。
※渡すラブレターは期日を決め、その期間内に各個人の引き出しに入れる。用紙サイズは折り紙の4分の1のサイズとした。

【事例①、②の考察】

自分ではわからない“私の良いところ”、人から見て“あなたの良いところ”というラブレターの交換は、各々が一人ひとりを思い浮かべ、普段伝えられない思いを、小さな紙に詰め込んだ。大人の私たちでも、人からこう見られていると知ると、気恥ずかしさはあるにしても、認められる気持ち良さは少しの自信になった。ともすれば、職員同士の信頼関係や繋がりがより深まったようにも感じる。今後は、この研修で職員が感じた「認められる」という経験からの心地良さを、子ども達に「どのように伝えるか」「どのような伝え方が良いか」ということが園内研修のカギになると考えた。次からは、どのような研修を行い、進めていけばよいのかを検討し、保育士がどのように関わっていけば子ども達の自己肯定感を育んでいけるのかを考えていきたい。



(アルバイト職員の研修の様子)

【事例③】

(ねらい) 一気になる子どもの姿を捉えよう

※一気になる子とは今回のテーマである「自信がないと思われる子」「もう少し自信をつけて欲しいと思う子」

(方法) 3グループのグループ討議形式

・各グループで一気になる子ども一人を決め、その子の背景や現状の姿を踏まえ、その子にあった関わり等を話し合いの子の姿やその変化を検証する。

(対象) 全職員

Aグループ—0歳児・1歳児担任(4名)

Bグループ—2歳児担任・現2歳児の前担任・一時保育担当(5名)

Cグループ—3歳児・4歳児・5歳児担任・幼児フリー担当(4名)

Aグループの討議例：第1回目

(10月18日 14:00~14:30)

O.S児—1歳児：女児

目的—一気になる子どもの姿を捉えよう。

方法—グループに分かれ、一気になる子(自信がないと思われる子)を挙げて、その背景や姿を考えた上で保育士の関わりを考える

* どういう姿から自信がないと思ったか。その子を選んだ理由。

- ・大人の顔色をよく見ている
- ・他児と大人の関わりをよく見ている
- ・他児を叱っている時、保育士のそばに来て様子をみている
- ・嫌なことがあっても友だちに伝えにくい
- ・泣くのを我慢する面が見られる
- ・目が笑っていない時がある
- ・いわゆる良い子で園ではあまり叱られることがない

* 背景

- ・家族構成—本児・母・祖父母・叔母
- ・家では意地悪などところがある(机に乗る・飼っている犬をいじめる・言うことを聞かない)
- ・離婚協議中・祖母はせっかち
- ・時々、母と祖母に叩かれている(愛情は有り)
- ・母は仕事の都合で園にはほとんど来ず(毎日の送迎は祖母)
- ・母、育児に不安を持っている

* 現状の姿

- ・大人の話しをしっかりと聞いて、言われた通り行動しようとする真面目な姿が見られる。自分の思いを通そうと駄々をこねる姿はほとんど見られない。
- ・一人でじっくり遊べるが、その中で他児におもちゃを取られても何も言えずにいる。



もっと自分が出せるようになってほしい

Aグループの討議例：第1回目

(10月18日 14:00~14:30)

O.S児—1歳児：女児

目的—一気になる子どもの姿を捉えよう。

方法—グループに分かれ、一気になる子(自信がないと思われる子)を挙げて、その背景や姿を考えた上で保育士の関わりを考える

*どんな関わりをしたか

関わり方①

よく遊べる子なので、一人遊びがじっくり楽しめる環境を作ることを心掛けた

子どもの姿と変化

長い時間じっくり遊べる

関わり方②

みんなの前で褒められることで自信をつけてほしい(本児が見本になる等)

子どもの姿と変化

目立つ事が嫌かと思っていたが喜んでた(新たな発見)

関わり方③

触れ合ったり、視線を合わせたりしてスキンシップを大事に関わる

子どもの姿と変化

笑顔がよく見られるようになった

関わり方④

意識的に名前を呼んで関わる

子どもの姿と変化

本児からの関わりも増える

*保育の中でよかったと思われる関わり

<意見交流>

- ・少人数では自分を出しやすいので、少人数で保育を行うなど保育の方法を変えてみる
- ・スキンシップを多くする
- ・褒められる経験を重ねる
- ・我慢するところがあるので、嫌なことは言えるよう立ちする
- ・簡単な身の回りの事はできる子なので当たり前ところを認める言葉掛けを心掛ける
- ・“良い子”と褒めず「～すごいね」と子どもの行動を具体的に言葉にして声を掛けるようにする。



スキンシップをすること、褒められる・認められる経験をたくさん増やしていく

A グループ討議例：第3回目
 (11月20日 13:30~14:00)
 目的-前回からの子どもの姿から関わり方を考えよう
 方法-エピソード記録を利用して、関わり方について考えていく

(子どもの姿と変化)

- ・褒める経験を大切にすることで、少しずつではあるが、

変化が見られるようになってきている。

- ・大人の顔色をよく見ていて、自分の思いが出しにくいところもまだまだあるが、他児と玩具等の取り合いをしたり、自分の思いを主張したりするようになってきている。



(家庭の環境・関わりにも変化があった)
 離婚が成立し、家庭環境が変わったことで、母との関わりも増える。母と会う事も増え本児の良いところ等しっかりと伝える。母との連携を大事に関わっていく。

A グループ討議例：第4回目
 (12月20日 14:00~14:30)
 目的-子どもの姿や保育の方法についての変化を話し合おう
 方法-エピソード記録を活用し、今までの成果や悩んだことなどを出し合おう

*変化があったところと変化のなかったところ

- ・家庭環境の変化もあってか本児の表情もよくなり、遊びが楽しめるようになってきている。
- ・大人の顔色をよく見ていたが、笑顔がよく増える。
- ・他児に対しても「いや」と言えるようになってきた。苦手な食べ物も保育士に「いや」と言えるようになる。
- ・発表会を通して自信につながったことが感じられた。
- ・母と話す機会が増え、また、ノートでのやりとりが増え良かった。

*関わりを持つ中で悩んだ事、葛藤した事

- ・これらの変化は本児の成長過程なのか、環境の変化か保育士の関わりによるものなのか分からない。
- ・家庭での様子が分かり難かった。(母との会話を大切にしたい。)

*保育の内容や保育士の変化

- ・小さい子なりにいろいろ思いを持っていて、様々な表現方があることに気が付けた。
- ・今回はO.Sだったが他のクラスの子も達への言葉掛けや、関わりで自信につながる姿が見られ保育の見方も変わった。
- ・子どもの背景を知ることの大事さが研修を通してわかった。
- ・みんなで意見を出し合い同じ目線で成長を見守る大切さを感じた。

*この研修を終えて（アンケートより）

- ・少人数のグループで研修を重ねていくことで、それぞれが話し易く子どもの変化や成長も見られ、よかった。
- ・一人に焦点をあて、研修毎に関わるポイントを決めた事で、スムーズに話し合いができた。
- ・研修ごとに記入用紙も作成されており進めやすかった。
- ・各グループには担任以外の職員もいて、様々な関わり方があり研修で話しを聞くのが楽しみで、とても勉強になった。
- ・一人に焦点をあてたことにより、他児への保育士の関わり方やその子の周囲、全般に目を向ける事に繋がったと思う。
- ・長い時間をかけての研修は常に意識を保ち続け関わる事ができた。
- ・クラス以外の子だったので、関わる時間がなかなか持てなかった。

【事例③の考察】

自己肯定感というものは目には見えないもので、保育士の関わりによってどれほどの変化を引き起こし、子どもがどう感じるのかは一概には言えない。今回は、担任をはじめとする各保育士が子どもの自己肯定感を意識して、どのように子どもと関わっていくのかという研修を行った。今まで当たり前に行っていた日常の言葉掛けやスキンシップに、子どもの現状をより意識して関わった成果なのか、子どもの表情が明るくなり、自信に繋がる姿を見る事ができた。これらの変化は、子ども自身の年齢に応じた成長過程によるものなのかもしれないと考えるが、子どもの変化から、一人ひとりに合った関わり方の大切さにより気付く結果が生まれたと思う。又、昨年度の園内研修での“キラキラ言葉”から学んだ、言葉掛けや関わりも活かされていると感じた。



【事例④】

研修で学んだ関わりや子ども達の変化から、一人だけに焦点を当てることなく、保育士一人ひとりの保育に活かすため個々で、保育士がより自信を持って欲しいと思う子どもに関わっていくことにした。事例③と同様に、グループ研修の中で各々が気付いたこと学んだことを振り返った。
(ねらい)ークラスで気になる子と積極的に関わる。

(方 法)ーグループ討議で学んだ関わり等を自身の保育に取り入れ実践する。

各クラスのエピソード

●B児（5歳児 男児）●

(子どもの姿)

- ・保育士から遊びの話し等から話し始めたが、最初は照れて会話のやり取りが続きにくかった。

(関わり方)

- ・保育士からの何気ない遊びのやり取りや楽しい行事の話しをする。

(変 化)

- ・予想以上に子どもから話しをしてきてやり取りも続いた（保育士からの話しかけでも表情がよくなった）。
- ・家でのことまで進んで話すようになり本児の姿が変わっていった。

保育士が考えたこと



その子に応じた関わり（声かけ）を意識し、その時だけで終わらず継続的に見守り関わることで、予想していたよりも変化（成長）が見られ、見方・関わり方を変えることが大切だと改めて思った。思っていた反応がすぐには返ってこなくても、子どものペースで向き合うことを続けていきたい。子どもの変化は保育士の保育をしていく上での励みになった。

●C児（2歳児 女児）●

(子どもの姿)

- ・食べる事に意欲を持ちにくい。

(関わり方)

- ・食べたという自信が持てるように、残さずに食べた時は一緒に喜ぶ。又、調理室と連携して量を小盛りにする。

(変 化)

- ・量を減らしたことによって、本児自身の見通しが持ちやすくなり自分で食べたという喜びを感じて意欲に繋がっている。

●D児（2歳児 女児）●

(子どもの姿)

- ・排泄の自立ができておらず、トイレに促すことで一日トイレで排泄が出来るものの、その日の天候や気温により排泄の間隔がつかめず、パンツの中で出る事が多い。

(関わり方)

- ・本児の様子を観察し、そわそわとした様子が見られたら、保育士が尿意を知らせる言葉を伝え「トイレに行く」と言葉で言える機会を重ねた。

(変化)

- ・しばらく続けると自ら「おしっこ」と伝えてくる、トイレでの排泄ができるようになった。更なる自信につなげたいと、午睡時に使用していた紙パンツを止めパンツで寝ることとした。本児等も「パンツで寝る」と、喜び、母も本児等の変化と成長に喜ばれている。

【事例④の考察】

いくつかのエピソードから、子どもの変化があったものや、まだ実践中で試行錯誤を重ねている保育士もいる。ごく一部のエピソードを見ただけでも、子ども達と関わる・見守るといった子ども個々への関わりと、その方法を考え実践する保育士の意識が高まったといえる。保育士が言葉を掛けたり、子どもの行動を言語化し言葉を添えたりすることで、子どもの気持ちは安心に変わり、保育士が見守り・待つことで、子どもが考える・やってみよう、つながるのではないかと考えた。

〈一年間を振り返って研修担当者より〉

事例①・事例②の振り返り・よい所探し研修

この研修を計画するにあたって、お互いの良いところをどのような方法で伝え合うとよいかと悩んだ。最近ではメールでのやりとりがコミュニケーションをとる主流となりつつあり、手紙のやりとりをすることも少なくなってきたので、この研修ではあえて手紙で伝えることにした。手紙はその人の文字も残り、大切な宝物の一つになると思った。また、忘れてしまっても読み返すことができるし、共に働く職場での親交やコミュニケーションを深めていきたいと考え手紙にしようと考えた。

事例③のグループ討議研修

研修担当者として、全ての研修に参加する方がよいのかと迷ったが、担当者が全てのグループの研修に参加することは、担当者の意図を意識した進め方になってしまうことを苦慮し、全てのグループの研修に参加することを控えた。そのことによって研修の数日前にねらいや進め方など投げかけなどしたものの、それぞれの研修の進行状況や様子が見えてこない面もあった。

また、グループで子ども一人を限定してしまうのか、保育士各々が一人ずつあげて変化を観察していくのがよいか悩んだが、限られた時間で、より内容の深いものとしたかった為、数人の保育士が一人に向けて関わっていく方が関わり方もいろいろあり変化や成長も見られると考へて、一人に焦点を当てた。

また、午睡時間の30分という限られた時間をいかに有

効に使うか、また時間の設定はよいのかと悩んだ。各々が実践し、始めはグループ研修に向けての実践報告会だったが、回を重ねるにつれて保育士自身の思いや、実践方法の内容も深いものとなった。また報告に向けて、活発な意見交換ができるよう事前に考えをまとめてグループ討議に参加し、より有意義な研修にしたいという職員の園内研修への意識の変化もみられた。

V. まとめ

子ども・保育者の自己肯定感をテーマに模索しながら行った園内研修は、気付きの多いものとなった。

まず最初に行った職員の自己肯定感の高揚に向けた研修、「ラブレター」の交換は一人ひとりが、より自身をプラスの面で客観的にみる機会となった。同じ職場の職員に褒めてもらう、認めてもらう、という機会は一人ひとりの気付きや新たな発見につながり、それが子どもへの保育や研究への大きな原動力となったと思われる。

子ども達が何かに挑戦しようとした時、その結果で「できる」「できない」を「良い」「悪い」と評価しがちだが、その時の言葉がけ(背中を押す)、見守り(待つ)といった保育士の関わりで子どもの気持ちは大きく変わる。できなくてもよい、頑張っている姿や挑戦しようとしている気持ちに寄り添うことで、子どもの「できない」「できないかもしれない」という不安が解消される。不安が安心に変わった時その安心に支えられ、新しいことに挑戦したり、自分を表現しようとしたりするのではないのだろうか。自己肯定感を積み重ねていくには、安心できる環境と、信頼できる友だちや大人の存在が必要だと思われる。

子どもにとって保育園で過ごす時間は人生の中でほんの一部で短い時間であるが、たくさんの事を吸収し身に付ける重要な時期といえる。保育士の関わりが、子どもの記憶にどれほど残っているのか分からないが、園での様々な挑戦や経験を重ねて育まれる、自信＝自己肯定感は子どもの心に残っていると思われる、子どもの一日一日が、かけがえのないものであることを常に意識し、子ども達の“やってみよう”“できた”をより引き出し、立ち合うことができるよう、この園内研修で学んだことを生かし、保育所職員として、一人ひとりの資質向上はもちろん職員同士がより自己研鑽に励み合うことのできる職場環境の構築、職員の努力が必要であると思われる。

【引用文献】

1. 「子どもの心を救う親の「ひと言」」 諸富祥彦 (青春出版社)
2. 「へこたれない子、心の強い子になる育て方」(PHP研究所)
3. 「保育の友」2013年4月号 (全社協)
4. 「保育通信」2013年12月号 (公益社団法人 全国私立保育園連盟)

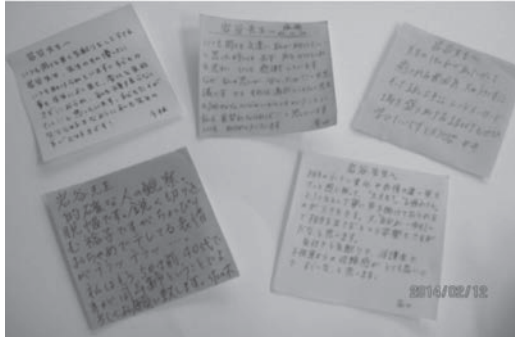
【参考文献】

- ・「仲間とともに自肯定感が育つ保育～安心のなかで挑戦する子どもたち～」 浜谷直人 (かがわ出版)

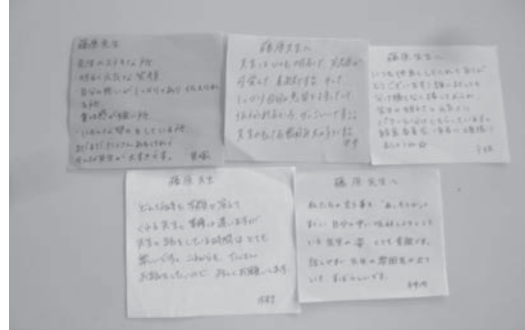
【資料①】

事例② 交換した手紙

(I保育士)



(H栄養士)



事例② 私から見たあなたのよい所 研修後のアンケートを抜粋

〈書いている時の気持ち〉

- ・ひとりひとりの顔を思い浮かべ（しぐさ・表情も）自分はどうか振り返るきっかけになった。
- ・相手の良いところに改めて気づき、書くことで感謝の気持ちも実感した。
- ・良いところに加え相手が困っている時や悲しんでいる時の顔も浮かべ、その時自分では何ができるかを思って書いた。
- ・なかなか伝える機会がなかったので伝えられてよかった。

〈もらった時の気持ち〉

- ・素直に嬉しい。見てもらったり認めてもらったりして感動した。
- ・意識していないところを褒めてもらい、驚きと自分を振り返る機会となり、自信につながった。
- ・よく書いてもらって申し訳ない気持ち、手紙の内容に近づけるように頑張りたい。
- ・どういう風に見てもらっているかよくわかった。褒めてもらうことっていい気分!!
- ・気恥ずかしいやら嬉しいやら、一人で照れて、嬉しさに浸ってしまった。
- ・自分には自信がないが、頑張ろうという気持ちになり仲間の繋がりを感じた。

〈この研修を通して感じたこと〉

- ・少し前向きに考えられるようになり、自分を修正していくことや、見つめ直す機会となった。
- ・褒めてもらう嬉しさ・気持ちよさを教えてもらったので、保育の中でも子ども達の良いところを伝えること・褒めることをより意識するようになった。
- ・子ども・保護者・職員一人ひとりを考えるよい機会だった。
- ・子どもの課題や弱点（伸ばしたい所・つけてやりたい力）に目を向けがちで、自己を反省しつつ、その部分をその子の伸びしろと考えられるようになった。
- ・行事等で日々の保育に追われ、悩み、なかなか気持ちが前に向かない時に読み返し、愛情をもらって頑張れと背中を押してもらった気持ちになるととても素敵な研修だった。
- ・保護者に対しても声掛けなど意識することが増えた。
- ・子どもも大人も気持ちを共に感じていくことは大切だと思った。
- ・認められる経験を通し、子どもに対してもいかに大切かを実感すると共に、大人になってからも認め合える関係を作っていきたいと思った。

課題研究② 遊びと学び

『絵本の力』

大阪府・都島桜宮保育園 中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加

1. はじめに

みなさんは保育の中で『絵本』をどのように使っているだろうか？絵本の力をどのように感じているだろうか？

活動前後の読み聞かせ？行事の意味や由来を伝えるためのアイテム？それとも保育のあそびの提供の中の一つ？園によって、また保育士によっても用途は様々だと思ふ。

私たち都島桜宮保育園では、今までおもちゃやあそびの提供などについては職員間でたくさん話をしてきた。

三年前、絵本研究家の加藤啓子さんの研修を受けたことがきっかけとなり、絵本は読むもの見るものという固定概念が外れ、保育の中での絵本の存在を一段と強めるものになった。そして、それぞれが絵本をどのように活用しているか？どういった想いで絵本を読んでいるのか？という話し合いを職員間でする中で以下のような絵本の力を再確認することができた。

- ・子どもたちの気持ちの反映、選択する絵本や感想から出る個性、絵本から感じ取る道徳性
- ・自分の知らない世界から広がる興味関心、知識の育成、そこから生まれる集中力
- ・絵やストーリーから膨らむ想像力
- ・感情、愛情、親子のつながり、情緒の安定

今回は、日々の保育を振り返る中で、このような絵本の力が生かされるようにねらいを持って取り組んでいる『絵本と子どもたちとの関わり』について研究・考察を深めていきたい。

2. 感情との出会い

ここでは『子どもたちの気持ちの反映、個性、道徳性』について考えていく。子どもが絵本を読むときに、絵本の場面に応じて子どもの表情が変わっている。では、絵本の絵を見て子どもはその絵に合った感情をどのように捉えているのだろうか？まずは、絵本と感情についての関係性を考えた。

(事例1) 乳児クラス(0、1歳児)で「かお かお どんなかお」という絵本を読む。

絵本の「笑っている絵」を



見て「ニコニコ」、「泣いている絵」を見て「エンエン」などと絵の表情の違いに気づき保育士に伝えている。また、友だちや保育士が笑っていると、一緒に笑顔になって笑い出したり、友だちが泣いている姿を見て「エンエンしている」と気づき、その子に対して元気づけてあげようと頭を撫でている姿が見られた。

乳児クラスの子どもたちに、保育士が絵本を読む時は「笑っているね」「泣いているね」など言葉掛けをしながら読む。それを繰り返すことで、子どもは絵と表情が一致する。その経験を重ねていく中で、友だちの表情や態度を見て、表情の違いに気づくようになっていくのではないかと考えられる。



そのことを踏まえ、幼児クラスでは、絵本の絵を見て保育士が「この子はこういった気持ちだろう？」と問いかけ、こういった返答が返ってくるのかを実践してみた。

(事例2) 5歳児クラスで「ともだち」という絵本を読む。

○「ともだちならいやがることはよそう」という文を読み、絵を見て子どもに「絵の子どもたちはどんな気持ちなのか」を問いかけてみる。

- ・カエルを持って追いかけている子に対しては、「おもしろいと思っている」「このカエルを友だちに見せたいと思っている」「一緒に遊びたいと思っている」と答える。
- ・追いかけている子に対しては、「やめてと思っている」「追いかけてほしくないと思っ



ている」と答える。

その後、このような場面ではどうすれば良いのか問いかける。

- ・カエルを持って追いかけている子に対しては、「カエルを見てと話す」「友だちがやめてと言ったらすぐにやめて「見てほしい」という自分の気持ちを話す」と答える。
- ・追いかけてられている子に対しては、「やめてと言葉で言う」「追いかけている子のお話を聞いてあげる」という意見が出た。

このことをみんなで話し合うことで、相手にも感情があるということ、表情やその子が発する言葉で、相手の気持ちを考えることの大切さの話に繋げていくことができる。

- 「ひとりではできないこともともだちとちからをあわせればできる」という文を読み、絵を見て子どもに絵の中に何が描かれているのかを問いかけてみる。



「発表会の絵だ」「オオカミの帽子をかぶせてあげている人がある」「衣装を縫っている人がある」など、絵を見て答えていた。他にも「木を作っている人がある」という子に続き、「木を持っている人がある」という子がいたので、保育士が「何で持っているのかな？」と問うと、しばらく考え、「木を持って（支えて）いないと倒れてしまうからだ!!」ということに気づく。

力を合わせるという考え方に子どもが自ら気づいたので、保育士は「他には一人ではできないけれど、友だちと力を合わせればできることってあるかな？」と問う。すると「友だちのおしゃべり」「マーチング!」「ドミノ倒し」などの答えが出る。保育士は「なんで、ドミノ倒しは一人でもできるのに、友だちと力を合わせればできると思ったの？」と問うと「一人よりも友だちと作った方が、すごいドミノを作ることができたから」と話す。

このことについて話し合うことで、一人よりも二人、二人よりも三人…と友だちがたくさんいることで楽しむことが多くあるということに子どもが自ら気づき考えることができる。友だちの存在について考えることで、友だちにも感情があること、友だちに感謝する気持ちなどを知る良い機会となる。また、このように絵を見て感情について子どもたちと考えていく中で、人と人とのつながりの大切さを子どもだけでなく大人も感じる機会になった。



乳児の時は「笑う」「泣く」「怒る」「楽しい」など簡単な自分の感情を感じ、大きくなるにつれ、その感情は相手にもあるということを知っていくことを絵本を通して伝えることができる。また今回の事例2のように絵本の世界にある背景を読み取って、一つひとつの絵に応じた感情を考えることができる。肝心なことは保育士がどう言葉掛けをするのかだ。一つの言葉で子どもの捉え方は変わってくる。世の中には多くの絵本があるが、その絵本一つひとつのページにそれぞれの感情があり、たくさん感情に出会うことができる。その場面に合った言葉掛けや、その場面を見た子どもから出た言葉を拾い、世界観を広げていけるような保育をしていくことが大切だ。

3. 絵本の種類も様々

ここでは『自分の知らない世界から広がる興味関心、知識の育成、そこから生まれる集中力』について考えていく。絵本というと絵を楽しむものやストーリーを楽しむもの、仕掛けを楽しむものといったものを連想する方が多いのではないだろうか。しかし、昆虫の飼いや野菜の育て方、季節の草花の名前が載っている図鑑や動物の表情が集められた写真集なども絵本の一つであると言える。ここでは、そういった絵本に焦点を当てて、子どもたちとの関わりを紹介していきたい。

(2歳児) 部屋で絵本を見て過ごす時にも、保育士が選ぶ絵本の中に図鑑や写真集も混ぜて出している。動物のいろいろな表情の写真が載っている『みんなのかお』という本を見て、「これなーに？」と保育士に尋ね動物の名前を知ったり、犬や猫、ライオン、ゾウだけでなく、動物って他にもたくさん種類があるんだということを知るきっかけとなった。また、「このゴリラさんは怒ってるねー」「こっちはニコニコしてるー」と同じ動物でも表情が違うことにも気づき、真似をして遊んでいる。



(3歳児) 園庭でダンゴムシ探しに夢中な3歳児だが、なかなかうまく見つけることができない。そこで、『ぼく、

だんごむし』というダンゴムシの生態が書かれた絵本を子どもたちと一緒に見ることにした。「へー、ダンゴムシって葉っぱの下にいてるんや！」「段ボールやコンクリートも食べるの！？」と見ていく中で発見の連続。園庭に出ると葉っぱやコンクリートの下を探してたくさんのダンゴムシを見つけることができるようになった。その後は、その絵本が大好きになり、水の中でも少しの間なら泳ぐことができることも子どもたち自身で発見していた。また、部屋で飼育して観察していく中で、ダンゴムシの赤ちゃんは白いことも発見することができた。



(4歳児) 身近な野菜だけでなく、あまり親しみのない野菜も育ててみようということで、クラスでズッキーニを栽培することにした。多くの子どもが「ズッキーニって何ー？」「聞いたことないー！」と言う中、一人の子どもが「野菜なんやったら、お野菜ノートに書いてあるかもしれないー！見てみよう」と野菜の種類や育て方が書いてある絵本を見ることを提案。そして、実際に見てみると、小さくではあったが載っていたズッキーニを見つけ、「きゅうりみたいな形やなー」「でも、カボチャの仲間やねんてー」と自分たちで様々な気づきを見つけていた。他にも、セミの種類や鳴き声、散歩の道中に咲いている花の名前など、何かわからないことが出てくると『調べてみよう！』と図鑑や絵本のページをめくり探すようになっていた。



(5歳児) 今年の6月に行われたサッカーワールドカップをきっかけに世界の国旗に興味を持った5歳児。「今日はどこの国とどこの国が戦うの？」と保育士に聞いては、『世界の国旗図鑑』を調べて自由画帳に試合が行われる国の国旗を描いて遊んでいた。数日経つと、「今日はブラジルとチリが戦うで」とブラジルとチリの国旗を描いた自由画帳を見せに来てくれるようになった。聞いてみると、朝のニュースや新聞の番組欄を自分で見て、今日の試合に登場する国を自分で調べていたようである。また、興味は国旗だけにとどまらず「この国のおはようってどんな言葉だろう？」と世界の挨拶にも興味が広がり『世界の挨拶辞典』でいろいろな国の挨拶を調べるようになった。このように、5歳児になると図鑑の存在が身近になり、疑問に思ったことや興味を持ったことは「調べれば知ることができる」と自分たちから図鑑を活用することができるようになっている。



以上のように、2歳児では図鑑の存在を知って触れ、3歳児では保育士と一緒に調べて発見し、4歳児では自分たちで調べ、5歳児になると図鑑を活用して、他の事にも興味を広げていくことができた。各年齢の図鑑との関わりを追っていくことで、子どもたちの成長もわかりやすく捉えることができる。しかし、5歳児になったからといってこういったことができるようになるのだろうか？やはり大切なことは乳児期から図鑑や写真集に触れる機会を作っているということではないだろうか。こういった経験の積み重ねによって、『わからないことも調べればわかる』という気持ちに繋がり、小学校以降での学習の動機であるべき『知ることの純粋な楽しさ』といった気持ちに繋がっていくのではないかと考える。

4. 絵本=使い方は無限大！？

ここでは『絵やストーリーから膨らむ想像力』について考えていく。

ごっこあそびが盛んになる2、3歳児。あそびの中で経験したことやストーリーからあそびを発展させている。例えば「オオカミと七匹の子ヤギ」の絵本に沿ってオオカミ役と子ヤギ役に分かれたり自分たちで役を決め楽しんでいる。そんなごっこあそびを楽しんでいる中で、

子どもたちが絵本を立てて遊んでいる姿を目にすることがある。保育士として「絵本は見るものだから立てて遊ばないよ」と注意するのか？絵本は見るだけのもの？それとも見るだけでなく、絵本からいろいろなあそびにつながっていくものか？ということに他の職員はどう感じているのかを話し合った。その中でも様々な意見が飛び交った。絵本を破ったり、投げたりと雑に扱わないようにする等、物を大切にすること伝えるのは必要だと思う。そのルールを踏まえた上で例えば「絵本を立ててお家にするの～」と子どもたちがアイデアを膨らませた場合、そこからお家ごっこに発展したりと想像力も深まっていくのではないかとすることに気づいた。子どもたちにとって絵本は見るだけでなく、おもちゃの一つとして遊んで楽しめるものでもある。そういった視点で子どもたちのあそびを見てみると、発想や発見に驚かされることがたくさんある。ここでは保育者の一言で変化したあそびの内容を紹介する。

(事例1) 3歳児クラスで絵本で遊んでいた時のこと。経験したことをごっこあそびで表現し、楽しんでいることが多いこの年齢。いつものようにごっこあそびが始まった。

A「今日はどうされましたか？」

B「今日は虫歯ができてしまったみたいで…」

A「それでは口をあけてください」

～歯を見る～

A「はい、もう大丈夫ですよ～治りましたよ～」

ここですぐに次のあそびに切り替わった。このあそびではAが絵本を病院のカルテ代わりにしていたのだ。発想はおもしろいと感じたが、あそびがすぐに進んでしまい、次のあそびに切り替わってしまった。例えばここで保育士が次の患者役になったらどう発展していくのか？終わった今となると言葉掛けや行動で子どもたちのあそびが変化していったのではないかと考えることができる。子どもたちのあそびのアイデアは予想がつかない。その為、その瞬間のあそびが広がったりと言葉掛け一つで変わってくるのだ。

(事例2) 異年齢交流で子どもたちが合同で絵本を見て楽しんでいた時のこと。

都島桜宮保育園では絵本の表紙を目で見て選びやすいように面展台を使用している。



普段はここから絵本を手に取り、1人でじっくり見たり、数名で1冊の絵本を読んだりと楽しんでいる、しかし、この日は普段とは異なった。2つ並んでいた面展台の間にAが立つ。

そして左右に面展台を動かしている。



一見動かして遊んでいるだけなのか？そう思ったが、しばらく様子を見てみることにした。

すると

A「はい。電車が出発しまーす」

他の子どもたちも絵本を切符代わりにどんどん絵本を持ってくる。つまり、面展台が電車となり、Aが車掌になり切符をもらっているのだ。そして切符を渡した子どもたちは窓際へどんどん集まる。

次はどうするのか観察してみると、手すりとの間に絵本を入れていくのだ。窓ぎわに飾る絵本の種類は春・夏・秋・冬四季が描かれている絵本など色々だった。保育士が「いろんな景色が見えるね～」と話すと「そうそう。次は動物園に行きますよ～」と車掌役の子がアナウンスをしてどんどん絵本=景色が変わっていくのである。そして最後はAの言葉通り、動物の絵本を窓際に持っていく、そこから動物園に変わり、遠足ごっこが始まった。



このように一つの絵本を切符の代わりにしたり、電車の窓に映る景色にしたりと様々な道具に変化する。これも絵本を使っただけのあそびだと思える。今回のように子どもたちのあそびの発想と保育士が言った一言がプラスされ、どんどん想像が膨らみあそびのアイデアも増えていったということが考察できる。

事例1と事例2を比べてみても保育士の言葉掛けや、行動一つでも子どものあそびは変化していく。また子どもたちの発想に気づくか気づかないのかでも状況は一変する。一つの絵本をじっくり見るだけでなく、絵本を使ってごっこあそびに発展することもある。

あそびに発展させていく子どもの『想像力』がさらに広がるように「ここからどんなあそびに発展するのだろうか？」と見守ったり、子どもの言動からさらにあそびが広がるような保育士の行動や言葉掛けも工夫することが

大切だ。

5. 絵本広場の取り組み

ここでは『親子のつながり、情緒の安定』について考えていく。

都島桜宮保育園では、降園時に親子と一緒に絵本を楽しむことができる「えほん広場」を行っている。えほん広場とは何か？と共に開催までの経緯や私たち職員の思いを辿ってみることにする。

平成20年度に夕方の時間に“親子と一緒に絵本を楽しむ場、コミュニケーションの場になってほしい”という目的から絵本コーナーを設けた。



しかし絵本コーナーは幼児クラスの送迎ルートではない場所に設置しているということもあってか、利用者のほとんどが乳児であった。ぜひ幼児にも親子で絵本を読み、コミュニケーションの時間をもってほしいという思いから、どうすればその時間をもってもらえるかを考え、まずは家庭で絵本を楽しんでもらおうと平成21年度より絵本の貸し出しを始めた。回数を重ねるうちに貸し出しを利用する親子が増え、少しずつ絵本が身近なものとなっていった。また私たちも、絵本研究家の加藤さんの研修を受けることで「えほん広場」の存在を知り、「もっとたくさんの親子に絵本を楽しんでもらいたい」との思いから平成24年度より「えほん広場」を始めた。夕方のお迎えの時間に、広場を1階の絵本コーナーではなく幼児の参加も期待し幼児クラスのお迎えの部屋の前にある2階ホールの広いスペースに設けた。絵本は棚の中から背表紙のタイトルだけで選ぶのではなく、子ども自身が選びやすいように「4.」のところで少しふれた「面展台」に表紙イラストが見えるよう並べて設営。そして読み手が絵本を選び、子ども達が静かに座って聞く「読み聞かせ」ではなく、子どもたちが自分で選び見て楽しむ空間とした。

初年度は年数回。利用者は多いものの絵本を見ているのは子どもで、保護者は保護者同士の会話を楽しんでいる状況。職員もまたこの機会に保護者とのコミュニケーションをとりようという意識で参加していた。しかし次年度に向けて「これでよいのか？」と、もう一度職員皆で

えほん広場開催の目的の再確認を行った。職員も意識を変えお便りや連絡ボード等で保護者に伝え回数も増やすことで、今では保護者同士の会話よりも保護者の膝の上に座り絵本を見たり、一人のお父さんの周りにいつの間にか数名の子どもが集まっていたり、子ども同士、異年齢でも一つの絵本を共有する光景がみられるなど、えほん広場本来の姿がみられるようになった。



その中で「ぴょーん」や「ぞうくんのさんぼ」などの絵本を外国語で書かれているものと日本語のものを読み比べをする読み聞かせを、保護者が自ら始めてくれる。見たい子は集まり、「おはよう」という言葉ひとつでも日本語との違いを知り、字を見比べたり、真似たりと外国語にも触れることができている。

また、子育て講演会「えほんを楽しもう!」を開催したことにより「ページをめくっては戻りながら言葉を交わし楽しむ絵本はひとつのコミュニケーションツール」「絵本は“字を読まないといけない”と思っていたが“絵を楽しむ”に意識が変わった」という感想が聞かれ、保護者の絵本に対する意識の変化もみられた。

このように、絵本を保護者にも子どもにも親しんでもらうことで、保育園を卒園してからも絵本に親しむ機会が続いてほしいと思う。幼い頃から絵本に触れることで、将来、教科書や本に対する抵抗心もなくなり、身近に感じられるようになるのではないか。そのことを踏まえた上で今後も絵本広場を開催し親子のつながりを深めていきたい。

6. おわりに

今回の研究・考察を進めていくことで、毎日子どもたちが関わっている『絵本』にはこれだけの力があることを再確認することになった。「はじめに」で挙げた4つの項目だけでなく、他にも、たくさんの絵本の中から今の気持ちに合った一冊を見つける『選ぶ力』や文字習得へのきっかけなど、絵本が広げる世界や子どもたちに与える影響はあげればキリがない。その一つひとつがこれからの人生での『生きる力』や『考える力』に繋がっていくのではないと思う。保育室の絵本にどの絵本を置くのかといった物的環境、絵本の読み聞かせにどの絵本を選ぶのか、また絵本の読み方、子どもたちの声や感性にどう対応するのかといった人的環境の両面をしっかりと考えることが大切になる。無限に広がる『絵本の力』を上手に活用し、子どもたちの心が豊かになるような関わりをこれからも工夫し続けていきたい。

健康な歯を育む保育の在り方

～口腔衛生指導と歯科医、保護者との連携をとおして～

宮城県・仙台保育所（こじか園） 後藤 しのぶ

I. はじめに

仙台市は、平成19年度から幼稚園・保育所で行われている歯科健康調査の診査基準を統一し、検診の結果を一元的に集約分析し、むし歯予防の推進に活用する取組を開始した。当園では、年に2回行っている歯科検診を平成10年度より登園時に保護者立ち会いへと変え、保護者の関心をより引き出せないかと考え続けてきた。また、2歳児から食後の歯みがきを取り入れており習慣化に力を入れている。しかし、平成23年度歯科健康診査結果から4歳児のむし歯有病者率を比較すると、仙台市の保育所・幼稚園全体では34.3%、当園では64.3%となり、20%程上回っている。そのため保育園における健康な歯を目指す取組の必要性が高まり、23年度から歯に関する保育の実践に更に力を入れている。

(1) 子どもの実態から

1歳児クラスの頃からむし歯が増え、園全体の中でもむし歯が多いクラスであった。23年度からの取組を通して子どもはうがいの種類の区別が付き、うがいをする回数も増えて技術が上達してきた。また、保育士が歯ブラシを歯科嘱託医から購入したものに統一し、園で管理したことによって歯ブラシの扱い方が丁寧になった。そして歯の磨き方についても、子どもに繰り返し教えたことで上達していった。しかし、「丁寧に歯を磨く」という意識を毎日持続させることは難しく、声かけが必要な子どももいる。

(2) 保育士の願いから

むし歯になる原因、理由を理解し、自分の歯を守ろうという意識をもちむし歯予防を実行できるようになってほしい。また、保護者も子どもの歯を守る大切さを知り、家庭でも取り組めるようになることを望んでいる。

(3) 研究主題のとらえ方

〈健康な歯を育む保育の在り方とは〉

保育士が子どもにむし歯予防の方法や（歯に関心をもつ、歯を強くする食べ物、よく噛むことの大切さ、歯みがきの仕方、仕上げ磨き）食生活の大切さを教え、子どもが自分で歯を守ろうとする意識を高めることと押さえた。

〈口腔衛生指導とは〉

- ・子どもが磨きにくい所を把握させる。

- ・丁寧に歯を磨かせる指導をする。
- ・フッ化物洗口を実施させる。
- ・保護者立ち会いの歯科検診を実施し、歯科嘱託医の助言を受け、保護者に子どもの歯を守る大切さを伝え、協力して歯のケアの実践にあたること。

II. 研究目標

- ・健康な歯を育む保育の在り方を4歳児クラスの実践を通して2年間探る。
- ・口腔衛生指導と歯科嘱託医、保護者との連携を通して探る。

III. 研究仮説

- ・子どもが自分の歯を守るために必要なむし歯予防の方法を健康な歯を目指す実践を通して学んでいくことで、自らむし歯予防に取り組むであろう。
- ・保育士が健康な歯を育む方法を子どもの実践や歯科嘱託医から学び、正しい情報を保護者に提供していくことで保護者の子どもの歯を守る意識に変化がみられるであろう。

IV. 研究の対象と方法

仙台保育所	平成23年度	4歳児クラス
	平成24年度	5歳児クラス
		男児9名、女児6名、計15名

(1) 4歳児・5歳児クラスの研究実践

- ①うがいの仕方
- ②染め出しの実践
- ③歯の日の設定
- ④フッ素洗口の実施

(2) 歯科嘱託医、保護者との連携

- ①歯科嘱託医との連携
 - ア、歯科検診の実施
 - イ、ミニ講演会の実施
- ②保護者への働きかけ
 - ア、アンケートの実施
 - イ、染め出し記録の提示

(3) 実践事例

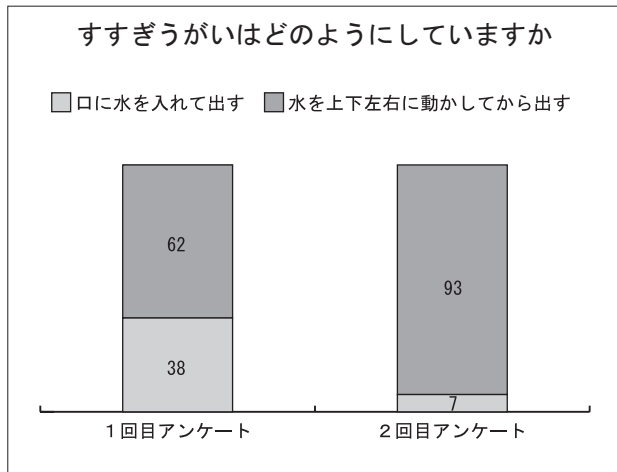
V. 研究実践・考察

(1) 4歳児・5歳児クラスの実践

- ①うがいの仕方

研究前は『ブクブクうがい』（口で水を上下左右に動

かしてから出す)と『ガラガラうがい』(のどを洗浄する)を使い分けている子どもはいなかった。そこで、『ガラガラうがい』は戸外あそび後や風邪予防としてのうがいであること、『ブクブクうがい』は、歯みがき後に行うことを子どもたちに知らせ、統一して取り組むようにした。その結果子どもたちは、うがいの区別が分かり15～20回水を動かせるようになった。うがいの中で、水をしっかり動かすと「ブクブク」という音が聞こえることに子どもたちが気づき、保育士と一緒に喜び合っていた。



②染め出しの実践

今までの磨き方では不十分であることを子どもたちに知らせるため、歯科嘱託医より指導を受け4歳児クラスより開始する。初めて体験する子どもの中には、口内に染め出し液をつけられると戸惑いの表情を見せる姿や、鏡を見て磨き残し箇所が赤く染まっていることに驚き、保育士に知らせてくる姿も見られた。その後、毎月末に保育士による染め出しを行っていたが、子ども達の姿や反応からその場限りになっていると感じた。そこで、保育士はどの箇所が一人ひとりの子どもにとって磨きにくいのかを観察・記録しながら前回の磨き残し箇所の確認をし、子どもが意識して磨けるように働きかけた。

その結果、子どもは磨き残しが分かり、日常の歯磨きにも活かせ姿が見られるようになっていった。そこから、染め出しは、健康な歯を育むために必要な指導方法の中でも視覚的な方法として効果的であり、子どもが歯みがきの仕方を再認識できる方法であるということが分かった。

③歯の日の設定

子どもに健康な歯をつくるためにはどうしたらよいかの分かりやすく伝える方法として、4歳児クラスでは毎週水曜日を歯の日とし、5歳児クラスでは月に1度歯の日を設定した。主にむし歯の原因や歯を強くする食べ物が分かるようにクイズ形式にしたり、読み聞かせをしたりしながら、行っていった。そして、絵本を部屋に置きいつでも見られる環境を作りながら、子どもが歯に関心

がもてるように進めていった。また、歯が抜け変わる時期となる子どもがいたことから、6歳臼歯への関心が高まり、子どもから歯に関する話しをすることも増えていった。その一方で、健康な歯を育むための意識づけの難しさが明らかになった。そこで5歳児クラスでも歯を大切にすることを意識を持続させていくための取組を継続していった。その中でむし歯予防の方法(歯を強くする食べ物について、食事の仕方について、よく噛むことや食生活の大切さなど)を指導していった。しかし、食生活の大切さは歯の日を通して理解できていたが、学んだことを自ら意識して生活に結びつけていくことは難しかった。



④フッ素洗口の実施

歯科嘱託医のすすめと保育士の研修会(仙台市むし歯予防研修会)で、フッ化物洗口がむし歯の予防に対する効力が大きいと保育士が再認識したことから5歳児クラスの9月より実施した。最初は、洗口液を1分間口に含むことが難しかった。そこで、洗口液に慣れるまでは子どもの状態に応じてうがいの目標時間(1分間)を変え、途中で吐き出してもよいこととした。そして、保育士が秒数を数えたりCDを活用したりしながら無理なく食後に取り入れてきたことで習慣化していった。また、洗口液が細やかな泡状になることを目標とし目安にしたことで、子どもたち同士でも細やかな泡を目指しながら意識してうがいをする姿(うがいの仕方を気をつける)が見られるようになった。フッ化物洗口においても、子どもが自ら認識できる視覚的方法が含まれていることで、意欲の保持が停滞することはなかった。また、フッ化物洗口は、むし歯になりにくい歯をつくるということを子どもが理解し、取り組むことができた方法であった。

(2) 歯科嘱託医、保護者との連携

①歯科嘱託医との連携

ア、歯科検診の実施(6月、12月)

登園時に親子で受診する場となっており、直接歯科嘱託医と話せる機会があることで、悩みや不安を解消できるきっかけとなった。また、親子で幼児期の歯の大切さに気づき改善しようとする姿が増えたことから、保護者の健康な歯を育むことへの関心が高まってきたといえる。

イ、ミニ講演会の実施

4歳児クラスでは懇談会の際に歯科嘱託医を招き、保護者に向けて歯に関する話をしてもらった。その中で保

護者が仕上げ磨きを実際に行いながら歯科嘱託医のアドバイスを受けたことで、歯に対する関心が高まり、意識を変えるきっかけとなった。そこで5歳児クラスでも継続し、講演会を実施した。5歳児の子どもは永久歯の生え変わりの時期であることから、継続的なむし歯予防が子どもの健康を守るために必要不可欠であることを伝えてもらった。後日、フッ化物洗口を始めたたり、歯間ブラシなどの道具を使用する家庭が見られた。



②保護者への働きかけ

ア、保護者アンケートの実施

家庭での歯みがきの取組の様子を知るためにアンケートを実施した。4歳児クラスでは歯みがきの習慣はついており、半数以上の子が毎日仕上げ磨きをしてもらっていた。しかしむし歯になる子どもが多いことから、歯みがきの方法に改善が必要あると考えられた。

5歳児クラスでは、前年度からの歯に関する取組と、フッ化物洗口実施後の保護者と子どもの変化についてアンケートを実施した。アンケート結果から歯みがきに対する保護者の意識に変化が見られた例として、歯ブラシの種類によって使用期限などに違いがでることが分かり、歯科嘱託医の推薦する歯ブラシを仕上げ磨き用として使用する家庭が増えた。

イ、染め出し記録の提示

染め出しの結果に対する保護者の関心が高まり、保育士に積極的に様子を聞いたり、情報交換をする場となった。染め出しの結果を通して保護者も子どもが磨きにくい場所が分かり、家庭での仕上げ磨きの参考にするなど、保護者にとっても染め出しはむし歯予防の方法として有効であることが明らかになった。

(3) 実践事例

①A児について

A児は0歳児クラスから入所する。1歳児クラスの時、歯科検診でむし歯が多く見つかり、それ以後歯科医への通院が続いている。歯科医を受診した後も甘いものをすぐに食べたり母乳を飲み続けていたりする姿があった。そして4歳児クラスの歯科検診でもむし歯が見つかる。その際に初めてA児が「歯医者に行っているのにどうしてむし歯があるんだろう」と疑問を保育士に話してることがあった。また、母親も本児がむし歯が多いことを心配していたため、園での取組に関心を示していた。そ

して家庭での仕上げ磨きも欠かさずに行い、本児が磨きやすい歯ブラシに変えるといった姿も見られた。A児は歯に関する取組を通し、むし歯になる原因や予防について理解を深めていった。しかし甘いものを頻りに摂取するという食生活に変化は見られなかった。

〈考察〉

A児が「どうしてむし歯ができるのか」と疑問をもったことと、研究での取組が重なったことで、むし歯予防について理解し、丁寧に歯を磨こうとするなど、本児の歯に対する関心が高まったと捉えた。また、母親自身も園での取組に強く関心を示し、むし歯予防についてどのように取り組んでいくべきか意識が高まっていった。しかしA児自身の嗜好、A児が欲する時に甘いものを与えてしまうという母親の姿に変化が見られることはなく、生活習慣の改善の難しさが顕著に表れた姿と捉えた。

②B児について

4歳児クラスより入所する。家庭では身の回りのことを大人にしてもらうことが多かったため、自分でしようとする意識は低い。園生活では他児の行動に左右されることはなくマイペースな面が見られた。4歳児クラスでの歯の活動の中で積極的に発言をし理解している様子が見られた。しかし歯磨きへの意欲は高まらずにいたり、学んだことを自分に当てはめて行動したりすることは難しかった。5歳児クラスになるとむし歯予防についての理解は深まり、歯みがきの仕方や食事の取り方なども変化が見られるようになっていった。

〈考察〉

B児はむし歯になる仕組みや予防の方法を理解していても、自分に当てはめて考えたり行動に移したりすることが難しいようだった。しかし5歳児クラスになってからは4歳児クラスで学んだことを土台とし、歯に対する関心が高まり理解したことを行動に移せるようになった。そのことから健康な歯を保ちたいという気持ちの高まりと、実践できるだけの力がB児に備わったと捉えた。

③C児について

3歳児クラスより入所する。性格は消極的で人見知りをしてやすく、自信がもてない様子であった。また生活習慣の乱れもひどく、むし歯も多かった。しかし健康な歯を育むための取組を通し、担任以外の保育士との交流が増えていく中で褒められる経験を多く積んでいった。そうしていく中で次第に表情も和らぎ、自ら保育士に甘えてくるなど積極的な姿も見られるようになっていった。また、友だちとの関わりが増え、自信をもって生活が送れるようになっていった。

〈考察〉

C児は歯の取組を通して担任以外の保育士と交流していく中で、褒められる経験を積み重ねていった。そうしたことで自信が付き、友だちとの関わりや園生活にも大きな変化が見られた。そのことからむし歯予防への理解ができただけでなく、内面的な成長が見られ自信につながったと捉えた。

④D児について

D児は何事も丁寧に取り組むことが難しい。歯の取組でも意欲を持続することは難しく、個別に丁寧に働きかけてきた。そうしていくうちに家庭でも歯みがきを毎日するようになり、仕上げ磨きがむし歯予防につながることを理解していった。また、家庭でも本児が自分から母親に「仕上げ磨きしてください」と伝えていたことで、母親もむし歯予防に対する関心が少しずつ見られ始め、親子で変化が見られた。

〈考察〉

個別にむし歯予防についてなど丁寧に指導していったことで理解が深まり、家庭でも実践してみようとしていた。また、丁寧に取り組むことについてもD児なりに意識するようになっていった。また、保護者も子どもの歯を守る大切さを園での取組やD児の話しから知り、歯みがきの仕方や仕上げ磨きに関心をもつなど家庭でも取り組めるようになった。そのことから子どもの働きかけで保護者の行動に変化が現れたと捉えた。

VI. まとめ・課題

4歳児クラスの研究実践を通して健康な歯を目指すために目標を掲げ取り組んできた結果、関心は高まっていたが、その日の子どもの状態により気持ちを持続させることは難しかった。そのため、年齢に合った「自分の歯を自分で守る」という気持ちを育みながら、子ども自身が意識し、実践できるよう援助していくことが大切であるということが分かった。また、5歳児クラスの研究実践では、昨年度からの取組を通して、保育士が子ども

に意識的に歯みがき指導を取り入れてきたことで、子どもは健康な歯を育むことへの関心が高まり、むし歯予防に対する意識も深まっていった。また、保育士は、歯科嘱託医による研修や講演を通して最新の情報や健康な歯を育むために適切な歯みがきの仕方・うがいの仕方を学ぶことができた。そうしたことで、どこに重点をおいて子どもに指導していくとよいかの分かり、より年齢に合った指導をすすめていくことができた。その中で、子どもは自分で磨きやすい方法を見つけて実行したり、歯みがきの仕方やうがいの仕方が上達していった。また、保育士による仕上げ磨きを取り入れたことで、子どもが仕上げ磨きがむし歯予防に効果的であることを理解し、家庭においても保護者による仕上げ磨きを実行する姿が見られていった。そして、保育士が定期的に歯の日を設定したことで、歯みがきの仕方だけではなく食事の仕方にも意識し、よく噛んで食べる姿が見られていった。また健康に関する興味が増し子どもたちの知的好奇心も広がっていった。また活動から学んだことを遊びの中に取り入れたりと変化が見られた。このような姿から意識の共有や改善を目的に保育士が強い意志で取組を始めたが、子どもは知り得たことを生活や遊びの中に応用していく姿が見られた。このような姿から子ども自身が自分の歯を守ろうとするために必要なことが分かり、行動に移すことができたといえる。また、保護者も子どもだけでは磨き残しがあり、不十分な磨き方であることを知り、仕上げ磨きをしたりフッ化物洗口を実行する家庭が昨年度よりも上回っていった。そのことから、保護者の子どもの歯に対する意識に変化が見られ、関心も高まったといえる。また、平成25年度歯科健康診査結果も20%下回るという結果になっていった。しかし、家庭が基本となる生活習慣においては改善までには至らず、家庭と連携を図ることが難しいという課題も残された。また子どもが健康な歯を育むために必要なことは分かったが、それを継続的に行動に移せるようになるためには、より保育士の指導に工夫が必要であることが分かった。今後も一人ひとりへの働きかけを大切にしながら指導方法を探求していく必要があると考える。

子どもの育ちを支える食育の実践

～食を身近に感じるために調理担当者ができること～

埼玉県・与野本町駅前保育所 大森美和・峯村ひで子

I. はじめに

都市部に位置する長時間開所の当保育所では、朝7時に自転車の後ろに乗って菓子パンを食べながら登園してくる子や20時ぎりぎりのお迎え時、お弁当のパックやコンビニの袋を提げている保護者の姿も珍しくない。月曜日から土曜日まで保育所で過ごし、日曜日にはどこかへ出かけた話を聞く。未満児の連絡ノートの朝食欄には「ケーキ」「紅茶」、夕食欄にはスナック菓子の商品名が記入してある。家庭での食卓の様子が見えてこないことに不安を感じた。

子ども達にとって「食事」とは何だろう。保育所で提供している食事は、子ども達の糧になっているだろうか。家庭ではどんな様子で食べているのだろうか。「食べるっておいしい、楽しい、大切」。子ども達と保護者がそう思えるような働きかけをしていくためには、保育所の栄養士と調理師の立場からどのようにしたらよいかを考えたと思った。

II. 研究の目的

- ・子ども達が食に興味を持ち、おいしく食べられるようになる。
- ・保護者に食の大切さを伝える。

III. 研究の方法

1. 日々の喫食状況を把握し、改善点を見つける。【事例1、2】
2. 食育を通して、子どもや保護者の食への関心の変化を検証する。【事例3、4、5】
3. 保護者へ具体的に働きかける。

IV. 事例と考察

1. 子どもの喫食状況を把握し、改善点を見つける。

【事例1】喫食状況を把握し、献立と調理の工夫をする。調理担当者も子ども達と一緒に食事をするを大切にしている。

一緒に食事をする「おいしいね。」「これ何?」「どうやって作ったの?」「見てみて!きのこがくっついてるよ!」「双子ちゃんだね!先生も初めて見たよ!」と会話をすることで食事を楽しみ合うことができる。

「パプリカが苦手。」「お魚がばさばさしてて苦手。」と苦手な食べ物については、「何が苦手だったかな?」「少し小さく切ったらどうかな。」「これを食べると〇〇くんの骨を強くしてくれるんだよ!一緒に食べてみようか。」

と会話をし、子どもの目線に立つことで、一人ひとりの食の傾向がわかる。

子ども達の喫食状況は、日常の会話や食事の時間、毎日のリーダー会議、月に一度の食事会議で保育士と連携し、共有した。また、保育士とともに毎日の食事について気がついたことを記録した。記録は、月ごとにまとめ、好きな食べ物・苦手な食べ物(その理由)、残食調査などから子ども達の食の傾向を分析した。改善点を見つけ、献立と調理の工夫をするようにした。

献立と調理の工夫として、苦手な食べ物は、好きな味付けにしてみる、量を加減する、調理形態(小さく切ってみるなど)を変える、食材の選択(部位など)の見直し、調理方法(煮る、揚げてみるなど)を変え、子どもの反響を見るようにした。

【考察】

保育士と調理担当者が連携することで、子ども達の喫食状況が明確になる。献立や調理の工夫、食体験を増やすこと(様々な種類の食材や味付けを取り入れるなど)、子ども達が保育士・調理担当者と一緒に食べることで、おいしく食べられる。苦手な食べ物でも少しずつ挑戦しようとする姿も見られてくる。子ども達の食事をしている姿に寄り添い、丁寧な言葉かけをすることが大切である。

【事例2】食について(食材や作り方)の話から、食材紹介へ

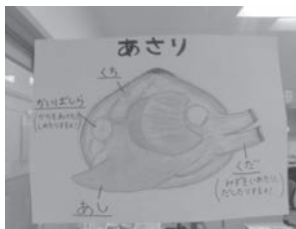
子ども達と一緒に食事しながら食べ物の話をすると、「知らなかった!」、苦手な物でも「少しだけ食べてみる。」という声を聞いた。調理担当者という立場から食について伝える機会を作りたいと思い、3~5歳児クラスで食事の前に食についての話をすることにした。食材(原料・大きさ・色・栄養など)や作り方などを子ども達にわかりやすいことから始めた。続けていくと、子ども達は、次第に食の話に興味を持ち、覚えた内容を自ら進んで話してくれるようになった。また、「この料理は、どうやって作ったの?」などと子ども達から質問の声も増えた。

子ども達が食に興味を持つきっかけになったが、新しいことを知りたいという気持ちに対して、話だけでは、物足りなさを感じ、食材に触れる楽しさも知ってもらいたいと思った。保育士に相談し、日々の食事に入っている食材や旬の食材を「食材紹介」として子ども達に見せる機会を作るようにした。

例：食材紹介（あさりの話）

埼玉県は海に面していない地域であり、旬の食材であったあさりに触れる機会が少ないのではないかと考え、食材紹介に取り入れた。

- ・年齢別またはクラス別（3～5歳児合同で2クラス）
- ・時間は15分
- ・10時から、活動している部屋で話をした。



<主な話の内容>

- ・あさりのいる場所、体のしくみについて（あし、貝柱、水を入れたり出したりする管があること）
- ・貝殻の模様や色、あさりの動いている様子を見たり、触ってみる。
- ・あさを沸騰したお湯に入れて、あさりの変化を観察する。
- ・あさを食べると、骨や血になる。

<取り組んでいる様子>

あさりの絵を見て、体のしくみの説明をすると、「管ってというのが目みたい。」「足があるの？ぼく達と一緒にだ！」。あさりを見ると、「プツプツしてる！」「あさりも息をしてるみたい！」。貝殻の模様を見て、「しましまだ！」「黒いのと白いと茶色いのがあるよ！」。あさを触ると、「ざらざらしてる！」「冷たい！」「固いよ！」「顔がひっこんだ！」。

「熱いお湯に入れるとどうなるかな？」という問いかけには、「たくさん動く！」「あさりさん、熱くて顔を出してくる！」という答えも出てきた。鍋を囲み、じっとあさりを見る。少しずつ開くあさりを見て、「あ！一個開いてきた！」「こっちも！あ！こっちも開いてきた！」と変化の様子を観察していた。あさが開くのはなぜかを説明した。鍋であさを煮ると、「いいにおいがしてきたよ！」「海のおいがする！」と匂いを感じていた。「お湯が白くなってきたよ！」と変化に気づく様子も見られ、「白くなってきたのは、あさりからおいしい汗が出てきたんだよ！」とうま味が出ることを伝えた。最後に、あさりについて内容や変化の様子を問いかけると、積極的に答える様子が見られた。



<昼食での様子>

説明したあさは、昼食のみそ汁に使用した。

以前、ひな祭りの献立にあさをはまぐりに見立てて、あさりのすまし汁にしたが、あさが苦手という子どもが多かった。今回は、「あさが一番おいしい！」「あさりの話楽しかったよ！おかわりする！」と、あさが苦手だった子どもがみそ汁を一番に完食していた。あさりの絵と実際のあさりを見て、「ここが管で、ここが足だ！」と確認する姿も見られた。

あさを食べ終わると、あさりの貝殻を使って、貝をカチカチと音を鳴らしたり、箸置きにしたり、貝殻のみそ汁をすくっている様子が見られた。子ども達ならではの発想であると感心した。

<食材紹介の掲示>

保護者も共有ができるように、食材紹介で話した内容と子どもの様子を食コーナーに掲示した。掲示すると、子どもが保護者にあさりに関する話をする姿や保護者が子どもに取り組みの様子を聞く姿が見られた。保護者からは、「あさりって、足があるんですね！知らなかったです。」「こういうことを家でやったことがないので、嬉しいです。」「あさは、子どもが苦手でお家では出していなかったのですが、喜んでいたのでですね。」という声も聞こえた。

<食材紹介から、保育活動へ>

昼食時に子ども達が食べ終わった貝殻に触れている様子を見て、貝殻を遊びにつなげられないかと保育士に相談した。5歳児があさりの貝殻を使って、オブジェを作ったり、年齢別の活動で「あさりの絵を描いたよ！」「また、お話を聞かせてね。」とよりキッチンまで見せに来てくれた。



[考察]

食についての話や食材紹介を続けていくと、「お米を食べると力が出るんだよね！元気に遊べるんだよね！」「もりもり先生！今日のお豆腐って大豆からできてるんだよね。おみそもだね。覚えてるよ！」と話をしてくれたり、さやいんげんの切り口を見て「あ！みてみて！ハートの形だよ！」「ぼくのもハートだよ！」と食事に入っている食材をよく見るようになった。楽しそうに食についての話をする姿が見られ、食べる意欲を高めることにつながった。食についての知識が増えることによって、

子どもの食の関心や好奇心も増える。

子どもの発想を大切に、保育士と連携することで、食育から保育活動に広げることができることがわかった。

2. 食育を通して、子どもや保護者の食への関心の変化を検証する。

【事例3】子ども達が興味を持った世界を生かして「世界の料理」

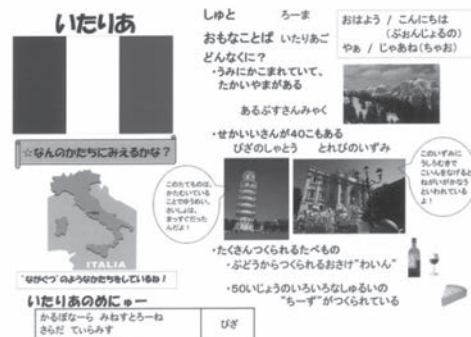
世界地図や国旗、サッカーワールドカップに興味があった子ども達。子ども達が興味を持っていることを食事の中に取り入れたら、食事を楽しむ機会が増えるのではないかと、世界には国によって様々な食文化があり、日本の食文化との違いを知る機会になるのではないかと考えた。

- ・月に一度、献立に「世界の料理」を取り入れた。
- ・日本と世界を比較できるよう、日本の国の特徴、日本料理の説明、食事のマナーなどを話した。(話す内容は、イラストを取り入れ、子ども達が読めるようにひらがなで記入した用紙を作って、各クラスに掲示した。)



～世界の料理の進め方～

- ①食事の前には、子ども達に興味を持ってもらえるように「国について」と「食事内容について」の説明をした。
国について：あいさつや有名な建物、食べ物、生き物などその国の特徴
食事内容：献立のメニュー名、入っている食材、作り方、食べ方、食事のマナー
- ②一緒に食事をし、子ども達がどのように感じるのか反応を見た。
- ③保護者にもメニュー、料理写真、子ども達の声を記入し、玄関前のサンプル横に掲示した。
- ④一度紹介した国については、子ども達が自由に見られるようにもりもりキッチンの前に掲示した。



例：「インド料理」チャイルドクッキングでナン作り

世界の料理が子ども達に定着し、楽しみの一つになった。「どうやって作るの？おうちで作りたい！」という声も聞こえてくるようになった。そこで、チャイルドクッキングに世界の料理を取り入れようと考え、インド料理のナン作りをした。

- ・収穫したバジルやピーマンを使ってタイ料理のガパオライスの紹介、チャイルドクッキングでインド料理のナン作りを取り入れた。
- ・ベルギーへ転勤する保護者、タイ料理店を営んでいる保護者、ギニア出身の保護者に聞いた献立などを取り入れ、保護者にも協力してもらった。
- ・世界の料理のレシピを配付した。



ナン作りでは、ナンに入っている材料（ヨーグルト）を見て、パンの生地にヨーグルト？と不思議な様子をしている子も見られ、世界の料理ならではの反応であった。生地を捏ね、伸ばし、夢中になって作っていた。手作りしたナンは、それぞれいろいろな形ができ、食べている時も「いいにおい！」「自分で作ったんだよ！おいすぎる！」「インドの料理作っちゃった！」と喜んでいる様子が見られた。

【考察】

世界の料理を続けていくと、「次は、どこの国の料理？」「アメリカ知ってるから、この国のごはん食べたい！」と子ども達が楽しみにしてくれている様子がうかがえた。日々の昼食やおやつで、食材や料理の名前だけでなく、「この料理は、どこの国の料理？」と、国についても興味を持つ姿も見られた。

調理担当者も国や料理の特徴を調べ、実際に様々な国の料理を食べに行き研究したり、調理をすることで料理の知識や調理の幅が広がった。子ども達とともに楽しみの一つとなった。

子ども達にとっていろいろな味を経験する機会になったが、初めて見る料理になかなか手をつけてくれない子や味が苦手という言葉も耳にした。興味を持ってほしいと始めた取り組みだったが、子ども達の反応をよく見て調理していくことが大切であると感じた。

取り組んだものをもりもりキッチンの前に掲示すると、子ども達が振り返ることでき、お迎え時には保護者に教えている姿も見られた。

保護者に聞いたメニューを取り入れることによって、保護者にも食事作りに参加してもらう機会を作ることができた。世界の料理紹介というきっかけで、保護者とも以前より会話が増え、食の共有ができた。同様に、郷土料理についても保護者とのやり取りをしている。

「世界の料理のレシピをもらい、お家でも作ってみました。はじめて作ったメニューで作るのがとっても楽しかったです。」と保護者も子どもと一緒に楽しんでくれた。「家庭で子どもたちが食べたものや国の名前、言葉などを話すようになり、食以外にもいろんなことに興味を持ち始めました。」という声も聞こえた。

【事例4】未満児との会話で始めた食育

未満児クラスのチャイルドクッキング

未満児クラスは、1、2歳児合同クラスである。食育計画としての内容は、収穫祭、とうもろこしの皮むき、枝豆のさやもぎ、グリンピースの豆取りであった。日々の昼食やおやつの時間に子ども達の様子を見に行くと、2歳児から「これ、何？」「これに何が入ってるの？」「どうやって作ったの？」という声が聞こえてきた。調理担当者は、その都度入っている食材や作り方などを説明した。

子ども達が自ら興味を持ったことを大切にしたいと思

い、昼食やおやつ作りを未満児クラスで行ってみることにした。クッキング内容は、保育士と調理担当者と話し合いながら、子ども達の発育・発達に合わせてできるものを選んだ。

クッキングをしたものは、家庭にレシピを配付し、子ども達の様子を伝えた。

＜一年間で行なったクッキング＞

ココアホットケーキ、焼き春巻き、豆腐ごまスコーン、せんべい汁（郷土料理）、おにぎり作り、ピザのトッピング（ケチャップをぬり、具材を生地にのせる）、すいとん作り（すいとんの生地をこねてちぎる、白菜やこんにゃくをちぎる）、クリスマスパフェのトッピング、もちりチーズパンなど

例：豆腐ごまスコーン作り（1・2歳児合同）

1歳児も2歳児のクッキングに興味を示していたことから、1歳児にもできるものを考えた。

ホットケーキミックスと豆腐をよく混ぜ合わせ、耳たぶくらいの硬さにする。最後にごまを加えて生地をまとめる。食べやすい大きさにちぎって丸める。オーブンで焼く。

まず、材料を見せると2歳児は「お豆腐だー！」。粉を見て触ると、「さらさら！」などと食材に興味を持っていた。「豆腐と粉を混ぜるとどうなるかな？よく見てね」。少しずつかたまりになっていく生地の変化に、「わーまるまるしてきたね！」。まとまった生地をさわると、「冷たい！」「大きい丸ができたね！」「ぷによぶによする！」と触感を楽しんでいた。

生地がまとまり、ちぎって丸める。見本を見せると、1歳児は、コロコロ丸めたものを保育士や調理担当者に見せてにこっとしたり、夢中になって真剣にまるめようとする様子も見られた。2歳児は、日常の粘土遊びのようにちぎって丸めて、「長いのができた。」「目玉焼きみたいになった。」という声が聞こえた。丸にすることを伝えながら、子ども達が思い思いに作った形を残しながら楽しく作れるように心がけた。

できたてのおやつを見ると「わー！いいにおい！」子ども達の笑顔があふれ、「みんなおやつを作ってみてどうだった？」と聞くと、「すっごいおいしい！」「楽しかった！」「あ！これ〇〇ちゃんが作ったやつだよ！」と嬉しそうにしていた。

【豆腐ごまスコーン作り（1・2歳児合同）】



<保護者からの感想 連絡帳や会話から>

1 歳児

・チャイルドクッキング、〇〇からも「コネコネ」と楽しそうにおにぎりを握るような格好をして教えてくれました。

2 歳児

・保育園で行なったチャイルドクッキングの話をしてくれて「コロコロして丸めてお団子にしたよ！」と言って嬉しそうな顔をしていました。お団子なら、2歳でも作れるのですね！レシピも簡単なので、おうちでもできそうです。作ります！

・「すっごくおいしかった～ママも食べたかった？じゃあ…おうちで作ってあげるね。」と言ってくれました。楽しみです！

・「スコーン作ったの？」と聞くと「お団子作ったの～あと、へび！ここにくっついたの！」と生地がゆびについた話もしてくれました。とっても楽しかったようです。

[考察]

クッキングを通して、触感、匂い、食べ物の変化、音、味…子ども達が五感を使うことができた。回数を重ねるごとに、未満児の子ども達も食への興味が増し、自分で作ったものを食べる喜びを感じられるようになった。1歳児の集中力に驚く場面も見られた。未満児でも参加することで食が楽しいと感じられる。クッキングを行なったあとには、日々の保護者との連絡帳や会話から家庭でやり取りがあることもわかり、食の話題が増えた。家庭でも、「お手伝いしたい！」と積極的に食に関わる様子がみられ、子ども達が楽しむ姿を見て保護者の食に対する見方も変わった。「クッキングはまだはやい、難しいものと感じていましたが、簡単なことから良いのですね。」「実際におうちでも保育園でクッキングしたものを一緒に作ってみました。」「おうちでも手伝ってもらいました。」と、子どもも保護者も食への関心が高まったことがわかった。

【事例5】 野菜の栽培・収穫から、家庭の食卓へ

おひさま農園では、様々な種類の野菜を育てている。子ども達が種を植え、水をやり、野菜の様子を観察しながら育てている。収穫の際には、「このピーマン、この間こんなに小さかったのに、もう大きくなってるね。」「こうやって食べたらおいしいよ！」という声も聞こえてくる。子ども達が自分たちで育てた食材を調理すると、苦手な野菜も自ら進んで食べる様子も見られる。

子ども達が楽しみにしている食材を家庭の食卓にも届けることで、保護者も子ども達の気持ちを共有できるのではないかと毎日のリーダー会議で話があがった。全家庭にぶどうとしそ、バジルを子どもと保護者で収穫し、家庭へ持ち帰ってもらった。

・ぶどうの栽培、収穫

ぶどうは、実がなると病害虫の予防のために一つひとつの房に袋をかぶせる。袋は、園児一人1枚ずつ持ち帰り、名前や好きな絵を描いてもらった。6月、お迎え時に子どもと保護者で袋をかぶせた。9月、ぶどうの収穫時期に、お迎え時にぶどうを親子で収穫してもらった。「大きくなったかな～？」「楽しみだね！」「じゃあ今日は、ごはんのあとに食べようね！」と会話が聞こえてきた。



・しそとバジルの収穫

しそやバジルは、香りがよく、子ども達の五感に触れるように育て始めた。しそとバジルもお迎え時に子どもと保護者で収穫してもらった。収穫すると、「バジルって、いい香り。」「何の料理にしようかな～。」「バジルは、トマトとチーズと一緒に料理しようかしら。」などと保護者も楽しそうに子どもと一緒に収穫していた。「何に入れたらおいしいですか？」という問いには、保育園では、しそをみそやきおにぎり、冷汁、松風焼き、納豆入り厚焼卵、中華風ローストポーク、和風ハンバーグ等に、バジルは、鮭のコーンマヨ焼き、グラタン、ナゲット、ピザ、ガパオライス等に加えたら子ども達よく食べてくれていたことを話した。レシピも持ち帰ってもらった。

翌日、子ども達に家庭でどのようにして食べたのか、感想を聞くと、「バジルは、ピザにして食べたよ！」「保育園のバジルね、パスタに入れて食べた！最高においしかった！」「お母さんもおいしいって言ってた！」「しそ食べたよ！朝、そうめんの上に乗せて食べたの！」と嬉しそうに話をしてくれた。



<保護者からの感想 連絡帳や会話から>

- ・昨日は、保育園から持ち帰ったしそをごはんに混ぜ、食後にはぶどうを。保育園で採れたものだからか、昨日も進んでごはんを食べ、食後のぶどうを楽しみにしていました。
- ・園でとれたぶどうは、甘くてとてもおいしかったです。

「ママにもちょうだいよ！」と言うと「えー、じゃあちょっとだけね。」といい、2粒くれました。

- ・帰りにぶどうとバジルをつんで帰りました。手の匂いをかいでずっと「バジルのにおいがする！」と言っていました。おひさまレシピをもらったので作ってみました。「おいしい！」と言って食べてくれていて、私も嬉しくなりました。
- ・週末に保育園でもらったバジルとしそでスパゲティを作り、「おいしいね。」と言いながら親子で楽しませてもらいました。
- ・おいしく頂きました！やっぱり園で収穫したものは、違いますね。また、いただきたいです。
- ・バジルは、市販のトマトソースに混ぜて食べました！普段お家では食べないものをよく食べていて、こういうのが食育なんだと思いました。

[考察]

おひさま農園で子ども達が育てた食材を家庭の食事へ。収穫時・収穫後の子どもと保護者の会話から、一緒に楽しんでいる様子が見られた。

今までの取り組みから、子どもが楽しいと感じると、保護者の喜びとなることが伝わってきた。収穫など同じ体験をすることで、保護者も五感に刺激を受けて、食べることに對しての喜びを共有することができ、さらに子どもと保護者のつながりが深まるということに気づいた。今後も、子どもも保護者も豊かな食体験ができるような機会を作っていきたい。

3. 保護者への働きかけ

- ・食についてのアンケート（家庭での食生活の把握）
 - ・配付物（食育だより、簡単レシピ、食事のQ & A）
 - ・離乳食試食会
 - ・食事サンプルの展示、食コーナー（収穫した食材の提示、世界の料理・郷土料理についての資料）
- などを実施した。

例：簡単レシピ

忙しい保護者が多く、スーパーでお弁当を買う、ごはんを作るのが苦手、お迎え時には、「今日のごはん、何にしようかな？」という声を聞く。簡単に作ることができて、子ども達の人気メニューを簡単レシピとして毎月作成するようにした。レシピの右面には、食の豆知識として使用する食材について（旬や種類、栄養、選び方のポイント、保存方法、調理の工夫、食べ合わせのポイントについてなど）の説明を記入した。

作成したレシピは、食事サンプルケースの横に簡単レシピ集としてファイリングし、自由に持っていけるようにした。



ごはんを作るのが苦手というAちゃんのお母さん。Aちゃんは、お迎え時、サンプルケースを見て「今日は、これがすごくおいしかったよ！」といつも嬉しそうに話をする。食事サンプルケースの横にレシピをおくと、Aちゃんが「これ持って帰って作ってほしい！」と自分でレシピ取り出し、お願いする姿も見られる。始めは、お母さん「今日は、材料がないし、時間もないからできないよ！」「お家でごはん作ってもいつもあまり食べないでしょ。」。Aちゃん「お家でも食べたいな！」。保育士や調理担当者もAちゃんの食事の様子、完璧に材料をそろえなくてもできること、食材のアレンジなどを話すと「じゃあ明日にでも作ってみようか！」と言い、作ってみようという気持ちを持ってくれた。後日、「先生！作ってみました。Aも喜んでくれて、お家であまり食べないのですが、よく食べてくれました。」と話してくれた。「次は、これを作ってみようと思います。」とAちゃんがリクエストしたメニューを取り出して見せてくれるようになった。

[考察]

簡単にできるレシピで食事サンプルケースの横にファイリングし、自由に持っていけるようにしたので、料理が苦手、忙しいという保護者でも取りかかりやすかったこと、保育士・調理担当者が声をかけることで、家庭で作るきっかけになった。子どもが喜ぶと料理をすることも増え、「このレシピに彩りがほしくてきゅうりを入れてみました。」「ツナを入れたらおいしいと思って、加えてみました。」と次第にレシピをアレンジするようになった。食事に対する関心が変わった。食事サンプルケースやレシピから保護者と子ども、調理担当者との食のやり取りが増えた。

V. まとめ

食べることは、生きることの源である。調理担当者として、食事は、体作りのために好き嫌いなく食べて欲しいと思っていた。子どもの目線に立って寄り添い、食べることを一緒に楽しむことが一番大切であると気づき、子どもの実情に合わせた調理の工夫、食体験を増やすことでおいしく食べられるようになることがわかった。

一つひとつの取り組みから、子ども達が様々な角度から五感を使い、食に触れることを楽しむ様子が見られた。

楽しいと思うことで食の興味関心が高まり、食欲につながる。また、子どもが「食を楽しむ」と今まで食に関心が薄かった保護者も次第に食に興味を持ち、「食に対しての関心」も変化した。保護者の関心が高まることで家庭での食事の様子も少しずつ変化してきている。子どもが楽しいと思うことは、保護者の喜びにつながる。食を楽しむ子どもが食を楽しむ親を作ることに気づいた。

『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』に、保育所における食育の目標は、「現在を最もよく生き、かつ、生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本としての食を営む力の育成に向け、その基礎を培うこと」とされている。その原点として、内面的な育ちを支えられるように、子ども達の気づき、反応、疑問、やりたいという気持ちや声に耳を傾けながら食育の幅を広げていきたい。

子どもと同様に保護者も食体験の少なさを感じた。保護者に対しては、難しい話ではなく（食の情報提供や選択肢を増やすことと同時に）、子どもと保護者が一緒になって食体験ができる提案などをし、食を身近に感じて

もらえるような取り組みをしていきたい。

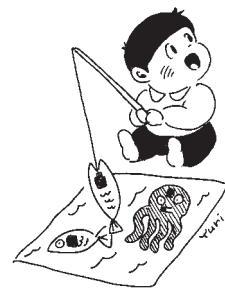
心のこもった食を伝え、豊かな食体験を積み重ねることにより、子ども達が10年後20年後に「食べるっておいしい、楽しい、大切」と自分の子どもや身近な人に伝えていけるようになることが私達の願いである。保育士とともに、食を通して子どもの育ち、そして心の育ちを支えていきたい。

参考文献：

- ・この子にあった保育指導 食事で気になる子の指導
名古屋 研一 (株)ひとなる書房
- ・「辞書びきえほん 世界地図」
陰山 英男 (株)ひかりのくに
- ・食育エプロン げんきいっぱい健康エプロン
高野 陽 (株)メイト

引用文献：

- ・楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～
厚生労働省



職員間の連携を振り返って ～リーダーとしての取り組み～

東京都・そあ季の花保育園 齊藤 直美

はじめに

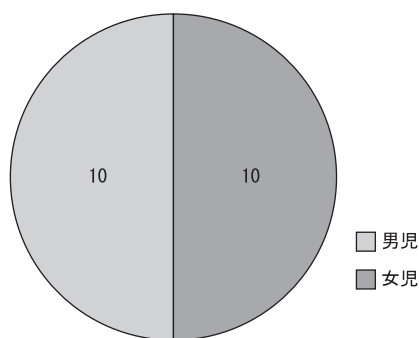
本園は2012年度に、練馬区のプロポーザルに応募し選定され、2013年4月開所した認可保育園である。近くには公立図書館や四季折々の野菜畑があり、のどかな環境に恵まれている。私は同じ法人の保育園から異動し、保育経験2年目で1歳児クラスのリーダーを任された。今回は、新任保育士3名と一緒に保育を行い、保護者への対応や保育内容などについて、様々な問題を繰り返し職員間で話し合い、保護者・職員間そして子どもたちとの信頼を築いてきたことを振り返りまとめた。

1. テーマ

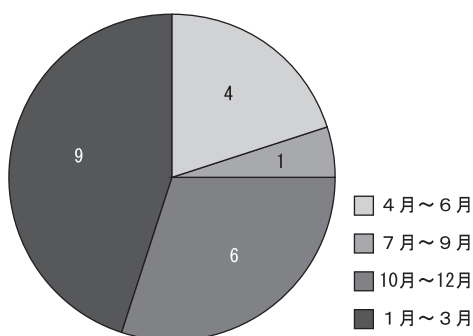
「職員間の連携を振り返って～リーダーとしての取り組み～」

1) 1歳児クラスについて

・子どもの人数と男女比 (うち、男児の双子が2組)



・子どもの月齢 (高月齢5名、低月齢15名)



- ・ 第一子……………10名
- ・ 園に兄弟がいる……………4名
- ・ 集団保育経験あり (主に認可外) ……………6名

《保護者について》

父母共にフルタイムで働いていて、送迎が祖父母であることも多く、とても協力的であったように感じた。

《クラス担任構成》

社会人として働いたのち保育士資格を取った職員が1名、新卒職員が2名、保育士資格を持っている非常勤職員が1名、非常勤職員(無資格)が1名(0・1歳児担当)、そして初めて1歳児クラスのリーダーをすることになった私の計6名が1歳児クラスの担当となった。

《4月の様子》

子どもたちは初めて保護者と離れ、生活することへの不安から、泣き続ける姿が見られた。新任保育士は初めて目にする光景ばかりに不安な様子であった。私自身も、初めての環境で初めての1歳児保育ということに対して不安な気持ちもあったが、他の保育士の不安な気持ちが子どもたちや保護者にも伝わってしまい、毎日安心して過ごすことが出来なくなってしまうと考え、1年間この環境の中で試行錯誤しながら保育を行っていこうと決めた。私が慌ただしい中で、日々大切にしていきたかったことは“一人ひとりの子どもに寄り添うこと”であった。そのためには、どの様に動き、新任保育士に理解してもらえるように伝えていけばよいかとても難しい日々が続いた。

①デイリープログラムの作成と環境設定

1歳児クラスの保育について分からないことが多かったため、園長や主任、乳児リーダーに相談しながら、環境設定やデイリープログラムを決めることから始めた。しかし、初めに考えた環境設定やデイリーを1年間続けてきた訳ではない。

- ◇ 子どもたちの動線の見直し
- ◇ 今、子ども達に経験させたいことは何か
- ◇ 一人ひとりの発達と生活リズムを見直す
- ◇ じっくりあそぶにはどうするか

4つの視点からクラスで話し合いをしてきた。また、1月からは0・1歳児クラスの異年齢保育も始める計画を立てるため、0歳児担任ともデイリープログラムの見直しを行ってきた。

《特徴的な室内環境からの気付き》

1歳児クラスには、畳の部屋が2ヶ所。また、部屋の中にちょっとした段差がある。4・5月は、新しい環境の中で、段差でつまずいたり段差から転落しそうになったりすることが多々見られた。

◇ 取り組み

- ・子どもたちに段差の上り下りの仕方について繰り返し伝えながら、職員間で段差の上り下りの際は近くで見守っていくことを徹底した。
- ・段差がある場所は、園庭で遊ぶ際、災害の時の避難経路に使用する階段もあるため、階段でのルールをクラスで決める。
- ・子どもを支える手の繋ぎ方も主任からアドバイスをもらい職員みんなで共有し実践した。

◇ 気付いたこと

- ・段差が日常の生活の場に沢山あることで、職員一人ひとりが、常に子どもの姿を監視している状態になっていたことに気が付く。
- ・怪我やトラブルが続いてしまっても怪我やトラブルに怖がる前に、実際一緒に遊んでみる。子どもたち一人ひとりをもっと知ること、子どもの気持ちに寄り添う事に気が付く。

◇ 実践

- ・リーダーから手作り玩具を作り始め、子どもと一緒に楽しく遊ぶ姿を他の職員へ伝えることから始める。(段ボール遊び・小麦粉粘土・表現遊びなど)

◇ 結果

- ・子どもたちの遊びの幅も少しずつ広がり、友達や保育士の様子を見ながら関わりも増えてきた。
- ・子どもたちの楽しむ姿を見て、他の職員も少しずつ手作り玩具を用意したり、新しい遊びを取り入れてみたりといろいろなことに挑戦する様子が見られ始めた。
- ・秋になり、乳児保育で0・1歳児の遊びの環境を見直そうという話が出ると、0・1歳児担任の新任の職員同士で話し合い、自分たちでデザインを考え準備する姿が見られた。
- ・子どもたちの姿をみて、どんな経験をして欲しいかなど新任の職員同士で考える時間を作ることで職員同士の気持ちが更に通い始め、信頼関係も強く育ったように思う。

②一人ひとりの子どもに寄り添うこと

ひたすら「保育」を行ってきたが、その中で大切にしなければならぬことを見落としていることに気が付かれた

- “子どもの目線に合わせて声を掛ける”
- 見えない所で怪我やトラブルが起こらないよう“子どもに背を向けない”
- 丁寧な言葉遣いや穏やかな声で子どもと関わることを意識し“保育士が大きな声を出さない”
- 子どもが今興味を持っていることや関わりの様子を知るためにも“子どもと一緒に遊ぶ”
- 子どもがすべきことを拒んだ際には無理に“子どもの手を引っ張らない”
- 保育士がアンテナを張りながら、どんなに些細なことでも“子どもの声に耳を傾ける”
- 園と家庭での子どもの様子を伝え合いながら“保護者との連携をとる”などについてであった。保育をする上では当たり前のことが、私たちは出来ていないことの方が多かったため、意識しながら保育をしてきた。まずは、担任間で子どもたちの話をしながら、情報を共有することを徹底した。

保育経験者もわかっていることばかりだが、一緒に働いている職員に伝えることが出来ていない。繰り返し、気が付いた職員が声を掛けていくことから始める。これは、他クラスでも共通するものの為、会議の中での毎回のテーマとして取り入れるようにした。「自分を振り返る」くせを付けるように自分の言葉で会議に参加し、発言する機会も作った。

③起きてしまったアクシデントへの対応

日々の保育で危険は沢山ある。次の事例から学び、実行したこと

<畳コーナーにハサミが置いてあった>

事務スペースに、段差にいる子どもが手を伸ばせば届く場所があり、そこに置いてあったハサミを子どもが持ち出してしまった。「危険な物が置いてあると触れてしまう可能性がある場所」と認識し、その場所には物を置かないことを職員間で共有し徹底するべきだった。危険な物は置いていないかこまめに確認するようにした。

<子どもがリップクリームを手にしてしまった>

ある職員がリップクリームを使用した後、エプロンのポケットに入れたまま保育してしまい、気づかないうちに子どもがポケットの中から取り出していた。その後職員間で話し合い、リップクリームや目薬など、子どもが触れてはいけない物は、休憩室等のみで使用し、子どもに触れる場所には絶対に置かないことを職員間で確認した。

<職員の名札で子どもの足にすり傷ができた>

保育士がある子どもを抱っこしている際に、胸の下の方に付けていた職員用名札の端が足に当たっていて、す

り傷が出来た。子どもの名札は危険のないように背中に付け、午睡時には外すことを徹底していたが、職員の名札が子どもを傷付けてしまう可能性があるという意識が低かった。担任間で名札はどこに付ければ一番危険ではないのかについて話し合いを行い、職員間で共有した。

＜ブラインドの紐を束ねていなかった＞

いつも布団敷きをお願いしている非常勤職員とは違った非常勤職員に布団敷きをお願いした際、ブラインドの紐を結んでもらうことを伝え忘れた。なぜ、紐を結ばなければ危険であるかの理由まで含めて、全職員が把握しておく必要性があり、職員間で共有した。

＜下痢の子どもに水遊びをさせてしまった＞

朝の受け入れをした職員が下痢であると伝えられたにも関わらず記入の件できちんと水遊びは控えることを伝えられなかった。子どもの体調によっては、水遊びやプール遊びが出来ないということを看護師も含め、全職員で確認していたが、保護者への発信や確認が曖昧になったり、自信を持って伝えることが出来なかった。分からないときには、近くの職員に確認や相談をするように徹底した。

一人では、決して仕事ができないことを痛感したとともに、「連携」の大切さを強く感じた。

④保護者への対応から見えるリーダーの役割

子どもの怪我やトラブルがあった際の保護者への伝え方、発熱などで報告やお迎えの電話連絡のマニュアルはあるが、全てリーダーが行っていた。しかし、「新任の先生たちが育たない。慣れている職員の方が仕事は早い。リーダーが休みの時は、どうするのか。保護者対応の際、きちんと説明できない。」との意見があった。この保育園でのリーダーの役割は、手間暇かけて職員に説明し、クラス担任みんなが「自分たちのクラス」への責任感が持てるよう仕事を振り分けることもリーダーの役割だと感じた。

2) 0・1歳児クラスの連携から学んだこと

私達の園は、3・4・5歳児の異年齢保育を行っている。だが、0・1歳児クラスでも「関わり合う生活」を保育に取り入れていこうと日々の保育で、クラスの枠を外し、職員同士の情報を共有していきたいと思うが、なかなか上手くいかない。いくつかの事例から一つ一つ学び自分たちを振り返る材料があった。

【事例1】

6月のある日、リーダーの私が早番で上がった後、1歳児クラスで嘔みつきが起こった。1人で見るのが難

しい人数である場合にも、0歳児クラスと1歳児クラスの連携がきちんととれていれば、0歳児クラスの職員にフォローをお願いするよう話をしていたものの、助けを求める声が出ず、嘔みつきに繋がってしまった。その経験から新任保育士からも0歳児クラスに助けを求める声が出てきた。

【事例2】

積極的にお散歩へ行けるようになった秋ごろ。0歳児クラスと連携を取り一緒に散歩に行く予定を立てていた。朝、乳児リーダーから散歩に連れていく子どもの人数と名前を確認されても、曖昧な答えしか伝えられなかった1歳児クラスの新任保育士。きちんと人数の把握ができていないことを怖く思い、この日は散歩には連れて行かないことを乳児リーダーが決めた。その日の昼に、早速乳児会を行い、どうして人数を把握しておかなければいけないのか、何のために週案を書くのか、0歳児クラスと1歳児クラスと一緒に話し合った。新任保育士が1週間見通しを持って保育をするのは、難しいこともあるかもしれないが、その話し合いを境に、次の週どのようなことをするかクラスで考えるようになった。

このような経験が0歳児クラスと1歳児クラスの連携を作り上げてきた。新任保育士に大切な事を伝える時には、クラスリーダーと乳児リーダーが同じ内容を伝えられるように、2人の間でも常に確認し合い、リーダーからの報告だけを頼りにするのではなく、0・1歳児クラスの子どものことはお互いに情報を共有できるように意識しながら、乳児ノートを作ったり、引き継ぎ表を活用しながら連携を取ってきた。それでも不安な時には、主任や園長先生へ確認することを徹底した。

加えて1歳児、0歳児それぞれのクラスが落ち着いてきた6月頃からは、乳児リーダーと1歳児クラスでの話し合いを0歳児クラスと1歳児クラスでの話し合いという形に変えてきた。例えば、プールが始まる前には危険個所や流れを確認し合い、無理なくプール遊びを楽しむことができるよう考えるようにした。話し合いの時に初めはなかなか新任の先生達から素直な声を聞くことができなかったが、少しずつ「怖い」「できない」といった意見が出てくるようになり、その都度やり方を変え「できない」を「できる」に変えてきたのがこの1年間であった。

3) 保護者からの意見やクレーム

保護者との関わりの中で、教えられる事、振り返り見直していくこと、保育園の方針を丁寧に伝えていく事、そして起きてしまったことを素直に受け止め謝罪すること、最後に信用を取り戻すには、何が大切なのかを話し合い、実行するという事を、いくつかの事例から学んだ。

【事例1】

ある子どもが体調が悪く何日か休んでいた次の日、病院受診後に登園すると連絡が入った。受診後、父から電話連絡があり「子どもが寝てしまい、家で食事を食べさせてから午睡明けに登園させたい。」とのことであった。私は、保育園での生活リズムが崩れてしまうため、他の方にも出来るだけ遅くても11時頃には登園してもらうよう声かけをしているということ、休み明けで久しぶりの登園が午睡明けからとなるとお子さんにとっても不安かもしれないことを話し、父は仕事であることを確認した後に「おばあちゃんに見て頂くことも難しいですよ。」と提案したところ、その日は父が調整し登園することはなかった。しかし、次の日母に声をかけた際、園長とも話をしたいとのことだったが、園長が不在であったため、主任が話を聞いた。

今回の問題点は2つあった。まず1つ目は「遅めの登園を受け入れようとしなかった」ことである。園の考えとしては、大人の都合で11時過ぎや午睡明けの登園になってしまう際には、子どものことを第一に考えると生活リズムが崩れてしまうことについて話をしているが、今回のように保護者が仕事を休めなかったり、誰も見てくれる人がいなかったりする場合には保育を受け入れる必要もある。今回は園の考えとしてはこうであるという部分を伝えることは出来たが、父が仕事であると分かった時点で「寝たまま連れてきていただいても大丈夫ですよ。」と快く受け入れるべきであった。そして、2つ目は「祖母にお願いすることは難しいですか？とこちらから提案してしまった」ことだ。普段、送迎を度々してくださっているのを知っていたため聞いてしまったが、祖母が遠くに住んでいることを把握していなかったことが原因だった。

この事例ではまず電話連絡で父とのやりとりをした際、もし判断に困った際にはその時点で園長や主任に報告し相談するべきであった。そして、登園時間について生活リズムを大切にしたいことや、11時前の登園をお願いすることについて、他の職員にも伝えてはいたが、保護者の仕事の関係やどうしても難しい理由がある場合などには臨機応変、柔軟に対応することについて、私自身も上手く出来ておらず、伝えられなかった部分だった。

【事例2】

2月下旬、登園時に受け入れした職員の対応について不満があったようで、上の者と話をしたいとのことだったため、園長が直接対応する形となった。内容としては、まず受け入れの際に自分の子どもが他の子と一緒に保育室に入ろうとしているにも関わらず、目の前でドアを閉められた。どういう気持ちで保育をしているのか。という意見から始まり、職員にすれ違って挨拶してくれない。以前、食事用エプロンが汚れ物袋ではなくカゴの方に入っていて洋服が濡れてしまったことがあった。その

時対応してくれた職員も、謝罪はするがその後言い訳のような言い方をしてきた。保護者と職員が会える時間が短いため、その時の対応が悪いと、子どもにもそのような対応をしているのではないかと思ってしまう、ということであった。

この事例では、基本的である挨拶や子どもへの対応、保育士の立ち位置等についての指摘であった。職員間でも何度か確認し合ったり、主任からも指摘してもらったが、そこが徹底されていなかった。園長からは保護者は今回のように自分たちは分からないところを見ている、自分たちの行動に意識を持つようにと話があった。クラス職員だけでなく、その日のうちに園全体でこの意見のことを共有し、棚に寄りかかって保育をしていないか、座り方は見苦しくないか、子どもへの対応や話しかけ方はどうか、等見直すべき点がいくつか挙がった。

①報告・連絡・相談・確認をすること

私たちのクラスは、リーダーも2年目、他の担任は1年目という職員構成だった。上の立場から全て教えたり、伝えたりするのではなく、何か問題が起きた時にはまずクラス担任で意見を出し合い話し合いをした。そこでも分からないときに、主任や乳児リーダーも含め、アドバイスをもらい話し合うようにした。そのため、問題は絶えず起きていたが1年目の職員も「どうすればよかったのか」と自ら行動を振り返り、考えることが出来ていたと思う。教えてもらうだけでなく、自分で考えてみる。そして分からないことは話し合いながら、改善していくことがこれからも必要であると考え。クラスリーダーとしてリーダー会の報告を他の職員に伝える際にも、一方的に報告するだけでなく確認することが大事であると気付いた。そして、その場では聞きにくい職員もいることもあるため、こまめにこちらから確認していくことも必要ではないかと考える。

②連携を取ることに

まず職員同士の連携では、クラス担任はもちろん、乳児リーダーや幼児リーダー、各クラスのリーダーとも伝達し合うことが大切である。今年度になり、昼の打ち合わせを毎日15分間行っていて、そこでは、感染症や怪我の報告の他に、その日の活動や次の日の活動、クラスの気になる子どもや配慮が必要な子どもについても伝え合い、各クラスの職員が把握できるようにしている。この会議をするようになってから、自分のクラスだけでなく他のクラスの子どもや保育の様子が少しずつ分かるようになってきた。園全体で子ども一人ひとりの成長を見ていくという気持ちを持ちながら保育していきたい。その他に、保護者との連携も大切になる。園だけで進めていくのではなく、家庭とも連携を取りながら同じような伝え方や進め方をしていくことでより子どもたちも意欲的に取り組み、スムーズに移行が出来るようになるのだと

思う。保護者の方に移行の話をする時にも、一方的にお願いをするのではなく、子どもたちの園での意欲や取り組みの様子を知らせていくことで、保護者の方にも子どもが成長していること、そのためにも園と家庭で進めていくことが大切であることに気付いてもらえるのではないかと考える。

③保護者に保育を伝えること

昨年度新設園ということもあり、幼児クラス中心に転園してきた子どもが多いため、前の園の保育との違いを比べたり、行事内容について意見があったりと、なかなか上手く伝わらないことがあった。そのような時に、クラス担任だけでなく園長や主任も交え、この保育園ではどの部分を大切にしていってほしいかについて繰り返し話し合いをしながら、保護者の方々にも丁寧に伝えていくことが必要である。幼児クラス中心に毎日掲示している今日は何の日？や各クラスのおたよりでは、その日や前の月で、どのような活動をしたか、子どもたちの最近の姿についてなど、文章や写真を用いて知らせたり、その他には随時保育参加をすすめている。

4) 報告・連絡・相談・確認

今回1年間、このような職員配置で保育をしてみて改めて「報告・連絡・相談、そして確認」が大切だと分かった。

①報告

園長や主任、乳児リーダーから伝えられたことを確実にクラス職員にも伝えること、保護者から質問や意見があった際にはクラス職員や園長・主任に伝えること、クラスリーダー同士でも保育の状況を伝え合うことなどが大事であると感じた。どんなに小さなことでも報告し合うこと、保護者との連携についても、職員間で報告し合う大切さを実感した。報告漏れが保護者との信頼関係を崩してしまうこともあるのではないかと考える。

②連絡

朝受け入れした職員が子どもの体調や保護者への連絡先について他の職員に確実に伝えること、そして子どもの体調や怪我の様子について降園時に間違いなく引き継ぎすることが大事であると感じた。怪我や体調不良の子がいる時は0歳児クラスと1歳児クラスそれぞれのクラスで報告し合うこと、そして大事な連絡は口頭だけでなく引き継ぎ表にも詳しく書いておくことである。

③相談

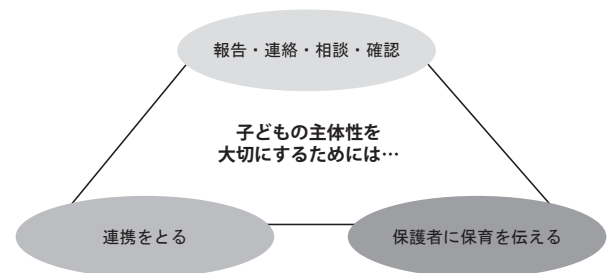
分からないことや気になることがあったら1人で勝手に判断せず、必ず乳児リーダーや主任、園長に相談すること、他の職員にもどのようなことでも声をかけてもらうこと、保護者の方々にも気軽に相談してもらえる信頼

関係を築くことなどが大事であると感じた。保育園という場所は、一人だけで子どもたちを見ているところではない。複数担任であることは、人の数だけ多くの知識や考えがあり、様々な視点から見る事が出来る環境であるからこそ、不安や悩みがあるときにはまず周りの人に相談してみることが大切である。自分の気持ちを素直に話し、どうしたいのかについて伝えると、適格なアドバイスをもらうことが出来た。

④確認

リーダーとして他の職員に伝達したことがきちんと理解してもらっているか確認すること、分担して行う仕事を既にしてくれていると勝手に思い込まず、その都度終わっているか確認すること、不安なことがあれば勝手に判断せずに確認することなどが大事であると感じた。例えば、引き継ぎ表に書けば確実に保護者へ伝達してくれていると思っても、時には忘れてしまう場合もあり、そのときにこちらから確認することで、もし忘れてしまっていることがあった時にも翌日の朝すぐに保護者の方へ聞くことが出来た。

5) 見えてきた課題



結論としては、これら3つの課題をつなげていくことを目標としていきたい。

また、今年度は2年目ということで、更に保護者からの意見や要望なども増えてくると思うが、様々な意見に素直に耳を傾けながらその都度、職員全体で共有し、話し合い、園の考えを伝え対応していくことが、保護者と良好な関係を築けるのではないかと強く感じた。これからも子どもの主体性を大切にし、子ども一人ひとりを丁寧にみる保育をしていきたい。

保育における標準化とその手立てについて

～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～

石川県・大徳保育園 浅香 聡彦

問題提起と目的

保育委員会では、『選ばれる保育になるために』というテーマを設定し、研究活動を始めました。話し合いの中で、選ばれるためには保育の質が重要でその質を上げることが選ばれる保育になるということであると考えました。しかしながら、保育の質を議論する上で、その質をはかる基準がないことに気付きました。選ぶ側としては何を基準に選ばよいか。どこを見てよい保育とそうではない保育の評価をするのか。また、同じ園の中でも、保育の経験年数や性格・気質、正規臨時パート派遣といった雇用形態によって上手下手の差が大きくてもよくありません。そのため、少なくとも各園での標準化が必要と考えました。

基準や標準というと、保育園においてはマニュアルや手順書ということを思いつきます。例えば、入園の手引きや危機管理・災害発生時の対応マニュアルに関するものが挙げられます。これはどの園にもあります。しかし保育内容に関してのものがあるという話はほとんど聞きません。

これに対して、介護業界では体位変換の仕方やおむつの交換の仕方の手順が決まっていますし、看護業界でも同様です。しかしながら保育業界では確立されておらず、養成校でも系統だてて教えることはありません。そこで、現在すでに実施している自園での0歳児のおむつ交換の事例から、保育内容に関してのマニュアルの必要性とその効果並びに標準化することの意義を明らかにしたいと思います。

※下線各園の標準化とは、同じ園の職員が誰でも最低限することが決まっています、その意味が分かり誰でもできることと定義しました。

大徳保育園の概要

設置主体 社会福祉法人 大徳福祉会
設立年月 昭和53年4月
所在地 石川県金沢市畝田中1-97
定員 150名
園児数 0歳児 18名 1歳児 21名 2歳児 36名
3歳児 29名 4歳児 35名 5歳児 33名
合計172名
職員数 園長1名 主任保育士1名 副主任保育士1名
保育士30名（うち臨時・パート8名） 栄養士4名

調理員（パート）1名 事務員1名

（平成26年10月現在在籍）

標準化への変遷

0歳児のおむつ交換に焦点を絞って、標準化前と現在までを振り返ってみたいと思います。

14年前より、園全体で子どもが主体であるとの考えのもと、0歳から丁寧な保育、一人ひとりを大切にしたい保育を行いたいと職員達と話し合いをし、排泄と食事の介助については特定の大人（担当）が行うことにしました。当時は、流れ作業のように手が空いている者が順番におむつを替えていくのが当たり前でした。

はじめ

排泄は、排泄時間を記録するチェック表を基に、担当が排尿感覚をつかみながら子どもをおむつ交換台に連れて行き1：1でおむつを替えることにしました。

0歳児の配置基準は3：1のため、他の保育士の負担を考え、速くおむつを交換し元の遊ぶ場所に戻ろうとしていました。そこでは、速く行うことが重視されていました。いつも担当の保育士がおむつを換えますが、子どもにとっては、あつという間に替えられてしまうので、落ち着かない時間でもあり、同時に、丁寧とはいえませんでした。

また、おむつの替え方は個々に任されていました。新人保育士や初めて0歳児を担当する者は先輩保育士からやり方は教わるのですが、人によって言うことが違うため、混乱し、結局自分のやりやすい仕方でした。

この時は、大人が中心で、大人のためのおむつ交換でした。子どもは終始、受け身でした。また、担当でない者の時は、子どもが嫌がっていました。恐らく、どうされるか分からず、交換の仕方にも上手下手があったのではないかと考えられます。

おむつ交換マニュアルの導入

保育士から大人のためではなく、子どものためのおむつ交換にしたいと意見があり、助言を求められました。子どもが主体であるためには、これから何をするか、先を見通せることが大事で、そのため交換する際の手順を決めてはどうかと提案し、ベテラン保育士が試験的にマニュアルを作ることになりました。それをたたき台にし、0歳児の保育士間で話し合いをし、最初のおむつ交換マニュアルができあがりました。

うまくいくかと思いましたが、まだまだ大まかなもので、例えば「子どもの足を上げる」との文言には、右からなのか左からなのかの記載がないため、人によってやり方が違っていました。子どもが主体、子どもと一緒にするというより、やはり大人が中心で換えてあげている状況でした。

マニュアルの改善 誰のために、何のために

0歳児保育士間でマニュアルの中身を精査するうちに、全員でもう少し詳細まで決めたほうがよいということになりました。例えば、子どもをおむつ交換台に寝かせた後は、右足からズボン脱がせ次に左足と手順を決めました。すると、子どもが見通しを持って次第に子ども自らが足を上げるといった協力をしてくれるようになりました。子どもが嫌がることは減りましたが、ここでは、時間が来れば交換する作業のようなものでした。また、新人保育士は理由も分からず決まっていることなのでその通り行うといった様子でした。

大人の作業に、子どもが少し協力するとはいっても、やはり大人中心でした。また、なぜこの手順なのか理由がありませんでした。

そこで、0歳児保育士間で話し合いをしました。子どもにとって、おむつ交換が心地良いもの、楽しい時間であってほしいため、笑顔で行ってはどうか。大人も楽しいひと時にしたい、という意見が出ました。一部の保育士が交換時に、子どもをくすぐったり、歌をうたって楽しい時間にしようとしていました。これはマニュアルにないものでした。

0歳児の保育士達と、おむつ交換とはどうあるべきか。その目的は何なのか。なぜこの手順なのか。その理由について考えてみました。そこで得られた結論は、以下のものでした。

目的：子どものための、子どもが主体となるおむつ交換。

手順：いつも同じ人が同じ手順でする意味

- ①子どもが安心・安定する。
- ②子どもが先を見通して協力してくれる。
- ③することが変わらないので、大人が迷わない。そのため、ムリ・ムラ・ムダがなくなる。

マニュアルの確立

目的と手順の意味について理解することにより、0歳児保育士におむつの替え方の手順の違いはなくなりました。(現在使っているマニュアルの原型ができました。)しかし、子どもへの言葉のかけ方は個々で違っていました。

- i 「おむつ外すよ」 ii 「おむつ外すね」 iii 「くさいの替えようね」
- i 「右足上げて」 ii 「右足上げてくれる？」 iii 「右足からね」

些細なことと考えるか、どこまで統一するか議論になりましたが、結果的には、行為の主体は子ども、言葉のかけ方は優しく心地よい呼びかけ、言葉の内容は具体的に、ということでもとまりました。上記の例では、いずれも ii が採用されました。

そしてこれ以降、大人が迷わないで、疑問があったときすぐに確認できるように、個々にマニュアルを所有することにしました。

保育士の休日のため、毎回必ず担当ができるわけではありませんが、クラスの他の保育士が子どものおむつ交換をする際に嫌がることはほとんどなくなり、子どもが安定していたため、保育士も安心しておむつ交換をすることができるようになりました。

同時期に遠野のわらべうたに出会いました。そこには人を育てるために代々受け継がれてきた教えがあり、あそびにはもちろん、おむつを替えるときにも唄うことを知り、自園でも取り入れてはどうかと保育士から意見が出ました。

しかしながら、全員がわらべうたの仕方と意味を分かっていないといけないため、ひとまず保留としました。

わらべうたの導入

職員全員がわらべうたの研修を受け、人が生きていく上で大切なこと、生きる知恵を伝えていることを知り、おむつ交換にぜひ取り入れたいとなり、マニュアルに取り入れることにしました。おむつを外した時には、両手で3度顔を覆う仕草をしながら「ちよつちよつちよつ」と言葉をかけ、お尻が丸出しになっていることは、恥ずかしいことであることを伝えたり、おむつが濡れていることを鼻をつまんで「くせくせくせ」と言葉をかけ、臭いことは気持ちが悪いことだと伝えたりしました。

保育士がおむつを交換しようと誘うと、嫌がることはなく、喜んで行きたがるようになりました。子どもにとって、おむつ交換は気持ちがよいものとなり、また保育士との1対1の時間を楽しめるようになったのではないかと思います。子どもの楽しそうな姿を見て、保育士自身も以前より楽しくなっていました。所要時間も3分位だったものが、5分と長くなり、子どもの状況によっては(特に不安定になっている子には)コミュニケーションを長くとり10分位かけることもありました。保育士間でそれが当たり前のこととなり、おむつ交換に向かう子がいると、ゆっくりいってらっしゃいという雰囲気ができあがっていました。大人の作業から子どもの協力なしには成立しない子どもと大人の共同行為に変わっていました。

保育士の言葉かけの変化へ

言葉のかけ方やわらべうたもみんなが同じようにできるようになり、自園ではおむつ交換が完成されたものに

なったと誰もが思っていました。しかしながら、子どもが上手く足を上げたりした時には、マニュアルには書いていなかったのですが、保育士は自然に「上手だね」「素敵だね」という言葉をかけていました。しかし、ある保育士から、この言葉は評価の言葉で上下の関係になるため、他の言葉を使ったほうがよいのではという意見が挙がりました。対人関係の心理学であるアドラー心理学を参考にし、「ありがとう」の言葉を使ってはどうかという意見でした。それは、大人と子どもであってもタテの関係ではなくヨコの関係を作ったほうが相互理解・相互信頼が高まり、将来的にもよりよい人間関係を築いていけるのではないかということでした。この保育士には、大人の行為に協力してくれた時に貢献感（人のために役にたっていると感じる）を持つことは、将来自分のためではなく、世のために何かをすることを好み、他の人と協力しよりよい世の中を作っていくことにつながるため、その芽を育てたいという思いがありました。言葉の選択は難しく、これは現在検討中です。

新人保育士と移籍保育士の変化

マニュアルが確立されたため、マニュアルについて保育士達に同じ質問をすると同じ答えが返ってくるようになりました。新人保育士だろうが他園から移籍した者だろうが初めて0歳児を担当する者だろうが、おむつ交換をする際に迷うことはなくなりました。子どもとの信頼関係ができれば、誰であっても、子どもと楽しみながらおむつ交換が可能になるため、お互い安定するようになりました。

看護と保育の違い

看護の業界には小児看護技術があり、おむつの交換の仕方があります。仕事柄そこには清潔に手早くするための手順となっています。しかしながら、保育では養護と教育が行われているわけで、清潔はもちろん自園のように教育的要素が入っていたり、子どもとのコミュニケーション・人間関係を重視したものがあってもよいと考えます。それは保育だからできる考え方です。

自園のこれから

初期の子どもの担当を決めることからマニュアル作り、その改定をするにあたり、判断の基準は子どもが主体であるかどうかでした。

これまで私は、管理職の立場で極力指示を出さないようにしてきました。それは、保育を運用し実践するのは、現場の保育士だからです。明らかに誤った行動になっていた時は、ビデオをとって意見を求めたり、考えてもらうこともありました。しかし決めるのは保育士達で、自分達で決めたからには実践することを求めました。子どもに求めるように、保育士にも主体的であることを求めた結果が現在にあると思います。マニュアルの改定を重

ね標準化のレベルも上がっていきました。

マニュアルというと、その通りにやらなければいけないもの、窮屈なものに感じられます。また、その通りにやりさえすればよいものとも思われがちです。しかし、マニュアルは1度作れば終わりではありません。不具合が出てきたり、もっとよい考え方や方法が見つかるかもしれない。その際、保育士が子どものために、最低限の質の保障をした上で、さらに質を向上させたいと考えるならば、自ずから改定され、さらなる標準化が図られると考えます。また、標準化を基にすれば、保育士各々の保育観で他者を批評するのではなく、さらなる質の高さを求めることになります。

今後の課題 各園の標準化から保育業界の標準化へ




保育園各園によって、保育内容への考え方に違いはあると思います。ただ、運用は各園に任されているとしても、保育所保育指針が基準となっているので、各園で自園のように標準化がはかられ、その標準化されたものを持ち寄り、そこにある原理を抽出できれば、保育業界の標準化が可能になると思います。そうなれば、保護者が園を選ぶ際の評価基準の1つになり、保育の質が担保される可能性が高まります。そして、保護者に理解されるようになれば、家庭でも実践される可能性が出てきます。今後、保育委員会の委員たちと引き続き、保育の標準化の研究を進めていきたいと思っています。





※テーマが保育の標準化についてであるため、わらべうたの意味や効用についてアドラー心理学の目的については省略しました。





※自園の0歳児のおむつ交換を事例に挙げましたが、1歳児2歳児にもマニュアルがあり、標準化されています。これを基に、担任が変わる場合、持ち上げる場合にも保育士相互で子どもの状況と合わせて確認を行っています。





おむつ交換①「歩行の安定しない子の交換」




大徳保育園マニュアル

環境	<p>排泄は他人の前でできるものではありません。“恥ずかしい”という気持ちは、人として、とても大切なことです。大徳保育園ではこのことを大切に考え、おむつ交換の場所を生活空間の中でも少し切り離して、子どもと保育士の対一の特別な時間と関係の中でゆったりと交換してもらえ環境を作っています。他の子どもから見えない場所に交換台を設置し、そこに行けばおむつを交換してもらえると、子ども自身が理解できるようになります。</p>		
教育	<p>大人からいつも同じ手順で丁寧に交換してもらうことで、子どもは大人に信頼感を寄せ、安心感を持って、心地よさを感じながら、適切な生活習慣や生活リズムを身につけていきます。</p> <p>大人の優しいことばがけやわらべうたは、相手の話を聞こうとする意欲や態度、豊かな感性を育て、その働きかけに応えようとする、“表現する力”を養います。</p> <p>また、応答的なコミュニケーションをとりながらのオムツ交換は、人と人との支え合って生活するための自立心、人とかかわる力を育てます。</p>		
準備	<p>新しいおむつ・おむつシート 酸性水・交換台を拭くタオル (便の時にその他の必要なもの)・おしり拭き・手袋・ナイロン袋・交換用エプロン ……すべて、保育士が扱う。</p>		
1		<p>「おむつ換えてこようか」と声を掛けて誘う。 声掛け … (以下太字で記入) 「おむつ換えてこようね。」</p>	<p>子どもが見通しを持てるように、これからする行為を伝えます。子どもが、交換したい気持ちになっているか、意思を確認します。</p>
2		<p>おむつ交換台まで、進行方向に体を向かせて抱く。</p>	<p>今からどこに行くのか、次になにがあるのか、視覚で認識できるようにします。子どもの気持ちがおむつ交換に向かいます。</p>
3		<p>交換台におむつシートを敷く。「ねんね」と言い、手のひらで子どもの後頭部を固定して、お尻から下ろし寝かせる。 「ねんね」</p>	<p>交換台は共同で使用するの、個別のおむつシートを利用します。体と心が不安定にならないように頭を固定します。お尻から下ろすことで安心します。</p>

4		<p>「れえろれえろれえろ」とわらべうたを唄いかけ、こどもと目を合わせる。</p> <p>「れえろれえろれえろ」</p>	<p>口であそぶわらべうたで、子どもに注目してもらいます。寝転がって少し不安な気持ちから、楽しい気持ちに変わっていきます。</p>
5		<p>「くせくせくせ」と鼻をつまんで声を掛け、おむつが濡れていることを伝える。</p> <p>「くせくせくせ」 「気持ちが悪いね。」</p>	<p>「くせくせくせ」とわらべうたを唄いかけることで、臭いことは気持ちの悪いことなのだと、子どもに意識させるようにします。</p>
(6 ※便の場合は、保育士用のおむつ交換用エプロンと手袋を身に着ける。)			
7		<p>右足からズボンを脱がせ、おむつを外す。</p> <p>「ズボン脱ぐね。」 「右足上げてくれる？」 「ありがとう。」 「左足上げてくれる？」 「ありがとう。」</p>	<p>「右足あげてね」「左足あげてね」と声を掛けられながらの、いつも同じ手順は子どもに安心感を与えます。自分で右足からあげて、育児に主体的に協力するようになります。きき足が左足の子であれば、左足から行います。「ボタン外すね」「おむつ外すね」などこれから行うことを丁寧にことばで伝え、子どもが見通しを持てるようにしてあげます</p>
8		<p>お尻を持ち上げ、汚れたおむつを外す。</p> <p>「おむつ外すね。」 「お尻上げてくれる？」 「ありがとう。」</p>	<p>子どもは自ら足を持ったり、お尻を上げたりして、育児に協力するようになります。子どもの足を縛り付けるように持つなどの保育士主導の育児は避けま す。子どもが協力してくれた時は「ありがとう」と声を掛けて、<u>貢献感</u>を持たせていきます。 ※貢献感…人のために役に立っていると子ども自身が感じられるようにすることは、子育てをしていく上でとても大切なことです。</p>

9		<p>酸性水で手を消毒する。</p> <p>「私の手をきれいにするね。」 「待っていてね。」 「待っていてくれてありがとう。」</p>	<p>酸性水の入ったスプレーを、手に吹きかけて消毒します。</p>
10		<p>「よっこよっこよっこ」「のびのびのび」とわらべうたを唄いかけながら、足（膝辺り）を摩る。</p> <p>気持ちよく、綺麗になったことを伝える。</p> <p>「よっこよっこよっこ」「のびのびのび」</p>	<p>「よっこよっこよっこ」「のびのびのび」と足を摩ると、子どもは縮めていた足をピンと伸ばして気持ちよさそうにします。こうすることで、おむつを取られて、緊張した子どもの気持ちをほぐしてあげることができます。また、こうして遊んでいるうちに、湿ったお尻を風に当てて乾かすこともできます。</p>
11		<p>「ちよつちよつちよつ」とわらべうたを唄いかけ、恥ずかしさを感じさせる。</p> <p>「ちよつちよつちよつ」「恥ずかしいね。」</p>	<p>両手で顔を覆うような仕草をし、三度顔をそっと叩いて、「ちよつちよつちよつ」とわらべうたを唄いかけます。笑止（しよし）がなまったことばで“恥ずかしい”ということの意味します。“おむつを外したままで、お尻を出しているままだと恥ずかしいね”という気持ちを、ことばで伝えます。</p>
12		<p>新しいおむつに交換する。</p> <p>「きれいなおむつに換えるね。」 「お尻上げてくれる？」 「ありがとう。」</p>	<p>足を持って引っ張り上げるのではなく、お尻を持ち上げます。「きれいなおむつするね。」と言っただけで、足を持ったり、お尻を上げてくれるようになります。上げてくれた時は、「ありがとう」と声を掛け、貢献感を持たせていきます。</p>

13		<p>おむつのゴムが内側に入り込んでいないか確認する。</p> <p>「おむつ直すね。」 「これで大丈夫かな？」</p>	<p>ゴムが内側に入り込むと、子どもに不快感を与えます。また、衣服への漏れの原因にもなります。</p>
14		<p>右足からズボンを穿かせる。</p> <p>「ズボン穿こうね。」 「右足上げてくれる？」 「ありがとう。」 「左足上げてくれる？」 「ありがとう。」 「気持ちよかったね。」 「すっきりしたね。」</p>	<p>「右足から穿くね」「次は左足ね」と声を掛けられながらの、いつも同じ手順は子どもに安心感を与えます。自分で右足からあげて、育児に主体的に協力するようになります。きき足が左足の子であれば、左足から行います。全部の交換が終わったら、「気持ちよかったね。」「すっきりしたね。」と、心地よさを伝えます。</p>
15		<p>「こちょこちょこちょ」をして、身体を縮める。</p> <p>「こちょこちょこちょ」 「くすぐったいね。」</p>	<p>「こちょこちょこちょ」と言いながら、子どもの脇を2、3度くすぐります。ケタケタと笑ったら、上機嫌で心も体も健康だと分かります。また、「こちょこちょこちょ」をすることによって、おむつを換えてゆったりした気持ちと体を縮めることにもなります。これを続けることによって体が締まってきます。</p>
16	<p>保育士用のエプロンを外しておむつを捨てる。</p>	<p>「エプロン外すね。」 「待っていてね。」 「待っていてくれてありがとう。」</p>	
17		<p>酸性水で手を消毒する。</p> <p>「手をきれいにするね。」 「待っていてね。」 「待っていてくれてありがとう。」</p>	<p>汚れたおむつを触った後なので、手をもう一度消毒します。子どもにその行為を見せながら、待っててもらいます。</p>

18		<p>子どもが保育士の親指を握れるように誘導する。</p> <p>「起き上がるよ。」 「掴まれるかな？」 「ありがとう。」 「上手だね。」</p>	<p>子どもが保育士の親指を掴みやすい位置に手を置き、誘導します。</p>
19		<p>保育士の親指を握らせて、子どもの手首を握ってゆっくり引き起こし、自分の腹筋を使って起き上がるようにする。</p>	<p>子どもが腹筋を使っていることを意識しながら、ゆっくりと引き起こし、子ども自身が自分で起き上がるコツを体得できるようにします。(首がすわっていない子は、頭を支えながらゆっくりと上体を起こします)</p>
20		<p>子どもを抱き、交換シートをたたみ、交換台と(エプロン)を酸性水で消毒し、消毒用タオルで拭く。(消毒用タオルは午後に新しいものに交換する。)</p> <p>「きれいにするね。」</p>	<p>共同の交換台なので、清潔に保たれるように配慮します。</p>
21	<p>排泄チェック表を記入する。</p>	<p>時間、状態を指定の用紙に記入する。</p>	<p>※別紙参照。 子ども一人一人の排泄リズムは違います。一人一人の排泄の間隔、状況を把握しておむつ交換に誘い、排泄の自立を助けます。</p>
22	<p>手洗いをする。(便の時)</p>	<p>子どもを遊びに誘った後に、石鹼を使って手を洗う。</p>	<p>感染症予防のため、石鹼を使って流水で手を洗います。</p>

お箸の正しい使い方 ～手先を使ったあそび、機能との関連性～

鹿児島県・建昌こぎく保育園 大森 千代美

【はじめに】

当保育園は、鹿児島県の中央部に位置する始良市にある。人口約7万5千人で、鹿児島市に隣接しておりベッドタウンとして都市化が進む町であるが、きらめく海・緑豊かな山々に囲まれた自然豊かな環境の中で、日々の保育を行っている。

建昌福祉会は、高齢者・障がい者・児童・保育において事業を行っており、当保育園は、3つ目の保育園として新設され、定員50名（園長1名、主任保育士1名、保育士15名、栄養士1名、調理員3名、事務員1名、計22名の職員構成）で平成25年度4月に開園した。

近年、健康づくりの観点から、「食育」ということが盛んに謳われ、そのことから、保育所における食育の重要性が高まり、様々な形で計画・実践されている。保育所保育指針においても、「保育所における「食育」は食を営む力の基盤を養うことを目標として実施される。」と示されている。「食育」の実施にあたっては、栄養士や保育士が連携を持ち、その有する専門性を生かしながら、園全体で共に進めることが重要である。そして、保育所での食育の計画は保育指針に示されるように、保育や指導の計画の中をしっかり位置づけられることが必要とされている。

開園したばかりで、すべてのことが初めてであり、保護者との連携もなかなか図りにくく、子どもたちの発達過程においても、家庭での状態を把握しにくかった。そこでまずは保育園で取り組めることを話し合い、実施していくことにした。核家族化により家庭以外の環境を経験したことのない子、初めての集団生活を体験する子どもが多かった。そのため、園生活を送る中で、基本的な生活習慣（排泄・睡眠・食事・着衣）が、子ども一人一人にそれぞれのリズムやタイミング、癖などがある事、また、おおよその発達に比べて身につけていない部分が多い事が気になった。その中でも食事のマナーの習得率（各年齢、発達に見合った）の低さが特に目立った。

保育園の中で見受けられる食事の子どもたちの様子をよく観察してみると、食事の椅子の座り方や姿勢が悪い。それらを正しても食べこぼしが多い。新しい環境に慣れ、食欲が出てきたが食事時間がかかる。お皿やお椀を持たず顔を近づけてたり肘をついて食べる。足を椅子に上げて食べる。お箸でうまく掴めずに、最終的に手を使って食べている。なかなか食事が進まないなどの問題点が数多くみられた。

その中でも特に、お箸の正しい使い方やお箸が使えな

い子が多く目に付いた。お箸の正しい使い方を身に付けられるようにしていく事を、研究の目的とした。

（対象児は3歳児17名、4歳児15名、5歳児6名）

年齢にもよるが、個々の発達状況においてもお箸の持ち方・使い方に差が見られた。そこで、どの段階でつまずきが見られるのかを把握し、とくに3歳から6歳は感覚教育に適した時期であることから、段階に応じた手立てを考えていくことにした。

【研究の目的】

マナーを守り、楽しく食事をする為に、食事面での問題点を改善する。

子ども達の問題点として一番身につけていなかったお箸の持ち方について、取り組んでいく事にした。

＜お箸を使うことで得られるであろう効果＞

- ・お箸を正しく上手に使うことで、手先・指先が器用になる。
- ・手先・指先の繊細な運動による、神経の発達、脳へ刺激により、脳の発達を促す。

お箸の使い方ひとつを教えることで、幼児期の子どもに必要とされる、模倣からの学びにつながったり、考える力を育てる事ができる。

最近では、多くの学校でも「お箸使い」を、学習の中で位置づけることで、

1. 落ち着きがでてきた。
2. 集中力がついた。
3. 手先が器用になった。
4. 性格が明るくなった。

などの多くの事例があがっているようだ。

- 1) お箸は、毎日の食事には欠かせないものである。「つかむ」「はさむ」「はがす」「さく」「切る」「すくう」「まぜる」など、たくさんの機能を持っている。お箸を使うことは、手や指の発達や、手先の器用さを促し、脳への刺激にもつながると考える。

- 2) お箸が正しく持てるようになる為の、子どもの発育・発達には日常行われている保育の活動がなにより生かされること。

子どもたちが、無理なく楽しくお箸のマナーを身に付けられるように、保育生活の中で取り組める遊びを通して実践していく事にした。

【研究仮説】

日常の保育活動の中で、紙ひこうき遊び・粘土遊び・新聞紙遊び・豆つかみ・紐とおしなどの、遊びを取り入れることで、手先、指先の機能の向上につながり、子どもたちの、お箸の持ち方・使い方も、少しずつ改善されていくのではないかという仮説をたてた。

【研究方法】

①子どもの実態把握

- ・保護者との個人面談…4月に実施。保護者との面談を行い、その中から、家庭での食事の様子、お箸の使用状況などを聞き、家庭との共通意識が持てるようにした。
- ・チェックリストの作成・実施（Ⅰ期）…6月に作成し7月上旬に実施。
6つの項目のチェック項目に添って行い、子ども一人一人の把握をする。
- ・一人ひとりのお箸の持ち方や使い方を観察する。

②活動計画の話し合い…どのような遊びが手先・指先の発達につながるか、参考文献から引用し、内容を検討する。

③手先を使った遊びの活動を実施…紙飛行機・紐通し・豆つかみ・新聞紙あそび・粘土遊びなど

- *日常の保育活動の中で、指先・手先を使った遊びを積極的に取り入れ、子ども達に興味を持たせ、楽しく取り組めるようにする。遊びの段階で色々なものを

を準備し、子どもたちの状況を見ながら、年齢にとられず、個々の発達、どこにつまずきがあるのかを把握し、それに応じた活動を実施する。

④変化の把握（チェックリストⅡ期 実施・集計）
活動内容の成果の確認。Ⅰ期Ⅱ期を比較し、遊びの中で見えてきたものを把握する。

⑤考察・まとめ

【子どもの実態把握】 3歳児（17名）、4歳児（14名）
5歳児（6名）

様々な参考文献の中から、「体・手先の指導アラカルト」をもとにチェックリストを作成した。

《チェックリスト項目》

- ①スプーンを持って、上手にすくえない。
- ②スプーンや箸を使うのを、やめて手づかみになる。
- ③上手に食べ物をつかめない。
- ④クロス箸になる。
- ⑤にぎり箸になる。
- ⑥食べながら箸を落とす。

6つの項目で、子どもたちのお箸の持ち方、使い方を実態把握する。

チェックリストを使い、一人ひとりのお箸の持ち方や使い方の特徴を知る。

その中でも、特に多く見られた特徴を次に示した。写真1～4の通りである。



写真1 握り箸

5本の指すべてで2本のお箸を握り、握り方を緩めたり、強めたりすることで、食べ物を掴み取るものであり、また、お箸を使う前のフォークの持ち方と同じ持ち方である。



写真2 中指が上箸の上

中指が上箸の上であり、中指がお箸の上にあることで、上箸を押さえるため、上箸と下箸が開かない場合が多い。



写真3 中指が下箸の下

中指がお箸の下であり、2本のお箸の先がつきにくい。えんぴつの持ち方に似ている。



写真4 クロス箸

お箸の交錯が生じる頻度が高い。
人差し指が強く押されると、下箸が前に出る。

【年齢別に見えてきた問題点】

3 歳児…保護者との個人面談から、お箸を使っている子が少なかった。

お箸を握ったり、動かしたりする力が弱い。

指を動かすことが難しいようだった。

4 歳児…お箸を正しく持てず、うまく動かせない。指先の不器用さが目立っていた。

正しいお箸の持ち方を頭の中では分かっているが、指の動きは思うようにいかないようだった。

5 歳児…お箸を正しく持てない、指先の機能の発達において、大きな問題はみられなかったが、持ち方にはそれぞれの癖がでていた。

初めは正しく持っていたとしても、お箸がうまく動かせず、元の持ち方に戻る子もみられた。

* 5 歳児においては、チェックリストの項目が1つしか対象にならなかったため、お箸の持ち方に重点を置いて、新たなチェックリストを作成した。

チェックリスト I 期集計後、お箸の事だけでなく、手先・指先の動きに関連する遊びや、ハサミを使ったり貼り絵などの細かい作業、ボタン掛けなどにおいても園生活の中で問題点がみられた。

※ポイント（体・手先のアラカルト より）

①指先の動きには、『握り』と『つまみ』がある。

例：『握り』・・・ペットボトルをもつ・蛇口をひねる・歯磨き粉をもつ・鉄棒を握る

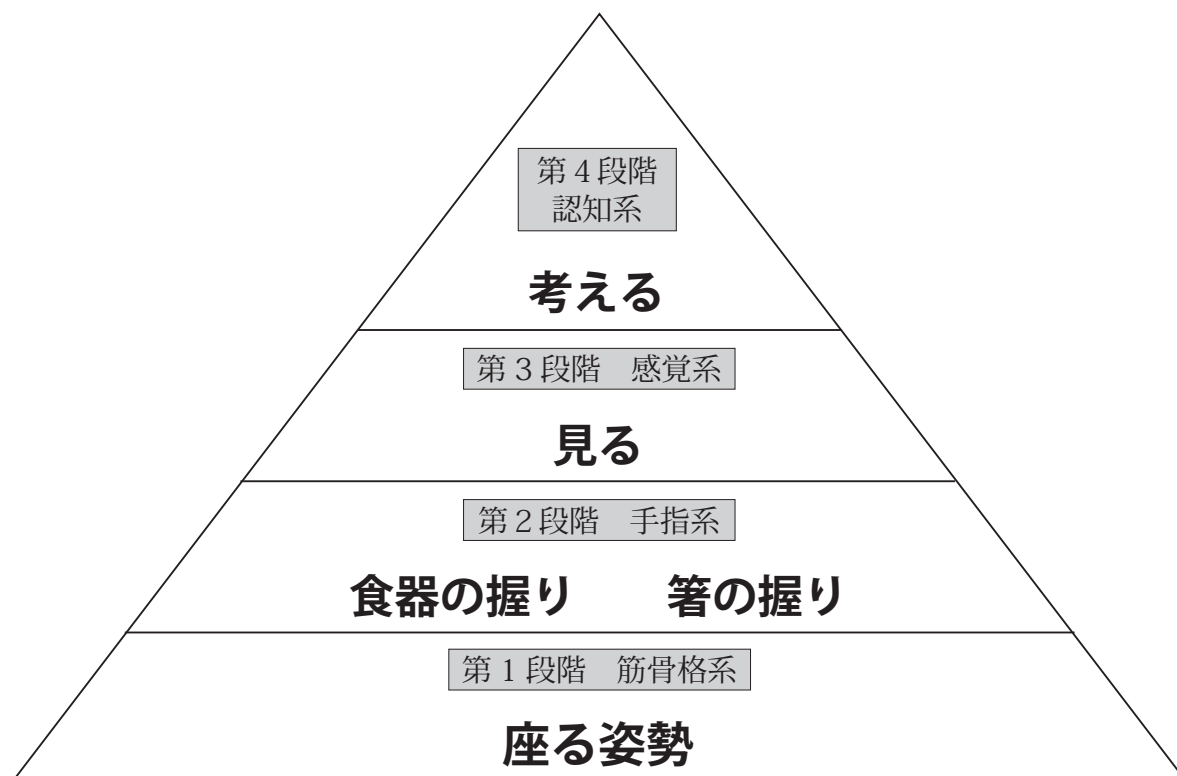
『つまみ』・・・ファスナーを引く・くつ下をはく・ティッシュをとる・ボタンをかける

②手首を上手に使う。

③深部感覚（力加減など）、感覚や視覚などの感覚も使う。

⇒指先の動きには、『握り』と『つまみ』があるが、どちらにも手首の動きが重要になる。また筋肉だけでなく、感覚や視覚などの感覚系も使わないと、上手に指先を使えない。

【指先のピラミッド構造】



それらをふまえて、次のような手先を使った遊びを活動に取り入れた。

【手先・指先を使ったあそび実践】

①持ち方を正しくする

- 紙飛行機あそび…紙飛行機を折ることで指先を使う。

<図1>

箸を持つように、3本の指で紙飛行機を持って飛ばす。

的をねらい紙飛行機を飛ばす。

- 線あそび……………お箸と、えんぴつの持ち方には共通点があり、お箸を持つには指の力や指の動きが必要なので、お箸を持つ練習を始める前に、えんぴつを持ち、力を入れて線を引く遊びを行う。
- ぬり絵あそび……………正しいえんぴつの持ち方で、いろいろな形を力強く塗る。



<図1>

②指先の力を育てる

- 新聞あそび……………指先ではさんでやぶる、ちぎる、片手の指先だけで丸める。手のひら全体で丸める、包む。
- 切り紙あそび……………ハサミを使い直線切り、個々のレベルに応じてジグザグ、色んな形状、固さのあるものを切る。
- ちぎり絵あそび……………おりがみ、千代紙、広告紙など好きな大きさにちぎり、ちぎった紙にノリを付けて絵を完成する。<図2>
- 粘土あそび……………手、全体を使って丸めることから始まり、指先を使ってちぎる、丸める、造形まで。<図3>
- 指あそび……………指ずもう・手遊びうた（子どもの興味のある曲に合わせた手遊びうた）紙引っ張りゲーム



<図2>

<図3>

③手先の動きを高めるあそび

- 紐とおし……………ストロー・ビーズ、大小の穴が開いたものや、ストローの長さも工し、紐の種類も毛糸、レース紐・モールなどの固い物も準備する。

*初めのうちは、柔らかい素材には通しにくい様子が見られたので、モールなどの固い素材に通してみる事から始めた。<図4>



<図4>

- 豆つかみ……………お箸をあまり上手に使えないことから、まずは、指先で直接豆を掴んで空の皿に移す。次にアルミ豆を準備し、お箸で掴むことができるようになったら、大豆に移行していく、うまく掴めるようになったら時間を決めて何個つかめるか等の、ゲームなど行う。<図5>

たくさん豆を運ぶゲームではなく、正しい持ち方で豆を「つまむ」そして「運ぶ」ということを子どもたちに伝える。

- 毛糸あそび……………あやとり遊び。指先を使って、器用に動かす。



<図5>

このように、遊びの中に取り入れることで、子どもたちからは、「やった!」「できた!」「楽しい!」などの声も聞かれた。紙ひこうきを飛ばすときの持ち方と、お箸の持ち方の、手の形が同じだということに、子どもたちも遊びを通して気づき、給食を食べる時も、持ち方を意識するようになり、子どもたちのお箸の持ち方への関心・意欲も高まってきた。

【変化の把握】

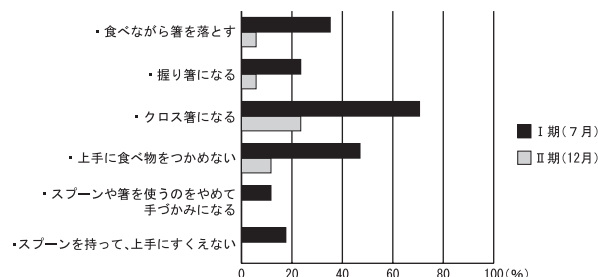
チェックリストⅠ期、Ⅱ期をグラフに表した。

≪3歳児≫

(*対象者17名。できない子の人数を記入)

チェック項目	Ⅰ期	Ⅱ期
①プーンを持って、上手にすくえない。	3人	0人
②スプーンや箸を使うのを、やめて手づかみになる。	2人	0人
③上手に食べ物をつかめない。	8人	2人
④クロス箸になる。	12人	4人
⑤にぎり箸になる。	4人	1人
⑥食べながら箸を落とす。	6人	1人

変化の把握 (3歳児 17名)

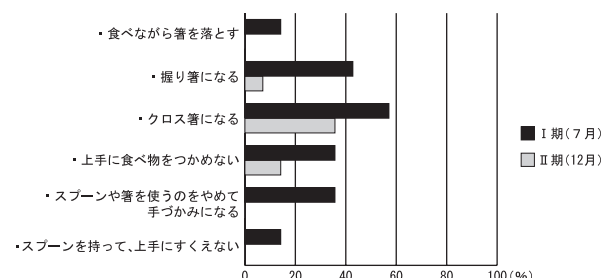


≪4歳児≫

(*対象者14名。できない子の人数を記入)

チェック項目	Ⅰ期	Ⅱ期
①スプーンを持って、上手にすくえない。	2人	0人
②スプーンや箸を使うのを、やめて手づかみになる。	5人	0人
③上手に食べ物をつかめない。	5人	2人
④クロス箸になる。	8人	5人
⑤にぎり箸になる。	6人	1人
⑥食べながら箸を落とす。	2人	0人

変化の把握 (4歳児 14名)

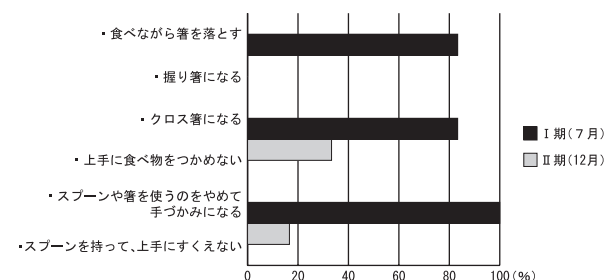


≪5歳児≫

(*対象者6名。できない子の人数を記入)

チェック項目	Ⅰ期	Ⅱ期
①紙ひこうきを3本の指で持てない。	6人	1人
②クロス箸になる。	5人	2人
③お箸を正しく持てない。	5人	0人

変化の把握 (5歳児 6名)



このチェックリスト結果からみてとれるように、3歳児は、ほとんどの項目で改善が見られた。特に実践開始前(Ⅰ期)には“できない”が、全体の半数近くを占めていた「クロス箸になる」、「上手に食べ物をつかめない」、「食べながら箸を落とす」などの項目で、実践開始後(Ⅱ期)では、その割合が大幅に減り、大きな変化が見られた。

チェック項目⑤に該当していた8人のアルミ豆つかみの例を見て見ると、Ⅰ期の平均は、30秒間で約0.4個だったのに対し、実践後のⅡ期では個人差もあったが、ほぼ0だった子ども達が1個～3個つかめるようになり、平均2個となった。

紐通しにおいては、とおし紐やビーズを手全体で握っていたが、少しずつ親指や人差し指を主とした指先を使

って行こうようになった。

このような結果から、お箸を持ったり動かしたりする力が弱いなどの問題点があったが、指先を使った遊びを行うことにより、それらの問題点が改善され、遊びが上手になるとともに、お箸を落とすことが減り、食べ物を上手につかめるようになってきたと考えられる。

4歳児においては、発達障がいなどの問題がある子ども数名おり、Ⅰ期では、にぎり箸になったり、お箸が使えない子どももいた。しかし、遊びの中に指先の動きや力を高める遊びを取り入れて日々過ごす中で、Ⅱ期では、全員お箸を使えるようになった。クロス箸などの箸の動かし方に問題点はあるが、3本の指でしっかりと紙飛行機を

持ち、飛ばせるようになるにつれ、お箸の持ち方は大きく改善してきた。特に箸を使っていた期間が短い、あるいは初めての子に関して、変な癖がついていないだけに箸の持ち方に関しては比較的早く身についたようだった。

発達に問題がある子には、指先の力を高める遊びをしながら同時に手先の動きを高めていく遊びも取り入れた。しかし、紐通しにおいては難しさがあり、苦手意識を持ってしまった。そこで、乳児の玩具によくみられるビーズコースターのように固定された部分を移動させることから始めた。すると関心を持ち、指先を動かして遊ぶ姿が見られた。

5歳児は、お箸を使い食事はできていたが、I期のグラフからみてとれるように、全員がすべての指で握り、3本の指で紙ひこうきを持っていないことが、保育者にとっても予想外の結果だった。(現代のあそびが関係しているのでは) お箸を正しく持てず、クロス箸になるなど、独自の持ち方で食べていた。

持ち方を改善する為に、紙飛行機あそびを実践した。持ち方を正し、しっかりと持てるようになると手先に無駄な力が入らずに紙飛行機を飛ばせるようになった。的に当たる確率も高くなってきた。持ち方を正し、力の加減が出来るようになったことで箸の持ち方にも上達が見られた。

年齢別におけるこれらの変化から、お箸の持ち方・使い方の背景には、経験不足もあるが、手先の未発達さが大きく関係していると考えられる。また、手先の不器用さだけでなく、お箸を使うことにも集中力や落ち着きがない、不安感が大きいなどの心身の発育・発達も関係していたように感じられた。子どもの発達の状態や、つまづきを把握し取り組むことが、大切だと感じた。

【まとめ】

お箸の持ち方ひとつを取っても、一人ひとりに様々な背景があり、日常の保育に関しても一人ひとりよく観察し、その子に合った支援をしていくことの大切さを改めて感じた。

中には、なかなか成果が現れず、途中で停滞する子どもいたが、子どもたち一人ひとりの進み具合を把握し、わずかな変化も見逃さず、子どもたちを誉めながら意欲を高めていく事が必要だと思う。

保育士は、正しいお箸の持ち方を押し付けたり矯正するのではなく、楽しくお箸の持ち方が身につくように保育(遊び)の内容を、いろいろと工夫してきた。勿論、お箸を正しく持ち、使えるようになることが最終目標ではあるが、同時に成長過程にある子どもたちの、心身の発達も大切にすることを考えて進めていくように気を付けた。

今回実践で、手先を使った遊びをたくさん取り入れる

ことで、お箸の持ち方・使い方が改善されてきただけでなく、以前はお箸の持ち方・使い方が出来ていない子に対して「持ち方が違うよ。」「ちゃんと持ってね。」などと、声かけをしてしまうことが多かったりして、せっかくの楽しい雰囲気が壊れてしまっていた。しかし、遊びの中で行ってきた「飛行機の持ち方だよ。」と声かけをすることにより、子どもたちへ箸の持ち方についてのイメージが伝わりやすいことや、子どもだけでなく保育士自身も、しつけている感じを持たず、楽しく取り組むことができるようになった。このように子どもたちの姿だけでなく、保育士自身の考え方やアプローチの仕方を工夫することも、問題解決の大きな要因だと考えられる。

平成25年12月4日「和食」が、ユネスコの無形文化遺産に登録された。和食＝日本の文化。世界でも、和食が注目される中、お箸の正しい持ち方・使い方を伝えていく事は、マナーだけでなく、日本の歴史や文化とともに、受け継がれてきた大切なものを子どもたちに伝えていく事でもある。すてきな日本人になれるように、大切な食文化を伝えていかなければならないと思う。

【今後の課題】

実践の結果から、最初の取り組みの部分では、手先・指先を使って遊ぶ中で、自然と機能が向上し、指先の力がついてくることで、楽しくお箸の持ち方・使い方を身につける事ができた。しかし、ここに至るまでには、0～2歳児のころまでの「はいはい」などの粗大運動や、「つかむ・つまむ」という微細運動になっていくまでの育ちの関連性が重要だと感じた。また、独自の持ち方やそれぞれ癖が出てきてからの改善は難しくなるため、乳幼児期からの取り組みが重要だと考えられる。

今回実践に取り組む中で、お箸を使うには、まずは年齢や手の大きさに応じた、程よい長さのお箸選びも大切だと思った。これらを踏まえた上で、今後は家庭との連携を図り、保護者の協力のもと、共に進める事の必要性も感じている。

新たに気づいた課題についての取り組みを、それぞれの発達段階にあるクラスの職員間で連携を持ち更に家庭とのつながりを深めながら取り組んでいきたいと思う。

【参考文献】

体・手先の動き指導アラカルト
体の動き指導アラカルト 笹田 哲
いただきます・ごちそうさま NPO法人 キッズエクспレス21

カルタ遊びを通して育む思いやりの心を育む

沖縄県・愛心保育園 島袋 篤子

1. はじめに

当保育園は創立32年、保育指針の基本を各年齢別に正しく踏まえたうえで、当保育園の特色とする音体教育、習字教育、漢字遊び、英語で遊ぼうなど、乳幼児に必要な養護と教育をバランスよく取り入れながら美しくたくましい体、豊かな感性、優れた知能をもった子どもに育てています。そのような中で平成20年、日本保育協会沖縄県支部の研修会で、講師の塩川正人氏の研修を受講し、思いやりの心を育むことこそが保育の原点であるという職員の熱い思いと設立当初からの当法人の基本理念と合致していたこともあり、本格的に『思いやり保育』の実践を保育の柱としての取り組みをスタートさせました。そのような中、楽しく『思いやりの心』を取り組んでいくにはどのような方法があるのかを職員みんな

で話し合い考えたうえで、園独自で思いやりカルタを作ることになりました。まず平成21年度より保護者と保育士の二人三脚で思いやりカルタを作り、日常の保育の中でカルタ遊びを楽しみながら取り組んでいくことにしました。今回は保護者も巻き込んでカルタ遊びを通して思いやりの心がどのように育っているかを研究したことについて報告します。

2. 園の概要

設置主体 : 社会福祉法人 玉重福祉会
保育園名 : 愛心保育園
開園年度 : 昭和58年4月
所在地 : 沖縄県那覇市字上間384-15
園児数 : 定員80名 現員96名

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
定員	10名	15名	15名	15名	15名	10名
現員	12名	16名	18名	19名	19名	12名

職員構成 園長、副園長、事務長、主任、副主任、保育士14名（フリー、パート保育士含む）
調理員3名、学童指導員4名

3. ねらい

- ・カルタ遊びを通して『思いやりの心』を育む
- ・保護者と二人三脚で『思いやりの心』を育む

4. 研究方法

- ・遊びを通して楽しく学ぶにはどのような方法があるのか全職員で話し合い、研究テーマを考えたうえで、カルタ遊びを通して思いやりの心を育むことこそがベストと考え取り組むことにした。
- ・家庭での思いやりカルタの浸透具合、活用状況についてアンケート調査を実施する。
- ・意識することで習慣になるようチャレンジカードを作成し、家庭で実施する。
- ・思いやりチェック表に興味関心をもち、思いやりに対する意識を育んでいく。
- ・チャレンジカードを通して思いやりの心が育っているのか確認する。

5. 実践方法

☆実践①《カルタ遊び》

①フラッシュカード

- ・絵カードを見せながら保育士が読み札を読み、後から子ども達が続けて音読する。



②カルタ取りゲーム

- ・全員が平等に楽しめるように3枚取ったら休憩をする。
- ・少人数でグループに分かれて行う。
- ・拡大したカルタで体を使ってダイナミックに遊ぶ。
- ・逆パターンで読み札を取る。
- ・子ども達が交代で読み手となる。



- ・読み手が読み終わるまでカルタに手をつけないように手は頭の上ののせて置く



- ・1対1での対戦を楽しむ



・カルタを取った子どもが次は読み手になる

〈カルタ遊びの様子から〉

- ・競争心が弱くカルタを取れない子がいる（3歳児）
- ・理解できていない、即ち覚えていない子がいる（3歳児）
- ・文字に興味を示している（4歳児）
- ・読み札の頭文字を聞いて後の文章がすらすらと自然に出てくるようになった（各年齢共通）
- ・子ども同士読み手と取り手に分かれて遊ぶ姿が見られるようになり、年齢の低い子を誘って楽しそうに遊ぶ姿も見られるようになった（5歳児）
- ・4月～文字の読み方が片言だったが、カルタ遊びを通して興味が湧き文字や文章を覚え自信を持って表現豊かに読めるようになってきている（5歳児）
- ・平等にカルタが取れるよういろいろなルールを考えながら楽しませている（保育士の配慮）

☆実践②保護者へアンケート協力依頼（1回目）

※別紙資料①…アンケート依頼文書

「思いやり子育てカルタ」についての保護者アンケート結果報告

①6年前に全国に先駆けて当園が作製した愛心オリジナル『思いやり子育てカルタ』があることを知っているしやいますか。

- ・知っている……………92%
- ・知らない……………8%

*『知っている』と答えた方へ（複数回答可）

- ・思いやりカルタを持っている……………43%
- ・保育参観で知った……………51%
- ・カルタのことは子どもから聞いた……………9%

*『カルタを持っている』と答えた方へ（複数回答可）

- ・親子で一緒に遊んでいる……………67%
- ・兄弟（いとこ）と一緒に遊んでいる……………33%
- ・遊んだことがない……………13%

②保育園で思いやりカルタ遊びを取り入れています、お父さんはご家庭で思いやり子育てカルタの話をしてくれていますか。（梅、百合、桃組さんのみ）

- ・してくれる……………44%
- ・時々してくれる……………30%
- ・してくれない……………26%

③ご家庭では、思いやり行動が見られますか。

- ・見られる……………52%
- ・時々見られる……………42%

- ・見られない…………… 3 %
- ・無回答…………… 3 %

④思いやり保育についてのご意見、ご感想もどうぞお聞かせください。

- ・思いやりを育むという他の園では見られない愛心保育園の方針にとっても魅力を感じています。
- ・わが子の成長がとても楽しみです。
- ・0歳、1歳の子どもが頭をペコンと下げて『ありがとう』という仕草を見せたり、笑顔で表現する姿に親としての喜びを感じる。
- ・母親が怒ると『ケンカの後はおめんなさいで仲直り』とカルタの読み札を言ってくれるので、つい笑顔がこぼれます。
- ・何かあると子どもから大丈夫？と心配してくれます。

〈第1回アンケート結果から〉

- ・意外にも新入園児がカルタについて知っていた。
- ・カルタを覚えて日常会話の中でカルタを引用し話をしている子が多く見られる。
- ・思いやりの心がかなり育まれはじめている。
- ・人見知りやが激しい子も自然に『あいさつ』ができるようになってきている。
- ・家庭で自ら手伝うことが喜んでできるようになっている。
- ・素直に『ありがとう』と言えるようになってきている。
- ・思いやりカルタを使って遊んでいる家庭が思いのほか多く嬉しく思った。
- ・親の関心度を高める努力が必要であることを感じた。
- ・カルタで遊んでいるが、もっと深くつなげるように努めていく。
- ・園でのカルタ遊びが家庭でも会話の中でもっと活かされるようにして欲しい。

☆実践③チャレンジカード

※別紙資料②…思いやりチャレンジカード

カルタの読み札の中から各クラステーマを決めて1ヶ月ごとの表を作成しそれを連絡帳に貼って、保護者にチェックをしてもらう。

〈3歳児梅組〉 ☆1ヶ月(30日)として○印は15日以上、×印は14日以下

(カルタの読み札)

『ねるまえに いっしょにはみがき ばいきんバイバイ』

・19名中 ○→19名 ×→0名

『てつだう はげます ありがとうは 3つのやくそくね』

・19名中 ○→17名 ×→2名

〈連絡帳より〉

- ・チャレンジカードに○印をつけるためにやたらとお手伝いをしようとしています。
- ・自分の事を後回しにし、弟のお世話をしてくれました。
- ・チャレンジカードに○印をつけた？と自ら確認をしますよ。
- ・『1日1回はお手伝いをしないといけない』と言って今日はお皿洗いを頑張りましたよ。
- ・1歳の弟の靴を履かせるなど、手伝いをアピールする姿が見られて嬉しいです。

〈4歳児百合組〉 ☆1ヶ月(30日)として○印は15日以上、×印は14日以下

(カルタの読み札)

『くじになったら おやすみたいむ』

・19名中 ○→5名 ×→13名 記入なし→1名

『てつだう はげます ありがとうは 3つのやくそくね』

・19名中 ○→16名 ×→2名 記入なし→1名

〈連絡帳より〉

- ・チャレンジカードのことがあり、急いで寝る準備を始めていましたが、姉たちの笑い声につられて隣の部屋へ行ったり来たりで結局10時前になってしまい、ああチャレンジ失敗とつぶやいていました。
- ・9時まで寝ようとするけど眠れず、今日も思いやりチャレンジカード×印だねと言うと○印にして泣いていました。チャレンジカードのおかげで姉は9時まで寝ています。
- ・なかなか9時まで眠れず今日も×印か…とつぶやいていました。
- ・寝る時間は×印だけど、お手伝いはお片付けをやっているから○印をつけてねとかわいいことを言われました。
- ・祖父母とスーパーに行ったとき、他の人がカゴを片付けていないのを自主的に片付けて、近くにいたおばさんに褒められたようで喜んでいました。

〈5歳児桃組〉 ☆1ヶ月(30日)として○印は15日以上、×印は14日以下

(カルタの読み札)

『くじになったら おやすみたいむ』

・12名中 ○→3名 ×→9名

『てつだう はげます ありがとうは 3つのやくそくね』

・12名中 ○→10名 ×→2名

〈子どものつぶやき〉

- ・○印をもらいたかったけど9時まで眠れなかった(Sくん)
- ・9時まで眠れなかったからもういいや。もう寝ないでおこう(Mさん)

- ・ Aくんも×だったから自分も寝ない（Mさん）

〈連絡帳より〉

- ・ 家庭によっては9時までには布団に入っても眠れないから×印をつける保護者と、9時までには布団に入ったから○印をつける保護者がいた。保護者と子どもとで、印をつける内容を決めている
- ・ 『思いやりチャレンジカードがある』との報告。早速、洗濯物をたたんでくれ早めに寝ています。
- ・ いつも優しい思いやりはあるがチャレンジカードを通しさらに思いやり行動が見られるようになっていく。
- ・ 思いやりを意識しお手伝いなどをやろうとする行動が嬉しい。



〈チャレンジカードに取り組んで〉

- ・ ほとんどの家庭で取り組みが見られ嬉しく思った。
- ・ 家庭でわがままをしている子が褒められたことで自信がついて明るくより活発になったと喜びの声が寄せられた。
- ・ きょうだい同意識するようになった（保護者）
- ・ カードを気にしている娘は帰るなり私のカバンの片付けやお手伝いを頑張っています（保護者）
- ・ 良い習慣になるよう親も頑張ります。目標があるのは良いですね（連絡帳より）
- ・ カードを見せて頑張っている姿をアピールするようになった。

☆実践④ 〈思いやりチェック表〉

※別紙資料③…思いやりチェック表

各クラス表を準備し、できたら各自でシールを貼る。

〈カルタの読み札の中から〉

〈8月の目標〉 ☆3、4、5歳児共通

『さわやかな あさのあいさつ ところがはずむ』

〈9月の目標〉 ☆3、4、5歳児共通

『といれのあとは すりっぱならべて ところもそろろう』

〈10月の目標〉 ☆3、4、5歳児共通

『つかったおもちゃ きれいにかたづけ きもちいい』

〈11月の目標〉

3歳児→『つかったおもちゃ きれいにかたづけ きもちいい』

4歳児→『ぬいだふく きちんとたたんで おかたづけ』

5歳児→『よくかんで たべようね たのしいきゅうしょくを』

〈思いやりチェック表に取り組んで〉

- ・ 友達がシールを貼っているのを見ると意識するようになった。
- ・ シールが増えていくと喜ぶ姿が見られる。
- ・ 目標が達成できるようになってきている。
- ・ 片付けの苦手な子が積極的に片付けができるようになった子がいる。
- ・ トイレのスリッパ並べの習慣づけが課題だったがチェック表に取り組み、トイレのスリッパ並べが自然と上手になり、気持ちが良い。

実践⑤保護者へアンケート協力依頼（2回目）

*思いやりチャレンジカードについて

	梅組（3歳児）	百合組（4歳児）	桃組（5歳児）	合計（50名）
依頼数	19名	19名	12名	50名
良いと思う	13名	18名	9名	40名
なくてもいい	5名	1名	3名	9名
分からない	1名	0名	0名	1名

*チャレンジカードを通して意識が芽生えましたか?(保護者)

	梅組（3歳児）	百合組（4歳児）	桃組（5歳児）	合計（50名）
はい	12名	18名	12名	42名
いいえ	4名	1名	0名	5名
回答なし	3名	0名	0名	3名

*チャレンジカードを通して意識が芽生えましたか?(子ども)

	梅組（3歳児）	百合組（4歳児）	桃組（5歳児）	合計（50名）
はい	14名	17名	11名	42名
いいえ	5名	1名	1名	7名
回答なし	0名	1名	0名	1名

*チャレンジカードを通してどのような姿が見られましたか？

〈3歳児 梅組〉

- ・歯磨きは今まで私たちが『やろうよ』と言葉かけをして磨いていましたが、最近は自分から『歯磨きしよう』と言います。
- ・カードが始まり歯磨きを少しは嫌がらずにやってくれるように○印をつけるために本人も頑張っていました。お手伝いやありがとうは毎日できているので、歯磨きは×印がつかないようにこれからも一緒に頑張ります。
- ・意識してチェックできるようになった。
- ・やらない方がいいと思うわけではないですが、日頃から歯磨きもお手伝いやあいさつなども自然に身につけて欲しいと思い取り組んでいます。カードがあると『カードに○印をつけたいから』の理由でやることになるので、特になくてもいいと思いました。

保育士の気付き

- ・積極的に歯磨きに取り組む姿が見られたことや嫌がらずにやるようになったなど、保護者から喜びの声がよせられた。一方で、○印をつけたいから取り組むのではなく、自然に身につけてほしいのでチャレンジカードは特になくても良いという意見もあった。

〈4歳児 百合組〉

- ・『くじになったら おやすみたいむ』と言うと時計を見るようになり、親子で時間を意識するようになりました。9時に眠ることはできませんでしたが、お布団を敷いてくれてお手伝いにつながり『てつだう はげます ありがとうは3つのやくそく』につながっていたので良かったと思います。
- ・『何か手伝うことあるかな〜』と自分から聞いてくることが増えた。『×印』がチャレンジカードにつくの嫌がり、今日は早く寝ようねと、寝る準備をするようになった。
- ・時計を見ながら行動するようになりました。お手伝いは今まで気が乗らない時はやらなかったのが奪うようにお手伝いをしてくれるようになりました。
- ・仕事が終わってそれから夕食の支度、お風呂となると、どうしても就寝時間が9時を過ぎていましたが、親自身の都合で遅くなってしまっていたな・・・と反省することができました。今でもまだ少し9時を過ぎてしまっていますが、子どもの意識が見られたときは○印をつけています。

保育士の気付き

- ・親のリズムを整えてあげるべきであること、親自身の都合に合わせて遅くなっていたことを反省しているなど、親の意識も子ども達のために変わってきたことを感じた。子ども達も時計を見て時間を意識できるようになっていると報告がたくさんあった。

〈5歳児 桃組〉

- ・いつも眠る時間を気にして9時になるとベッドに入るようになりました。お手伝いも以前よりすすんでしてくれるようになっていますが、今はまだ「チャレンジカードがあるからする」と言う部分が多いようです。これをきっかけに自分からすすんでできるようになってほしいです。
- ・9時に寝るのは難しいのですが、いつもどうしたら早く寝ることができるのか、私たちも子どもも考えるようになりました。それでもなかなか達成できません。
- ・「×印になるよ」と言うと、やはり「×印」の言葉が嫌なようで少しずつですが早めに寝るようになっていきます。先月は×印ばかりでしたが、今日やっと○印がつかえました。
- ・9時まで眠ることは、お姉ちゃんたちの影響もあり、なかなかできなかった。
- ・最初は、はりきって頑張っていました。だんだんやる気がなくなってきました。

保育士の気付き

- ・以前に比べ、意識して手伝うようになっている。チャレンジカードがきっかけになっていることや、親子で9時に眠ることを考えるようになった。一方で、年長では最初だけがやる気があったことや、見られるからやるというマイナス面も感じられた。

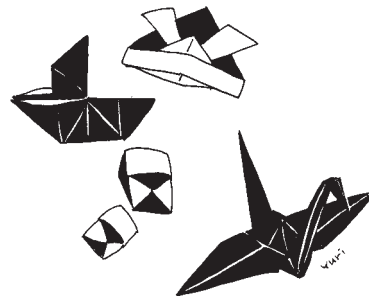
6. 考察・まとめ

- ・友達に教えるときなどに思いやりカルタの文章を引用するなど日常生活の中に取り入れている姿がよく見られる。
- ・チャレンジカードやチェック表を通して子ども達1人ひとりの思いやり行動が目に見える形で確認できるようになり、意欲的に取り組む姿が増えた。
- ・カルタの読み手や取り手をやりたくて意欲的にさらに積極的に取り組むようになってきた。
- ・カルタを取れない子に対して教えてあげる姿が見られるようになった。
- ・文字に興味を持ちカルタの読み方や間違いに気づくと励ましながら友達に優しく教えてあげる姿が見られるようになった。
- ・子どもの心を育むためにほとんどのご家庭での取り組みがしっかりと位置付けられている様子が見られてきてとても嬉しく思った。
- ・手伝う、片付けなど苦手な子が意欲的に取り組めるようになってきている。
- ・子ども達を中心にして、保護者・職員と二人三脚での取り組みが功を奏し、園全体に思いやりの和が広がって園全体の雰囲気や環境が和やかな環境に包まれてきていることが何より嬉しい。
- ・チャレンジカードを通して保護者の意識も変化し、子ども達のために生活リズムを見直すようになった家庭

が増えた。その結果、保護者支援へもつながった。

7. 今後の課題

- チャレンジカードに取り組んでもらえなかった保護者に思いやりの大切さをどのように伝えていくべきかが今後の課題。
- 意識して取り組めるようになったことやコミュニケーションが増えたことなど、良い結果がよせられたので今後も継続していきたい。
- チャレンジカードやチェック表の取り組みが3歳児以上を対象にしていたので、今後は年少児まで意識、習慣づけができるように全園児で行いたい。



(4) 奨励賞

〈課題研究部門〉

- ・ 課題研究①人との関わり

「グループ活動と係活動にチャレンジ！」

武元 善輝（鹿児島県・つるみね保育園）

〈実践報告部門〉

- ・ 「仲間、あそび、自然の中で育ちあう保育

—障害児保育の取り組みから—

藤井 民子、佐々木 淑子、鈴木 綾、太田 ちはる

（北海道・人見保育所）

- ・ 「楽しく食べる

～“ひとくち食べてみる” から繋がる “食べられるかも？” の気持ち～」

野上 未優、佐藤 遼子、北爪 麻依（群馬県・高崎保育所）

- ・ 「麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり」

金田 茉莉（東京都・砂原保育園）

- ・ 「運動遊びを保育に取り入れて～園内事故防止と体力増進のために～」

桑野 嘉子（新潟市・つくし保育園）

- ・ 「子育て家庭への支援を考える～子育てパートナーとして～」

田中 美佳、井原 千恵（北九州市（研究会員）・戸畑保育所）

課題研究① 人との関わり グループ活動と係活動にチャレンジ！

鹿児島県・つるみね保育園 武元 善輝

1. はじめに

つるみね保育園は、過疎化少子化高齢化の著しく進む地域にある、定員50名（現在64名）の小さな保育園である。開園してから40年、これまで豊かな自然環境を生かした保育が特色であったが、3年前から、デジタル技術を活用した保育（デジタル保育）での先進的な研究・実践を進めている。その結果、保育の幅が広がり、子どもたちの笑顔の幅が広がるなど、多くの成果が上がり、過疎地の保育園の取り組みだが、多くの方々に注目していただけるようになってきている。

しかし、乳幼児期の保育に重要なのは、人との関わりであり自然とのふれあいである（アナログ保育）という保育方針を大事にして、「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」という合い言葉を設定し、全職員で共通理解共通実践を重ねている。そこで、今回の論文では、人との関わりに視点を当て、子どもたちのグループ活動や係活動を中心に、日々のアナログ保育の実践を紹介したいと考えている。

今回、紹介するのは5歳児クラスでの実践である。5月中旬頃から、グループ活動と係活動に取り組んできた。グループ活動では、4・5人のグループを作り、同じ目的を持って一緒にいるんなことに取り組んだ。係活動では、そのグループ内で一人ひとり役割を持ち、主に日常生活における活動に取り組んできた。

グループ活動と係活動をやってみようと思った理由は、二つある。一つ目は、子どもたち同士での関わりを深めてほしいということ。今までは、保育者との縦の関係が主となることが多かったが、グループ活動を通して、子ども同士の横のつながりを持つことで、信頼関係、協調性が育つのではないかと考えた。そしてもう一つは、グループ内で、一人ひとり自分の役割を持つことで、その活動を通して、主体性や責任感などが育つのではないかと考えた。この二つの理由でグループ活動と係活動をやってみることにした。

保育士となり5年目。5歳児クラスを担当するのは初めてで、グループ活動や係の活動を子どもたちに取り組みさせた経験がないので、自分なりに子どもたちの実態に合うように考え、時には子どもたちと話し合いながら、進めていくことにした。

今回はグループ編成3回目までの取り組みをまとめたものである。

2. グループ活動の実践

① グループ編成

5歳児クラス11名、新入園児2名、計13名（男児8名、女児5名）を4人グループを2つ、5人グループを1つにし3グループに分けることにした。これは、3人グループでは、係の仕事が負担になる可能性があるのと、机の数やクラスの棚がちょうど3つに分かれていたのが理由である。

最初のグループ編成で気をつけたことは、仲のよい友達をなるべく同じグループにするということだ。それは、グループ活動は楽しい、おもしろい、という印象を子どもたちに持ってもらいたいからだ。普段から一緒に遊ぶ友達同士で組むことで、最初から関わりが持てると思った。そのうえで、グループ活動とは、どういうものなのかを子どもたちに伝えられたらと思った。実際、グループのメンバーを発表したときに、喜ぶ子どもが多かった。また、女児5名なので3グループに分けたときに、1つのグループだけ女児が一人になってしまうが、仲のよい男児と組むことでいやがることなく分けることができた。

次に、2回目のグループ編成では、なるべく関わりの少ない子ども同士で組むことにした。1回目のグループ活動で、子どもたちも大体何をするのか、グループ活動とはどういうものなのか、がわかってきているので、今度は、普段関わりの少ない子ども同士を一緒にし、少しでも関係を深めていければと考えた。ただ新入園児のうち一人の子が、友達と関わることを少し苦手としていたので、一回目のグループで一緒だった子ども2人と一緒に組むことにした。そうすることで、少しは、安心して活動に参加できるのではないかと考えた。実際、新入園児の子は家庭で、その2人の子の話を母親にするようになり、その2人の子も、積極的に新入園児の子に声をかけるようになっていた。

3回目のグループ編成では、1・2回目に組んだことのない人となるべく組むようにした。3回目になると、素直に新しいグループになることを喜ぶ姿が多くみられた。中には「○○くんとがよかった！」「○○ちゃんのがよかった！」と仲のよい友達と組みたいという子どももいたが、ほとんどの子どもは、だれとでも関わりを持つとうという姿勢がみられるようになった。少しは、グループ活動が定着したのではないかとと思う。

② グループ名を決める。（写真資料1）

グループ活動での一番初めの活動として、子どもたち

同士で話し合い、グループ名をつけることにした。自分のグループに少しでも愛着を持ってもらいたからだ。グループ名が決まると、一つの紙にグループ名を保育者が書き、その周りにみんなで絵を描いてもらいクラスの掲示用にした。子どもたち同士で話し合ったり、協力して1つのものを作ったりするという経験が、協調性の成長につながると思い実践した。

最初のグループ編成では、仲のよいメンバーだったので、スムーズに話し合い、5分もしないうちに、決めることができていた。

2回目のグループ編成では、関わりの少ない子ども同士だったせいか、なかなか決まらず、保育者も交えての話し合いとなった。子どもたちそれぞれの気持ちを受け止めた上で、相手の気持ちを受け入れることの大切さを伝え、何とか決めることができた。この話し合いで、友達の気持ちを受け入れることの大切さに、少しは気づいてもらえたのではないかなと思う。

3回目のグループ編成では、2回目の経験が生かされていた。最初は自分の意見を通そうとしていたが、話をするうちに「やっぱり〇〇くんの決めた名前がいいや！」と少し渋々ではあったが、友達の考えを受け入れて決めることができた。

③同じ目的を持って遊ぶ。

グループごとに分かれて遊ぶ機会をつくり、子ども同士の関わりを深めてほしいと思い、様々な遊びにチャレンジした。

・KAPLA（積み木）遊び（写真資料2・3）

「今日はグループで何を作るか話し合って、みんなで協力して作ってね。」とお願いすると、各グループ話し合いを始めた。上手にまとまったグループは、一つのものを協力して作り上げていた。まとまらなくても各々作り始め、あとから合体させるといような方法をとっていた。このKAPLA遊びでは、普段一人で取り組んでいるよりも、スケールの大きい、ダイナミックな作品が生まれていた。

・折り返しリレー（写真資料4）

グループ対抗で折り返しリレーを行うと、競技性がある分、自然と一致団結する姿が見られた。自然と友達を応援したり、みんなで話し合って作戦を考えたりするような場面もみられたりした。

・粘土遊び

KAPLA遊びと同様に、グループで話し合っテーマを決めてもらい協力して作ってもらうように促した。動物園や水族館の作品ができていて、それぞれ分担して作る姿が見られた。また、友達の作り方をみて、いろんな作り方があるのだと知ることにもなっていた。

〈グループ活動の考察〉

グループ活動において、グループ編成は1番重要だと感じた。グループのメンバーで、子ども同士の関わり方や活動に対する取り組み方に影響してくるからだ。3回のグループ編成を通して、少しは友達の考えや気持ちを受け入れようとする姿勢が出てきたと思う。グループ名を決めるときにも、最初の頃に比べ、楽しく決める姿が多く見られるようになってきた。回数を重ねるごとに成長しているように感じた。そして、グループでいろんな遊びにチャレンジすることで、子ども同士の関わりが増えていき、楽しみながら協力する姿や話し合う姿が見られるようになってきた。また、単純に遊び自体も充実するものとなっていた。製作では、自分にはないアイデアや技術を知ることがあり、自分たちの遊びの幅が広がっていくことを喜んでいて。グループ対抗でのゲームも、作戦を立てたり、応援をしたりすることで協調性の成長につながった。グループ活動において、同じ目的を持ち一緒に遊ぶことや一緒に何かに取り組むことが重要であると感じた。

3. 係活動の実践（写真資料5・6）

グループの中で4つの係を設けた。道具係、給食係、掃除係、安全係、の4つの係を毎日交代で行うようにしている。分かりやすく当番表を作り部屋に掲示してあり、帰りの会で次の日の係を確認する。

①道具係

製作の準備や片付け、午睡で使うマットや枕の準備。

②給食係

箸の準備、保育者が用意した給食の配膳。

③掃除係

製作後の掃除、給食後のぞうきんがけ。

④安全係

テラスや部屋で友達が暴れたり走ったりしていないか見守り、注意する。（風紀員のような感じ）

〈係活動の考察〉

子どもたちは単純に、係活動で自分の役割があることを喜んでるように感じた。係活動に取り組んでいくうちに、自分の好きな係が出てくるようになっていた。だからといって他の係を放棄することはなく、グループの友達のために頑張っていた。それには、4つの係を1日交替でするところで、4日経てばまた好きな係ができるという見通しが持っていたからだと思う。当番表があることで、明日は何の係なのか、楽しみにしながら、見通しを持つことができていた。また、保育者に褒められたり友達に感謝されたりすることで、責任を持って仕

事をしようとする姿が見られるようになってきた。簡単な仕事でも誰かのためになるという経験が積み重なり、子どもたちの責任感の成長につながった。

4. まとめ

グループ活動、係活動を通して子どもたち同士の関わりを持つことで、信頼関係が深まったり協調性や主体性、責任感が育ったりする機会が多く持てた。グループで取り組んだ分、子どもたち同士気持ちがぶつかり合うこともあったが、それを少しずつ乗り越えたことが、信頼関係や協調性の成長につながった。係活動は、自分だけでなく友達のためにというところで、やる気につながり、主体性や責任感が生まれるきっかけになった。グループ活動や係活動は、子どもたちを成長させる保育の一つにすぎないが、大きな役割があると考えることができた。

今後の発展としては、グループ編成をする前に思い出作りの製作、グループで取り組む遊びのレパートリーを

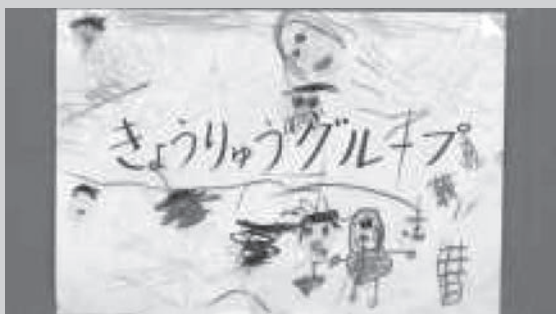
増やす、新しい係をつくる、グループのなかでリーダーを決める、などを考えている。子どもたちの発達段階に合わせ、時には子どもたちと話し合いながら、この活動を充実させていきたい。

また、今回課題となったのが、子どもたちのコミュニケーション能力である。グループ内での話し合いは、度々あったが、保育者が仲介役に入ることが多かった。これからの時代コミュニケーション能力が重要であるといわれている。子どもたちにどうコミュニケーション能力を身につけさせるのかが、課題となってくる。

これからの保育として考えていることは、子どもたちの表現力をどう高めていくのか。表現力の向上が、子どもたちのコミュニケーション能力を高めていくことにつながると考えている。そこで、今回のグループ活動と、表現力を高める活動を、うまく組み合わせる保育を展開していきたいと考えているところである。

*写真資料

写真資料1 (グループ名前決め)



写真資料2 (KAPLA遊び)



写真資料3 (KAPLA遊び)



写真資料4 (折り返しリレー)



写真資料5 (当番表)



写真資料6 (係活動)



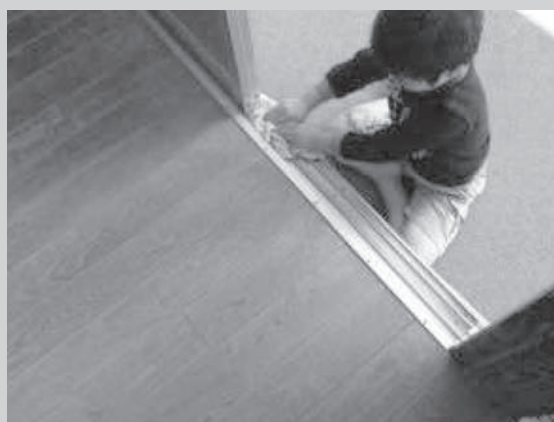
道具係 (マット敷き)



給食係 (配膳)



掃除係 (ぞうきんがけ)



掃除係 (サッシ拭き)



安全係 (テラスの見守り)



安全係 (友達が走らないように見守る)

仲間・あそび・自然の中で育ちあう保育 ～障がい児保育の取り組みから～

北海道・人見保育所 藤井民子・佐々木淑子・鈴木綾・太田ちはる

I. はじめに

開設60年を迎える当保育所では子どもたちの育ちには常に「自然」「人間」「事物」が必要であると考えその3つを生かす保育のありようを常に研鑽してきた。子ども達と楽しく日常を過ごし、どの子にも幸せな乳幼児時代を一生の原風景として記憶に残してあげたいというおもいで現在に至っている。同時に保護者にも「大変で孤独のまま過ぎる乳幼児期の子育て」ではなく「社会の中で安心して親としても成長できる子育て」へと変わってもらえるよう願っている。今、実体験のないまま育てている子ども達、保護者の世代も同じである。

「自然の中で体験した事、発見した事、同年齢の仲間と出会い、ぶつかり合い、仲良くなっていく事、よき大人に出会い見守られ愛されて育つ事で将来の「興味、意欲」「学びの芽」につながっていく」と秋田喜代美氏のことばにもある。その根っここの部分である「子どものあそび」を大切に仲間と関わる楽しさを保育実践し研究につなげていきたいと思う。

そこで、目の前の子ども達を見たとき、発達につまづきのある子、支援を必要とする子がわが園にも多くなっている現状がある。目に見えづらい障がいと同時に身体的に障がいを持っている子も入所している。保育所では障がい児保育の基準はまだまだ定かではないが保護者はあちこちの機関を見てまわり、わが子を皆と同じように楽しい体験をさせたい、友達の中で育つ幼児期を過ごさせたいと切望し入所してくる。

当園では、母が産後うつ病を発症し経管栄養摂取児となってしまったK児、1歳から入所してきたダウン症のH児が同時に同じクラスに入所した。担任と担当の保育士が受け入れる準備から始まって他の職員、園の内外に協力を経て保育を進めてきた。しかし、大変さを抱えながらも保育士の大きな目標は保育の中で、クラスの仲間と関わりながら、皆がともに成長発達していくことである。

障がいのある子に焦点をあてながらも、同時にどの子にも同じ「生きる力」を育てたいと思う。それには覚える事ばかりではなく、考える活動を設定し教え込むのではなく引き出す指導をしなければと思った。「みたて活動」や「ごっこあそび」のように想像力から始まる楽しい遊びを体験しないまま育った子と、体験した子、同年齢の子や仲間の中で話しながら遊んだ子と、いつも一人ぼっちの子、バーチャルの世界で実体験をしないまま幼児期を過ごす子では、その後の育ちに違いはあるのだから

うか。体験をたくさん重ねる事とともに一緒に育つものは何なのだろうか。

今回、着目した子ども達は身体的にも知的にも同年齢の子ども達と1、2年のハンディをもった子ども達である。しかし障がいにこだわることなく皆と一緒に保育する中で発達、成長を確認することで同時に同年齢の子の成長発達も明確にみえてくるのではと考えた。五感を鍛え、「生きる力」を育てたい。「障がいがあるなしに関わらず、「すべての子がたくさんの仲間の中で自分をいきいきと発揮する力を育てる保育のありようを検証する」ことは将来、「社会の中で生きぬいていく人」を育てる事につながると学びあい職員で共有化していきたいと思う。

II. 研究の目的

障がい児保育の子ども達に焦点をあて自然体験・実体験の遊びの中で保育士や仲間と関わり「自分を発揮し生き生きと遊ぶ子どもの姿」を知る。

III. 研究の方法

3歳児クラスの障がい児として入所してきたK児（女子）とダウン症 H児（男子）の二人の保育記録、連絡帳、成長記録をもとに、一人ひとりの育ちを確認し、仲間との遊びの中で実体験を繰り返しながら成長していく様子を探る。

IV. 事例と考察

事例1：Kちゃんの保育から 一障がい児保育から保護者支援へ

(1) プロフィール

【K児（女子 平成21年8月生）】

乳児院より2歳6ヶ月で入所、生後母親の病気のため栄養摂取ができなくなり経管栄養摂取児となり両親のもとから乳児院に入所、児童相談所、医療機関、行政、保健センター、保育所とのカンファレンスを数回にわたり実施し、自宅に戻り保育所に入所、経管栄養摂取児として障がい児保育としてスタートする。

4歳時には経管もはずれ保護者とともに喜び合った。現在は4歳6ヶ月になり障がい児保育から母の疾病という理由で保育している。

(2) 入所までの職員の受け入れ準備、共有化へ

最初の入所相談は児童相談所からの電話だった。母親

が産後うつ病のため乳児だったKちゃんがミルクを飲まなくなり、経管で栄養を取る状態になり乳児院に預けられた。2歳を過ぎても経管栄養摂取の状態が変わらないため、保育所を利用しての子育てへと打診。受け入れてくれる保育所がなく何とか検討してみてくれないかとの相談がある。保育士は乳児院でのK児の様子や乳児院での保育を見学に行き受け入れたいと決定。子どもと保護者を含めての医療、児童相談所、乳児院とのカンファレンスを実施し、皆で見守ろうと確認する事ができた。経管栄養摂取取についても職員間で学習会を行い、皆で共有する事を大切に2歳児クラスからの保育が始まる。

(3) エピソード①「経管がとれたよ！かわいいね！」

K児の特徴としては新しい環境に慣れにくい。暗闇、大きな音、大きな着ぐるみ等に遭遇すると恐怖心が強くパニックになる事が見られた。入所当時は不安いっばいの顔で部屋を移動するだけでも大泣きすることもあった。ゆったりと接するようにこころがけ食べ物を口に出来た時は「おいしいねえ」と「楽しい事を一緒に」を常に心がけた。本当に少しずつ少しずつ慣れ、笑顔も見られるようになりその夏にはついに管をはずせることになった。食事への工夫や不安感をなんとか取り除きたいと保育士は毎日奮闘してきた。K児が「みて！とれたよ」と笑顔を見せた時は職員、友達、保護者が一緒に大喜びしあった。内科検診でも嘱託の先生が頭をなでて「Kちゃん、管とれてよかったね、可愛いね」の言葉にとても誇らしげのK児だった。

(4) エピソード②「出来た！プールの輪くぐり！」

3歳児夏のこと。経管もとれたばかりでK児もとても喜んでいたので、思いきり遊ばせたいと思っていたが水いぼで断念した。遊んでいる子が気になるようでチラチラとみている。8月になり水いぼも治り、自分から水着に着替え、毎日、自分から入ってくるようになった。いつも食い入るように仲間の遊ぶ姿を見ているK児に対して「もっと働きかけたほうがいいのか、でも、あせらずに」と考えていたので、とても嬉しかった。

しかし、プールには入るがいつも隅っこにはりついていてだけで不安や恐怖感が強いのは以前と変わらない。輪くぐりやビー玉遊びなど水の中で楽しめるよう工夫を重ねてみた。

いざ、はじめでもおどおどしているので保育士と一緒に手をひいてくぐる。

一人でくぐる事はできないがやめようとはせずは何度でもくる。友達と一緒にやりたいという気持ちが保育士には伝わってきた。

クラス全員がプール遊びをできる日に恵まれた。なかなか体調が悪く、全員が入れる日が少ないのだ。保育士が「楽しいゲームをしよう」と提案すると「リレーがしたい」と子どもたちからの案が出る。みんながいつもや

っていた輪くぐりリレーを2チームに別れ始めようとするK児は不安げな様子なのでK児も出来る大きい輪を使って行く。リレーが始まり泣くかもしれないと予想していたが生き生きとクリアしなんとK児のチームが勝ったのだ。今までこわがっていたのがウソのようにスイスイ水の中を歩き、輪をくぐって次の人にタッチしていた。

(5) 考察

歩き始めた子ども達が一番先に興味を持つのが水である。流れる水、あふれる水のおもしろさはどの子どもも感じ意欲や興味に繋がるものだと思っていた。しかし、何がきっかけがないと、触れることも、体験することもできず、そのことに対して、恐怖や不安をもったまま育ってしまうのだと感じた。

事例2：障がい児（ダウン症）H児の発達成長

(1) プロフィール

【H児（男子 平成21年4月生）】

1歳11カ月 1歳児クラスに4月から入所

ダウン症で合併症は無いとのこと、入所当所は全身の筋力が弱く、2歳4カ月で歩けるようになる。

1歳～2歳半ぐらゐの遅れがある。保育園に入所させ、同年齢の仲間と一緒に色々な経験をさせたいという保護者の強い希望があり入所に至る。療育センターに週1、2回通いながら登園している。職員はあらかじめダウン症児についての勉強会に行き、担当がいなくときの保育士の体制を考えるなど事前準備をした。

(2) エピソード「歩く！Hも遊ぶ！」

4歳クラス5月、4月生まれH児は5歳になった。歩行もゆっくりではあるが30分位の児童公園の散歩は遅れながらも歩いて一緒に行けるようになってきた。あまりにも遅れてしまったときはおんぶや抱っこをしながら歩いていた。

保育士：「皆に追いつけないね。」

H児：「みんな、いない」

保育士：「どうする？遊ぶ時間なくなるからおんぶする？」

H児：「H、歩く」

保育士：「じゃ、あちこち見ないで行かないと皆のところにいけないよ」

H児：「皆と遊ぶ！歩く！」

—ようやく角を曲がるとクラスの皆が待っていてくれた。—

クラスの園児：「おーい！H児のこと待ってるから、はやくおいでー」

(3) 考察

2歳4ヶ月まで歩けなかったが、広い園庭や築山で走り回っているうちに、急ぎ足で走り回れるようになった。

知能の遅れが心配されていたが、直立歩行がしっかりしてくると二語文が出てきた。現在は視力の低下もあり、眼鏡をかけての訓練もしている。

H児を気にかけて、いつも待っていてくれるクラスの園児がいる事で、会話する事もできるようになってきた。他クラスの園児も困っている友達をみると自然と手を貸してくれる。皆が優しい子に育っていく、きっかけをH児は与えてくれているのだと感じた。

V. まとめと考察

冒頭に述べているように子どもたちの発達と成長はどのような場面で見られるのか2人の障がい児保育に取り組む中で検証してきた。

ここでの障がい児が当園ではなく、もっと専門的な施設で育っているとしたらどうだったのだろうかと考えてみる。早期療育を受ける権利も子ども達にはある。しか

し、生活をともにし、一緒に喜び合える、助け合える環境の中で育つことは、唯一保育所が出来る事だと思う。それは小さなエピソードからも見えてきた事でこれからも生まれる様々なエピソードが実践の財産となると思われる。

それぞれの家庭状況も違う子、支援を必要とされる子もいるクラスだが、どの子も大人や仲間の中で大切にされ、楽しく、主体的に遊べるようにと願い保育してきた。

今、自分に自信がない、自己肯定感が持てないと言う事が若年層に広がっている。子どもの世界は唯我独尊の世界（特に3歳児）と言われる。自然素材を教材とし、想像力を働かせ工夫し、仲間の中でけんかしたり、仲直りしたり、大変な事、そして楽しい事の実体験を重ねていく。子ども達は乳幼児期にどれ程たくさんの刺激を受けて育つのだろう。これから私達保育士も素晴らしい刺激を与えられる担い手の一人でありたい。



楽しく食べる

～“ひとくち食べてみる”から繋がる“食べられるかも？”の気持ち～

群馬県・高崎保育所 野上未優・佐藤遼子・北爪麻依

I. はじめに

高崎保育所では2009年度から2010年度の間『チャイルドクッキングを通しての子どもの育ち』をテーマに、子どもたちのやり取りや姿を事例として挙げ、研究・発表した。2012年度は『楽しく食べる』というテーマを設定し、食材と栄養素を知ることが園全体で見つめ直し、子どもたちに伝えていこうと考え、様々な食育活動を行ってきた。それらの活動も含め保育士の働きかけにより子どもたちの食への興味・関心は広がったと感じていたが、実際の食事に影響を与えているのかどうかという疑問が浮かんだ。そこで今年度は、給食を通して子どもたちの好き嫌いを把握し、保育士とのやり取りが食べることへの気持ちの変化に繋がっているか改めて確認したいと考えた。昨年の活動を引き続き行いながらも、食材に触れる機会を増やした。またアンケートを基に、苦手克服メニューを作成し配布した。好き嫌いのある子も「楽しく食べる」ことに繋がっていった欲しいと願い研究を進めていくことにした。

II. 研究の目的

- ・給食を通して、子どもたちの食べる姿に変化があるかどうか確認する。
- ・楽しく食べることに繋がるようにしていくために、保育士と給食担当者がどのような働きかけをしていけば良いかを考える。

III. 研究の方法

- ・給食を通して、子どもの好き嫌いの実態を把握する。
- ・日々の子どもの変化をとらえ、事例として示す。
- ・嗜好調査アンケートを年2回行い、給食や食育活動が子どもの食に対しての成長等に影響を与えているかの考察を行う。

IV. 事例と考察

高崎保育所では、食育活動を通して食べ物の大切さを子どもたちに伝えてきた。給食は食べ始める前に本人の希望を聞き、食べられないと思う量は友だちにわけて食べてもらう等してなるべく残さない工夫をしている。一口でも食べられたということで、自信が芽生えるのではないかと期待をして接している。

(1) 給食・食育活動を通しての子どもたちの様子

【事例1】

《2歳児Yくん》

- ・入所時は小麦・卵アレルギーがあり、医師と相談のうえ除去食で対応していた。
- ・入所9ヶ月後から小麦の除去を徐々に解除していく方向になり、小麦製品を口にできるようになったが、進んで口にできない様子が見られた。

5月

パンに比べ麺類なら比較的食べているようだが表情は固い。うどん>パスタ>焼きそばといった好みで同じ麺でも食べが違う。献立がパンの日は表情が暗く見え、おからから食べ、パンは残ったままという光景が目につく。米粉のパンは食べられているので、先入観プラス食感への苦手意識があるようだ。一口ごとに牛乳を飲む等して味を変えることで、食べられている。しかし、食べる量はまだまだ少なく、一口ごとに食べられると「すごい！」と拍手をもらい、褒められながら挑戦している。

7月

少しずつ自分でパンを手に持ち、進んで食べようとする姿が出てきている。一口食べては上を見たり、パンをいじったりはしているが、「あと少しだね。」と口にしたりと、自分で自分を励ましながら食べている。

具を先に食べてしまい、残ったパンの部分に苦戦することもあるが、ジャムパン等ではジャムに助けられ比較的食べが良くなったりもしている。飲み込みづらそうなこともあるが、完食を目指す姿も見られる。

10月

麺類の日は小麦量の摂取を考え具を多め、麺は少なめで対応している。うどん以外の麺はあまり進みが良くなかったが、近頃は“食べる”ことに興味が出始め気付けば焼きそばをおかわりしていた。「(増やしても)大丈夫？」の問いに、「いっっぱい食べちゃうもん。」と答え、以前は1本1本取っては食べていた焼きそばを一定の時間で完食するまでになっていた。また食欲にも変化が出てきて全体的に摂取量が増え、体重にも数字として表れるようになった。好きなパンの種類は少ないが、麺類は抵抗がなくなりつつあると感じた。食べたい気持ちが食わず嫌いを少しずつ改善していつているようで、嬉しく思う。

1月

進級に向け自分ですることが増える中、転園の話が出たことで、Yくんのメンタルに変化が見られ始める。今まで食べられていたメニューに苦戦する姿が出てきた。環境の変化に敏感なところが食にも表れ、心配をする。麺類、パン類に対する苦手意識が戻っている様子はないが、様子を見ながら対応した。

2月

他の子から好きなパンの話が聞こえてくると「Y君も食べられるんだよ！」と話していた。大好きなアンパンマンミュージアムに出掛け、パン屋さんで沢山のパンを自分で選んで購入した話を嬉しそうにしていた。「メロンパン、あんぱん、食パン…」とYくんの口から何種類ものパンの名前が聞かれた。「アンパンマンのパンを食べたら元気100倍になった？」とたずねると、笑顔で「うん！」と答え、アンパンマンの元気100倍ポーズを決めてくれた姿にはこちらも嬉しくなった。



(チャイルドクッキングの様子)

【考察1】

アレルギー除去食による影響が見られるYくんだが、苦手意識があったパンや麺類を保育士の声掛けで少しずつ自分からも食べようと頑張る姿勢が見られた。保育士は口にできたことをYくんにわかるように伝えており、それがYくんの自信に繋がっていると感じた。食べた経験が少ないことが苦手意識に繋がっているようなので、自信がつくことで、「食べやすいかも？」と意識の変化が出てきたようだ。

3月の転園が迫った頃、担任保育士が母親と話をすると「すっかりパンが食べられるようになって良かったです。あたたかく声掛けをして頂きありがとうございました。」と声を掛けられた。4月当初は“慣れさせたい”という親の願いもあり対応してきたが、味と食感に慣れず飲み込みづらそうにしている姿に、無理をさせているように感じることもあった。それでもYくんの少しでも挑戦しようとする姿と、月日が小麦粉を克服するに至った。根気強くまた長い目で見守ってきて良かったと、保育士は振り返っている。

【事例2】

《3歳児Sくん》

- ・未満児の頃から、食感によって苦手な物が多く、飲み込みづらそうにする姿が見られる。
- ・特に汁物の具に苦手なものが多いため、食べ終わるのに時間が掛かる。

7月

あんみつの寒天が飲み込まずに、口から出してしまう。食感が苦手なものはよく噛んで食べられるよう声を掛けていたが、苦手だと思うものには最初から拒否の姿勢が出てしまうようだ。一人で食べているのではなく、みんなで一緒に食事をしている意識を持てるよう工夫した。「お友だちもう食べちゃった。すごいね。」と声掛けをしていると、その友だちからも「頑張ってる。」と言ってもらい、「はい。」と少し嬉しそうにしていた。

母親に話を聞いてみると、家では嫌いなものが出ると「何で出すの！」と怒っているとのこと。少しずつ苦手なものに挑戦できるように、家でも励ましてもらうよう話をした。

9月

苦手な麩の味噌汁だったが進んで食べ始め、口から出すこともなく食べ終わることができた。保育士が「もう食べられたの？すごいね。」と声を掛けると、それを聞いていた同じテーブルの子だけでなく、周りの子たちが「すごいね。」「えらいね。」と言ってくれた。Sくんはとても嬉しそうにしており、保育士の「みんなに褒めてもらえて良かったね。」の言葉に笑顔を見せていた。

12月

誕生日会に保護者が来ると、食べ終わった後に一緒に帰れるという目標があったためか、苦手なきのこの入ったメニューだったがあっという間に食べ終わっていた。保育士が驚いて「今日はすごく早いね。」と声をかけると、保護者も「家では見ただけで嫌がるのに。」と驚いていた様子だった。家ではそのような状態なので、苦手なものを口にしている状況にはならない様子だった。「一口はすごく小さいけど、園では頑張ってる食べていますよ。」と保護者に言うと「お家でも頑張ってる欲しいな。」と言っていた。

1月

なめこと豆腐の味噌汁の時「おかずは好き。」と言っていたので「味噌汁とおかず交互に食べてみたら？」と勧めしてみた。自分なりに「おかず3回食べたら味噌汁2回食べる」とルールを決めたようで、「3回食べたから次おつゆだよ。」と言いながら食べていた。いつもよりリズム良く食べられたのが嬉しかったのか、その日は「もう終わっちゃった」と笑っていた。

しかしその後見ていると、好きなおかずは大口3回、苦手なキノコはかけらを3つ、というように食べていた。意識してバランス良く順番に、とはいかない様子だった。時々「次はこっち食べてね」と苦手なものだけが残らないよう声を掛けると「今お肉食べたから次こっち（味噌汁）だもんね?」と確認していた。

3月

朝の食育活動で、えのきをバラバラにする作業を手伝ってもらった。「くさい。」「固いなー。」と言いながらも他の友だちと一緒に作業を全て終わると、「小さくなったよ!」と嬉しそうに言っていた。味噌汁に入って出てきたので「まだ匂いする?」と聞いてみると「もうしない。」「やわらかくなってる。」と言っていた。「おいしくなってる?」の問いには「うん。」と言って笑っていた。交互に食べて最後に少し残っていたが、残さず食べていた。



(給食担当による朝の食材紹介)

【考察2】

食感がやわらかいものが苦手なSくんに対して、「よく噛んで。」と声掛けを行っていたが、苦手意識があり上手く飲み込めない姿が見られていた。しかし、保育士や周りの子どもたちからの言葉を受けて、少しずつだが進んで食べようという気持ちを持ち始めたようだ。その頑張りを保育士だけではなく、子どもたちが見逃さずに声を掛けたことで、Sくんの自信にも繋がっていった様子だった。保育士の提案に耳を傾け自分なりにチャレンジしていた姿にも、Sくんの意識の変化を感じる。

誕生日会に来た母親にSくんの頑張っている姿を見てもらったり様子を伝えたりしているが、家庭では苦手なものを口にするのは、なかなか難しいようだった。今後も家庭とやり取りを密にしていくことで、Sくんが家でも少し食べてみようという気持ちになっていってくれればと思う。

【事例3】

《3歳児Rくん》

- ・野菜類、イカ・エビ等が苦手なため、進みが悪い。
- ・食に関しての取り組みの中で関心を示して話を聞いているが、理解に繋がるまではいかず、食べることへの意欲はまだ低い。

5月

ミニトマトのすっぱさが苦手でした以前は一口食べるごとに体を震わせていたが、少しずつ食べる意識も出てきた。ちびちびとだが体を震わせずに自分から食べる姿が見られる。

ブロッコリー入りのサラダが進まず、かけらをちびちびと摘んで食べていたので「大好きなカレーと一緒に口に入れるとおいしいよ。」と声掛けをすると、Rくんは実際にサラダとカレーと一緒に食べ、食べやすいと感じたのか少しペースアップできた。

3月

夏野菜カレーにピーマンが入っていた時、カレーは大好きだが、ピーマンが嫌いなので「ピーマン嫌いなんだよね。」と言いながら食べていた。「カレーに入っているピーマンと入ってないピーマンだったらどっちが美味しく食べられる?」と聞くと「カレー。」と答えていた。「カレーに入ってるピーマンの方が食べやすいんだから、しっかり食べてね。」と声を掛けると、納得したようであればく食べていた。

10月

基本的に食事のペースがゆっくりなので、量を調節しながら様子を見ている。苦手なものばかりを続けて食べているので、時間が掛かっているのではと感じた。おかずや主食も一緒に口にすると美味しく食べられると思いき声を掛けたが、ご飯・汁物・おかずを交互に食べる三角食べがまだ上手にできない。色々な食材をバランスよく食べることも習慣化できればと思う。

12月

食事の時に野菜から食べ始めるものの、ちびちびと嫌そうに食べている。苦手な野菜のみを口に入れるのでは時間が掛かり過ぎてしまい美味しく食べられないので、野菜を口に入れたら違うおかずやご飯を口に入れたりするよう伝える。口の中の味が少しは変わり、食べやすくなるためペースアップできるようになってきた。早く食べられた時は「先生終わったよ!」と嬉しそうにしている。しかし自分から進んでその食べ方ができずにいるので、ペース良く食べられるよう引き続き言葉掛けをしていく必要を感じた。

1月

食事の仕方が大分スムーズになり、ペース良く食べられるようになってきた。時間的には30分以内で食べられている。食事のペースが上ってきたことを母親に伝えると、「家では全くペースが上がらないんです。」と言っていた。園でも時々のおんびり食べている事はあるが、友だちに「Rくん頑張ってる!」と声を掛けられると「そういう風に言わないで!」とすねる姿が見られた。減らさ

ず完食できるようになり、苦手な野菜やそのほかのおかずなどは集中してペース良く食べられているが、汁物になると集中力が切れてペースダウンしたり、ボーっとしたりする姿も見られる。

3月

2歳児が進級練習のため3歳以上児クラスと一緒に食事をするようになると、刺激を受けて自分から頑張ろうとする姿が見られた。ただ、2歳児の進級練習が終わると気が抜けてしまったのか、また時間が掛かるようになった。カレー等好きな物が多いメニューはペロリと食べ切れているので、どうやら全体量が多い少ないはあまり関係ないようだ。苦手な物をいかにおいしく食べられるかは、苦手なものだけを口に入れるのではなく色々なものをバランス良く口に入れていくことで美味しさも増すと思うので、食の基本である三角食べがスムーズになるよう今後も教えていきたい。



(給食担当による食材紹介)



(紹介した食材の掲示)

【考察3】

基本的に野菜が苦手で、食べることに對しての意欲が低かったRくん。しかし、保育士の声掛けによって苦手な物を先に食べようとしたり、味付けによっておいしいと思えたりすることで、自ら納得して食べられるようになってきた様子だった。食事中話をするのも好きなようなので、「おいしい」ことを沢山伝えていくことで意欲に繋がるのではないかと感じた。友だちに励まされると複雑な様子だが、保育士には頑張りを認めてもらいたい気持ち強いようなので、見守っていることをしっかりと伝えるようにしていきたい。

子どもの苦手意識は見た目には左右されるところも大きいので、最初の段階として、好きなものと一緒に食べることで「食べられた!」という気持ちになることは、次のステップに繋がる1つの方法だと思う。その後、三角食べを意識できるようになると良いのではないだろうか。Rくんは三角食べを上手くできないことで、野菜の味への苦手意識が強くなっているようだ。バランス良く食べ、時間を掛け過ぎず食べられるように今後も声を掛けていきたい。

【事例4】

《4歳児Sくん》

・歯ごたえのある食べ物が苦手だが、進級したことによ

り残さず食べることを頑張っている。

・特にキャベツが苦手で、昨年度は口から出すこともあった。

5月

キャベツとアスパラが入っていたサラダをじっと見つめていた。苦手意識から、なかなか進まずそれまでの一口のサイズより1/10くらいのサイズで食べ始めていた。「頑張ってるね。」と声を掛けると頷いていた。それでも、少しずつ食べ完食していた。

6月

給食のおかずで「きんぴら」が出る。歯ごたえがある物なので苦手かと思ったが、自分から「おかわりする!」とおかわりをしていた。「これは好きなんだよ。」と言って見事に完食した。以前ならば、固いだけで苦手意識をもっていたが、味付けやメニューによって食べる意識が高まってきたようだ。

8月

Sくんのテーブルと一緒に食事をする時、いつも苦手なキャベツ入りのサラダが全部なくなっていた。一番最初に食べたのだと思い「すごいね。もう終わったんだね。」と声をかけると、満面の笑みのSくん。しかし、その後「まだキャベツあるよ。」と言う。だが、お皿には見当たらない。「ほら。」と言って見せてくれたのは味噌汁で、確かにキャベツが沢山入っていた。「誰が入れたの?」と聞くと「Sちゃん(本児)」と嬉しそうに答えた。どうやら好きな味噌汁に入れたら美味しいのではとSくんなりに考え、工夫したようだった。しかし「それ美味しい?」と聞くと「まずいよ。変な味。」と言っていた。それでも自分で工夫したことが嬉しいのか、頑張って完食していた。

11月

苦手なキャベツが出て、以前よりはペースダウンしなくなってきた。サラダの味付けは好きなようだが、和え物やおひたし等の薄めの味はまだ苦手なようだ。食感よりも味付けが食べるペースを大きく左右するようで、Sくん自身もこの味は大丈夫というのがわかっているようだ。

好き嫌いのはっきりしているが、以前に比べると苦手意識はほとんどなくなったようで、スムーズに食べられるようになってきた。「すごいね。」と声を掛けると、とても嬉しそうな笑顔を見せていた。

3月

年度末になり、好き嫌いがあまり目立たなくなった。家庭では相変わらずあまり自分からは苦手なものは口にしないようだが、園ではちびちび食べたり、苦戦する姿

が見られなくなった。キャベツが苦手だったが、キャベツが沢山入っているサラダをおかわりするようになった。まだ和え物やおひたし等はおかわりするまではいかないが、年度初めから比べると、だいぶ食事に対しての意識が変わってきたように感じる。



(栄養ボードの活用)

【考察4】

歯ごたえのあるものが苦手なSくんだったが、6月の事例ではきんぴらを好きだと言って完食できていた。苦手な食感のものでも味付けによっては食べられ、苦手意識が変わっていく姿が見られた。8月の事例では、苦手なキャベツを味噌汁に入れるという大人では考えつかない行動にSくんなりの「こうしたらおいしいのでは？」という工夫も見られ、食べることへの意識の高まりを感じた。また、保育士にその行為を注意されることなく認められたことで、食へのマイナスイメージとならずSくんも楽しく食事ができたのではないだろうか。3月には、キャベツの入ったサラダをおかわりする等、味付けによってまだ若干好き嫌いはあるものの、歯ごたえに対するの苦手意識は薄まったようだ。一年を通じて、Sくんが自分で『この味付けはおいしい』と気付いて食べられたことで自信を持ち、苦手な食感でも食べようという意欲が育ったように感じる。

(2) 嗜好調査アンケート

当園では、毎年2回行っている嗜好調査アンケートがある。子どもたちの好き嫌いの把握や、家庭での食生活を知ることができる等の良い点があり、実施してきた。今回は保育園の給食でのできごとや、食育活動が家庭での食事にも影響を与えているか知るために、さらに質問事項を見直しを行った。

① 1回目のアンケートより

[H25.8.12配布 55/70家庭数]

Q：園での食育活動について知っていることに○を付けて下さい。(複数回答)

- | | |
|------------------------|-----|
| 1) きょうのきゅうしょく／栄養ボード | 49人 |
| 2) チャイルドクッキング | 53人 |
| 3) 昼の給食担当による食材紹介 | 17人 |
| 4) お当番による今日のメニューと今日の食材 | 23人 |
| 5) 菜園活動 | 35人 |

Q：のびのび・すくすくさん(以上児クラス)の保護者の方に質問です。今年度よりのびすく組ではチャイルドクッキングの日に栄養ボードを使って食材の働きについて学んでいますが、知っていますか？

はい 12人

いいえ 20人

「はい」と答えた方は知ったきっかけ、お子さんとのやりとり等具体的に教えて下さい。

- ・家で食事の時「肉は筋肉を作るんだよ」など教わってきたことを話す。(5歳児)
- ・「これは赤、これは黄、今日は緑がちょっとだね！」など話している。(5歳児)

Q：のびのび・すくすくさんの保護者の方に質問です。今年度より給食担当が週1回程度、昼食前に食材紹介と掲示を行っていますが、知っていますか？

はい 12人

いいえ 20人

「はい」と答えた方は知ったきっかけ、お子さんとのやりとり等具体的に教えて下さい。

- ・「給食の先生が食べ物のことを教えてくれるんだよ」と言っていた。(5歳児)
- ・スーパーで同じ食材を見つけると「給食の先生が見せてくれたやつだ！」と教えてくれる。(5歳児)

Q：給食を食べるようになってお子さんの食の変化や食事に対する成長がありましたか？(複数回答)

- | | |
|------------------------|-----|
| 1) 好き嫌いが少なくなった | 21人 |
| 2) 好き嫌いが多くなった | 3人 |
| 3) 残さず食べるようになった | 18人 |
| 4) 食べる意識が高まった | 19人 |
| 5) 食事のマナーについて興味関心が高まった | 18人 |
- ・配膳(茶碗や箸の置く位置)にこだわるようになったり、食事時の挨拶をしっかり言うようになった。(5歳児)
 - ・給食の野菜の切り方や味付けを家で真似るといつもよりよく食べ、好き嫌いが少なくなった。(5歳児)



(苦手克服メニュー)

②2回目のアンケートより

[H26.1.8配布 66/71家庭数]

Q：園での食育活動について知っていることに○を付けて下さい。(複数回答)

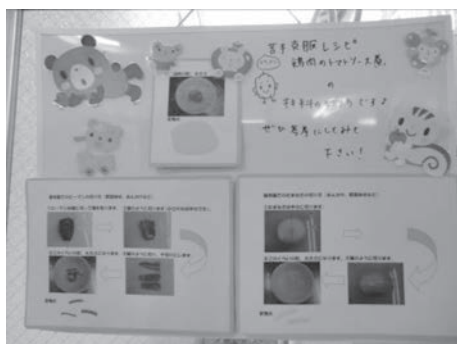
- | | |
|-------------------------|-----|
| 1) きょうのきゅうしょく／栄養ボード | 54人 |
| 2) チャイルドクッキング | 59人 |
| 3) 昼の給食担当による食材紹介 | 29人 |
| 4) お当番による今日のメニューと今日の食材 | 33人 |
| 5) 菜園活動 | 39人 |
| 6) 苦手克服メニュー・食材の切り方の写真掲示 | 32人 |
| 7) 今日の給食の実物展示 | 54人 |

Q：給食を食べるようになってお子さんの食事に影響があったと感じていますか？

- | | |
|----------|-----|
| ①とても感じる | 35人 |
| ②少し感じる | 21人 |
| ③あまり感じない | 3人 |

Q：給食を食べるようになってお子さんの食の変化や食事に対しての成長がありましたか？(複数回答)

- | | |
|-------------------------|-----|
| 1) 好き嫌いが少なくなった | 30人 |
| 2) 好き嫌いが多くなった | 2人 |
| 3) 残さず食べるようになった | 21人 |
| 4) 食べる意識が高まった | 17人 |
| 5) 食事のマナーについて興味・関心が高まった | 23人 |
- ・お茶碗の米粒を残さず食べるようになった。実際にピカピカに食べると「見て～！ピッカピカ♪」と言っている。(3歳児)
 - ・給食がおいしいと言って、家の食事をしない時があった。(5歳児)
 - ・以前は嫌いなものに全く手をつけなかったが、苦手でも一口、二口と頑張れるようになった。(3歳児)
 - ・スプーンを使って食べるのを意識している。(0歳児)



(苦手克服メニューの野菜の切り方)

【考察】

2回のアンケートの結果から、約9割の保護者が給食を食べるようになって、子どもたちの食事に変化があったと感じていることがわかった。配膳の仕方や、スプー

ンを持って食べること等、食事のマナーが身についたという意見や、苦手なものを少しずつ食べられるようになって、という意見も聞くことができた。

だが、「園での食育活動について知っているものに複数回答して下さい」という質問では、多く知られているものと、良く知られていないものの差が見られた。そのため、もっと積極的に園での活動を保護者に伝えていく必要があると感じた。

また、ある保護者からは、「アンケートに毎回同じことを書いている気がする。もう少家での食事を変えていきたい」という意見も寄せられ、アンケート自体が保護者に影響を与えているということも知ることができた。

V. まとめ

給食の様子を改めて見ていると、子どもたちの好き嫌いとは味だけではなく食感によって左右されていたり、食べ慣れていなかったりなど気持ちの問題で苦手意識がある場合もあることがわかった。保育士は関わりを持つなかで、何がその子の苦手意識に繋がっているのかを把握し声掛けをしたり、給食担当と連携したりして食材に興味を持てるように働きかけていた。その保育士の姿を見て、周りの子どもたちが苦手な食材を頑張って食べようとする子に、その頑張りを認める言葉を自然と掛けてくれる様子も見ることができた。これは、これまで行って来た食育活動によって、保育士や子どもたちの食に対しての知識が深まったことや、食材を大切にする気持ちが育ったことが関係しているのではないだろうか。

1年間を通して、苦手を克服した子もいたが、そうではない子もいた。しかし苦手なものでも、味付けや食感が違ったり、食べ方を工夫することで、「食べられるかも？」という気持ちを子どもたち自身が持ち、食べる意欲を持つようになっていく姿を見ることが出来た。

当園では「楽しく食べる」をテーマに掲げ、2ヶ年で実践研究に取り組んできた。その中で、子どもたちはもちろんのこと、保育士も給食担当者も食に対する知識を増やし、関心を深めてきた。食材を知り味わい食べ方を工夫することで、苦手意識を和らげ今まで以上においしく食べる気持ちを育てていけるよう、活動を続けていきたい。

【参考文献】

- ・「作って食べよう！ぐんまの食育レシピ」(群馬教育委員会)

麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり

東京都・砂原保育園 金田 茉莉

1. はじめに

昭和23年に開設し今年で67年目を迎えた砂原保育園は、東京都葛飾区亀有の閑静な住宅街にあり、0歳児12名、1歳児18名、2歳児19名、345歳児47名の合計96名の園児が生活している。一人ひとりを尊重し、その子のもつ個性を大切にしたい保育を目指し、「人として豊かに生きる力の基礎を育てていく」ということを保育方針としている。「誰とでも仲良く遊び、元気に遊ぶ子ども」「感じ考え表現できる子ども」「自分を大切に、友だちも大切にしたい子ども」を目指す子ども像として保育を行っている。

3、4、5歳児は異年齢保育で各年齢が3名ずつ集まって小さなグループを作り、それを“家族”と呼んで生活している。年長児の最初の役割は家族の名前をつけることから始まる。図鑑や絵本を見ながら「こんな家族にしたい」という思いを描きながら、名前を考える。意見が食い違いなかなか決まらないこともあるが、話し合いを重ね、最後は家族のメンバーが納得していく。

砂原保育園の幼児室は壁がなくオープンである。子ども達は自分のやりたいことを年齢を超えて友だちと関わりながら行っている。年長児は家族のお父さん、お母さん、年中児はお兄さん、お姉さん、年少児は弟、妹として毎日を生活する中で、年下の子ども達は年上の友だちに頼ったり甘えたり憧れたりする気持ちを持っている。年上の子ども達は年下の友達を可愛がり、お世話を楽しむ中で年下の友達に頼られることに嬉しさや誇りを感じている。

異年齢保育には、大きい子には小さい子を助けたり、小さい子は大きい子から学び成長するという互いに学び、寄りあう心を育てるといふ良さがみられる。年長児は午睡の時間に年少児のことをタッチングで寝かせたり、着替えを手伝ったりと上手に、楽しそうにお世話をすることができる。自然とそのような関わりができるのは年少児の頃に自分が同じようにお世話をしてもらった経験があるからだ。年長児も最初から上手にお世話が出来るわけではなく、中には「お世話の仕方がわからない」と話す子どももいる。そんな子ども達は保育園で同じ家族の友達と一緒に過ごす中で様々なことを経験し、学び合っ

て成長している。幼児クラスでは“寄り合い”と呼ばれる話し合いを大切にしている。家族で集まってその日の過ごし方を話し合ったり、年齢ごとに集まって活動について意見を出したり、時には和室でお茶を飲みながら和気藹々とし

た雰囲気の中で寄り合いが行われる。自分の気持ちを言葉で相手に伝えるということは大人でも簡単なことではない。子ども達の中にも自分の気持ちを相手に伝えることが苦手な子が多くいるが、日々の暮らしの中で“寄り合い”が子ども達の中に定着し、自然とそのような関わりができるようになっていく（図1）。

子どもの心の育ちを、活動を通して人との関わりに焦点を当て、考察を行った。

2. 2013年度の年長児

1) 4月の姿、保育士の願い

2013年度の年長児女児6名、男児9名の計15名である。一人ひとりが年長児になったことの喜びを感じ、寄り合いや当番活動などに積極的に取り組む姿が見られているものの引っ込み思案や自分に自信が持てない子が多くいた。気持ちはあるが、それをなかなか言葉にして伝えることが出来ない子が多く、寄り合いでは意見が出ず、協力して何かをすることがあまり見られない集団であった。保育者には、そんな子ども達が自分の気持ちを自分の言葉で相手に伝える事ができるようになって、自信を持ち、小学校に進んでもらいたいという願いがあった。

2) 年長児の活動

年長児になると、園外の活動が増え、特別な活動が多くなる。そんな年長児に憧れて「早く年長さんになりたい」と口にする子も多い。その中でも月に1回、園外の森に行くことは子ども達にとって、特別な日であり、楽しみにしていることだ。電車に乗り、40分程離れた場所にある森。自然を身近に感じて欲しい、という保育者の思いから始まったこの活動（図2）。

7月、年長児はその時に使う麦わら帽子を作ろうということになった。この活動のねらいは自分のイメージしたものを色々な素材を用いて形にする、出来上がった麦わら帽子を被って森に行くという2点である。このように取り組む過程で子ども達同士の様々な関わり合いが見られた。

3. 麦わら帽子作りの活動

1) エピソードI「虹が描いてある絵本知ってる？」

ようこ（仮名）は、4月生まれで年長児の中でも1番月齢が高い。しかし、引っ込み思案で自分の気持ちを相手に伝えられず、困った時には泣いて助けを求めることが多かった。

ようこがデザイン画に描いた麦わら帽子と、実際に出来あがった麦わら帽子はイメージ通りだった。それだけ一つのことに対して没頭し、集中できる子どもでもあった(図3)(図4)。

「虹色のリボンをどうしてもつけたい」という思いがあるものの「虹って何色でできているんだろう」という疑問をなかなか解決することができない。そこで、保育者は本児がどのようにして解決策を見つけていくか見守ることにした。

ようこは虹が描いてある絵本を探すが、見つけることができない。「誰かに聞いてみよう」という気持ちがあるが、なかなか言い出せないようこ。「誰かに聞きに行ってみる？」と声を掛けると、しばらく考えたあと「先生と一緒に一緒なら行く」と、ようやく動き出した。友だちや職員に聞きに行くことにした(図5)。しかし、相手の所まで行ったものの、自分の気持ちを伝えられずに泣いてしまう。保育者がようこの気持ちを代弁して伝えることは簡単だったが、それではようこは以前のままと同じである。毎日、同じように聞きに行く姿を保育者は見守った。何度も涙を流したがようこは諦めず、やっと「虹の描いてある絵本を教えてほしい」と自分の言葉で伝えることができた。乳児クラスの担任に教えてもらって虹が描いてある紙芝居を見つけたことができた時、ようこはとても嬉しそうに「先生が言っていた通り、紙芝居に描いてあったよ」と報告に来た。

その後、ようこは虹の絵を参考にしながら、虹のリボンを作ることができた。この「作りたい」という強い気持ちが、ようこの背中を押していたに違いない。自信がない時に黙り込み涙を流すようこが、色々な人に尋ね自分のイメージした通りの物を作り上げる姿に、保育者も驚き、嬉しく感じた。

ひとつ大きく成長したようこ。卒園式を過ぎ、最終登園日の集まりの時、年少、年中児にお別れの言葉を言おうと声をかけたところ、最初に口を開いたのがようこだった。「みんなありがとう」と言うたった一言ではあったが、涙を流しながらも自分のことばで気持ちを伝えようとする姿にその場にいた誰もが驚かされた。ようこは様々な壁にぶつかり、時には涙を流すことも多かったが、いつの間にか自信をつけていた。保育者の願いがようこに届いた瞬間でもあったように感じる。

2) ①エピソードⅡ「それならやってみよう」

ともや(仮名)は9月生まれ、4人兄弟の上から2番目の男児。2歳児の頃に弟、4歳児の頃に妹が生まれ、その前後では園生活においても不安定になる姿が多く見られた。甘えたいという気持ちが強いものの、素直に表現することができず、言葉や行動が乱暴になってしまうことが多かった。様々な活動に興味、関心があるが、恥ずかしいという気持ちが先にあり、なかなか参加することができないともや。特に人前に行くことを嫌がり、3

歳児の頃から運動会や発表会には一度も皆の前に出ることができなかった。

活動には取り組み始めるが途中でやめてしまうことが多く、最後までやりとげることが難しい。周りの子どもたちがイメージを膨らませ、すらすらと麦わら帽子のデザイン画を描く中で、中々描きだすことができない。保育者が側につきやっとならできあがったデザイン画には青い羽が1枚描かれただけだった(図6)。「恥ずかしい」「ぼくにはできない」という言葉を口にする反面、おそらく彼の心の中には「本当は僕だってやりたいのに」「どうしたらいいの」という思いがあったはずだ。「青い羽を1枚つけるだけでもいいんじゃない？」と、ともやの気持ちに添ってあげると、しぶしぶ作り始めた。しかし、青い羽を1枚付けてみるとともやは「もっと何かつきたい」と気持ちを口にするようになった。そこで保育者は以前からともやが保育室で大切に育てていたカタツムリをモールで作って「これはどうかしら？」と見せた。すると、ともやもすんなりと「作る！」と言って、次々とカタツムリを自分で作りあげた(図7)。その意欲には保育者も驚いた。

早速、出来あがったカタツムリを帽子につけるととても嬉しそうだった。恥ずかしがりながらも鏡に映った自分を見て嬉しそうなともや(図8)。いつの間にかともやの周りにはたくさんの友達が集まり、「ともやくん、すごい!」「作り方教えて」と声を掛けられている。ともやは恥ずかしそうに、それでも「園長先生にも見せに行きたい」「乳児さんの先生なんていうかな?」と自分の気持ちを素直に保育者に伝えてきた。色々なひとに出来上がった帽子を見せにいくたびにたくさんの人から「ともちゃん素敵!」と言われ、ともやの表情はにこやかで自信に満ち溢れているようだった。

4. 活動後の年長児の姿

麦わら帽子作りの活動を終えたあと、各々に自信ができて、生き生きとした表情で活動に取り組む姿が見られるようになった。9月に行われた年長児のお泊まり保育ではファッションショーを行った。麦わら帽子を被り、それに合わせた衣装を自分たちで作って表現することを行った(図9)。一人ひとりが自由にポーズを決めたり、グループでテーマを決めて踊ったり、それぞれのパフォーマンスを見せた。以前の年長児であればなかなか意見が出ずに保育者が指導していくような形になっていたが、麦わら帽子作りがきっかけになって他の活動にも積極的に取り組み始めた。

ファッションショーの練習で印象に残っていることがある。練習中にともやがへそを曲げて部屋の隅っこに座り込んでしまった。保育者は周りの子ども達がどうするか見守っていた。すると、ようこが傍に寄り「ともやくん、一年生になるんでしょ!一緒に頑張ろうよ」と声を掛けたのだ。今までのようこならおそらく、ともやが練

習に参加しないことに困り、涙を流し、黙り込んでいただろう。しかし、堂々とともやと一緒にやろうよと言葉を掛ける姿にその場にいた誰もが驚かされた。ようこの言葉にはっとしたともやは、その後の練習に時折へそを曲げながらも前向きに取り組むようになった。

5. 子どもと保護者

麦わら帽子作りの活動で子ども達と関わる中で保育者は悩んだ。そのため、毎日担任同士で話し合いを重ね、保護者に協力してもらうこともあった。

保育園での姿を話したり、どんな思いを持って取り組んでいるかを説明すると、保護者も家での様子や困っていることを打ち明けてくれるようになった。

エピソードⅡでも紹介したともやの両親は、毎回行事の度に両親揃って見に来て見守ってくれた。そんなともやは12月に行われたキャンドルサービスでみんなの前に立ち、堂々と前を見て最後まで歌を歌うことができた。堂々と歌うともやの姿に母親は涙を浮かべていた。キャンドルサービスが終わった後に、ともやに向けた父親の「よくやったぞともや!」の声が今でも忘れられない。

保育園では解決できないことも保護者のあたたかい理解があれば見えてくる子どもの姿がある。このような保育者と保護者の関係が子どもの育ちを支えてくれるのだ。

6. 考察

1) 一人ひとりに合わせた保育者の関わり

エピソードⅠ、Ⅱに共通して言えることは、保育者の関わり方がとても重要だということだ。エピソードⅠで保育者は、ようこに自発的に人と関わる経験をし「自分でできた」という達成感を味わって欲しい、自信を持って物事に取り組める子になって欲しいというねらいがあった。そのため、適切な支援をすることを心掛けた。ようこの意欲を適切な言葉掛けで引き出し、援助しすぎないように見守った。それを繰り返すことによって、いつの間にかようこが保育者から離れ、自分で自分の気持ちを相手に伝えることができるようになった。

エピソードⅡでは、一つのことを最後までやり遂げるということが苦手だったともやに麦わら帽子作りを通して、自信をつけてもらい、人前で恥ずかしくらず表現出来るようになって欲しいという保育者のねらいがあった。ともやのようなやりたいけれど上手くいかないという子には、気持ちを受け止めながら時には一緒にやってあげたりする適切な援助も必要である。援助の仕方について、何度も担任同士で話し合いを重ね、その時に見合ったともやの関わり方を考え、ともやのやる気を引き出すことができたのは、見守ることと保育者が実際にやって見せるという適切な援助をしたことが重要であったと感じる。そしてたくさんの人に褒められ、認められると、子どもは自信を持ち一つのことをやり遂げたという達成感を感じることができるのだと思う。

保育者の適当、且つ妥当な援助は子どもにとって心地よく、あたかも自分で出来たという気持ちにさせてくれる。子どもの主体性を尊重するあまり、やってあげてはいけない、見守ることが大切だと考えがちであるが、それは一歩間違えると放任になってしまう危険性がある。やりたいけれど素直に表現することがなかなかできない子どもには保育者同士が良く見て観察し、話し合い、共通理解を持って接するといことがとても重要だ。その子自らのやる気を信じて待つことも時には大切だが、それと同時に適度な支援や特に言葉掛けや温かい雰囲気を作ることも大切だと考える。

2) 個の育ちは集団の質を高める、集団の育ちは個の質を高める

年長児に進級したばかりの4月は、一人ひとりに自信がなく、表現することが苦手な子が多かった。寄り合いでもなかなか意見が出ず年長児としてのまとまりがなかった。しかし、ようこやともやのように一人一人が自信をつけ、生き生きと活動していくことで、年長児全体の雰囲気が変わり、行事や活動に意欲的に取り組むようになっていった。4月に保育者が感じていた集団のまとまりのなさは個人の自信のなさが関係していたのだと気付かされた。個の質が高まると、集団の質が高まるという良いサイクルができていたのだと感じた。

7. 今後の課題

今回の活動を通して改めて保育者の関わり方について考えることができた。

砂原保育園では人との関わりをととても大切にしている、1歳児と4歳児と一緒に散歩に出掛けたり、地域のお年寄りとの交流を大切にしたりと年齢を超えた関わりをすることで普段見る事ができなかった子どもの姿を見ることが出来る。地域のお年寄りとの交流では、保育者が知らなかったような知恵を教えてもらうことがある。幼児期にたくさんの人と関わることも心の育ちの大切な要因である。

幼少期の人間関係は、心の育ちに大きく影響する。今回の麦わら帽子作りを通して見えてきたことでもたくさんの子どもの心の育ちが見えてきた。私たち保育者は子ども達の姿を担任や保護者と共有し、その子に合った関わり方をする必要はある。その為には、今その子がどのような気持ちでいるのかを毎日の保育の中で共有し、保育者同士の連携を大切にしながら、子どもの今に寄り添っていきたいと思っている。

(図1) 寄り合いの様子



(図2) 森での様子



(図3) ようこが描いたデザイン画



(図4) 出来上がった麦わら帽子



(図5) 不安そうな顔つきで保育士に聞きに行くように



(図6) ともやが描いたデザイン画



(図7) モールで作ったカタツムリを縫い付けているところ



(図8) 恥ずかしそうに鏡に映った自分を見つめるともや (図9) ファッションショーの様子



運動遊びを保育に取り入れて ～園内事故防止と体力増進のために～

新潟市・つくし保育園 桑野 嘉子

【はじめに】

当園は、新潟市北区（旧豊栄市）の田園と文化の街に位置する、定員120名の保育園です。昭和37年に、地域の要請により無認可保育園を設立し、昭和43年に認可保育園となり、老朽化により移転改築を2回行い、現在に至っております。

当初の地域のニーズは、保育に欠けるというよりは、交通量が増加してきた頃なので、交通事故などからの安全確保と、集団生活をとおして社会性と身辺自立を図る事を目的とした入所が多数でした。家庭環境も3世代や、4世代が多く、家族の愛情を十分に受けて育った子ども達は、素朴で天真爛漫、伸び伸びと逞しく、心も身体も健康そのものでした。

昭和40年代に入ると、社会は高度経済成長期に入り、当地域も核家族化が進行し、両親共働き家庭が急増して、子どもを取り巻く環境は大きく変化してきました。更に、少子高齢化時代に移り、出生率の低下で家庭や地域での子どもが減少し、子ども同士の刺激が無くなりました。その上、文明の進化により、世の中は便利になり過ぎて、大人も子どもも“運動をする”ことが減少してしまいました。

わずか30年ほどの間に、子ども達は自然の中で、たくさんのお友達との関わりや、身体を動かして様々な遊びをして楽しむ、お腹を空かせて美味しくご飯を食べる事や、ぐっすり眠り、元気に育つという事が出来なくなってしまいました。次代を担う子ども達の健康に異変を感じ、「健康と体力」を取り戻す事を目的にして、「運動遊び」を意図的に毎日の保育に取り組んで実践することになりました。

【本論】

事故や災害の原因は、人的要因と、環境要因に分類することができると言われております。しかし、ほとんどの事故においては、人的要因と環境要因の双方が複雑に関連して発生していると考えられます。保育園においても同様で、低年齢児の集団のことから、どちらかと言えば人的要因（発育、発達段階、心身状態、規範意識、行動、服装など）による事が多いと思われれます。特に少子化の近年は、子どもを取り巻く環境の変化により、本来、年齢と共に順調に発育発達していく筈の子ども達に、異常が見られるようになりました。

子育ての伝承がされていない親、少ない子どもに大勢の大人達が、愛情の取り違いをして過保護・過干渉な関

わり、また、逆に無関心、放任、虐待等での育児問題が山積しています。その結果、年齢相応の運動経験をしないで育った子ども達による、自損事故での怪我が多発してきました。不安定な歩行、注意力散漫、下半身が弱い子、反射神経の鈍い子など多種多様です。その子ども達は、集団生活の中で、友達との接触や、自身での躓きで転倒し、咄嗟に手をつくことが出来ずに、頭部や顔面の打撲傷により通院する怪我をさせていただきます。事故の原因として共通する事は、子どもの育ちの過程での運動不足が考えられます。

保育園は、子ども達にとって“第2の家庭”です。安全な環境の中で、安心して一日を過ごすことができるように、環境整備に努め、保育内容の充実を図って、十分な配慮のもとで事故防止に努めているところです。しかし、事故の直接原因となるのは子どもです。

その子ども達は、物質的に裕福になった社会の中で、ゲーム機やビジュアル媒体・スマートフォンの普及などにより、家の中での遊びが中心となったことと、児童を狙う犯罪の多発等により、公園や屋外で、元気に遊ぶ子ども達の姿が見られなくなりました。そうした環境の中で育っている子ども達は、運動能力が低下し、「転倒しても手が出ない」「躓く」などの自損事故による怪我をさせていただきます。

以前より、新潟においては、地域的に交通の便が悪い事もあって、大人も歩かずに自動車を多用していることから、都市部と比較すると、歩行の面だけでもかなり著しい差が生じています。怪我が多発すると、保育者は守りに入り、危険が伴う屋外遊びを避けたい傾向になり、それにより、体力が一段と低下して、益々重篤な怪我や事故につながるという負の連鎖に陥ります。

そこで、このような、子どもの問題を改善するための方法を模索しておりましたが、参考図書など適当なものも見当たらず、「どの様な運動が、どの様な効果をもたらす、どの年齢に有効か」といった、根本的なところで手を拱いていたというのが現状でした。

まずは、「できることを実行してから善し悪しを判断しよう」ということで、興味のある事、気になった事を、職員と協議しながら手探りで実践してきました。

誠に申し訳ないことですが、当園のスタート時期から今日までの、時代背景や親の意識の問題なども含めて、以下、実践経過を報告いたします。

[実践活動]

昭和37年～42年

- ・入所児童年齢は2～5歳児
- ・屋外遊びの奨励（晴天時）
- ・交通事故防止のため、反射運動を取り入れた遊びの導入

昭和43年～47年

- ・1歳児入所。年齢別保育の中で身体を動かす遊びの奨励
- ・便利で豊かな生活の中で歩く、走るなどの他身体活動量が減少し、生活様式・習慣の変化による身体異変(正座が出来ない・姿勢が悪い・忍耐力低下) 外遊びの積極的励行

昭和48年～59年

- ・0歳児入所のため、早朝・延長保育希望多数（便乗型もあり）
- ・外遊びの励行
- ・長距離散歩実行（友達の家訪問散歩）
- ・スナック菓子、コーラ等の清涼飲料水の過剰な摂取を注意喚起
- ・運動量の多い子、少ない子の二極化（事故例）

※10cm程の高さの台から飛び降りて骨折

※子ども同士が衝突して、鎖骨骨折などの事故発生

※子どものおやつとの与え方指導等「食生活の改善」に重点を置き保護者指導実施

（チョコレート・スナック菓子を袋ごと与え、夕食を食べない子 等）

昭和60年～平成7年

- ・国の乳児指定保育所となり、産休明け（生後2ヵ月）乳児受入
- ・早朝、延長保育の時間延長（7：00～19：00）、土曜保育有り
- ・家庭外勤務の母親の増加。仕事と育児の両立支援、育児ノイローゼなど病的母親の子育て支援開始
- ・子育ては“保育園にお任せ”家庭の増加
- ・休日は、子どもの健康管理の配慮なく、親中心の目的で外出、子どもとゆったり触れあう時間が無い
- ・活字ばなれ、勉強嫌いの親の増加（「育児講座」や「講演会」を開いても無関心で、参加者減少）
- ・保育参観日に「保育参加」「育児講座」を合わせて実施
- ・意図的に“子どもの健康”“親子運動”を計画実施
- ・屋外遊び（雨天以外は毎日）励行
- ・散歩、体力増進の運動奨励

平成8年～平成12年

- ・家庭では、運動不足の生活に合わせて、食事の問題も大きくなってきた。（魚から肉食へ、野菜不足、おやつとの与えすぎによる肥満児、カルシウム不足、虫歯の増加など子どもの身体に大きな変化が現れた）
- ・ちょっとした事で転倒。遊具の低位置からの落下で骨折する事案発生

※（対応策）デイリープログラムに「体操」時間を毎日設置、全身運動強化

※屋外遊び（鬼ごっこなど多くを取り入れて、全員の子どもが楽しく、活発に活動出来るよう配慮）励行

この時代は、発達期にある子どもの体力は、個人差が大きく、「体力や運動能力が均一な子ども集団はない」と言われていましたので、他の子どもとの比較で、その子の能力や変化を見逃さないようにする必要を感じました。

子どもの体力が落ち続けている背景には、日常生活の中で子どもが身体を動かす機会がなくなってきている事が指摘されていました。「なぜ遊びが大切なのか」その必要性和、子どもを指導する現場の対応が課題となりました。

幼児の体力低下の原因には、「遊びや生活」「家庭環境」の現状が反映しています。

当時の「夕食前の遊び」の内容で多いのが、「テレビ視聴」と「テレビゲーム」であり、幼児の生活も小学生と変わらなくなってきており、「外遊び」が減って、「室内遊び」が増えるなど、家庭での運動に関わる活動不足が問題になってきました。

そのために、豊栄市では地域を挙げて「子どもの体力推進運動」が始まりました。

◇平成8年～12年度にかけて、旧豊栄市教育委員会主催で、市内の全保育園および幼稚園の5歳児対象に「幼児の体力測定」を実施することになりました。

[目的]

幼児の体力測定を通して、基本的体力要素の様々な問題を浮き彫りにし、総合的数値から問題を解決することにより、21世紀を担う子ども達の健全育成を目的とする。

[測定種目]

- ①閉眼片足立ち
- ②ソフトボール投げ
- ③長座位体前屈
- ④立ち幅跳び
- ⑤25m走前進反応時間
- ⑥全反射運動

実施結果、市教育委員会として、基本的な体力要素の問題点を解決し、幼児の体力向上、維持していくことにする。については、今後5年間継続して「体力測定」を実

施し、幼児と保育士との接点を持ちながら「体力測定」の結果を基に、全市の保育園、幼稚園に赴き、保育士と

一緒に幼児の体力の向上を図っていく。

[結果]

・平成08年度 豊栄市「5歳児体力測定平均」

年齢	立ち幅跳び	25 ^{メートル} 走	ボール投げ	閉眼片足	長座位前屈	全身反射
5歳女児	96.3cm	6.74秒	4.9 ^{メートル}	8.65秒	12.7cm	90
6歳女児	109.6cm	6.21秒	5.7 ^{メートル}	12.16秒	13.2cm	111
5歳男児	110.4cm	6.30秒	6.8 ^{メートル}	5.91秒	9.6cm	113
6歳男児	117.8cm	6.15秒	7.8 ^{メートル}	8.74秒	9.7cm	132

・平成09年度 「体力測定」結果

年齢	立ち幅跳び	25 ^{メートル} 走	ボール投げ	閉眼片足	長座位前屈	全身反射
5歳女児	120.0cm	6.15秒	5.1 ^{メートル}	11.78秒	10.9cm	95
市平均	96.3cm	6.74秒	4.9 ^{メートル}	8.65秒	12.7cm	90
6歳女児	123.0cm	6.06秒	5.2 ^{メートル}	7.67秒	10.2cm	86
市平均	112.4cm	6.28秒	5.1 ^{メートル}	11.71秒	7.6cm	98
5歳男児	125.0cm	5.88秒	8.5 ^{メートル}	8.36秒	5.9cm	154
市平均	115.2cm	6.23秒	7.3 ^{メートル}	7.00秒	4.8cm	114
6歳男児	130.0cm	5.87秒	7.2 ^{メートル}	6.86秒	6.6cm	189
市平均	120.7cm	6.17秒	7.0 ^{メートル}	8.35秒	4.9cm	146

・平成10年度 「体力測定」結果

年齢	立ち幅跳び	25 ^{メートル} 走	ボール投げ	閉眼片足	長座位前屈	全身反射
5歳女児	104.0cm	6.68秒	5.2 ^{メートル}	20.12秒	6.5cm	119
市平均	102.5cm	6.59秒	4.7 ^{メートル}	9.17秒	8.0cm	102
6歳女児	108.0cm	6.73秒	4.1 ^{メートル}	9.63秒	4.9cm	160
市平均	109.0cm	6.37秒	5.0 ^{メートル}	10.80秒	8.2cm	94
5歳男児	117.0cm	6.18秒	7.7 ^{メートル}	12.43秒	9.7cm	143
市平均	113.0cm	6.39秒	6.5 ^{メートル}	7.37秒	4.5cm	104
6歳男児	117.0cm	6.10秒	7.0 ^{メートル}	9.39秒	-0.4cm	172
市平均	114.0cm	6.21秒	7.4 ^{メートル}	8.40秒	4.5cm	122

・平成12年度 「体力測定」結果

年齢	立ち幅跳び	25 ^{メートル} 走	ボール投げ	閉眼片足	長座位前屈	全身反射
5歳女児	121.0	5.91	4.4	7.64	6.8	63
市平均	107.0	6.33	4.1	7.76	7.7	78
6歳女児	119.0	5.88	3.9	9.56	9.4	149
市平均	113.5	6.12	4.5	9.55	7.2	107
5歳男児	119.0	5.91	5.8	8.24	5.0	58
市平均	113.4	6.21	6.3	5.74	4.2	104
6歳男児	122.0	5.61	8.0	9.07	5.9	114
市平均	120.3	5.86	7.8	8.02	3.4	124

[報告] 豊栄市社会教育指導員(体育講師)より

平成8年度～12年度まで継続して実施した「幼児体力測定」の結果は、種目によって多少の違いはあるが、子ども達の体力は確実に落ちている。特に、「長座位体前屈(柔軟性)」は、下降の一途。(体が固いと言うことは、もちろん遺伝的要素もあるが、身体を動かす経験がワンパターンで、様々に動かしていない)

子ども達が、体を動かす楽しさや、心地よさをじっくり体験できる機会を、家庭と保育園が連携をとり、意図的に提供する必要があると思う。つくし保育園は、個人差はあるが、バランスよく運動形態が発達している。(但し、それが即、技術として、「逆上がり」や「開脚跳び」や「縄跳び」がスムーズに跳べるとは限らない)

ただ、やはり体の固い子どもが多く、普通の遊びの更なる検討が必要と思う。…という講評を貰いました。

そして、平成11年度より、「幼児の体力向上」を目的として、市の体育指導員が希望する保育園に出向いて、5歳児を対象に体育指導を実施することになり、当園も毎月1回指導をして貰うことになりました。

[指導内容]

- ①跳び箱 ②マット運動 ③平均台 ④鉄棒 ⑤ボールあそび ⑥フープ ⑦縄跳

※その後、子どもの活動が活発になり、骨折等の重傷例は減少したが、指導員が転職のため、講師による体育指導が不可能になった。(園独自で継続実施)

平成18年～現在(平成17年3月 新潟市に合併)

- 平成18年度に、保育士の運動指導がマンネリ化してきたことで、園内研修会を開催
東洋英和女学院大学人間科学部教授 池田裕恵氏を迎えて“子どもの運動”について学習し、理解を深める。
- 翌平成19年度に、池田先生ご指導の下で、4、5歳児の「体力測定」を実施
- その後、引き続き、従来の学習を基にして、3～5歳児の「運動遊び」の充実を図り、職員が毎年10月に「体力測定」を実施し、今日に至る。

[体力測定結果] 平成19年度

年齢	25 _歩 走	立ち幅跳び	ボール投げ	両足連続跳	身長	体重
4歳全体	7.4	101.1	4.7	6.5	105.5	16.6
4歳男児	7.3	102.0	5.1	6.5	106.0	16.8
4歳女児	7.4	99.9	4.2	6.4	104.9	16.4
5歳全体	6.5	114.9	6.5	5.2	113.8	19.9
5歳男児	6.3	121.4	7.2	5.1	114.6	20.2
5歳女児	6.8	106.1	5.6	5.4	112.8	19.4

(標準偏差)

年齢	25 _歩 走	立ち幅跳び	ボール投げ	両足連続跳	身長	体重
4歳全体	0.8	12.9	1.5	1.4	4.4	1.8
4歳男児	0.8	15.4	1.7	1.5	4.7	2.0
4歳女児	0.7	8.3	1.0	1.4	4.0	1.4
5歳全体	0.6	15.2	1.9	0.7	4.0	2.6
5歳男児	0.4	14.5	2.0	0.7	3.7	2.8
5歳女児	0.7	11.2	1.1	0.6	4.1	2.1

平成20年度(5歳児)

種目 氏名	25 _歩 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	6.3秒	108cm	4.37 _歩	32回	58秒	31.9秒	90.0%
女児平均値	6.3秒	104cm	3.80 _歩	48回	53秒	32.5秒	92.9%
全体平均値	6.3秒	106cm	4.04 _歩	41回	55秒	32.3秒	91.7%

平成21年度

種目 氏名	25 ^秒 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	5.98	112	4.43	30	43	33.7	100.0%
女児平均値	6.29	100	3.76	36	92	34.6	100.0%
全体平均値	6.14	105	4.08	33	69	34.1	100.0%

平成22年度

種目 氏名	25 ^秒 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	6.1秒	116 cm	4.29 ^秒	26 回	39秒	41.6秒	93%
女児平均値	6.2秒	108 cm	4.09 ^秒	34 回	60秒	41.6秒	95%
全体平均値	6.2秒	111 cm	4.17 ^秒	31 回	51秒	41.6秒	94%

平成23年度

種目 氏名	25 ^秒 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	6.6秒	103 cm	3.76 ^秒	31 回	46秒	41.5秒	93%
女児平均値	7.0秒	90 cm	3.04 ^秒	35 回	62秒	44.7秒	100%
全体平均値	6.8秒	103 cm	3.76 ^秒	32 回	46秒	41.5秒	97%

平成24年度

種目 氏名	25 ^秒 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	6.3秒	111 cm	4.00 ^秒	30 回	94秒	37.9秒	93%
女児平均値	6.4秒	110 cm	3.70 ^秒	34 回	94秒	38.1秒	100%
全体平均値	6.4秒	111 cm	4.00 ^秒	29 回	94秒	37.9秒	86%

平成25年度

種目 氏名	25 ^秒 走	立ち幅跳び	ボール投げ	縄跳び (30sec)	ぶら下がり	左右移動	平衡感覚
男児平均値	6.1秒	108 cm	3.72 ^秒	34 回	76秒	35.7秒	93%
女児平均値	6.6秒	104 cm	3.71 ^秒	36 回	77秒	35.7秒	100%
全体平均値	6.4秒	108 cm	3.72 ^秒	35 回	76秒	35.7秒	97%

体力測定の種類

- ①30秒走 ②立ち幅跳び ③ボール投げ（直径15～20センチ幼児用ボール・両手投げ） ④ぶら下がり ⑤左右移動（中心線からスタート左右の定位置にカゴを置き片方のカゴの中のボールを他方のカゴへ10個移動する） ⑥平衡感覚（平均台渡り） ⑦縄跳び（30秒）

平成25年～26年度

○日本テレビ土曜午後8時放送「世界一受けたい授業」に出演しておられた、東京大学大学院教授・教育博士の深代千之氏の「運動会で一番になる科学スポーツが得意になる運脳神経の作り方」で実践された内容^(※1)や、「所さんの目がテン」で紹介された「つま先で走る練習」など、あらゆる事を実践しました。

- (※1) ・短距離走の前に大きく腕振りする
・大腿スキップからのダッシュ
・(縄跳び開始前に) 縄を持たずに跳ぶ・腕回しの練習をする
・(投げる間隔を培うために) 紙鉄砲をならす・メンコ遊びをする

○新潟市私立保育園協会青年部の学習会で、新潟大学教育学部准教授 村山敏夫氏や(株)こどもプラス 柳澤弘樹氏との出会いがあり、具体的な児童の身体能力の発達について理解を深めることができました。今まで形骸化していた「子どもの運動」について、具体的に「この運動は何処の発達を促すのか」という疑問が解消できました。特に1～2歳児の運動については、ほとんど研修会で実施されていなかったため、乳幼児期からの発達を理論的に学習することができ、貴重な収穫でした。

人間の運動は、すでに胎児期から始まっていて、超音波による計測では3ヵ月頃までに、四肢や体幹を含む全身の複雑な運動が認められています。そして、新生児は外部からの特別な刺激が無くとも、四肢や体幹などの動きを含む極めて複雑な運動をし、視野に入ったものに手を伸ばしたり、音のする方向に顔を向けたりするという運動をしています。その時期は、床の上に寝せて、自由に動かしてあげる事が大切ですが、「泣いた」「おっぱい」「おむつ交換」といっては、必要以上に抱き上げている親が多くいます。

また、寝返りや、うつぶせから上半身を上げる、ずり這いをする頃に親の都合優先で、抱っこ帯で母親のお腹に結ばれ、長時間外出をしたり、ペットのように抱っこしたりされている赤ちゃんも多くいます。

乳児期は、体の発育と同時に、体の機能と運動能力の発達もめざましい頃です。

うつぶせから顎を上げる～首が据わる～寝返りする～ずり這い～おすわり～ハイハイ～つかまり立ち～立つ～歩く…という発達過程を踏んで成長していく「大切な時

期」です。その成長していく過程では、大人は必要以上に手を掛け過ぎないで、優しく見守り、援助していくことの大切なことを知らせると共に、発達に合った「運動遊び」を家庭でも取り入れて、楽しく子どもに関わりながら、心身ともに健康な子どもに育てていけるよう、保育園と家庭の連携を密にして乳児保育を進めているところです。

以上のように、各種の研修会をとおして、子どもの発達過程と関わり方の認識を深める事と、「体力測定」についての新たな学習をし、更に年齢相応の具体的な指導法を学ぶための園内研修を実施しています。そして、全職員が認識を共有化し、0～5歳児の系統的年間指導計画を見直し、「運動遊び」の内容充実を図って保育実践してきた結果、大きな怪我は皆無となり、小さい怪我も驚くほど激減いたしました。

「体力測定」については、その年の子ども達の性格や、経験などが大きく反映してくるために、種目別の記録の向上には繋がりませんでした。

2歳以上の子ども達の中に、赤ちゃんの頃に「十分に運動をしたか」「しなかったか」の差が身体の発達に顕著に現れていることから、不足を補うための運動を「運動あそび」の時間として設け、毎朝の体操時間や、カリキュラムに取り入れて実施しています。

(主な運動) 柳澤弘樹 氏の指導による

支持力=腕で体を支える力をつける運動

- ・ハイハイで歩く ・両手両足をつけて歩く
- ・手押し車で歩くなど 等

脚力=移動する力・自らの意志で動かす力

- ・ハイハイをする ・立って歩く ・ジグザグに走る

跳躍力=飛び上がる力

- ・両足で跳ぶ ・つま先で跳ぶ

懸垂力=ぶら下がる力

- ・ジャングルジムに登る ・鉄棒にぶら下がる
- ・渡り棒を渡る

・「運動遊び」の生活発表として、「運動会」で、日頃実践してきた「体育遊び」の一端を競技に取り入れて発表しています。

- (1歳児) ・走る・マットを乗せた跳び箱の上を登って降りる
- (2歳児) ・S棒を跳び越える・跳び箱を乗り越える・ジグザグ走り・力走
- (3歳児) ・うさぎ跳び・クマ歩き・カエル跳び・ペンギン歩き
- ・跳び箱の上から下にあるフープの中に飛び降りる・力走
- (4歳児) ・レスキュー運動=ロープをたぐって移動・マットで横転・ジャンプ

- ・鉄棒でぶら下がり、足で大きな紙の芋を挟んで籠に入れ・力走
- (5歳児)
- ・変形ダッシュでスタート・跳び箱を跳ぶ・鉄棒前回り
 - ・S棒をクマ歩きで越える・大縄跳び・力走・リレー

[まとめ]

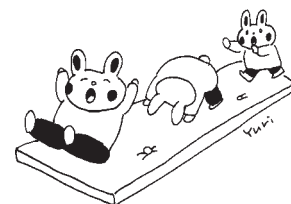
人間である私たちも、本来群れをなす動物です。群れをなして行動する動物には、子育て法がDNAに組み込まれていないそうです。群れをなすと言うことは、その中で様々なことを真似て学び傳承されていきます。現代の日本においては、生活体系の変化によりそれが失われつつあります。また、情報過多、多様化した今日、大人の悪い慣習が子どもの生活にまで及んでいます。健康な身体づくりをするために、まず「子どもの生活リズム」をしっかりと整えてあげることが、大人の一番の務めであり、正しい愛情と知識をもって子ども達に関わり、健康

と安全に関する事について、理解しやすく、正確に教えていくことが重要かと思います。

また、少し前ですが、「徒競走は、みんなで手をつないで、一緒にゴールしましょう」と提唱した小学校が話題になりました。途中までは普通に競争しますが、ゴール前では早い子どもは遅い子どもを待って、みんなで手をつないで横一列でゴールするという。

競争は、負けた時の悔しさがあるからこそ、勝った時の喜びがある。学校の中はもちろん、社会に出れば確実に優劣がつけられ、否応なく競争に巻き込まれます。「みんな頑張ったね」で済まされる訳ではありません。すべてを公平にしようなどという考えは、むしろ教育上好ましくないと思います。「本質的に、人は平等だけれど能力に差はある」ということを早い時期に気づかせ、偽善的な優しさよりも現実の厳しさを知る事と、忍耐力を身につける事が大切であると思います

子ども達が健やかに成長するために、今後も運動能力の向上に努めて参りたいと考えております。



「子育て家庭への支援」を考える ～子育てパートナーとして～

北九州市・戸畑保育所 田中美佳・井原千恵

I. はじめに

近年家族形態が変わり従来であれば、不安や悩みを身近な人に相談できていたが少子化や核家族化に伴い、それが出来なくなっている。それによって「子育てを担っている母親の負担とストレスの増加」「子育てを支える身近な家族と地域の弱体化」が進んでいるように感じる。

このような環境の中で仕事と子育てを両立していく事が困難と感じている保護者が多いのではないだろうか？

そこで、私たち保育園がそういった保護者をどのように支えていけば良いのかを考え、前年度に引き続き、今回は園全体に目を向けて保護者支援に取り組むことにした。

- ・お知らせプリントにベイビーズの内容を加える。
- ・フォトフレームでベイビーズ予告篇を送迎時間に流す。



II. 研究の目的

子育てをしていく中で保護者が抱える色々な悩みや不安を受け止め、その気持ちを共有することで子育てに対する不安を少しでも解消し、楽しく育児が出来るようにする。また、保護者と一緒に子どもの成長を喜び、具体的にこの子に何が必要なのかを考えあつていく。そうすることで保護者の負担を少しでも軽減できるようにする。

III. 研究の方法

- ①保護者が育児から離れ、リフレッシュできるような時間や保護者同士で育児に関する話が出来るような場を設ける。
- ②送迎時を利用し、保護者が抱える色々な悩みや不安を聞き、その気持ちを共有する。

IV. 事例と考察

〈事例1〉

◎家庭教育学級

- ①DVD「ベイビーズ」試写会 日時：7月6日(土)
参加者：母親5人、父1人 10時～11時30分

●ねらい

- ・世界各国の育児を観ることで色々な子育ての形がある事を知る。
- ・かわいらしい赤ちゃんの姿を観て癒され、自分の子どものことをより愛おしく思う。

〈お知らせ方法〉

6月初めに家庭教育学級のお知らせを掲示する。前年度、参加者が少なかったのをより多くの保護者に参加してもらえるように、お知らせの仕方も工夫した。

笑い声や驚きの声などがあり、やわらかい雰囲気の中でみんな楽しく観ていた。

- ✿Aさん：お母さんが育児をするのはどこの国も変わらない。裕福な国はお父さんも子育てに参加している。
- ✿Bさん：日本はきれいにしすぎかも…。育つ環境は違っても成長過程は一緒だなあと思った。
- ✿Cさん：毎日家の中ではいっぱいいっぱい余裕がないけれどこれを観てもう少しゆとりを持って育てていいのかなあと思った。



〈ミーティング〉

自己紹介後、育児についてみんなで話す。

- Kさん：子どもが男兄弟で、けんかが多い。喧嘩の止め時がよくわからない。男の子だからなのか、私自身はもっと子どもと関わりたいと思うけど子どもの方は、ちょっと冷めているところもあって思うように関われない。このまま子どもが大きくなったら離れていくばかりで自分たちのことは見放されるのではないかと不安。

保育士：(唯一、父親で参加しているYさんに) お父さんどうですか？

Yさん：自分達が同じくらいの年代の友だちと集まった時は「お母さんって大事だなあ」って話をしますよ。男はマザコンですから…。

保育士：お父さん、男兄弟いますか？

Yさん：兄がいます。

保育士：小さい頃は喧嘩していましたか？

Yさん：兄とは4つ離れていたのだから絶対かなわない相手だから、自分は武器を持って喧嘩していました。怒られる時は両方とも怒られていました。兄は「お兄ちゃんなのに」と怒られ、自分は「あなたも手を出すからでしょう。」と言って怒られていました。



〈考察〉

ミーティングについては、思いのほか和やかな雰囲気ではしゃべることができた。日頃の子どもの様子や悩みごとを話し解決策は出なくても保護者同士で気持ちを共感することが出来ていた。保育士は話のつなぎ役になり、色々な保護者の悩みを引き出すようにした。

②アロマキャンドル作り

日時：10月26日(土) 参加者：母親5人 学生2人
10時～12時 パート職員2人

●ねらい

子育てから離れ、普段はできないアロマキャンドルという癒しの時間を過ごし、心身共にリフレッシュする。

〈お知らせ方法〉

前回と同様、参加者募集のプリントとフォトフレームで製作過程の紹介をする。今回は、それらに加え、実物のキャンドルを玄関に飾る。



〈キャンドル製作中の保護者の反応と感想〉

キャンドルの色の選びやロウが固まっていく様子など和気あいあいとした雰囲気の中で行われた。

✿Aさん：日頃、家ではできないことができて楽しかったです。

✿Bさん：もともとキャンドル作りに興味があったので良い機会を頂きました。

✿Cさん：家では、息子2人を抱え、毎日子育てと戦っている中、こういった女子的な時間を過ごせて良かったです。二度とない時間だと思います。(一同笑い)



〈考察〉

キャンドル製作は、参加者全員楽しむことができていた。前回と同じ製作後、ミーティングの時間を設けた。自己紹介をしてもらったが、その時に母親Sから「人前で話すのがとても苦手なところが嫌いだ」という意見が出た。その後の話しも特に盛り上がりせずに終わった。後日、Sさんには「嫌な思いをさせてすみませんでした」謝った。Sさんは、特に気を悪くしている感じではなかったが、「次回は、ミーティングがなければ参加します。」と言っていた。Sさんのような保護者に対してどのような配慮をするかが次回の課題となった。

他にも、参加保護者から「もっと人数が増えた方が楽しいのではないかな？雰囲気がわからず、参加したくても躊躇している保護者がいるのではないかな？」という意見があった。それを踏まえ、今回は製作時の様子や出来上りの写真をエピソードと共に玄関に提示した。



③スクラップブック

日時：2月8日（土） 10時～12時

参加者：母親5人、小学生1人

●ねらい

普段、家庭ではなかなか取り組むことができないスクラップブック 製作を体験することで育児から離れ、趣味を楽しむ時間を持つ。

〈お知らせ方法〉

製作過程の写真がない為、今回はフォトフレームを使わない。出来上がりのスクラップブックを飾っておく。



〈スクラップブック製作の保護者の反応と感想〉

スクラップブックの先生の話真剣に聞き、取り組む保護者達。特に、飾りの材料を選ぶ時間になると、各々自由に席を立ち、どんな飾りを使うか、どう配置するかなど没頭している様子だった。



❖ Aさん…家ではこんなに材料がそろわないので良かったです。

❖ Bさん…持って帰って、子どもの写真を選ぶのが楽

しみです。

❖ Cさん…家では、アルバム作りなど好きなので楽しい時間でした。

〈考察〉

当初の予定では、1時間をスクラップブック製作、その後30分をミーティングという計画だった。しかし、スクラップブック製作が思っていた以上に時間がかかり、2時間を要してしまった。

その為、ミーティングの時間が終わった保護者から順次立ち話をして帰って頂くような形になってしまった。今回はコーヒーを準備し、今までとは雰囲気を変えたミーティングを行うことも出来たが今回のようにミーティングをなくして保護者が納得できるまで取り組めたことも良かったと思う。

また、前回「ミーティングが嫌だ」と言っていた保護者に対しては、前もってミーティングに参加しなくてよいという事を伝え、安心して参加してもらえるよう配慮した。



《事例2》

◎個別の支援

T・Sくんの場合

平成22年9月生まれ

家族構成 父・母・祖母（父方）・弟（4ヶ月）

母親の状況

弟の育児休暇中で送り迎えは、ほとんど母親が行っており、担任と接することも多い。

4月

母親が迎えに来ると走って逃げるSくん。それを追いかける母親。「帰りたくない」というSくんに対しイライラしている様子。母親の様子が気になるが4月なので送迎時を利用して積極的に会話をしてなるべく母親の気持ちに共感しながら信頼関係を築いていくようにした。

5月

母親の方から「先生、相談があるのですがいいですか？」と声をかけられた。Sくんの家庭での様子について話し始める。

- ・家で怒られると癩癩を起して「ママ、ママ」と泣きじゃくる。
- ・全然言うことを聞かず家で怒ってばかりいる。自分もSに対しイライラしてしまい、つい叩いてしまうこともある。叩いてしまった事は自分でもいけないことだと分かっているがイライラするのでどうしたらいいのかわからない。他にも、自分が一緒に遊んだ方がいいと思っているがどうやって遊んでいいのかわからない。お父さんも普段は仕事で疲れているので、遊ぶことはない。泣かれるとお父さんもイライラする。など、沢山の悩みや不安を打ち明けられた。

保育士の対応

母親の話しを終始聞き手に徹して「うんうん」とうなずく。たたく行為はいけなことだが、その母親の行動をとがめることはせず、「叩きたくなることもありますよね」と共感する。話しを聞きながら答えを出していくようにした。

〈悩み1〉

戦いごっこをする時に割りばしを持って戦うので取り上げるとすぐ泣くんですよ。

保育士：「割りばしの代わりに新聞紙を丸めた剣を作ってあげたらどうですか？」とアドバイスした。

母親：「そんな事思いつきませんでした。今度やってみます。」と驚いていた。

〈悩み2〉

はさみを使いたがるので、広告を与え切っているが途中から絵本まで切り始める。その事を怒ると泣くんですよ。

保育士：「はさみを持たせる前に切っているものと悪いものを教え、約束をしてから切らせてみてはどうですか？」

母親：「それはやったことがなかったです。」「集中してはさみで切っているが、切り刻む行為は何かストレスがあるのでしょうか？」

保育士：「それはいいですよ。今、興味があるので集中しているんだと思います。」

話し終わった後には、「すみません、先生、長々とありがとうございました。」と言う母親。保育士からは、「いつでも話して下さいね。」と一言添える。いつでも話は聞きますよといった姿勢を示しておくことがSくんの母親にとっては必要なのではないかと感じた。

次の日の連絡帳には、「昨日は（Sが）あまりぐずらない良い子でした。先生がSに何かお話してくれたのか

なあ？と思うくらい」と書いてあった。実際には、保育士からSに何も働きかけはしてない。母親が、自分の思いを保育士に吐き出すことでSくんに対するイライラが軽減されたのではないと思われる。母親の気持ちが軽くなればそれが子どもにも良い影響を与えるのだろうと感じた。

6月

担任の保育士が母親が喜ぶだろうと思い、Sくんが保育園で頑張っている様子を積極的に伝える。「着替えや靴を履くなど自分のことは自分で行うようしていますし、園ではとてもお利口ですよ。」などと伝えた。

数日後、登園時、事務所横の玄関でイライラする母親を見て、主任保育士が声をかけると「何も自分で行うとしないんです！！保育園では、自分で靴をはいているのに！家では全くはかないんです。」とすごい形相でSくんに対し怒っていた。

Sくんを担任に預けた帰り、主任保育士が母親に「Sくん、大丈夫だった？」と声をかけると、母親は家で身の回りのことを何も自分でしようとしないSくんに対してイライラすることなど話してくる。主任保育士が「まだ、2歳だし甘えさせてもいいんじゃないですか？」と話しをすると、「甘えさせてもいいんですか？」と驚いていた。同じ日の降園時、母親がSくんに笑顔で靴をはかせ、Sくんも嬉しそうにしていた。主任保育士と話した事で肩の力が抜けたような母親の表情だった。担任は、母親が喜ぶだろうと思いSくんの出来る事を伝えていたがかえってそれが母親を追い詰めていたことに気づき、反省した。

7月

家庭教育学級に参加するSくんの母親。「ベイビーズ」を観ての感想では、「あまり細かい事を気にせずに育児していいんだなあと思いました。赤ちゃんの横で掃除機をかけてもいいんですね。」と話していた。ミーティングでの様子では、他の人が話しているのを聞きながら笑う場面も見られるが、自分から何かを話そうとする様子はない。人前で話すのが得意ではなさそうなので、保育士もあえてSくんの母親に話しをふらず様子を見ていた。家庭教育学級に参加した、NさんとKさんは子どもが男の子（6歳・4歳）と（8歳・6歳・3歳）ということもあり、Sくんの母親と育児で重なる部分がある。

（NさんとKさんの話し）

「子どもが男兄弟だからけんかも動きも激しいですよ。家が壊れるんじゃないかと思うくらい。怒る時の自分の言葉は激しくなるし、手が出ることもありますよね。よく、自己嫌悪におちています。」

この会話の内容は、以前、Sくんの母親が保育士に相談してきた内容と同じような悩みだった。

ミーティング後、保育士がSくんの母親に「今日は、

他の方の話を聞いてどうでしたか？」と声をかけると、Sくんの母親は、「良かった。(NとKの話を聞いて)何年か後には、あんな感じになるんだろうな…と思いました。」と話していた。

このミーティングを通し、Sくんの母親が「悩んでいるのが自分だけではなく、同じような家庭が他にもあるんだ」という事に気づき、悩んでいる気持ちが少しでも楽になってくれたら嬉しく思う。

(考察)

現在も何か悩むと保育士に「ちょっとお話ししてもいいですか？」と話しをしてくるが、その内容は様々でSくんの事、父親の事、時には姑の愚痴を話してくることもある。話しをする事で少し気持ちが楽になるSくんの母親。保育士側が「いつでも話を聞きますよ」という姿勢でいる事の大切さを感じ今後も続けていこうと思います。

V. まとめ

今回、子育て支援という課題を通して支援とは何かという事をしっかりと考える事が出来た。

前年度の家庭教育学級では、育児について学ぶ場として開催されたが、今年度は、保護者が育児から離れリフレッシュする場、また、保護者同士で育児について話す場として開催した。参加人数は、それ程多くはなかったが、終わった後には「楽しかったです。」「来年も続けてほしい」など、保護者の喜ぶ顔を見る事が出来、私たち家庭教育学級を開催した事に手応えを感じる事が出来た。

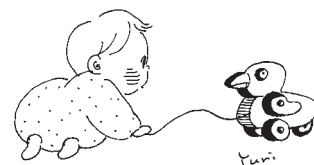
今後の課題

- ①家庭教育学級という固い名前では躊躇してしまうのではということもあり、一目見て誰もが行ってみたいと思うようなキャッチコピーを考える。
- ②保育士から発信するばかりではなく、保護者同士で誘い合い保護者サークルのように一緒に学級をつくるようにしていく。
- ③最後のミーティングの中で、食べ物、飲み物を出していく。
- ④参加人数にこだわらず、継続することを大切にしていく。という点に留意しながら今後も取り組んでいきたい。

また、事例②にあげたように個別への支援にも取り組んだが、他にも支援を必要とする保護者は沢山いた。育児の悩みを聞く事が支援になるだろうと思っていたが、実際に保護者と話しをすると悩みは育児だけに留まらず、仕事や家庭の中の事など多岐にわたる事が分かった。中には、迎えに来ると「ただいまー。疲れたー。」と保育室に座りこみ、15分くらい保育士と話しをして帰る保護者もいる。大切な事は、保護者の背景を読み取りながら会話する事ではないだろうか。私たち保育士は、子どもたちだけではなく保護者も一緒に包み込み、癒しを与えるような存在で今後もありたい。

参考資料

- ・「新 幼児と保育」 小学館
- ・「もう一つの子育て支援 保護者サポートシステム」 フレーベル館



2. 総評及び講評

総 評 委員長 藤 澤 良 知

作品別講評 委 員 小 林 芳 文

石 川 昭 義

井 桁 容 子

酒 井 かず子

日 吉 輝 幸

岡 田 澄 子

保育所保育実践研究・報告は平成26年度で第9回を迎えた。応募件数は16件（課題研究部門4件、実践報告部門12件）と件数は停滞気味であるが、実践研究内容は保育界2014年4・5月号で「研究レポートの書き方」についてガイドラインが示されたこともあって、研究報告内容は随分充実されて来たように感じた。調査研究に当たってはガイドラインに示すように、まず目的を明確にし、関係の論文や調査研究報告等を調べる。研究計画をたて実行する、結果の分析検討、考察の手順で取り組む。もとより、保育の専門性の向上に向けて、各園とも努力されておられるが、その成果をまとめ、検証し改善につなげることは、保育の専門性の向上、保育内容の充実・向上のために大切なことである。

1. 課題研究については、①「人との関わり」は2件で実践奨励賞の「子ども達が自分のことが“好き”と思える保育」と、奨励賞の「グループ活動と係活動にチャレンジ」であった。②「遊びと学び」については1件で「実践奨励賞」の「絵本の力」、③「子どもの健康・安全」については1件で「研究奨励賞」受賞の「保育の質を高めるリスクマネジメント～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～」の合計4件であった。課題研究は取り組みに難しさもあろうが、保育の在り方、評価、質的向上など、保育に関する基本的な研究課題であり、取り組みの強化が期待される。

2. 実践研究部門は、日頃の保育実践活動を通じた実践報告で、テーマは自由である。「優秀報告賞」は沖縄県第2愛心保育園の「園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り～職員一人ひとりのよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～」であった。これは次世代を担う保育士をどう育成するか視点に立って、平成21年度から研修を開始、園の理念、目標の再確認、組織の強化策、各人の自己評価、保護者支援等について、新任、中堅、リーダー別の研修、全体の研修を重ね着実に成果をあげられている。

「実践奨励賞」は6件で、①「健康な歯を育む保育の在り方～口腔衛生指導と、歯科医、保護者との連携を通して～」、②「子どもの育ちを支える食育の実践～食を身近に感じるために調理担当者ができること～」、③「職員間の連携を振り返って～リーダーとしての取り組み～」、④「保育における標準化とその手立てについて～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～」⑤「お箸の正しい使い方～手先を使ったあそび、機能との関連性～」、⑥「カルタ遊びを通して思いやりの心を育む」であった。

「奨励賞」は合わせて5件で①「仲間、あそび、自然の中で育ちあう保育～障害児保育の取り組みから～」、②「楽しく食べる～“一口食べてみる”から繋がる“食べられるかも？”の気持ち～」、③「麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり」、④「運動遊びを保育に取り入れて～園内事故防止と体力増進のために～」、⑤「子育て家庭への支援を考える～子育てパートナーとして」の5件であった。このように実践研究は保育の現場での保育実践、事例報告、調査報告等で取り上げるテーマも多様である。日常の多様な業務に追われ、調査研究の取り組みは無理という方も多いと思われませんが、保育を科学する心をもって取り組むと、新しい発見もあり、そこからあなたの保育に寄せる夢も広がります。

講 評

研究奨励賞（課題研究部門）

課題研究③子どもの健康・安全

「保育の質を高めるリスクマネジメント

～ヒヤリハットを共有し事故を回避する～

江藤 治世（大阪府・都島友渕乳児保育センター）

講評：石川 昭義

本研究は、保育園8園と児童発達支援センターを運営し、園児数が1,000名を超える大規模な法人として、事故を回避する体制をどのように構築し、情報の共有を図るかという「リスクマネジメント」に取り組んだ研究である。ヒヤリハット事例の分析は、平成24年度までは各園で行っていたものを、平成25年度からは法人のリスクマネジメント委員会で問題を共有し、各園から集約された事例の分析を行って事故防止に努めた経緯、特に事例報告を増やしたり職員に周知させたりすることの努力は、園の規模の大小にかかわらず他の保育所に示唆を与える取組と評価できる。

各園からヒヤリハット事例を収集し、ケガの種類や時間、場所等に分類してグラフにまとめ、考察を加えたことは評価できる。今後は、リスクマネジメントに係る研修等を通じて、安全対策の具体的な取組を行い、それがヒヤリハットの軽減にどのようにつながっていったかを検証できるように研究が継続されることを期待したい。

講評：酒井 かず子

創立80年の歴史ある法人で、しかも、保育園8施設、支援センター1施設の計9施設の大きな法人で、リスクマネジメント委員会を発足し、組織的に事故防止に取り組んだ研究で、とても興味を持って読ませていただきました。

特に、成長過程である未熟な児童と職員も人間であるので完璧ではない。従って、「事故は回避困難である」ことを前提とし、事故を起こさないようにすることや、再発防止を目標に発足した委員会で、場所、時間、天候、曜日、月、年齢別に怪我の種類を細かく分析をしていま

した。

毎日ヒヤリハットの報告をすることにより、職員の意識付けになる点は同感です。一人ひとりが環境に対する安全配慮や園児の発達に対する視点と安全配慮が事故防止につながると考えます。おそらく次の段階かと思われませんが、物的環境に対する具体的な対策や、人的環境の具体的な対策をとることにより、どのように保育内容の充実向上につなげていくのが大切と考えます。乳児の噛み付き・引っかきは言葉がうまく伝えられない事が原因と考え、転倒は頭が大きくバランスの悪さから足元が不安定であるとあり、その通りだと思いますが、これを保育方法で対応できないでしょうか。子どもが成長するのを待つのではなく、そのような時期だからこそ、少人数制や担当制、部屋の環境も一人遊びが落ち着いて集中して行えるようなコーナー作りをしたり、1例ではありますが、そのような時期もしっかりと対応することがヒヤリハットの効果と考えます。今後、分析を生かした具体的な対策を実施し、保育の充実向上につながることを期待いたします。

講評：日吉 輝幸

子どもの「生命の保持」は、保育所保育指針にも書かれているように保育所の重要な責務であると、すべての保育者が認識しているはずであろう。しかし、保育所という集団生活の場では、どれだけ細心の注意を払っていても、事故やケガが発生する可能性は捨てきれない。故に、如何にして事故につながるリスクを軽減していくかということは、保育所という組織の大命題であろう。

本研究では、多数の保育所を経営する法人をあげて、リスクマネジメント委員会を編成したうえで、各保育所から得られたヒヤリハットの報告を基にして、管下保育所の事故事例の共有化、数値化、分析等を行って事故防止に努めてきたことが記されている。これらは、「生命の保持」という責務を果たすための姿勢として、大いに評価すべき取り組みであり、他の保育所でも是非とも参考にしてもらいたい形式であるといえよう。

最後に、都島友渕乳児保育センターにおいては、集められたデータの分析のみならず、事故やかみつき等の発生の根本的な解決に至るよう、日々の保育の検証も行い、本研究のテーマとしている「保育の質を高める」ということと、リスクマネジメントとの関連性を更に深く研究し実践していかれることを期待する。

優秀報告賞（実践報告部門）**実践報告****「園内勉強会を通して共に育ちあう職場作り****～職員一人ひとりのよりよい資質の向上と保護者支援を目指して～****知念 幸江（沖縄県・第2愛心保育園）****講評：石川 昭義**

本報告では、これまでの園内勉強会の経緯と内容が紹介されている。特に、平成26年度の勉強会は、新任、中堅、リーダー、全職員という4つの職階に分けて、それぞれのテーマで実施された勉強会の様子が報告され、また、職員アンケートの結果も出されている。「共に育ちあう職場作り」という視点から見れば、リーダー的職員は、新任や中堅がどういうことに悩んでいるか、どこに困難を感じているかを把握することが大切であるが、勉強会を通じた問題の把握から助言にいたるプロセス及びその記述は大変示唆に富むものといえる。

もう一つ興味深かったのは、勉強会の時間を保護者の理解のもとで設定していることである。園長は、保護者に対して勉強会の開催を説明したり、その内容について園便りを通して伝えたりしている様子がうかがえる。こうした保護者の理解が保育士の資質向上を支えているともいえるが、同じような課題を抱えた他の保育所にとって参考となる取組といえる。当園では、保護者と保育士が一緒に参加できる内容の勉強会の開催も視野に入れているとのことであり、今後の職場作りの新たな展開に期待したい。

講評：酒井 かず子

過去の園内勉強会の取り組みから、平成26年度は新任、中堅、リーダーに分かれて勉強会を進め、課題改善に繋げ、組織の強化に繋がることを目標として取り組みを始められました。その内容から、それぞれの立場からの悩みや相談したいことなどが明確になりました。日頃は保育に追われていて、思いはあってもなかなか時間が取れずに過ごしていたことが、今回の勉強会により、改めて理解することに繋がったり、その中での課題が見つかったり、的確なるアドバイスに繋がったりと、職員一人ひとりが目標に向かって向上心を持ち、充実した勉強会が出来た様子が分かりました。この勉強会の積み重ねが園児や保護者へと繋がりますので、継続していくことの大切さを実感しました。そして、園内勉強会はどこの保育園でも実施していると

と思いますが、貴園ではその内容をレポートにまとめ、日保協の「保育所保育実践研究・報告」に発表されていて、この作業により、さらに勉強会の内容が整理され、課題が浮き彫りになり、次の課題が明確になってきます。この地道な努力が大きな差となり、貴園の組織の強化になることを確信しました。今後も続けられることを期待いたします。

講評：日吉 輝幸

毎年テーマを持って、継続的に保育士の資質向上のための取り組みを行っていることに加え、第三者評価の受審結果を踏まえて、個々の意識向上が組織の強化につながることを念頭に、園内研修に取り組んでいることは他の保育所の模範となるのではないだろうか。「次世代を担う保育士の育成」は、保育の連続性や継続性を考えたときに、すべての保育所の取り組むべき課題だと筆者は考えるものである。

第2 愛心保育園では、「保育クレド」の読み合わせをとおして、保育理念や保育目標の共有化を図っている。この取り組みは簡単なようだが、取り組んでいる保育所は少ないようだ。また、近年、このように理念や標語を声に出すことの有効性が見直されているとも聞く。加えて、保育士の経験や立場毎の勉強会も積極的に行っており、「育ちあう」というテーマの下、資質向上のための取り組みを真摯に行っている様子が見て取れ敬服する。

最後に欲を言わせていただければ、園内研修を行ってきた結果、個々の資質がどのように向上し、保護者支援にどのような成果をあげたかを詳細に記述していただきたいと思った。今後とも全国の保育所の模範となるべく、研鑽されることを期待している。

実践奨励賞（課題研究部門）**課題研究①人との関わり****「子ども達が自分のことが“好き”と思える保育」****岩谷 裕子（京都府・福知山保育所）****講評：石川 昭義**

近年、幼児期から自己肯定感を養うことが保育の課題の一つになっており、本研究の問題提起の意義は大きい。「子ども達が自分のことが好きと思える保育」を研修のテーマとしているが、最初に、「保育士自身の好きなところ嫌いなところを記載する」、「私から見たあなたの良いところ」というテーマで保育士自身の研修から始めているところが特徴的である。まさに、心理学で引用される「ジョハリの窓」を思わせる園内研修が実践されている。「今後は、この研修で職員が感じた『認められる』という経験からの心地良さを、子ども達に『どのように伝えるか』『どのような伝え方が良いか』ということが園内研修のカギになる」と連動させて考えているところが評価できる。

この認識が、事例として挙げられているような、気になる子どもをめぐるグループ討議にも反映されていると思われる。今後は、園内の複数の研修が、どのように子どもの自己肯定感を養う具体的な保育につながっていったのかについて考察を深めていくことが期待される。

講評：岡田 澄子

本研究は、園内研修6年目の実践研究です。子どもたちが「自分のことが好き」と思える前に、保育士自身が自分の好きなところ嫌いなところを記載してみたり、職員同士で好きのところや良いところを手紙に書いて渡し合うなど、お互いを認め合うことにより職員同士の信頼関係や繋がりがより深まったようです。職員間の信頼関係や繋がりは、保育するうえで何よりも大切なことですが、思ってもなかなかできずにいることの方が多いように思います。

その後、気になる子（自信のない子、もう少し自信をつけて欲しいと思う子）の姿を捉え少人数のグループで討議していきました。それにより、その子に応じた関わり（声かけ）を意識したり、継続的な見守りをしたために予想していたよりも変化（成長）がみられたようです。

今後さらに園内研修で学んだことを生かし、保育園職員として一人ひとりの資質向上、自己研鑽に励まれることを期待いたします。

6年前から資質向上を目指して、職員の園内研修に取り組み、今回は「子ども達が自分のことが好きと思える保育」をテーマに、子ども達のやってみよう、できたという体験の積み重ねから生れる自信へと導くため、子どもの良い行動をほめ、励ますなど、保育士との関わりの中から生まれる自己肯定感をいかに引き出せるかについて努力されている。また、保育の中での気づき、気になる子どもへの関わり方など対応についてグループ討議を行うなど前向きな対応をされている。

職員の自己肯定感の高揚に向けた対応として、ラブレター（好きなところ、嫌いなところ、私が見たあなたの良いところなど）の交換を通じて信頼感を高め、また、子どもの潜在能力をいかに伸ばすかといった積極的な対応をされている。子ども達の育つ力を伸ばすには、自発性、好奇心、興味、やってみたいという意欲などいかに伸ばすかが大切と思われる。

子どもは本来自ら育ち、生きる力を持っており親や保育者はこの子どもの自ら育つ力をいかに支え伸ばしていくかが大切で、この活動はこの趣旨に沿った素晴らしい活動と思われる。益々の発展を期待したい。

実践奨励賞（課題研究部門）

課題研究②遊びと学び

「絵本の力」

中嶋 耕平、岩島 愛美、千澤口 裕未、井上 亜矢香、高村 紗耶加

（大阪府・都島桜宮保育園）

講評：井桁 容子

普段の保育のなかで活用されている絵本が、どのような形で子どもたちの成長発達や遊びにいかされているかに着目した研究報告です。身近なものから発見や気づきを見出す姿勢が、保育の質を高める動機づけになる可能性を感じさせられました。

たとえば、子どもたちの気持の反映、選択する絵本や感想から見られる個性を上手に受け止め、ダンゴ虫探しに夢中になっている3歳児にたいして、タイムリーに絵本を活用し、探すコツにつなげたり、絵本には描かれていないダンゴ虫の生態に気づくきっかけづくりになるなどの実践は素晴らしいです。絵本コーナーの活用しやすい工夫もなされているので、親子の関わりのひと時に効果が期待でき、さらに、絵本は保育の中でとかく保育者側が“読み聞かせる”姿勢になりがちなところを、多様な活用法に意味を持っていることも大切な視点といえます。よい取組をされているのですが、実践研究であるので主観的な感想にとどまってしまい、内容の論旨が明確に表現しきれなかったことが惜しまれます。

講評：小林 芳文

この研究は、保育の中で、絵本をどのように活用しているか、子どもの成長の上での絵本の力について、仮説としての四つの側面について考えられた興味あるレポートでした。子どもとの関わりで、まず「感情との出会い」についての設定に興味を持ちました。乳児クラスと5歳児クラスの事例を挙げ、「かお」と「ともだち」の絵本を対象に整理されていますので、それぞれのクラスでどのような感情があり、保育士のどのような言葉がけで、どう子どもが変容するのか、そこから保育での絵本の活用のあり方を研究しています。この事に絞ってもう少し細かくレポートしていただけたらさらに良いものになったように思います。「絵本広場の取り組み」の所を中心に、研究レポートを作成されるだけでも、大変重いレポート、保育力アップに向けての意義ある研究になったと思います。

日々行っている既成の保育を見直すという作業は、とても大切なことであるのだが、なかなか思うように取り組めない作業でもある。研修で学んだことを職員間で共有するということは、大変な苦勞があると思うが、都島桜宮保育園では、これまでもおもちゃや遊びの提供について、職員間での話し合いの機会を多く持ってきたとのことで、まずはその取り組みに敬意を表したい。

今回の研究についても、「絵本は読むもの見るもの」といった固定概念を払拭した上で、保育を行う中で、絵本が子どもの成長に与える力について考察している。その過程においても、職員間での話し合いの機会を持ち、絵本の持つ力について、道徳性、知識の育成、集中力、想像力などと定義付けている。そして、日々の保育の中で、これら絵本の持つ力がどのように生かされているかを検証しつつ、保育を振り返っていることが大きなポイントである。絵本は、子どもの国語の力の基礎を育てる重要なツールであるが、「読むもの見るもの」といった使い方だけではなく、如何に子どもの身近なものとして、子どもが絵本と親しむ機会を持てるかということも大切であろう。

絵本のみならず、保育活動の一つ一つを客観的、論理的に検証していくことは、多くの保育所に求められることだと筆者は強く思う。都島桜宮保育園においては、今回の研究事例を参考にして、他の保育活動の検証も行っていただきたいと願うものである。

実践奨励賞（実践報告部門）

「健康な歯を育む保育の在り方

～口腔衛生指導と、歯科医、保護者との連携を通して～

後藤 しのぶ（仙台市（研究会員）・仙台保育所こじか園）

講評：岡田 澄子

仙台市が平成19年度より幼稚園・保育所で行われている歯科健康調査の調査基準を統一し、検診の結果を一元的に集約分析し、むし歯予防の推進に活用する取組を開始する以前の平成10年度より年2回実施の歯科検診を、登園時に保護者立ち合いで行っている保育園。この報告書を読み始めてすぐに、羨ましいなど声に出してしまいました。歯科医と検診の日程を合わせるだけでも大変なのに、それを保護者立ち合いで実施することは、歯科医、保護者の理解があるのでしょうか。また、定期的に「歯の日」を設定したことにより、子どもや保護者が以前より歯を大切にする意識が高まったのではないのでしょうか。

歯科健康検診の結果がよくなっているが、生活習慣においては改善までには至らず、家庭と連携を図ることが難しいという課題も残されたとあります。

継続は力といいます。機会があればその後の成果もご報告いただければと思います。

講評：日吉 輝幸

生後6か月頃から乳歯が生え始め、3歳頃に生えそろう、6歳前後に永久歯である6歳臼歯から生え変わり始める時期と、子どもが保育所で生活する0～6歳の時期は、奇しくも重なっている。「どうせ生え変わるから」と乳歯のむし歯を放っておくと、永久歯に悪影響を与えることはいうまでもない。乳幼児期における口腔衛生は、後の健康を左右する大きな問題といっても過言は無いと思われる。

仙台保育所こじか園では、仙台市の歯科健康調査の結果を受けて、健康な歯を育む取り組みを行っている。その内容のうち、保護者立会の歯科検診の実施については特に良い取り組みだと思った。保育所の努力だけでは、子どもの健康は守れない。家庭との緊密な連携、すなわち家庭の理解や協力が必要である。そのためにも、保護者の意識を変えていくことと、意識の継続が重要であろう。また、染め出し等により、子どもが興味や関心を持つこと、それを口腔衛生への意識付けに昇華させていく取り組みも適切であると思われた。

子どもの歯磨きは、大人の介助を必要とする部分も多いため、如何に継続的かつ自発的に歯磨きを行えるか、一人ひとりへの働きかけや指導方法についても探求を続けていただきたい。

講評：藤澤 良知

仙台市では、平成19年度から幼稚園、保育所の歯科健康調査基準を統一し健診の結果を集約分析し改善に努めている。平成23年の4歳児のむし歯有病率をみると、当園は20%も上回っており、改善に取り組むこととした。4歳児についてむし歯になる原因、理由を理解できるよう説明した上で、うがいの仕方、歯ブラシの選び方、染め出しの実践、歯の日の設定（4歳児は毎週水曜日、5歳児は月1回）、フッ素洗口の実施、更に保護者と嘱託歯科医との連携を図るなど積極的に取り組んでいる。しかし、子どもの関心は高まったが持続することの難しさを実感されている。

活動を通じて保護者意識は高まり、仕上げ磨きやフッ素洗口を取り入れる家庭も増え、2年間にむし歯有病率は20%下回るなどの成果も見られた。また、歯に関心をもつ、歯を強くする食べ物、よく噛むことの大切さ、歯磨きの仕方、仕上げ磨きなどを通じて子ども達が自分の歯を守るという意識が高まり、また、保護者の意識の改善がみられるようになったことは大きな成果と思われる。実践事例は貴重な成果の足跡である。今後とも健康な歯を育む保育を目指して頑張ってください。

実践奨励賞（実践報告部門）

「子どもの育ちを支える食育の実践

～食を身近に感じるために調理担当者ができること～

大森 美和、峯村ひで子（埼玉県・与野本町駅前保育所）

講評：岡田 澄子

親を巻き込んだ食育。素晴らしいことだと思います。さらに、研究の担当者が保育士ではなく、栄養士、調理師なので視点も違っていいと思います。

食材紹介も斬新な「あさり」の話。海のない埼玉県ならではのしょうか。子どもたちが興味津々であさりに触っている姿が目には浮かびます。

月に一度の「世界の料理」は、日本と世界を比較した説明をしたり、収穫したバジルやピーマンを使ってタイ料理などを紹介しています。また、チャイルドクッキングでインド料理のナン作りをしたり、世界のレシピばかりではなくごはんを作るのが苦手な保護者にも簡単レシピを提供するなど、保育園での食育が家庭にも広がり親子で楽しめるものになっていると思います。保護者からも嬉しい感想が寄せられて、保育園と保護者との信頼関係も良好であると窺えます。

なにより、園児が保護者と収穫できる大きなぶどうの木がある「おひさま農園」が羨ましいです。自分たちで育てた野菜は、まさに地の恵みですね。今後も保護者を巻き込んだ食育を推進してください。

講評：酒井 かず子

都市部に位置し、長時間保育の園児が多い中、家庭での食事に不安が大きく、子ども達や保護者に「食べるっておいしい、楽しい、大切」と思ってもらえるように栄養士と調理員が考え、行動に移したことは大きく評価いたします。

まず、各保育室に入り一緒に食事をする事で子どもの様子を把握し、献立や調理の工夫をし、各種会議を通して保育士との連携をとり、保育に結びつけ、より効果的に進められている様子をワクワクしながら読ませていただきました。

子どもの様子から、あさりの生体等を知らせ、味噌汁にして食べたり、貝殻を使用して作品にしたり、また、サッカーに興味を持っていることを受け、世界の料理に結びつけたり、野菜

を栽培し、収穫し、クッキングをし、食べるところまで、一貫した取り組みの楽しそうで嬉々とした子どもの様子が目に浮かびました。時間に追われている保護者も、簡単レシピにより、家庭で作るきっかけとなり、アレンジまでできるようになり、大成功ですね。これにより、家族団らんで食事を楽しむ子どもが増え、心豊かな子どもに育つことでしょう。今後も豊かな食生活を目指して取り組んで行かれることを期待しています。

講評：藤澤 良知

子どもにとって食事はおいしく、楽しく、大切なことを、子ども達によくわからせるために、いかにして子ども達に食への興味を持たせるか、保護者に食の大切さを理解してもらえるよう努力されている。調理担当者は、昼食時やおやつ時に2～3歳児の縦割り保育のクラスに入って、一緒に食事をし、喫食状況の把握、食材や調理方法の紹介に努めている。また、あさりの調理から貝殻のオブジェづくり、お絵かきをするなどの保育活動につなげている。

子ども達が国旗や世界地図、サッカーに興味を持っていることから、月に1度外国籍の保護者や外国レストランの保護者の協力のもと「世界の料理」を取り入れて、その国の料理の特徴とか、食材、食べ方を紹介し関心を高めている。保護者にもレシピを配布したところ家庭でも各国の料理を作って食への関心が高まっている。

豊かな食体験をつみかさね食べることの楽しさ、おいしさ、大切さを身に着け、体と心の育ちを支えていきたいとの願いのもと良く頑張っておられる。

実践奨励賞（実践報告部門）

「職員間の連携を振り返って～リーダーとしての取り組み～」

斉藤 直美（東京都・そあ季の花保育園）

講評：井桁 容子

保育経験2年目で、経験者でも難しいと言われる1歳児保育のリーダーを任された著者が、保育中に起こったアクシデントや保護者からの意見やクレームの一つ一つを素直に受け止め、即座に職員間で話し合いを繰り返し、保護者、職員間、子どもたちとの信頼感を築いた実践記録です。実践報告の多くは成功を報告するものですが、この実践にはドキリとするようなアクシデントが挙げられるなかで、「(中略)職員一人ひとりが、常に子どもの姿を監視している状態になっていたことに気付く。子どもたち一人ひとりをもっと知ること、子どもの気持ちに寄り添うことに気付く」と振り返り、手作り玩具作りへと実践が進化していく様子が見事です。その間も新任同士で十分に話し合うことも繰り返されて、「自分を振り返るくせをつけるように、自分の言葉で会議に参加し、発言する機会も作った」と、お互いに高め合っていました。素晴らしい同僚性と言えます。

待機児解消を目的として、新設保育所が増えている昨今、似たような状況にある保育所も少なくないと危機感を覚えています。この実践報告にある危機管理はそれらの園の方々の参考に役立つと思いますので、私は高く評価いたしました。

講評：石川 昭義

この報告は、保育経験2年目で1歳児クラスのリーダーを任されるという勤務の現状及び新卒保育士2人と非常勤職員等を含めて5人の職員をまとめる立場の苦労が読み取れる興味深い内容であった。「私自身」だけでなく、「他の保育士の不安な気持ちが子どもたちや保護者にも伝わってしまい、毎日安心して過ごすことが出来なくなってしまう」と考えた著者が、そうならないように奮闘するリアルな動きが伝わってくる報告である。たとえば、デイリープログラムの作成、アクシデントの対応の再確認など、一つ一つの事例は若手の保育士を成長させ、職員間の関係を築いていく過程として読み取れる。

研究のまとめとしては、「報告・連絡・相談・確認」の重要性を指摘するやや一般的な内容

にとどまった感がある。今後は、事例で紹介された、保護者からの意見やクレームを契機としながら、リーダーと若手の職員との連携、管理職と若手との間をつなぐリーダーの役割について考察を深めていくことが期待される。

講評：日吉 輝幸

保育経験2年目でクラスリーダーを任されるということは、とても大変なことであろうと推察する。そあ季の花保育園は、新設2年目の保育所ということが記されている。同一法人で別の保育所も経営しているようだが、単独の保育所として見ると運営実績が少なく、本報告以外にも若手保育士を中心として、日々奮闘されているであろうことにエールを送りたい。

リーダーとして責任を持つという経験をして、それを報告書にまとめるということは、自分自身を客観的に見直すということが必要になるのではなかろうか。本報告書からは、経験の浅い保育士がクラス運営で奮闘している様子が垣間見れ、その労苦をひしひしと感じた。

本報告について、「実践報告書」として評価すると、いくつかの事例に際し、リーダーとしての取り組み（考えたこと、行ったこと）と、それが職員間の連携にどのように役立ったかという部分を、もっと深く掘り下げて報告していただきたいと思った。それらが大変な思いをしたという労苦の報告で終わってしまうのではなく、報告者の貴重な経験であり、保育士としてのやりがいであると思えるようにと、期待するものであることを添えさせていただく。

実践奨励賞（実践報告部門）

「保育における標準化とその手立てについて
～0歳児のおむつ交換を通しての標準化の必要性とその意義～」
浅香 聡彦（石川県・大徳保育園）

講評：井桁 容子

高い保育の質が求められる昨今、さまざまなアプローチで質の研究がなされています。

この実践報告は、おむつ交換に焦点を当てた大変ユニークな視点で保育の質についての標準化に取り組まれていると思います。論旨にもブレが無く資料もしっかりと整えられ分かりやすく表現されていたことが素晴らしいと思います。また、具体的な実践では、おむつ交換の前に、保育者が子ども一人ひとりの排尿間隔を掴むことから努力していることや、交換時にていねいに言葉をかけていくこと、予告をしながら応答的に関わっていくことも、ただの作業に終わらせないという質の高い関わり、さらに、衛生管理としての環境設定も評価できます。しかし、この実践の標準化の見事さは、おむつ交換のスキルであることを確認しておきたいと思います。生後1、2ヶ月でもかなりの認知力があると言われている乳児は、おそらく、この声、この抱かれ具合など、一人ひとりの大人の違いは見抜く力がありますので、それらの能力に対して、尊厳を持って関わるとすれば、全員が全く同じセリフ、同じ手順でなくても、混乱することはないのではないかと私は考えます。パターン化を保育者が過剰に意識することにならないようにと願います。

講評：岡田 澄子

「選ばれる保育になるために」というテーマを設定し、研究を始めた保育園。0歳児に焦点を絞ったおむつ交換。

保育園でのおむつ交換は、いかに早くするか、無駄なくするかと忙しく動く保育士の姿を思い浮かべますが、子どものための、子どもが主体となるおむつ交換を目的とし、おむつ交換マニュアルの導入や確立、わらべうたの導入などでおむつ交換が子どもと大人の共同行為に変わっていったと報告にあります。しかも、マニュアルには書いていない保育士の適宜な言葉かけも生まれたようです。

資料として添付されている、おむつ交換①「歩行の安定しない子の交換」マニュアルは、カ

ラー写真入りのもので、手順が詳しく記載されているため、急に担当が代わるがあっても対応できる解りやすいものなので、経験の浅い保育士にも重宝だと思います。

今、インターネットなどでおむつ交換のマニュアルが手に入る時代になりましたが、個々の保育園で、保育士が試行錯誤をしながら作ったマニュアルは、その作成の過程が貴重なものになったと思います。

講評：酒井 かず子

選ばれる保育になるために、保育の質の向上が重要であり、保育士の経験年数やその他の個人差を標準化するためにおむつ交換に焦点を当て、マニュアルを作成し、子どもも保育士も楽しくおむつ交換ができるようになったとの報告に共感し、感心しました。おむつ交換により子どもとの信頼関係を築き上げ、おむつ外しへと繋がっていきますので、とても大切な行為だと思っています。そのことに気がつき、焦点を当てたことに感心いたしました。担当保育士と意見を交わし、大人のためのおむつ交換から子どものためのおむつ交換へと考え方を180度転換されたことは、頭ではわかっているにもかかわらずなかなか変えられない中で、上手に転換されましたね。その部分のサポートにもしっかりと時間をかけて修正をしながら作り上げたマニュアルは保育園の宝物ですね。特に写真付きは大変にわかりやすく、新人保育士でもすぐに実施可能なまとめ方となっています。

今後も子どもの成長や変化に合わせてマニュアルも成長をしていくことが楽しみです。

実践奨励賞（実践報告部門）

「お箸の正しい使い方～手先を使ったあそび、機能との関連性～」

大森 千代美（鹿児島県・建昌こぎく保育園）

講評：井桁 容子

これは、新設保育園の混乱の中、3歳以上の子どもたちの食事のマナーの習得率の低さ（椅子の座り方、食べこぼし、器を持たずに食べるなど）を問題点として、家庭と面談をしてその背景を把握した上で、指先、手先を使ったあそびを積極的に取り入れた実践の報告です。ややもすると、箸の持ち方そのものの訓練をするという視点になりがちなところですが、結果を急ぐことなく、子どもたちに自然な興味を持たせ楽しく取り組める遊びや環境設定の工夫が見事です。また、一人ひとりの箸の持ち方を把握しつつ、保育者のかかわり方や対応、考え方が問題解決の大きな要因となるという振り返りも実践の意味を高めた結果と言え高く評価したい実践報告でした。

講評：日吉 輝幸

食事の際、子どもは「上手く食べられないもの」「食べこぼすもの」というのが定説なのだろうか。乳児期にスプーンやフォークの食具を持たせるときは、遊びの際の手首の返し方を見極めてから持たせるという説を聞いたことがある。確かに、手首を上手く返す、動きがスムーズになったときに食具を持たせると、食べこぼしが少ないように思うのは筆者だけであろうか。また、何歳から箸を持たせるのが良いかと聞かれることがあるが、スプーンでも「三指握り」がしっかりできるようにならないと、箸が上手く持てないものであろう。

本報告書では、正しい箸の持ち方を身に付けるために、手指の機能の向上に着目している。手指を使った遊びを実践し、手指の力を育てたり、動きを高めたりしていることは興味深い。そして、これらの実践を経て、乳児期の手指の微細運動の大切さに言及していることは、筆者の見識と合致するところである。また、食事の際のマナーや生活習慣は、当然家庭の影響が大きいことは言うまでも無い。それを改善するためには、すべてを保育所が担うのではなく、あくまでも「家庭と共に」が原則である。今後の取り組みについては、本報告書の最後に記されているように、家庭とのつながりを深め、保護者への指導や協力についても心がけられること

を期待している。

講評：藤澤 良知

新入園児の状況をみると、基本的な生活習慣である食事のマナー（各年齢、発達に見合った）が身につけていない子が多くみられ、その中でもお箸の持ち方、使い方が大きく関係していると考えお箸の正しい使い方の研究をすることにした。

そこで①参考文献をもとに、チェックリストを作成してまず、一人ひとりのお箸の持ち方、使い方を観察した。②どのような遊びが手先・指先の発達につながるか、参考文献で検討した。③手先を使った遊びとして紙飛行機、紐通し、豆つかみ、粘土遊びなど取り入れ子ども達が興味を持って楽しく取り組めるようにした。④手先を使った遊び活動を通じて箸の持ち方、使い方の改善が図られたかをチェックリストにより検討した。⑤手先を使った遊びを沢山取り入れたことにより、お箸の使い方が改善されるようになった。

チェックリストの作成に当たっては、文献をもとに正しい箸の持ち方の研究を重ね、また、手先、指先を使った遊びの実践を通して、お箸の正しい持ち方、使い方を身につけるなど指先の力を育てるユニークな活動をされている。

実践奨励賞（実践報告部門）

「カルタ遊びを通して思いやりの心を育む」

島袋 篤子（沖縄県・愛心保育園）

講評：岡田 澄子

思いやりカルタとはどういうものか、興味を持って読み進めていきました。

市販のカルタではなく、平成21年度より保護者と保育士の二人三脚で作った保育園オリジナルのカルタで、しかも家庭にも配布されていることに驚きました。

ただ単にカルタ遊びをするだけではなく、思いやりチャレンジカードに発展しています。カルタの読み札の中から各クラスでテーマを決め、表を作成し○、×をつけています。5年間も継続していることなので、兄弟のいる家庭では当たり前のようにチャレンジカードに取り組んでいるのでしょう。

「家庭でわがままをしている子が褒められたことで自信がついて明るくより活発になった」と喜びの声が寄せられたようです。

創立32年の歴史ある保育園。美しくたくましい体、豊かな感性、優れた知能をもった子どもに育てている保育の中で、思いやりの心がますます育まれる保育を期待します。

講評：小林 芳文

本研究は、保育園でのカルタ遊びを通して子どもの「思いやりの心」を育むことができるであろうとした研究仮説を、大変解りやすく実践した研究として受け止めました。そのためのカルタ作り、それを使った子どもと保護者を交えての活動、実践の工夫した進め方等、質の高い報告として受け止めました。「遊びを通して楽しく学ぶ」ことは、子どものみならず、保育士、それを支える保護者など全ての人を生き活きさせてくれます。「遊び」を情緒・心理的な発達に軸に据えること、そこに目を向けたことは、保育園ならではの取り組みとして意義を有しています。この実践研究のすばらしさは、その方法にあると思います。全職員での話し合い、家庭からのアンケート、思いやりカルタ作り、家庭での実施、思いやりの意識化に向けてのチャレンジカードやチェック表等の振り返りの展開は、すばらしい方法となっています。

私は、身体運動的な遊びを通して「こころ、あたま、からだ」の全体発達に結びつけた「ム

ームメント教育」という実践を、子どもの発達支援に抱き合わせて行っています。遊びの要素を持ったームメントは、取り分け、障害を持った子どもたちに利益を与えていることも知られています。参考になるようでしたら嬉しいです。

講評：藤澤 良知

遊びを通して楽しく学ぶにはどのような方法があるか職員全体で話し合い、カルタ遊びを通して思いやりの心を育むことこそ保育の原点であるとの理念のもと、思いやりの心を育む保育を保育の柱として、保育士と保護者が協力して6年前に作成したオリジナルな「思いやり子育てカルタ」遊びを通じて思いやりの心がどのように育っていくか、生活の中にいかに浸透しているかを狙いに保護者の協力のもと調査をして検証するなど成果を上げている。また、フラッシュカードやカルタ取りゲームで興味、関心を促し、また、チャレンジカード、チェック表を作成して意識を高める。また、保護者アンケートの実施などしっかりした取組みをされている。

その結果、日頃の生活の中で、カルタの文章の引用した会話が増え、子ども達の思いやり行動がみられるようになったなどは素晴らしいことである。カルタ遊びを通して楽しく遊び、思いやりの心を育むというユニークな活動として、益々の発展が期待される。

奨励賞（課題研究部門）
課題研究①人との関わり 「グループ活動と係活動にチャレンジ！」 武元 善輝（鹿児島県・つるみね保育園）

講評：小林 芳文

この研究は、最近、話題になっている「人との関わり」、コミュニケーションスキルの支援法について、保育園で活用出来る具体的な実践として受け止めました。研究対象をもうすぐ小学校にあがる5歳児に目を向けたことで、発達教育上でも当を得た研究課題となっており、日常保育の活動ともつながりすばらしい研究となっています。「グループ活動」の編成などの方法を色々に工夫したり、ベースからの展開を考えたことすばらしかったです。特に「グループ名」を決める展開は、その様子がこちらに伝わって来ました。子ども同士が自らの力で主体的に、協調的に育っていくことは、このような保育の展開で可能となることが、「実際の遊び」（積み木、リレー、粘土遊び）を取り入れたこと、また「毎日行う係」も設けて自然な方法でつながりをされております。

今後の課題としてあげている「表現力を高める活動」とつながる保育の研究を期待していません。

講評：酒井 かず子

少子高齢化による過疎化の進む地域にあり、園児64人の小規模の保育園で、デジタル保育を先駆的に進める一方で、アナログ保育も大切にし、今回はアナログ保育の実践として、グループ活動と係活動による人との関わりに焦点を当てて取り組まれた研究発表をしていただきました。

この活動により、子どもたちにも変化が見られるようになり、関わりの少なかった子ども同士が少しずつ関わりが持てるようになったり、仲間と協力することや責任を持って行動することができるようになったりと、成長の様子が見え、毎日が楽しかったのではないのでしょうか。

研究の理由として「子ども達同士での関わり」や「自分の役割を持つこと」の2つを挙げていましたが、小規模保育園では一人ひとりの存在感や関わり、役割等が既に日常の活動の中にあり、筆者の目的を十分に満たすものではないかと考えましたが、あえてこの課題を挙げた本

当の理由は、筆者が初めて5歳児を担当するにあたり、自らが未経験であったグループ活動や係活動へのチャレンジであったように受け取りました。悩みながらも懸命にチャレンジし、子どもたちと共に成長していく様子が伺われました。今後も是非チャレンジして、子ども達の成長にあった保育を目指してください。

講評：日吉 輝幸

現代は、多くの企業でコミュニケーションスキルを育成するトレーニングが行われている。コミュニケーションスキルは、人が生まれ持った才能ではなく、基本的ないくつかの法則を習得して実践すれば、誰にでもできるものと考えられているようだが、はたして本当にそうだろうか。

つるみね保育園では、人との関わり（コミュニケーション）に視点を当て、子どもの信頼関係、協調性、主体性、責任感を育むために、グループ活動と係活動に取り組んでいる。そして、グループ活動を行う場面を静的遊び、動的遊びの両面で設けたり、同じ目的を持って遊んだり、また、係活動を通して協力し合う気持ちを育てたりしている。なお、グループ員の構成を変えてみたり、活動の内容を変えてみたりと、意図して経験に幅をもたせようとしていることが感じられ、筆者にはとても興味深く思えた。しかし、残念ながら係活動の記述が少なく、係活動を行う中での子どもの様子が詳細には分からなかった。

冒頭にも記したように、成人期になってからの付け焼刃的なトレーニングがどれほど有効なものかは分からないが、幼少期から人との関わりの中で葛藤し、それを乗り越える経験の繰り返し、コミュニケーションスキルの発達につながるのではないかと筆者は考えるものである。その意味で、つるみね保育園の取り組みは的を射ている取り組みだと思われるので、今後も継続して取り組んでいかれることを期待している。

奨励賞（実践報告部門）

「仲間、あそび、自然の中で育ちあう保育—障害児保育の取り組みから—」

藤井 民子、佐々木 淑子、鈴木 綾、太田 ちはる（北海道・人見保育所）

講評：井桁 容子

発達障害がある無しに、子どもが成長していくうえで困っていることがあれば、そこをどのようにしたら解消できるかを、保育者は支援する役割を担っている専門家です。そのためには、大人側の願いや期待を先行させるのではなく、その子どもの求めていること、困っていることについていねいなまなざしを向けて共感的に関わっていくことが、安心と信頼の基になり、生きる力を育てていきます。また、子どもの心身の安定が保障されていくと、保護者の孤独感や罪悪感も緩和されていきます。

この実践報告の中で、保育者が意欲的に熱意を持って取り組まれていることを高く評価したいと思います。しかし、成功した結果は伝わってくるのですが、最も大切な保育者がどのように関わりを持ったか具体的な積み重ねがエピソードの中に表現されていなかったことと、「五感を鍛える」「育てる」という保育者主導の視点がすこし気になりました。

講評：岡田 澄子

開設60年の保育園では、子どもたちの育ちには常に「自然」「人間」「事物」が必要と考え、その3つを生かす保育のありようを研鑽してきたのです。

二人の障がい児を受け入れるときに、児童相談所、保健センター、発達支援センターと連携しながら、特別な障がい児保育ではなく同じクラスでの育ち合う保育をしました。入所時のようすや成長過程のエピソードにも職員がよく勉強をしていて、共通理解されていると思いました。保護者との関わりがうかがえる報告があるとさらによいものになったと思います。

「生活をともにし、一緒に喜び合える、助け合える環境の中で育つことは、唯一保育所ができることだと思う」と記されています。これからも刺激を与えられる保育を継続してください。

いま、保育所の保育に期待されている取り組みに、「障がい児」の支援があります。専門の療育機関とは、異なった保育力を活用することが、子どもたちに必要であることが、解ってきたからです。

この研究テーマは、私の専門領域とも関係していることもあり、皆さんの保育所が取り組みの軸にあげている「仲間、あそび、自然」のテーマ（キーワード）が、障がい児保育の大切なポイント（要素）になると受け止めて、内容を拝見させていただきました。遊びの要素を持った活動の大切さ、仲間も自然の環境も取り込んだ支援が、障がい児の成長・発達に不可欠だからです。私は、「からだ、あたま、こころ」の発達全体に添った身体活動を使った「ムーブメント教育・療法」による楽しい支援法を行っています。障がい児保育を実践している全国の保育園、とりわけ北陸（特に福井の保育園）で30年以上にわたって展開しています。「保育士、子ども、保護者」の三項関係を活かした保育です。

この取り組みに保護者と共にもこれから取り入れて「みんなの笑顔」を応援して下さい。

奨励賞（実践報告部門）

「楽しく食べる

～“ひとくち食べてみる”から繋がる“食べられるかも？”の気持ち～」

野上 未優、佐藤 遼子、北爪 麻依（群馬県・高崎保育所）

講評：井桁 容子

食育に熱心に取り組む園が多くなってきているが、本実践報告も2009年から『楽しく食べる』というテーマを設定して、園全体で食に関して様々な実践を行っては見つめ直すことを重ねてきた、保育士と栄養士の協働によるものです。異なる立場から、保育を見直すことは、視野の広がりをもたらしマンネリ化防止にもなり、更に同僚への信頼、尊敬の思いを高め合うために有効であり高く評価したいと思います。内容も読みやすく整えられていますが、せっかく月ごとに抽出されている表現が『楽しく食べる』という論旨からずれて、5月「パンが残ったままが目につく」、7月「飲み込みづらそうなこともあるが、完食を目指す姿も見られる」、1月「今まで食べられていたメニューに苦戦する姿が出てきた」というようなエピソードから読み取れることは、目に見える「食べた量」にこだわってしまっていることでした。次回は、子どもの思いに着目すると、熱心な実践が生きてくると思います。

講評：酒井 かず子

過去の経緯から、食育に力を入れてきたことがよく分かり、感心いたしました。

今回は子ども達の好き嫌いを把握し、保育士との関わりの中でどのように変化をしていくかの確認状況の報告で、楽しみにして読ませていただきました。

まず、苦手意識の原因の把握をし、次に苦手な食材に興味を持つような働きかけをし、そして給食担当者との連携により、味付けや食感の変化、食べ方等で食べる意欲につなげ、食事の時間には保育士と子ども、子ども同士の関係で楽しく食べながら苦手なものを少しずつ克服していく様子がよくわかりました。子どもにとっては大きな自信に繋がったことでしょう。そして、保育士の皆様も子どもの変化を目の当たりにし、楽しむことができ、自信に繋がったのではないのでしょうか。

生まれてから就学前の時期は心身共に、一生の中で一番成長する時期で、必要な栄養をしっかり摂ることが重要です。しかも、苦手意識を持たないように配慮し、しっかりと自立できる

ようにサポートすることが私たちの責務と考えます。しかし、食事は頑張って克服するものではなく、まさに筆者がテーマに挙げた「楽しく食べる」事が大切と考えます。多少の苦手な食材があっても、栄養が満たされていれば良いとおおらかな見方にささえられ、楽しく食べる事ができたらよいですね。今後も活動を続けていくとのこと。期待しています。

講評：藤澤 良知

2009年からチャイルドクッキングを通して、子どもの育ちをテーマに調査研究、2012年度は「楽しく食べる」というテーマを設定、食材と栄養素の関係を園全体で見つめなおし、子どもに伝えたいとの思いから、取り組んできたが、実際の食事にどう生かされているかどうかの疑問もあった。そこで本年は、給食を通じて子どもの好き嫌いを把握し、保育士の対応の仕方が、子どもにどんな影響を与えているかを検証した。子どもの好き嫌いは味だけでなく、食感により左右され、また、食べなれていないなどが原因となっている。

また、食材を知り、味わい、食べ方の工夫で子どもの苦手意識、好き嫌いを和らげるなど、保育士がどう声掛けし、対応するかに努力されている。苦手なものも味付けや食べ方の工夫で「食べられるかも？」という気持ちが湧き食べる意欲が高まるなど、対応のあり方の大切さが理解できた。

子どもの嗜好調査を年2回実施とあるが、幼児期の的確な嗜好調査は難しいように思いますが、やり方など工夫して頑張って下さい。

奨励賞（実践報告部門）**「麦わら帽子づくりを通して見えてきた友だち関係の深まり」****金田 茉莉（東京都・砂原保育園）****講評：石川 昭義**

保育士には、年長の子ども達が自分の気持ちを自分の言葉で相手に伝えることができるようになって、自信を持って小学校に進んでほしいという願いがあった。本論のエピソードは、そのような思いからまとめられているが、子どもが自信を持って物事に取り組めるようにするためには、当然のことながら、一人ひとりの事情に応じた働きかけとともに、保育士と保護者との関係性が大切であることを十分に示している。

本論の考察でも触れられているとおり、“子どもの意欲を引き出すこと”と“援助しすぎないように見守る”こととの調整はいつも苦慮する課題であるが、今回のエピソードではその記述が良かった。

今後は、表題にある「友だち関係の深まり」について、園としての「深まり」のとらえ方を示しながら、「個の質が高まると、集団の質が高まるという良いサイクルができていた」ことについて、さらに具体的な事例を記述することが期待される。

講評：小林 芳文

この研究は、実践報告部門に相応しい活動が大変解り易く、生き活きと伝わってくる内容として受け止めました。「麦わら帽子づくり」という課題を挙げて、3、4、5歳児による異年齢保育を、「寄り合い」と呼んでいる家族「友達関係づくり」に取り組んだことで、どうすれば、子どもが興味を広げ、一人ひとりの個性を大切にできるか、エピソードも入れたことで、報告に深みが生まれたように拝見しました。

「個の育ちは集団の質を高める」その逆も然りであることは、私が専門とする障害児支援（保育）で、大切にしているムーブメント教育・療法の発達理念そのものです。さらに実践を重ねて本報告の今後の課題で述べている「こころ育ち」を保育で、沢山応援出来る事を研究を重ねて報告していただけたら嬉しく思います。

創立67年目を迎えた歴史ある保育園の保育目標・保育方針に基づき計画された麦わら帽子作り。5歳児に進級した子ども達の自信がない様子やまとまりがないことから、自分に自信を持って小学校に入学して欲しいという担任の強い思いが麦わら帽子作りに込められていることに興味をもちました。3、4、5歳児の異年齢保育で「家族」と称して生活をし、5歳児は年長児としての役割を果たそうとしている子ども達が、自らの麦わら帽子のデザインを描き、時間をかけて作り上げられていく様子が報告され、出来上がった麦わら帽子を誇らしげに眺め、自信に溢れている様子が伺われ、嬉しくなりました。子どもたちは、たとえどんなものでも自分でやり遂げた時にはひとりでほくそ笑んでいます。個々の子どもが興味を持ったことに集中して取り組めるような環境を作ると、いろいろな場面で、自らが進んで取り組み、自信に繋がり、自分に自信が持てると周りの人にも優しくなれ、協力できるようになれると思います。常に保育士が先頭に立って準備しなくても、子ども達の周りにはたくさんの自信につながる活動があると思います。それに気がつき、見守っていくことも大切だと思います。

麦わら帽子作りで自信をつけた子ども達は、今は元気に小学校に通っているのですね。その姿を見守ることができるのは保育士冥利に尽きますね。

奨励賞（実践報告部門）**「運動遊びを保育に取り入れて～園内事故防止と体力増進のために～」****桑野 嘉子（新潟市・つくし保育園）****講評：井桁 容子**

近年ますます、子どものあそびがIT化してきていることから、子どもたちの心身の健康な育ちが心配されています。そのために、一方では、懸命にそれらをカバーしようとする実践も多く聞かれます。そのような中で、ある研究者の調査によると、幼稚園や保育所で無理やり体操をさせられた子どもたち9000人のその後を調査すると、運動能力は自由に遊ばされた群のほうが無理やりさせられた群よりも全体的な運動能力が高かったという結果が出ました。無理やりさせられた群は、運動嫌いになっている子どもも多かったとの報告でした。さて、本実践報告は、長年にわたって子どもたちの運動能力の低下に危機感を募らせての実践であり、そのデータもきちんと記録されており、その努力に頭が下がります。今後は、運動発達と子どもの心の育ちの関連性を具体的かつ客観的な視点での調査のご報告に期待します。

講評：石川 昭義

この報告が指摘するように、この30年ほどの間に、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、大人も子どもも“運動をする”ことが減少したといえる。当園では、昭和37年の開設以来、運動に関わる様々な実践を試みている歴史がうかがえ、近年は、子どもの健康と体力の向上を目的とした「運動遊び」を意図的に毎日の保育に取り入れている。こうした実践の歴史とともに、6年間の「幼児の体力測定（25メートル走・立ち幅跳び・ボール投げ・縄跳び・ぶら下がり・左右移動・平衡感覚）」が紹介されているが、これらを計測し、その記録を蓄積していくことは大変重要なことであり、大いに評価できる。

本論において、数値的には種目別の記録の向上に繋がっていないことを認めていることも評価できるが、同時に、意図的な運動遊びの導入と体力向上との因果関係を実証することの難しさを表している。まとめの文章においては、社会には競争があり、人の能力には差があることを早い時期に気づかせることの大切さに言及されている。当園では、このことをどのような実践もしくは形で子どもに伝えているのかを知りたいと思った。

この実践報告は、最近、話題になっている子どもの運動遊びの不足に伴って生じている様々な成長の変化、発達のゆがみ等に関わる取り組みとして、どの保育園でも抱えている課題の保育実践として拝見しました。幼児には、どのような運動があるのか、年齢に相応しい運動はいかにあるか等、手探りの段階から始まったこと貴園の過去の記録から伝わって来ました。

乳幼児の運動と言えば、いわゆる学校での体育やスポーツと結び付ける研究者が、まだまだ日本には大勢います。このため訓練的な運動が目立ち、子どもの生き活きとした目の輝きがみられないこと、乳幼児には研究であげている学童以上に使われている運動因子（支持力、脚力、懸垂力など）に目を向けすぎると、どうしても訓練ぽくなり、時に子どもの運動嫌いを加速することにもなりかねません。幼児の「体力測定」も学校でのそれと同じ事をするが多くなってしまう。よってこの点をどう考えるか「運動遊び」の要素を保育に取り入れて行くことも考えて下されば嬉しく思います。

奨励賞（実践報告部門）

「子育て家庭への支援を考える～子育てパートナーとして～」

田中 美佳、井原 千恵（北九州市（研究会員）・戸畑保育所）

講評：石川 昭義

この報告では、子育て家庭への支援として、「家庭教育学級」という名称で保護者が集える企画（DVD試写会、アロマキャンドル作り、スクラップブック作り）と個別支援の事例が紹介されている。興味深かったのは、保護者が集う企画の中で、ある保護者から、参加者による自己紹介のような時間（ミーティング）が苦手という意見が出されたことである。次の企画のときには、その保護者に前もって「ミーティングには参加しなくてもよい」ことを伝えて参加してもらったという経緯が述べられている。この事例は、こうした保護者参加型の企画を実施することの意義について、読者に考えさせる題材の一つになるだろう。

本論のまとめでは、「保育士は、子どもたちだけではなく保護者も一緒に包み込み、癒しを与えるような存在でありたい」と結ばれている。今後は、表題にある「子育てパートナー」の意味について保育所としての考えをまとめ、その意味とつなげて「癒しを与える存在とは何か」について考察を深めていくことが期待される。

講評：岡田 澄子

仕事と子育ての両立が困難と感じている保護者や子育ての悩みや不安がある保護者に対して、それを受け止め、その気持ちを共有し保護者支援に取り組んでいる保育園。

家庭教育学級として、DVD試写会、アロマキャンドル作り、スクラップブック作りを開催し、保護者にリフレッシュしてもらったり、保護者同士で育児について話す場を提供しました。保護者同士で話をすることにより「悩んでいるのが自分だけではなく、同じような家庭が他にもあるんだ」ということに気づき、子育てが楽しいものになるように保育園がバックアップすることは、素晴らしいことだと思います。

参加者から「日頃、家ではできないことができて楽しかった」「家では材料がそろわないのでよかった」など高評価でしたが、参加者が少し少ないように思いました。

家庭教育学級では名前が固いので、「にこにこわかばひろば」に変更して、保護者からの要

望も多いので今後も続けていくとありました。

今後、さらに子どもたちだけではなく保護者も一緒に包み込み、癒しを与えるような存在であり続けてください。

講評：小林 芳文

近年、家族形態が従来とは大きく変わり、子育てを担っている保護者の抱える色々な悩みや不安問題は多岐に渡っている。この研究は、これらの課題を保育園の立場から取り組んだ実践として、大変意義在る報告として受け止めました。実践内容も興味ある工夫で進められたこと興味を持って拝見しました。保護者と共に世界の多様な育児をDVDでの試写会を通して「かわいらしい赤ちゃん」の姿などを共有したり、物づくりを通して保護者のリフレッシュ気分を高めたり、その活動の姿を保育園の玄関に提示したりして、そこから支援の方向を探られたこと解りやすい取り組みとみえました。

研究の副題である「子育てパートナー」の保育園の立場を活かした活動の成果から「保護者からの発信」を今後取り入れ保育園ならではの支援を行って行きたいとのこと、子ども・子育て、家庭支援の中核として保育園があることをこの研究で示してくれました。更に実践研究の進展を期待しています。

第9回 保育所保育実践研究・報告集

2015年（平成27年）3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

編集：社会福祉法人 日本保育協会 企画情報部

〒102-0083 東京都千代田区麴町1-6-2 アーバンネット麴町ビル6階

TEL 03-3222-2111（代） FAX 03-3222-2117

<http://www.nippo.or.jp>

※無断転載を禁じます